kan ze on ji

觀世音寺

－伽藍編－

2005

九州歴史資料館

巖窟音考

― 伽藍編 ―

2005

九州歴史資料館

塔全景

(1)　塔 SB3850礎石

(2)　塔 SB3850心礎

(1)　金堂C区全景

(2)　金堂SB4600A基壇版築状況

(1)　講堂 SB3800前面部西半

(2)　講堂 SB3800前面部東半

手前：講堂SB3800B基壇化粧　　奥：Ⅰ期礎石据付穴

戒壇院調査区全景

観世音寺絵図

序

西海道の名刹といわれる「筑紫観世音寺」は，天智天皇が母帝斉明天皇の冥福を祈るために発願された寺院であります。68歳という女身の斉明天皇は百済救済のため筑紫の地に赴かれ，朝倉の地で崩じられました。そして，発願から80余年を経て落慶法要が営まれ，建立期から幾たびかの災害・火災を乗り越えて，今日まで法燈が保たれています。

観世音寺の調査を本格的に開始したのは，昭和50年代になってからであり，史跡の町としての太宰府を保存・継承する手立てが幾度となく計画されました。観世音寺周辺も開発から脅かされることしばしばであり，文化財調査もそれに対応すべく，面から部分的調査にならざるを得ない状況でありました。そのような中，観世音寺の建立時期および規模・構造を明らかにすることは，九国三島を統括した大宰府ひいては西海道の諸寺院の解明にも繋がり，発掘調査の担う役割と期待は大きなものであります。

今回の報告は，これまで四十数回に亘った調査結果を集約するとともに，懸案とされてきた寺院の諸事実解明，ひいては日本の歴史の一端を担う古代史を少しでも明らかにし，研究者および古代史に興味を持たれている方々への一助となれば幸いであります。

本報告書の刊行にあたり，大宰府史跡調査研究指導委員長をはじめとする委員の先生方には，諸事繁忙中にもかかわらず適切な御指導をいただき深謝に耐えません。また，寺院の発掘調査を快諾いただいた観世音寺住職および御家族の方々に謝意を申し上げるとともに，このたびの調査・報告書刊行に際して，文化庁，太宰府市，地元関係各位，さらには故人となられた職員および作業員の皆様に対して深甚なる敬意を表する次第であります。

平成17年3月31日

九州歴史資料館長　森山　良一

『観世音寺』の刊行にあたって

九州歴史資料館では，このたび観世音寺の報告書を刊行することになった。

大宰府史跡の発掘調査に関わる正式報告書としては，『大宰府政庁跡』につぐ第二の刊行である。

観世音寺は天智天皇の開創と伝えられ，大宰府政庁の東に接し，朝廷による西海道支配の理念的な支柱としての役割を担った。寺域の一画に設けられた戒壇院は西海道の僧尼の受戒の場となり，国家仏教の体制を支えた。その法燈は中世・近世を通じて今に伝えられ，17世紀に再建された本堂（講堂）・阿弥陀堂（金堂）を中心に，見る者を圧倒する巨大な仏像群や，創建時に遡ると見られる国宝の梵鐘，古木が枝を重ねる境内の静寂な雰囲気によって，多くの人々を誘っている。

観世音寺の発掘調査は，昭和27年・同32年に遡るが，昭和47年の九州歴史資料館発足後は同館が発掘の主体となり，多年にわたり調査が続けられてきた。この間，昭和51年には僧房跡推定地から大房と見られる礎石建物が検出され，昭和53年から進められた子院金光寺跡推定地の発掘では，数多くの建築遺構や出土遺物，火葬遺構や埋葬施設としての石塔群などが発見されて，中世の寺院・僧侶の生活の実相に迫る貴重な成果を挙げることができた。

平成２年度からは，主要伽藍と伽藍全体像の究明が課題とされ，塔・金堂・講堂・回廊等の調査が進められた。平成14年度には金堂から創建期の瓦積基壇が発見されて明治期に及ぶ基壇の変遷が明らかとなり，翌年度からの講堂の調査においては，現礎石直下から根石が発見され，これまでの通説をくつがえす基壇の変遷が明らかにされ，中心部伽藍の造営計画やその過程を解明するための手がかりをも得ることができた。

観世音寺の報告書は，報告すべき内容の量からこれを伽藍編，寺域編，遺物・考察編の３編に分け，寺域編，遺物・考察編については平成17年度の刊行が予定されている。子院地区については，今後の調査に待つところが多く，その報告は後日に譲ることとしている。

本年10月には，待望の九州国立博物館が太宰府の地に開館する。博物館の開館が，大宰府史跡の調査研究の進展にとって大きな契機となることを期待したい。最後に物故された方々や退職された方々を含め，多年地道な調査研究に専心されてきた関係者の方々に，深い感謝を捧げたい。

平成17年３月31日

大宰府史跡調査研究指導委員会委員長　笹山　晴生

例　言

1．本書は，昭和45年度（1970）から福岡県が国庫補助を受け，九州歴史資料館が発掘調査を実施した観世音寺の正式報告書－伽藍編－である。

2．本書には，観世音寺推定寺域内において観世音寺の解明を目的として発掘調査を実施した大宰府史跡第43次調査（僧房）・55次調査（境内）・126次調査（講堂・北面回廊）・130次調査（塔・南門・南面回廊・南面築地）・163次調査（戒壇院）・188次調査（金堂）・126次補足調査（講堂・北面回廊）の成果を掲載した。

なお，大宰府史跡第８次・21次・68次・78次・93次・184次・185次調査は，観世音寺子院跡関連の調査であり，戒壇院を除く子院跡に関しては，子院跡のみをとりまとめた正式報告書の刊行を予定しており，今回の報告からは除外した。

3．発掘調査は，大宰府史跡調査研究指導委員会の指導と承認のもとに実施した。検出遺構及び出土遺物については，各指導委員の御指導と御教示を得た。

4．本書掲載の遺構実測図は，国土調査法第Ⅱ座標系をもとに基準点を設け作成し，各次調査担当職員の実測による。

5．本書掲載の写真は，当館参事石丸洋及び各次調査担当職員の撮影による。

6．観世音寺報告書作成に係る関係者は，下記のとおりである。

製図作業：高田いく子・初山淳子・高橋佑佳

図面整理：比嘉えりか・吉井美智恵

遺物整理：大田千賀子・中田千枝子・市川千香枝

7．本書の執筆分担は，以下による。

Ⅰ（1）～（3）高橋　章

Ⅱ　吉村靖徳

Ⅲ　石松好雄

Ⅳ（1）小田和利　　（2）1 高橋　　（2）2 横田賢道（賢次郎）

Ⅴ（1）～（9）小田

Ⅵ　小田

8．本書の編集は，小田がおこなった。

凡　例

遺構番号の頭に付した記号は，以下の遺構を示す。

ＳＡ：掘・土塁，ＳＢ：建物，ＳＣ：回廊，ＳＤ：溝，ＳＥ：井戸，ＳＧ：池，ＳＨ：広場，ＳＩ：竪穴住居，ＳＫ：土坑，ＳＸ：その他の遺構

挿図目次

Fig. 1　観世音寺調査地域図（1/3,000）…… 6
Fig. 2　大宰府関連遺跡分布図（1/200,000）…… 12
Fig. 3　観世音寺周辺地形図（1/6,000）…… 13
Fig. 4　観世音寺周辺主要遺跡分布図（1/62,500）…… 16
Fig. 5　観世音寺村之内旧跡礎現改之図（部分）…… 20
Fig. 6　講堂跡遺存礎石配置図 …… 21
Fig. 7　伽藍配置復原図（福山敏男案）…… 21
Fig. 8　寺域復原図（福山敏男案）…… 22
Fig. 9　伽藍配置復原図（服部勝吉案）…… 23
Fig.10　寺域復原図（服部勝吉案）…… 23
Fig.11　伽藍配置復原図（鏡山猛案）…… 25
Fig.12　境内採集軒丸瓦 …… 26
Fig.13　境内採集軒平瓦 …… 26
Fig.14　老司Ⅰ式軒瓦 …… 27
Fig.15　大宰府条坊地区割番号図 …… 28
Fig.16　観世音寺地区割図（1/4,000）…… 29
Fig.17　金堂発掘状況１（二重の基壇化粧）…… 31
Fig.18　金堂発掘状況２（正面の基壇化粧）…… 31
Fig.19　講堂発掘状況１（基壇外面の列石）…… 32
Fig.20　講堂発掘状況２（北面回廊の取付部）…… 33
Fig.21　講堂発掘状況３（講堂基壇化粧）…… 33
Fig.22　回廊周辺発掘状況（北から）…… 33
Fig.23　中門周辺発掘状況（奥は鐘楼）…… 33
Fig.24　回廊南東隅部発掘状況（小柱穴列）…… 33
Fig.25　昭和32年調査トレンチ配置図（1/500）…… 折込
Fig.26　調査区配置図（1/1,500）…… 折込
Fig.27　第130次調査塔発掘区（1/600）…… 35
Fig.28　第188次調査金堂発掘区（1/600）…… 35
Fig.29　第126次・補足調査講堂・北面回廊発掘区（1/600）…… 36
Fig.30　第130次調査南門発掘区（1/600）…… 37
Fig.31　第130次調査南面回廊発掘区（1/600）…… 37
Fig.32　第126次調査東面回廊発掘区（1/600）…… 37
Fig.33　第43次調査大房発掘区（1/600）…… 38
Fig.34　第70次・補足調査・第123次調査小子房発掘区（1/600）…… 39
Fig.35　第163次調査成壇院発掘区（1/600）…… 39

Fig.36　第130次調査南面築地発掘区（1/600）……40
Fig.37　第45次調査東面築地発掘区（1/600）……40
Fig.38　第119次調査東面築地発掘区（1/600）……41
Fig.39　第121次調査東面築地発掘区（1/600）……41
Fig.40　第78次調査東面築地発掘区（1/600）……42
Fig.41　第120次調査東面築地発掘区（1/600）……42
Fig.42　第21次調査東面築地発掘区（1/600）……42
Fig.43　観世音寺地形測量図（1/800）……折込
Fig.44　基壇土層実測図（1/50）……折込
Fig.45　塔周辺地形測量図（1/200）……43
Fig.46　塔調査区遺構配置図（1/150）……44
Fig.47　基壇地覆石実測図（1/40）……45
Fig.48　心礎・四天柱礎石実測図（1/50）……47
Fig.49　周辺礎石実測図（1/50）……49
Fig.50　金堂周辺地形測量図（1/200）……50
Fig.51　金堂調査区遺構配置図（1/150）……折込
Fig.52　A区北壁土層実測図（1/60）……51
Fig.53　礫敷SX4604実測図（1/60）……53
Fig.54　A区SB4600A・B基壇化粧実測図（1/60）……54
Fig.55　B区SB4600A・B基壇化粧実測図（1/60）……56
Fig.56　C・E区SB4600A・C基壇化粧実測図（1/60）……58
Fig.57　A区SB4600C基壇化粧実測図（1/60）……60
Fig.58　A・D区SB4600C基壇化粧実測図（1/60）……62
Fig.59　土坑SK4602，火葬墓SX4603実測図（1/30）……63
Fig.60　講堂周辺地形測量図（1/200）……64
Fig.61　講堂調査区遺構配置図（1/200）……折込
Fig.62　礎石建物SB3800実測図（1/150）……折込
Fig.63　SB3800基壇土層実測図（1/60）……折込
Fig.64　基壇北辺土層実測図（1/60）……66
Fig.65　講堂土層模式図（1/60）……66
Fig.66　SB3800A礎石根石実測図（1/40）……68
Fig.67　通路SX3780実測図（1/60）……69
Fig.68　SB3800B基壇化粧実測図（1/60）……70
Fig.69　階段SX3801実測図（1/60）……72
Fig.70　礎石実測図①（1/50）……73
Fig.71　礎石実測図②（1/50）……74
Fig.72　講堂礎石柱間計測図（1/200）……75
Fig.73　足場穴SB3740柱穴土層実測図（1/50）……76

Fig.74　足場穴SB3740・3782実測図（1/150）……77
Fig.75　SB3800D基壇化粧実測図（1/60）……78
Fig.76　SB3800C～E基壇化粧実測図①（1/60）……折込
Fig.77　SB3800C～E基壇化粧実測図②（1/60）……79
Fig.78　SB3800D礎石実測図（1/50）……80
Fig.79　足場穴SB3755・3781実測図（1/150）……折込
Fig.80　SB3800E基壇化粧実測図①（1/60）……折込
Fig.81　SB3800E基壇化粧実測図②（1/60）……81
Fig.82　瓦溜SX3805実測図（1/40）……82
Fig.83　土坑SK3742・3758・3769・3770・3774・3788・3791・3793実測図（1/40）……85
Fig.84　土坑SK3764・3765・3775・3778実測図（1/60）……86
Fig.85　土坑SK3771・3789・3792・3794・3796・3807実測図（1/40）……87
Fig.86　土坑SK3777・3795・3797，鋳造土坑SX3804，火床穴SX3779実測図（1/60）……88
Fig.87　土坑SK3795・3789，瓦敷SX3799遺物出土状況実測図（1/30）……89
Fig.88　南門周辺地形測量図（1/200）……91
Fig.89　南門調査区遺構配置図（1/150）……92
Fig.90　基壇土層実測図（1/60）……93
Fig.91　礎石実測図（1/50）……94
Fig.92　中門周辺地形測量図（1/200）……95
Fig.93　南面東回廊周辺地形測量図（1/200）……98
Fig.94　南面東回廊調査区遺構配置図（1/150）……99
Fig.95　東面回廊側溝SD3715・3735土層実測図（1/60）……100
Fig.96　北面東回廊調査区遺構配置図（1/150）……折込
Fig.97　北面東回廊周辺地形測量図（1/200）……102
Fig.98　回廊SC3730E取付部実測図（1/80）……103
Fig.99　回廊SC3730EB地覆石実測図（1/60）……104
Fig.100　回廊周辺礎石実測図（1/50）……105
Fig.101　北面西回廊周辺地形測量図（1/200）……106
Fig.102　北面西回廊調査区遺構配置図（1/150）……107
Fig.103　回廊SC3730W取付部実測図（1/80）……108
Fig.104　礎石据付穴SX3810，土坑SK3806実測図（1/80）……109
Fig.105　掘立柱建物SB3714実測図（1/80）……111
Fig.106　土坑SK3728・3729，瓦溜SK3887，鋳造土坑SX3885・3888実測図（1/40）……112
Fig.107　僧房周辺地形測量図（1/300）……折込
Fig.108　僧房調査区遺構配置図（1/150）……折込
Fig.109　調査区南壁土層実測図（1/60）……115
Fig.110　礎石建物SB1080礎石・根石実測図（1/50）……116
Fig.111　大房間取り復原図……117

Fig.112　井戸SE1081～1083実測図（1/40）……118
Fig.113　土坑SK1084～1087・1089実測図（1/80）……120
Fig.114　土坑SK1088・1090～1094（1/80），SK1106（1/40）実測図……122
Fig.115　土坑SK1095～1097・1099・1101～1103実測図（1/80）……123
Fig.116　土坑SK1098・1104・1105，SX1100実測図（1/80）……124
Fig.117　戒壇院周辺地形測量図（1/400）……折込
Fig.118　土層模式図（1/60）……125
Fig.119　戒壇院調査区遺構配置図（1/150）……126
Fig.120　礎石建物SB4180実測図（1/60）……折込
Fig.121　石組溝SD4175・4185，階段SX4182実測図（1/60）……129
Fig.122　排水施設SX4173・4174実測図（1/30）……130
Fig.123　溜桝状遺構SX4172・4177実測図（1/30）……131
Fig.124　溝SD4187・4188実測図（1/40）……132
Fig.125　井戸SE4195実測図（1/40）……133
Fig.126　溝SD4189，池SG4190土層実測図（1/60）……133
Fig.127　暗渠SX4191実測図（1/20）……134
Fig.128　埋甕SX4176・4178・4179，埋桶SX4181実測図（1/30）……134
Fig.129　南面築地周辺地形測量図（1/200）……135
Fig.130　南面築地調査区遺構配置図（1/150）……136
Fig.131　南面築地土層実測図（1/60）……137
Fig.132　戒壇院南面築地関係図（1/600）……138
Fig.133　金堂建物変遷図（1/400）……142
Fig.134　講堂建物変遷図（1/600）……144

表　目　次

Tab.1　観世音寺発掘調査地域一覧……7
Tab.2　大宰府史跡調査研究指導委員会委員……8
Tab.3　観世音寺発掘調査関係者一覧……9

付　　図

付　図1　観世音寺地形測量図（1/400）
付　図2　観世音寺遺構配置図（1/600）
付　図3　僧房礎石建物SB1080実測図（1/120）

本 文 目 次

Ⅰ 調査の経過……1
（1）はじめに……1
（2）調査経過……2
（3）調査組織……8

Ⅱ 位置と歴史的環境……11

Ⅲ 観世音寺研究史……19

Ⅳ 調査の記録方法と概要……28
（1）調査の記録方法……28
（2）調査の概要……30
1）既往の調査……30
2）主要伽藍の調査……35

Ⅴ 伽藍の調査……43
（1）塔……43
1）概 要……43
2）塔SB3850……44
3）その他の遺構……49
（2）金 堂……50
1）概 要……50
2）土 層……51
3）金堂SB4600……52
4）その他の遺構……63
（3）講 堂……64
1）概 要……64
2）土 層……65
3）講堂SB3800……66
4）その他の遺構……84
（4）南 門……91
1）概 要……91
2）南門SB3900……92

（5）中　門……95
1）概　要……95
2）中門SB4100……96
（6）回　廊……97
1）概　要……97
2）土　層……97
3）南面回廊SC3890……97
4）東面回廊SC3720……100
5）北面回廊SC3730……101
6）西面回廊SC3760……111
7）その他の遺構……111
（7）僧　房……114
1）概　要……114
2）土　層……114
3）大房SB1080……116
4）その他の遺構……118
（8）戒壇院……125
1）概　要……125
2）土　層……125
3）礎石建物SB4180……127
4）その他の遺構……132
（9）築　地……136
1）概　要……136
2）南面築地SA3880……136
3）東面築地SA1260……139
4）北面築地SA1860……139
5）西面築地SA1290……140

Ⅵ　総　括……141

図 版 目 次

巻頭図版 1　　塔全景
2 (1)　塔SB3850礎石
(2)　塔SB3850心礎
3 (1)　金堂C区全景
(2)　金堂SB4600A基壇版築状況
4 (1)　講堂SB3800前面部西半
(2)　講堂SB3800前面部東半
5　　手前：講堂SB3800B基壇化粧　奥：I期礎石据付穴
6　　威壇院調査区全景
7　　観世音寺絵図

PL.1　　大宰府史跡航空写真（南上空から）
PL.2 (1)　観世音寺周辺航空写真（昭和35年頃，南上空から）
(2)　観世音寺周辺航空写真（平成3年頃，南上空から）

塔

PL.3 (1)　塔全景（西から）
(2)　塔全景（南から）
PL.4 (1)　塔全景（北から）
(2)　塔全景（北西から）
PL.5 (1)　塔調査区（西面，西から）
(2)　塔SB3850基壇化粧（西面，北から）
(3)　塔SB3850基壇化粧（西面，西から）
PL.6 (1)　塔調査区（南面，南から）
(2)　塔SB3850基壇化粧（南面，北から）
(3)　塔SB3850基壇化粧（南面，南から）
PL.7 (1)　塔調査区（東面，南から）
(2)　基壇版築状況（北面，北から）
PL.8 (1)　基壇版築状況（南面，南西から）
(2)　基壇版築状況細部（南面中央，西から）
(3)　基壇版築状況細部（南面端，西から）
PL.9 (1)　塔心礎（西から）
(2)　塔心礎（西から）
(3)　塔心礎（東真上から）
PL.10 (1)　側柱礎石1（北から）
(2)　側柱礎石2（南から）

(3) 掘立柱塔心礎石2の根石状況（西側面）

PL.11 (1) 塔周辺礎石A（南から）

(2) 塔周辺礎石B（南西から）

(3) 塔周辺礎石C（西から）

PL.12 (1) 塔周辺礎石D（南西から）

(2) 塔周辺礎石E（北西から）

(3) 塔周辺礎石F（南から）

金堂

PL.13 (1) 金堂建物（元禄期再建，東から）

(2) 金堂A区全景（上層，北から）

PL.14 (1) 金堂A区全景（上層，北西から）

(2) 金堂A区全景（上層，南西から）

PL.15 (1) 金堂SB4600C基壇化粧（北から）

(2) 金堂SB4600C基壇化粧（北から）

(3) 火葬墓SX4603（南から）

PL.16 (1) 金堂SB4600B基壇化粧検出状況（北から）

(2) 金堂SB4600B基壇化粧検出状況（南から）

(3) 金堂SB4600B基壇化粧と焼土層（北から）

PL.17 (1) 金堂A区全景（下層，北西から）

(2) 金堂A区全景（下層，南西から）

PL.18 (1) 金堂SB4600B基壇化粧（北西から）

(2) 金堂SB4600B基壇化粧（南西から）

(3) 金堂SB4600B基壇化粧（南から）

PL.19 (1) 金堂SB4600B基壇化粧細部（西から）

(2) 同上（西から）

(3) 同上（西から）

(4) 瓦溜SX4606（西から）

PL.20 (1) 金堂SB4600A基壇化粧（西から）

(2) 金堂A区基壇版築状況（南西から）

(3) 基壇南西部下層礫群（西から）

PL.21 (1) 金堂B区全景（下層，南から）

(2) 金堂SB4600A・B基壇化粧（西から）

PL.22 (1) 金堂C区全景（上層，北から）

(2) 金堂C区全景（下層，北から）

PL.23 (1) 金堂SB4600A・C基壇化粧（北から）

(2) 金堂SB4600A基壇版築状況（西から）

(3) 金堂SB4600A基壇化粧細部（北から）

PL.24 (1) 金堂C区基壇版築状況（基壇化粧掘，西から）

(2) 金堂C区基壇版築状況（建物側，西から）

PL.25 (1) 金堂D区（南西から）

(2) 金堂E区全景（北から）

(3) 金堂E区SB4600A・C基壇化粧（北から）

講 堂

PL.26 (1) 講堂建物周辺（空中写真，南上空から）

(2) 講堂建物（元禄元年再建，南から）

PL.27 (1) 講堂SB3800前面（東半，南から）

(2) 講堂SB3800前面（西半，南から）

PL.28 (1) 講堂SB3800背面（西半，北から）

(2) 講堂SB3800背面（東半，北から）

PL.29 (1) 講堂SB3800梁側礎石（東半，南から）

(2) 講堂SB3800梁側礎石（西半，南から）

PL.30 (1) 講堂SB3800梁側礎石（西半，北から）

(2) 講堂SB3800梁側礎石（東半，北から）

PL.31 (1) 講堂SB3800B・C・D基壇化粧（東半，南から）

(2) 講堂SB3800B・C・D・E基壇化粧（東半，東から）

PL.32 (1) 講堂SB3800B・C・D・E基壇化粧（東半，西から）

(2) 講堂SB3800B・C・D・E基壇化粧（東半，南西から）

(3) 階段SX3801③（南西から）

PL.33 (1) 講堂SB3800B・C・D・E基壇化粧（西半，南から）

(2) 講堂SB3800B・C・D・E基壇化粧（西半，東から）

PL.34 (1) 講堂SB3800背面部（北東から）

(2) 講堂SB3800背面部（北西から）

PL.35 (1) 講堂SB3800E基壇化粧（背面，東から）

(2) 講堂SB3800桁側礎石（背面，東から）

PL.36 (1) 講堂SB3800E基壇化粧（背面，北から）

(2) 講堂SB3800E階段SX3802（▲印，北から）

(3) 足場穴SB3755及び土坑群（北東から）

PL.37 (1) 講堂SB3800E基壇化粧（北西隅，北から）

(2) 講堂SB3800E基壇化粧（北東隅，北から）

PL.38 (1) 講堂補足調査3Tr全景（南から）

(2) 講堂補足調査3Tr全景（北から）

PL.39 (1) 講堂SB3800B基壇化粧，礎石根石SX3790（西から）

(2) 講堂SB3800B基壇化粧（西から）

(3) 礎石根石SX3790（北から）

PL.40 (1) 基壇版築状況（礎石2－23間，北から）

(2) 基壇版築状況（礎石6－基壇化粧間，東から）

(3) 基壇版築状況（礎石14－基壇化粧間，南から）
PL.41 (1) 基壇版築状況（礎石31－14間，西から）
(2) 基壇版築状況（礎石31－14間，南西から）
PL.42 講堂SB3800礎石
PL.43 講堂SB3800礎石
PL.44 講堂SB3800礎石抜取穴
PL.45 (1) 足場穴SB3740柱掘方断割
(2) 足場穴SB3782柱掘方
PL.46 (1) 講堂補足調査1Tr全景（南から）
(2) 講堂補足調査1Tr（北から）
PL.47 (1) 土坑SK3789遺物出土状況（北から）
(2) 土坑SK3792（東から）
PL.48 (1) 土坑SK3795遺物出土状況（東から）
(2) 土坑SK3802鋳型出土状況（南西から）
(3) 瓦敷SX3799（東から）
南 門
PL.49 (1) 南門調査区（南から）
(2) 南門調査区（西半，南東から）
(3) 南門調査区（西半，北から）
PL.50 (1) 南門調査区（西半中央部，東から）
(2) 南門礎石A（西から）
(3) 南門礎石C（東から）
PL.51 (1) 南門礎石F・G（東から）
(2) 礎石A移設後（西から）
(3) 礎石C移設後（東から）
回 廊
PL.52 (1) 東面回廊調査区（南から）
(2) 東面回廊調査区（北半，南から）
PL.53 (1) 北面回廊SC3730E（西から）
(2) 北面回廊SC3730E（東から）
PL.54 (1) 北面回廊SC3730E取付部（南から）
(2) 北面回廊SC3730E取付部（東から）
PL.55 (1) 補足調査6Tr北面回廊地区（調査前，西から）
(2) 補足調査6Tr北面回廊地区（調査後，南西から）
PL.56 (1) 北面回廊SC3730W（126次調査，北から）
(2) 北面回廊SC3730W（126次調査，東から）
(3) 北面回廊SC3730W（補足調査，南西から）
PL.57 (1) 北面回廊SC3730W取付部（西から）

(2) 北面回廊礎石根石SX3810（南から）

PL.58 (1) 南面回廊調査区全景（南から）

(2) 南面回廊ATr（北から）

(3) 南面回廊ATr（南から）

PL.59 (1) 南面回廊BTr（北から）

(2) 南面回廊CTr（南から）

PL.60 (1) 溝SD3884，鋳造土坑SX3888（西から）

(2) 鋳造土坑SX3885（西から）

(3) 土坑SK3887（西から）

僧　房

PL.61 (1) 僧房調査区全景（東から）

(2) 僧房調査区全景（西から）

PL.62 (1) 僧房SB1080（東から）

(2) 僧房SB1080（西から）

PL.63 (1) 僧房SB1080（北から）

(2) 僧房SB1080礎石（北から）

(3) 僧房礎石1（北から）

(4) 僧房礎石2（北から）

PL.64 (1) 井戸SE1081（西から）

(2) 井戸SE1081遺物出土状況（西から）

(3) 井戸SE1082（北から）

PL.65 (1) 井戸SE1083（東から）

(2) 井戸SE1083石積状況（東から）

PL.66 (1) 土坑SK1084遺物出土状況（南から）

(2) 土坑SK1103（東から）

戒壇院

PL.67 (1) 戒壇院本堂建物（寛保三年建立，南から）

(2) 戒壇院地区調査区全景（南から）

PL.68 (1) 戒壇院地区調査区全景（上層，東から）

(2) 礎石建物SB4180全景（東から）

PL.69 (1) 礎石建物SB4180全景（下層，南から）

(2) 礎石建物SB4180全景（下層，東から）

PL.70 (1) 石組溝SD4175（東から）

(2) 石組溝SD4175先端の暗渠SX4174（西から）

PL.71 (1) 石組溝SD4185，埋甕SX4172（東から）

(2) 石組溝SD4185，SB4180基壇化粧SX4182断割状況（北東から）

PL.72 (1) 溝SD4189（南から）

(2) 溝SD4186，池SG4190（西から）

PL.73 (1) 埋甕SX4177（南から）
(2) 埋甕SX4177完掘状況（南から）
(3) 埋甕SX4178（西から）
PL.74 (1) 埋甕SX4179（北から）
(2) 埋桶SX4181（南から）
PL.75 (1) 溝SD4187（東から）
(2) 石組溝SD4188（東から）
(3) 暗渠SX4191（東から）
築地
PL.76 (1) 南面築地調査区（南から）
(2) 南面築地SA3880W断割状況（南西から）
(3) 2Tr土層断面（西から）
境内
PL.77 (1) 南面回廊北側（55次）1Tr（南から）
(2) 南面回廊北側（55次）2Tr（西から）
PL.78 中門調査状況（昭和32年，北から）
PL.79 (1) 中門調査状況（昭和32年，北から）
(2) 中門調査状況（昭和32年，南から）
PL.80 (1) 中門調査状況（昭和32年，北から）
(2) 中門調査状況（昭和32年，南から）
PL.81 (1) 北面回廊取付部調査状況（昭和32年，南から）
(2) 土坑SK3729（昭和32年，南西から）
PL.82 (1) 観世音寺絵図細部・五重塔
(2) 観世音寺絵図細部・金堂
PL.83 (1) 観世音寺絵図細部・講堂
(2) 観世音寺絵図細部・戒壇院
PL.84 観世音寺絵図細部・僧房
PL.85 (1) 観世音寺絵図細部・南門
(2) 観世音寺絵図細部・中門
(3) 観世音寺絵図細部・北門
PL.86 観世音寺参道入り口の標柱

Ⅰ　調査の経過

（1）はじめに

7世紀後半に天智天皇は，母帝斉明天皇の菩提を弔うために筑紫観世音寺建立を発願されたと『続日本紀』は伝えている。

記すまでもなく，大宰府の大寺として名実ともに国家的寺院であり，その壮大な伽藍は鎮西第一の名刹と言える。しかしながら，寺院建立は発願から容易に進行せず，80余年の歳月を費やして天平18年（746）に落慶法要が行われた。建設が進まなかったその背景には，政治的，経済的，飢饉，疫病など多くの難問を抱えていたと推察する研究者も少なくない。筑紫観世音寺が国家的大寺として名を確実にするのは，天平宝字5年（761）に下野薬師寺と並び戒壇院を擁したことであり，奈良南都諸寺に匹敵する大寺院と言える。

鎮西第一の名刹

戒壇院の設置

大宰権帥の菅原道真は，「都府楼は僅かに瓦色を看　観音寺は只鐘声を聴く」と詠われ，観世音寺の情景が少なからず表現されているようにきこえる。寺院完成後の歴史は大宰府の盛衰と軸を一つにし，東大寺の末寺となるまで大宰府管内諸国の僧統位置に付されたのである。

筑紫観世音寺については古来から注目され，これまで多くの研究者によって文献・絵画などが論究されてきた。文献史料の一つに『観世音寺資財帳』（以下，『資財帳』）がある。延喜5年（905）に作成されたこの財産目録は，仏像章，用器章，仏経章，仏衆物章，大衆物章，庄所章，賤口章などから構成されており，寺院の建物や仏具，土地や人々の動きなどを記したもので，末尾に寺の責任者と大宰府師以下の連署がある。今回，『資財帳』と発掘調査の成果を対比しながら報告したい。また，室町時代の作とされる『観世音寺絵図』を筆頭に，数多くの絵画が描かれている。以下，その代表的なものを列記してみよう。

観世音寺資財帳

観世音寺絵図

・観世音寺絵図（165.2cm×161.9cm　室町時代　観世音寺所蔵）　（寸法はタテ×ヨコ）
・大宰府旧蹟全図（140cm×127cm　江戸時代　木村明敏所蔵）
・筑前国続風土記附録全48巻（江戸時代　平凡社所蔵）
・文政三庚辰年観世音寺村之内旧跡礎現改之図（青柳種信資料79.7cm×124.3cm
　江戸時代　福岡市博物館所蔵）
・文政三年観世音寺村之内旧蹟礎現改ノ図（90.2cm×119.3cm　明治時代　福岡市博物館所蔵）
・観世音寺大伽藍図（青柳種信資料　60.9cm×63.2cm　江戸時代　福岡市博物館所蔵）
・西都旧跡十二景（観世音寺　21.9cm×16.8cm　江戸時代末　福岡市博物館所蔵）
・大日本名所図録　福岡県之部（観世音寺　明治31年　大阪大成館編纂）
・都府楼図巻（江戸時代以降　九州大学付属図書館所蔵）

このうち，観世音寺所蔵の『観世音寺絵図』は，大永6年（1526）に留守坊清建が古図から写し取ったことが知られている。この絵図には周辺の社，天智天皇，杵島観音引き上げの光景などが描かれており，縁起図的な内容が含まれている。しかしながら，伽藍配置及び建物の構図など，『資財帳』とともに発掘調査を進める上で看過できない資料となっている。例えば，僧房の長さや金堂のお堂的な構図は，金堂第Ⅲ期の建物基壇に類似した絵図であることが判る。

縁起図的な内容

さらに，『文政 三庚辰年観世音寺村之内旧跡礎現改之図』においては，講堂・金堂（弥陀堂）・戒壇院・塔などが描かれているが，その周辺は水田となっており，文政３年（1806）頃の寺院の荒廃した状況を看取できる。

往時は49の子院を擁し，鎌倉時代においても隆盛を極めた観世音寺であったが，豊臣秀吉の九州征伐に際して，観世音寺別当が秀吉の怒りを買い，寺領を没収されてしまう。これ以降，観世音寺は衰退の一途をたどるものの，江戸時代には黒田藩が中心となって再興がなされた。

黒田藩による再興

慶長８年（1603）の『観世音寺堂廻御検地之帳』によれば，寺領は惣かに９反６畝21歩であり，初代福岡藩主黒田長政の父如水は往戦の苦渋を聴いて，５反６畝７歩を寄進したとされる。

17世紀初めには，既に金堂を失い，講堂は無惨な姿となり，伽藍は荒れ果てていた。その講堂も寛永７年（1630）８月の暴風雨で倒壊してしまった。２代藩主忠之は，寛永８年（1631）に仮堂（阿弥陀堂）を建て，諸尊を安置した。これが現在の金堂建物とされている。しかし，未だ講堂は再建されておらず，これを嘆き悲しんだ天王寺屋浦了夢は，講堂の再建を妻子に託した。妻子は聖福寺萬水禅師とともに，３代藩主光之を大壇越として再建にあたり，元禄元年（1688）完成に至った。これが現在の本堂（講堂）である。

明治時代に入ると観世音寺は比叡山延暦寺の末寺となり，天台宗に属した。何時頃から天台宗に宗旨変えしたかは定かではないが，明治以後であろうとされている。黒田藩主による再興以後，金堂・講堂の腐蝕は著しくなり，建物を修理するために昭和８年「観世音寺奉賛会」が組織された。現在みられる観世音寺境内の姿が定着したのは，それ以後のことである。しかし，修理事業も太平洋戦争により中止せざるを得なかった。

その後，昭和22年に「観世音寺復興会」が設立され，昭和26年まで金堂・講堂の修理を行っている。この時，講堂の東南隅に建てられていた鐘楼を塔跡の東側に移築し，さらに，金堂の北側で，講堂の西側（現在は池になっている場所）に建っていた「天智院」を南門跡北西側に移築している。また，各堂宇に安置されていた仏像なども昭和32年に修理することとなり，同時に火災や台風などの災害から仏像を守り，それらを後世に伝承するための堅固な収蔵施設の

宝蔵の完成

建設が必要とされた。２年後の昭和34年には，待望の収蔵庫（宝蔵）が完成し，古代から守り伝えられてきた貴重な仏像などを永久保存する役目を担っている。

現在，観世音寺境内には，江戸時代再建の金堂と講堂の他，鐘楼・庫裡・天智院（茶室）・仏像収蔵庫（宝蔵）などの建物が存在する。また，元禄16年（1703）に観世音寺から分離した戒壇院には，本堂・庫裡・鐘楼・茶室などの建物があり，観世音寺とともに古刹として人々に憩いの場を提供している。

（２）調査経過

昭和43年以前，大宰府史跡に対する遺跡保存対策は，容易なものではなかった。それでも，観世音寺は大宰府政庁跡と異なり，史跡の保護対策はさほど講じなくてもよく，現在も法燈が保たれ，年末には「国宝梵鐘」の音色を聴くことができる。

昭和25年，「文化財保護法」が制定された。それに伴って「大宰府史跡」は昭和28年３月31日付で格上げとなり，国指定「特別史跡　大宰府跡」になった。一方，観世音寺は大宰府史跡

の追加指定に伴い，昭和45年９月21日付で「観世音寺境内及び子院跡」として，864,462㎡が国指定史跡となった。

昭和43年から，大宰府史跡及び大野城跡・水城跡などの調査が本格化する以前の観世音寺の発掘調査は２回行われている。調査に着手する以前は，寺跡の全貌を解明するには至っておらず，特に考古学・建築学的には推論の域を出ない状況にあった。例えば，研究者によっては，観世音寺の伽藍配置を「法起寺式」と呼んだり，「観世音寺式」と呼んだりしていた。このような観点から，観世音寺に初めてメスを入れ，考古学的及び歴史学的，建築学的に解明しようとする試みが，昭和27年九州文化綜合研究所によって実施された。実際，発掘調査を担当した鏡山猛は，『大宰府都城の研究』の中で伽藍及び寺域の復原を試みている。

「大宰府都城の研究」

続いて，昭和32～35年にかけて，観世音寺仏像収蔵庫建設に関連して講堂跡・回廊跡などが福山敏男・澤村仁等によって調査された。これらの成果については，十分に報告されていないため，今回部分的ではあるが，資料を追求できる範囲の中で掲載することとした。

観世音寺の発掘調査地域は，福岡県太宰府市大字観世音寺56-1番地他である。この一帯は，古代山城の大野城跡が築城された四王寺山から派生した丘陵地と谷地形が入りくみ，その山麓には，観世音寺子院の一つである金光寺跡や崇福寺跡が所在する。現在，観世音寺の東西域は平坦な田畑となっているが，子院が立地するにはふさわしい場所である。また，かつては南域にかけても水田が広がっていたが，近年は住宅が密集し，昭和40年代の面影は留めていない。

史跡「観世音寺境内及び同子院跡」地区における発掘調査は，文化財指定地の内外を調査対象地としたものであったが，昭和38年に福岡の大手不動産会社による宅地造成計画が出され，観世音寺背面（大字横岳一帯）に存在した崇福寺跡及び観世音寺子院跡などが破壊の危機に瀕した。福岡県は史跡の追加指定申請を行ったが，結果的に団地造成は実施され，遺構が破壊されたことは痛恨の極みである。

大宰府史跡の調査は，「大宰府史跡調査研究指導委員会」の諮問を受け，年次計画を立てて実施している。基本的には５ヶ年を一区切りとして実施しているが，調査を継続する必要がある場合は，計画を見直して発掘調査を実施している。

観世音寺の解明を目的として行う発掘調査は，『資財帳』及び『観世音寺絵図』を参考にし，それらに記載された堂宇を想定し，かつ残存している礎石などから調査範囲を決定し，事に当たることとした。当館が行った観世音寺の発掘調査は，昭和45年に大宰府史跡第５次調査として行ったのが最初であり，位置的には推定寺域の南東隅部にあたる。この時は，調査体制も十分ではなく，前述の開発事業が年々多くなってきている中でのトレンチによる小規模調査であったが，東西方向の築地の発見という結果は，調査担当者の心を浮足立たせた。

大宰府政庁跡の発掘調査を主体的に進める中で，観世音寺地区を本格的に調査したのは，昭和51年に大宰府史跡第43次調査として実施した推定僧房跡の調査である。遺構面は後世の削平が著しかったが，幸うじて礎石２個と礎石根石33個が遺存しており，長大な礎石建物１棟を検出することができた。礎石根石の規模・配列から建物の復原を試みた結果，『資財帳』記載の大房の寸法と近似することが判った。

大房の発見

引き続き，寺域の北限を確認するとともに『資財帳』に記された小子房・客僧房・馬道屋などの配置を把握するのを目的として，昭和55年に大宰府史跡第70次調査を，平成元年には大宰

府史跡第120次調査・第70次補足調査を実施した。これらの調査の結果，第70次調査区北端で幅6.5mの版築状遺構から6条の瓦敷集積遺構を検出し，さらにその北側で東西溝ＳＤ1850を検出したことから，懸案であった寺域北限を推定するに至った。また，奈良川原寺創建時軒丸瓦と同笵の軒丸瓦が発見され，天智天皇ゆかりの寺である物証を得ることができた。

川原寺と同笵の軒丸瓦

昭和62年から平成３年にかけては，寺域の東辺部及び南辺部に集中して調査を実施した。大宰府史跡第45次調査・第119次調査・第121次調査地は伽藍の東側で，東面築地の推定地にあたる。調査地は丁度，宝蔵の北東から東側にかけてで，そこには南北に畦畔が走っており，堂宇の東側を画する築地の存在が予測された。調査の結果，第121次調査区の東端において南北に走る８世紀後半の溝を検出した。「資財帳」には，「□□(八丈)陸拾伍丈板葺」と記されており，他の築地３面が瓦葺きであるのに対し，東面築地は板葺である。構造的には異なるが，当初から構造を異にしていた点も否定できず，東面築地としての可能性も残している。また，第45次調査時に唐三彩三足壺（鍋）が出土したことは，観世音寺において盛唐期の遺物が発見され，一例寺院の格付けを確固たるものにしたとして報道された。

東面築地は板葺

唐三彩壺の出土

次に，天智天皇の発願から長年の歳月を費やして建立された観世音寺の建物規模，伽藍配置，そして創建年代を解明するためには，どうしても講堂跡・金堂跡の調査を実施する必要に迫られた。前述した如く，講堂跡は昭和27・32年に発掘調査が実施され，建物規模・構造の復原はもちろんのこと，回廊が講堂側面の中央に取り付いていたことが指摘されている。

金堂・講堂の両建物は，県指定建造物として文化財指定されており，また，信仰者及び観光客が早朝から訪れているため，調査は範囲を限定して行う必要があった。このような条件の中，石田琳圓住職及び家族の方々は，我々の考えを寛容の心で理解され，平成２年に大宰府史跡第126次調査として講堂跡の発掘に着手することができた。調査区は既存建物の正面部分を除く四周に及び，長期に渡る発掘調査であったが，基壇遺構はⅠ～Ⅴ期を確認し，特に講堂前面部分にみられた基壇拡張とそれに伴う孫廂の遺構を確認したことは大きな成果であった。この結果，基壇変遷を次のように捉えた。

Ⅰ　期：８世紀前半代（天平18年頃に比定）

Ⅱ　期：10世紀後半代（講堂正面を南に２ｍ程拡幅し，孫廂を付けた時期。治暦２年（1066）の再建時期に比定）

Ⅲ　期：15世紀代（Ⅱ期の基壇正面を0.7ｍ南へ拡張）

Ⅳ　期：17世紀代（正面と背面に孫廂が付き，基壇規模が最も大きくなる。また，寛永８年の仮堂建設記事と「寛永」紀年銘を有する鬼瓦が符合することを指摘）

Ⅴ　期：元禄元年（黒田忠之による再建）

講堂跡の調査によって伽藍解明が大きく前進したため，次の主要建物である塔跡と推定南門跡の調査を平成３年に大宰府史跡第130次調査として実施した。塔跡及び推定南門跡付近には礎石が数個散在していたため，当然にして建物及び基壇規模が確定できるものと調査者・同確信していた。塔跡の調査ではそれが的中した。推定基壇列の南辺・西辺の一部に径20cm前後の自然石を配列した雛石を検出し，塔基壇規模一辺15m四方を推定するに至った。

塔基壇は一辺15m四方

そして調査は一段と拍車がかかり，南門跡へメスを入れた。南門跡推定地には数個の礎石が散在しており，基壇などの検出が予想されたが，残念なことに門遺構は後世の攪乱が著しく遺

存していなかった。しかしながら，伽藍配置及び寺域の状況を勘案すると，南大門の場所は現位置であることには疑いない。

次に，推定南門跡の位置を手掛かりに，南面築地跡の検出に精を出すこととし，昭和62年には大宰府史跡第109・111次として推定築地跡南西部を，さらに昭和63年には大宰府史跡第115次調査として推定築地跡南西隅を調査対象地に選定し，平成２年は大宰府史跡第122次調査として推定築地跡南東部を調査対象地として発掘調査を進めた。この一連の調査で観世音寺前面域の様相が少なからず明らかになってきた。検出した遺構は，掘立柱建物・柵・溝・井戸・土坑などで，時期的には大きくⅢ期に分けることができる。

しかし，懸案の南面築地は検出できなかったが，13～16世紀にかけて掘削された小溝や柵によって区画された中世の集落跡が検出された。このことにより，観世音寺南門前面域一帯は，寺院創建当時は一種の空閑地であったことが想定された。また，推定南門跡から南に延びる現参道は，古い時代から存在したと予測できたことである。それは，現参道の西側で幅8～11mの南北溝を検出し，溝下層埋土中から「嘉元二年十一月卅日」の紀年銘を有する卒塔婆が発見された。中世の溝ではあるが，それは推定南門跡付近から始まっており，参道を区画するため掘削された溝と考えられる。　中世の集落

これまで精力的に進めてきた観世音寺の伽藍規模・構造などの解明も，今一歩の所で中断せざるを得なくなった。それは，都市区画整理事業に伴い大宰府政庁跡前面域の日吉・不丁・大楠・広丸地区において宅地造成が急ピッチで進行し始めたことによる。前面域の発掘調査では，大宰府政庁南面に官衙域が広がっていることが判明し，多大なる成果を上げることができたが，観世音寺の調査は停滞してしまった。

平成６年に観世音寺戒壇院庫裡の改修事業に伴う調査が入った。この間小規模なトレンチによる調査が３回程あったが，主立った成果は得られなかった。戒壇院地区の調査では，古代の戒壇院に関わる遺構は希薄で，主に近世の礎石建物を調査した。この建物は近世戒壇院に伴う庫裡と考えられる。　近世の庫裡

これまで観世音寺境内及びその周辺を30数ヶ所発掘調査してきたが，肝心な金堂跡の規模を解明することが残された課題であった。大宰府史跡調査研究指導委員会への諮問並びに委員の協力を得，また，観世音寺住職の深い理解のもと，平成14年に大宰府史跡第188次調査として金堂跡の発掘調査に着手することができた。以前，金堂跡は昭和27年に鏡山猛等により発掘調査がなされており，花崗岩の割石を配列した基壇が確認されている。今回はその調査成果を踏まえ，金堂正面を除く北・西・南面に調査区を設定した。結果は，これまでの調査で発見されていなかった創建時と考えられる瓦積基壇（砂岩製の地覆石の上に瓦を積んでいる）が検出された。さらに10世紀中～後半及び12世紀中頃の基壇も新たに発見され，創建期から現在までに計５回の基壇築造が行われていることが判明した。調査に携わった者・同歓喜に声が震えたものである。この創建期の瓦積基壇の発見によって，講堂跡の創建期とした第Ⅰ期乱石積基壇遺構に疑問が生じたのである。　創建時の瓦積基壇

年次計画では，金堂跡の調査を一つの区切りとして，観世音寺の正式報告書の刊行が迫っていたが，講堂跡の創建基壇を再確認する意味において，平成15年に再調査を試みた。調査担当の小田和利は，再三にわたっての調査のため，従来の図面・写真を入念，詳細に検討しながら調

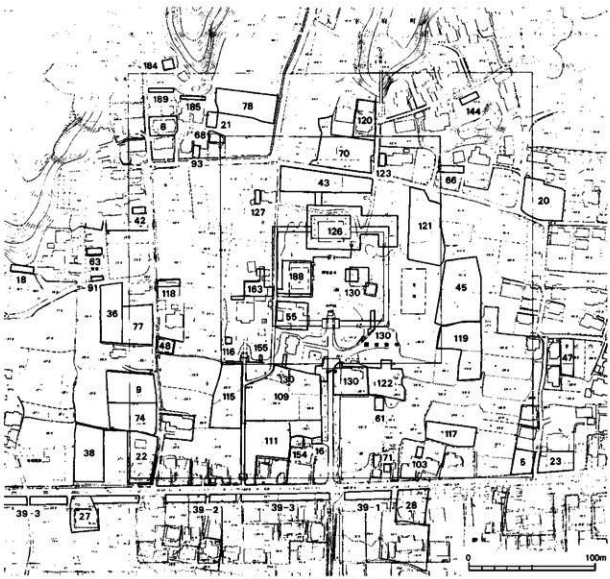


Fig.1　観世音寺調査地域図（1/3,000）

下層で礎石根石発見

査を進めた。調査も中盤にさしかかった頃，現礎石の１ｍ程西側で，約80cm下層から礎石根石を検出し，加えて基壇積土中から新しい瓦を検出するなど，現存する礎石は創建当初のものではないと判断する材料を二三得ることができた。

伽藍配置の定説覆える

さらに，北面西回廊の礎石根石も検出された。従来，北面回廊は講堂中央部に取り付くと考えられていたが，一間分講堂前面に取り付く形となり，これまでの観世音寺伽藍配置の通説を一挙に覆す大発見となった。また，当初懸案事項としていた創建基壇であるが，講堂西側において砂岩製の地覆石片を発見したことから講堂も創建当初は金堂同様，瓦積基壇であった可能性を確認した。

昭和27年の発掘調査以来，観世音寺周辺の調査は38次数になる。後世の攪乱や中世遺構によって創建当初の伽藍解明が容易でなく，中門をはじめ鐘楼や経蔵など，未だ建物の規模・構造を把握するに至っていない現状であるが，これまでの調査成果をひとまず集約する意味において，従来の調査を報告することとした。

Tab.1　観世音寺発掘調査地域一覧

次数	地区略号	調査箇所	面積㎡	調査期間	地番
		金堂・講堂他		昭和27年	観世音寺字堂廻
		講堂・東面回廊		昭和32年	〃
5	6KKZ-B-G	寺域南東隅部	60	700710～700730	観世音寺字露切73-1
16	〃-B-P	南面域	21	711125～711214	〃　堂廻174
20	〃-B-B	東面域	130	720603～720703	〃　朝日13-1
23	〃-C-F	寺域南東隅部	240	720928～730110	〃　露切74-1
28	6AYE-B	左郭五条七坊	77	730525～730613	〃　上井ノ内359
39-1	6AYE-C	左郭五条六坊	279	751020～751127	〃　露切98-8
39-2	〃	左郭五条五坊	250	760202～760416	〃　上井ノ内154他
39-3	〃	左郭五条三～六坊	600	760630～760927	〃　上井ノ内169-6他
43	6KKZ-B-K	僧房跡	970	761012～770224	〃　堂廻183-4
45	〃-B-M	東面築地東辺部	1,570	770410～771007	〃　今道50・52
47	〃-C-E	東面域	105	770405～770424	〃　御所ノ内41-1
48	〃-A-H	西面域	20	770425～770427	〃　堂廻191
55	〃-B-M	西面回廊南西隅部	70	780403～780415	〃　堂廻182
61	〃-B-O	南面域	48	781124～781205	〃　今道63-2
66	〃-B-H	東面築地東辺部	50	800108～800111	〃　山ノ井857
70	〃-B-J	推定小子房跡	1,150	800406～801203	〃　山ノ井845・846
71	〃-B-P	南面域	5	800410～800415	〃　今道63-3
103	〃-B-P	南面域	13	861104～861120	〃　今道62-9
109	〃-B-O	南面築地前面	1,790	870704～871224	〃　堂廻178-1他
111	〃-B-P	南面域	1,480	880104～880617	〃　堂廻176-1他
115	〃-B-P	戒壇院南面域	860	880708～881117	〃　堂廻195・199
116	〃-A-F	戒壇院境内地	11	880919～880926	〃　堂廻192-2
117	〃-B-O	南面域	630	881110～890214	〃　今道59
118	〃-A-H	西面域	35	881205～891214	〃　堂廻190-2
119	〃-B-N	東面築地南東隅部	870	890322～890812	〃　今道54-1・2
120	〃-B-I	推定北面築地跡	360	890821～891030	〃　山ノ井893-3
121	〃-B-L	推定東面築地跡	1,235	891127～900516	〃　今道48-3
122	〃-B-O	南面築地南辺部	630	900601～900917	〃　今道62
123	〃-B-H	僧房跡北側	7	900810～900811	〃　山ノ井847-1
126	〃-B-L	講堂跡	800	891119～900809	〃　堂廻182
126補	〃-B-L	講堂跡	250	040119～040521	〃　堂廻182
127	〃-A-C	僧房跡南西隅部	10	901114～901116	〃　堂廻184-1
130	〃-B-O	塔・南門・回廊跡	867	920109～921222	〃　今道64他
144	〃-B-H	北面域	59	920729～920907	〃　山ノ井862-1
154	〃-B-O	南面域	22	940117～940125	〃　堂廻175-1
155	〃-B-O	推定南面築地跡	4	931224～940124	〃　堂廻192-1
163	〃-A-E	戒壇院車裡	278	941017～950206	〃　堂廻192-1
188	〃-B-M	金堂跡	160	021001～030210	〃　堂廻182

（3）調査組織

観世音寺境内及びその周辺域の発掘調査は，昭和27年の調査開始から今日まで通算38回を数える。本格的な調査は，昭和44年に県教育委員会に文化課が発足し，大宰府史跡を中心に調査を進めるようになってからであり，観世音寺の調査も大宰府史跡調査の一環として実施されるようになった。調査の実施にあたっては，諮問機関として「大宰府史跡発掘調査指導委員会」（後に「大宰府史跡調査研究指導委員会」に改名）を設置して，その指導・助言のもとに計画的及び断続的に進められた。

昭和47年，九州歴史資料館が発足してからは調査体制が整備され，大宰府史跡を総合的・学術的に解明することを目的として発掘が進められた。しかしながら，当館における大宰府史跡の調査は，大宰府政庁跡や観世音寺ばかりでなく，学校院跡・大野城跡・水城跡・筑前国分寺跡と広範囲に及ぶ遺跡を抱え，さらに土地区画整理事業等々の緊急調査の対応に追われ，観世音寺及びその他の史跡調査もなかなか進まない状況にあった。また，発掘調査が長年に及んだため，かなりの職員の出入りが生じた。大宰府史跡第５次調査から36年が経過し，年々調査員数が縮小されつつある昨今である。

Tab.2　大宰府史跡調査研究指導委員会委員（在任年期，◎は委員長経験者を表す）

氏　名	分　野	職　（就任時）	在任期間
◎竹内　理三	国　史	早稲田大学教授	S43～S58
鏡山　猛	考　古	九州大学教授	S43～S46
浅野　清	建　築	大阪市立大学教授	S43～S62
井上　辰雄	国　史	熊本大学教授	S43～S58
井上　光貞	国　史	東京大学教授	S43～S56
大田　静六	建　築	九州大学教授	S43～S58
◎岡崎　敬	考　古	九州大学助教授	S43～H2
岸　俊男	国　史	京都大学教授	S43～S61
坂本　太郎	国　史	國學院大学教授	S43～S55
坪井　清足	考　古	奈良国立文化財研究所　平城宮跡発掘調査部長	S43～H7
小田富士雄	考　古	九州大学助手	S43～
◎平野　邦雄	国　史	東京女子大学教授	S59～H7
狩野　久	国　史	奈良国立文化財研究所　飛鳥藤原宮跡発掘調査部長	S59～
◎笹山　晴生	国　史	東京大学助教授	S59～
澤村　仁	建　築	九州芸術工科大学教授	S59～
杉本　正美	造　園	九州芸術工科大学教授	S59～
中村　一	造　園	京都大学教授	S59～
◎横山　浩一	考　古	九州大学教授	S59～H11
渡辺　定男	都市工学	東京大学教授	S59～
八木　充	国　史	山口大学教授	S63～
川添　昭二	国　史	九州大学教授	S63～
鈴木　嘉吉	建　築	奈良国立文化財研究所長	S63～
西谷　正	考　古	九州大学教授	H4～
佐藤　信	国　史	東京大学教授	H6～
坂上　康俊	国　史	九州大学教授	H8～
田中　琢	考　古	奈良国立文化財研究所長	H8～H10
町田　章	考　古	奈良国立文化財研究所長	H11～
山中　章	考　古	三重大学教授	H12～

大宰府史跡第５次調査・第16次調査は，福岡県教育委員会文化課が調査を担当し，大宰府史跡第20次調査以降は九州歴史資料館調査課が業務を遂行し，現在に至っている。

観世音寺の発掘調査関係者は，下表のとおりである。各個人の役職は，観世音寺調査に関与した最終時，または現在時を示すものである。

Tab.3　観世音寺発掘調査関係者一覧

西暦	役職 / 人名 / 次数	館長						副館長			参事									課長	参補	技術主査							主任技師			
		※鏡山　猛	※田村　圓澄	※吉久　勝美	※高橋　良平	※光安　常喜	※森山　良一	※藤井　功	※石松　好雄	※宮小路賀宏	※柳田　康雄	橋口　達也	※渡辺　正気	※西村　強三	※八尋　和泉	※横田　義章	※栗原　和彦	石丸　洋	※横田賢次郎	児玉　真一	高橋　章	※倉住　靖彦	中間　研志	※亀井　明徳	※高倉洋彰	※森田　尚	赤司　善彦	小田　和利	吉村　靖徳	小川　泰樹	齋部　麻矢	杉原　敏之	岡寺　良	加藤　和歳	酒井　芳司
1970	5																		○			◎										
1971	16																		◎	○		○										
1972	20								○										◎	○	○	○										
	23								○										○	○	◎											
1973	28								○										○	○	◎											
1974																																
1975	39								○						△	△		△	○		○	△		◎								
1976	43								○							△		△	○		○	△		◎								
1977	45								○							△		△	◎		○	△		○								
	47								○									△	◎			△		○								
	48								○									△	○			△		○	◎							
1978	55								○									△	○		◎	△		○								
	61								○									△	◎		○	△		○								
1979																		△														
1980	66								○									△	◎		○	△		○								
	70								○					△	△	△		△	○		○	△		○	◎							
	71								◎									△	○		○	△		○								
1986	103								○									△	○					◎		○						
1987	109								○					△	△	△		△	○					◎		○						
1988	111								○					△	△	△		△	◎						○	○		○				
	115								○									△	○						◎	○		○				
	116								○									△	○						○	◎		○				
	117								○							△	△	△	◎						○	◎		○				
	118								◎									△	○						○	○		○				
1989	119								○					△	△	△		△	◎							○		○				
	120								○					△	△	△		△	◎							○		○				
	121								○							△		△	◎							○		○				
1990	122											○		△		△	△	△	◎							◎		○				
	123											◎					△	△	○							○		○				
	126											◎		△	△	△	△	△	◎							○		○		△		
	127											○					△	△	◎							○		○				
1992	130											○		△	△	△	△	△	◎								◎	○		△		
	144											△					△	△	△								◎	○				
1994	154																△	△	△								◎	○				
	155																△	△	△								◎	○				
	163														△	△	△	△	△								◎	○				
2002	188																	△	△		○						◎				△	△
2004	126補																	△	△		○						◎				△	△

凡例　－－：在任期間，※：退職者，◎：調査主任，○：調査担当，△：調査関係者

なお，調査関係職員のうち，文献（古代史）については倉住靖彦・酒井芳司が，美術工芸は西村強三・八尋和泉・井形進，写真撮影全般については石丸洋が担当した。

昭和45年以降の発掘調査・整理作業関係者は，下記のとおりである。

〔調査補助員〕

澤田　康夫（現那珂川町教育委員会）　　久野　隆志（現福岡県教育委員会）

山本　輝雄（現九州国際大学教授）　　山本　信夫（現金沢大学助手）

〔整理作業員〕

松沢直子　伊藤かの子　井上とし子　松浦敏子　田崎道子　大田和子　小西恵子

大田千賀子　市川千香枝　中田千枝子　齋部麻矢　今井涼子　小田美和　高橋佑佳

橋之口雅子　高田いく子　髙田雅子　比嘉えりか　初山淳子　吉井美智恵

〔発掘作業員〕

荒木健二　魚住　修　大田利次　鬼木定樹　尾花善太　椛島昭雄　城戸健一　座親正美

白石茂樹　関　武平　高橋慎二　武石　康　田原直人　永田　一　上師外海　上師常巳

馬場　五　原野三次郎　原野虎雄　原野　稔　武藤誠造　武藤竹夫　武藤芳毅　武藤芳明

安恒　進　吉木弘美　井上弘子　井上フミ　今福コヒサ　今福定子　岩崎冨貴子　大田君代

大田カズエ　大田シカ　大田タネ子　大田トモエ　大田フジエ　大田ミヨ子　大田喜美

大田レイ子　大谷千代子　小澤由紀子　鬼木トミ子　神崎サツキ　後藤ハツ子　小島八重子

篠原昌子　清水フミ　首藤由紀美　四本ルリ子　関　千代子　関　ハル　関　フサエ

関　ヨシエ　園田シズエ　高取ヒロ代　竹山ミツエ　田村シメヲ　田村スズ子　田中寿代

徳永シズエ　永島マサ子　永田ルイ子　上師シズエ　波多江由美子　初山幸子　浜崎喜美子

原野ナミエ　原野八重子　平田キクヨ　松島千恵子　松尾カオル　松尾ヒサエ　松永ツヤ子

丸山千代子　武藤　和　武藤カメ　武藤チナ　武藤千代子　武藤ハルミ　武藤美津代

武藤道枝　武藤ヨシ子　森永祐子　安元知子　八尋エイノ　八尋ヨシ子　山内マサヨ

吉鹿壽賀子　吉鹿次枝　力丸　薫　　（アイウエオ順）

この他，観世音寺の調査に深く御指導・御協力頂いた関係者は，以下のとおりである。

観世音寺石田琳圓住職，石田琳彰副住職，戒壇院柏木文正住職，九州陶磁文化館大橋康二，九州造形短大遠藤喜代志，元興寺文化財研究所狭川真一，太宰府天満宮森弘子・小西信二，大隈和子，他関係市町村文化財職員

観世音寺－伽藍編－　作成関係者

＜総括＞　館　長　森山　良一（兼教育長）

副館長　橋口　達也

参　事　石丸　洋（写真担当）

＜庶務＞　総務課　権藤　繁利　松井　安彦　永田　陽子

＜実務＞　調査課　髙橋　章　小田　和利　吉村　靖徳

＜整理＞　大田千賀子　市川千香枝　中田千枝子　髙田いく子

初山　淳子　比嘉えりか　吉井美智恵

（髙橋　章）

Ⅱ　位置と歴史的環境

遺跡の位置

観世音寺は九州の北西部にあり，行政区でいえば福岡県太宰府市に所在する。また，旧国名では筑前国御笠郡に含まれる。位置は北緯33°31′，東経131°付近で，博多の津より14kmほど入り込んだ内陸にある。観世音寺が所在する四王寺山南麓一帯には大宰府関連の遺跡が広がっており，大宰府史跡として現在までに約900haに及ぶ広大な面積が史跡指定を受けている。このうち観世音寺は「史跡観世音寺境内および子院跡」として89.5haが保存されている。そして，これらの史跡指定地内では，周囲の景観に配慮した整備や日常的な管理が行なわれている。そのため，今でもなお観世音寺を含む大宰府史跡とその周辺では，かつて大宰権帥菅原道真によって「観音寺はただ鐘の音を聴く」と詠まれた往事の情景・景観を偲ぶことができる。

地理的環境

まず，観世音寺が所在する「大宰府」の地形を概観しておく。「大宰府」とは古代律令制下において西海道を統括した行政府であるため，広義にはその権限が及ぶ範囲を指す。狭義には条坊制が敷設されたいわゆる大宰府郭の範囲，あるいは大宰府政庁を中核とし水城・大野城・基肄城などの周辺施設を含む大宰府都城全体を指す場合など様々である。以下では狭義の範囲のうちでも都市機能を果たし得た大宰府郭を中心に記す。行政区としては太宰府市・筑紫野市及び大野城市・宇美町の一部を含む地区にあたる。

現在，太宰府市の西半部から南部にかけては，高速道路・国道・私鉄など九州における各種幹線網が集中している状況である。また，これらとルートを重複させて古代西海道が通過している。このことからもわかるように，古来より大陸に対峙する博多の地から大宰府経由で豊後道を通って畿内へ，南下すれば有明海に抜ける交通の要所となっている。豊後道が軍事上の要衝としての位置づけられることは，古墳時代における大和政権の対内外の重点的な拠点として配置された的君の奥津城がこのルート沿いに存在することや，斉明天皇が崩御した朝倉橘広庭宮にも通じること，さらには古代山城の分布などからも十分に窺い知ることができる。

交通・軍事の要衝

このように歴史的に重要な位置を占めるに至った背景には，大陸に直面する津に通じるという地理的な理由だけにとどまらずに，この地域の地勢が大きな要因として関わっている。大宰府は，概して北部～東部と南西部の山地，並びにそこから派生する丘陵地帯に囲まれる盆地状の地形を呈し，その間を宝満山に源を発する御笠川が博多湾に向けて貫流することによって北西に開ける地形となる。北部～東部の丘陵地帯には，三郡山地に連なる霊峰宝満山（標高868m）が存在し，その西には我が国最大・最古の朝鮮式山城大野城を擁する四王寺山（標高410m）がある。御笠川は宝満山と四王寺山の間を南流し，東に流れを変え，さらに四王寺山麓に沿うように北に流れをとって玄界灘へ向かう。一方，南西部には脊振山地に連なる天拝山（標高258m）から北～東に向けて低丘陵が延び御笠川に至る。このように当該地は，三郡山地・脊振山地とそこから派生する丘陵によって挟まれた南東～北西に抜ける幅1.2～1.5kmほどの部分に二日市低地帯を形成する。即ち，この低地帯は博多の存する福岡平野と筑紫平野を分かつ地峡となっており，その博多側が長大な構築物である水城によって遮断されている。そして，

三郡山地

脊振山地

二日市低地帯

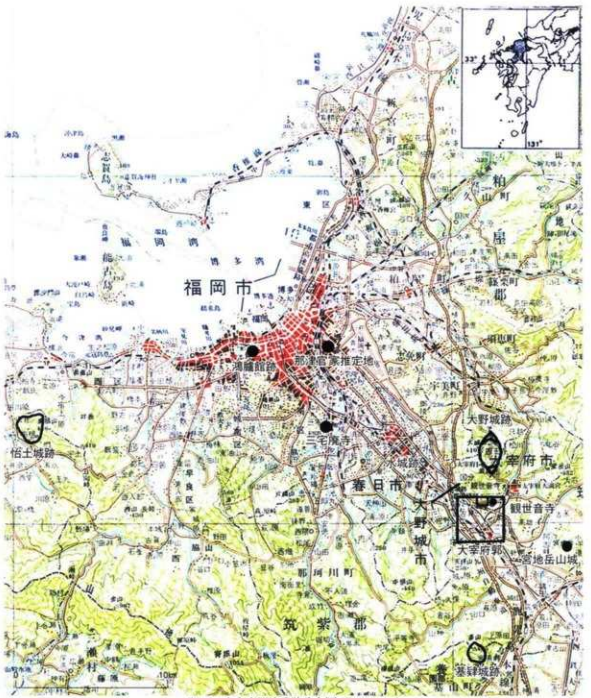


Fig.2　大宰府関連遺跡分布図（1/200,000）

地峡の南部（太宰府側）には，御笠川の氾濫によって形成された沖積地と，二つの山地から延びる丘陵の安定地盤部分を中心として大宰府関連の遺構が営まれている。

四王寺山南麓

観世音寺は二日市低地帯の北側，四王寺山の南麓に位置し，大宰府郭の北辺部にあたる。四王寺山は「万葉集」にも見えるように古くは大野山と称され，その頂部を中心に朝鮮式山城である大野城が築城された。国防の最前線として天智３年（664）に築堤された水城の翌年のことである。観世音寺は，この四王寺山から八ツ手状に派生した丘陵先端部の通称「山ノ井丘陵」と呼ばれる部分に切り土整地を施し，主要伽藍はその安定地盤上に占地する。ただし，方３町と想定される寺域全体としてみると，その大半が谷部にあたり，湿地が土壌化した粘質土層が

広がっている。そのため，かなり大規模に埋め土を行ない，その整地層上に観世音寺関連の遺構が営まれている。

なお，観世音寺の西側約600mの距離には，古代律令制下において西海道九国三嶋（のち：大宰府政庁嶋）の行政を統括した大宰府政庁があり，寺域の西側は政庁に付属する官衙域と接するという地理的環境のなかに所在する。

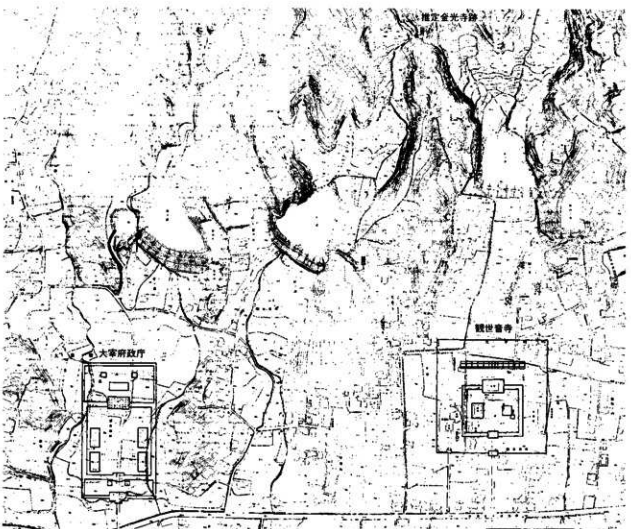


Fig.3　観世音寺周辺地形図（1/6,000）

歴史的環境

仏教公伝後，蘇我馬子らの尽力によって百済から渡来した寺工・瓦博士などの技術者の指導のもと，推古４年（596）に飛鳥寺が竣工した。その後天武朝に至って，諸国ごとに仏舎や仏像・経典を置く旨の詔が出され，地方に仏教が浸透していく。このような国家的な動きとは別に，西海道北東部の豊前国においては，百済・新羅・高句麗系軒瓦を多く出土するなど，朝鮮半島の渡来系氏族と在地豪族の関係の中で建立に至ったと考えられる寺院も顕著にみられる。

仏教伝来

このような中，観世音寺は中央政府が中心となって建立した，いわゆる「官寺」と位置づけられる。和銅２年（709）の詔に，「筑紫観世音寺は淡海大津宮に御宇天皇（天智）がのちの岡本宮に御宇天皇（斉明）のおんために誓願し基するところなり」（『続日本紀』元明天皇条）と

天智天皇による発願

斉明天皇

ある。660年の百済滅亡に伴い，翌年，斉明天皇は百済救援のために後飛鳥岡本宮より西下して那大津に到着し，磐瀬宮に入った。しかしその後，斉明天皇は朝倉橘広庭宮（福岡県朝倉郡朝倉町付近に比定されている）で突然崩御する。その菩提を弔うために，皇子である天智天皇によって発願された寺院が観世音寺である。この発願の契機からも窺い知ることができるように，観世音寺は単に一つの地方寺院との位置づけにはとどまらない歴史的な背景を有することになる。

大宰府と観世音寺

観世音寺は天智天皇によって発願された官寺でありながらも，西海道における中枢的な行政機関である大宰府と密接な関係を持つ。現在地に寺地を選定した経緯，あるいは条坊ないしは街区の形成時期との関係，さらには観世音寺の創建年代と落慶に至る背景，寺の衰退など，観世音寺は大宰府の成立と展開を抜きにしては語れない側面がある。

観世音寺は斉明天皇が崩御した朝倉の地ではなく大宰府に建立されており，しかも第Ⅱ期大宰府政庁との位置関係を踏まえた上での規則的な地割計画に則った占地がなされた可能性が高い。即ち，遅くとも第Ⅱ期大宰府政庁が成立した時点では，寺地の選定がなされていたものと考えられる。従って，観世音寺の着工時期を知るに際して，現都府楼に大宰府が設置された時期がどこまで遡り得るかにひとつの視点を置く必要があろう。

通常，大宰府は『令義解』に見える大宝律令の制定をもって成立したものとされる。ただし，これは，古代律令制下において整備された「大宰府」の成立であり，大宰府に繋がる一定の機能を果たす大宰府機構自体はいわゆる「筑紫大宰」段階にも存在し，その史料上の初見は推古17年（609）まで遡る。また，これより以前，博多湾に面する那津に修造された那津官家を律令制下の大宰府の前身として捉える見解がある。那津官家は福岡市比恵遺跡に比定されるが，官司としての筑紫大宰の所在特定はなされておらず，大宰府郭内にいつの時点で筑紫大宰が置かれたのかについては定かではない。

ただし，現状においては都府楼の地に移転してきた時期が白村江敗戦以降という考え方が支配的で，政庁Ⅰ期新段階の遺構群を概ね持統朝にあて，すでに稼働していた大宰府機構に関する遺構と考える指摘もある。近年，大宰府の街区割りについては政庁Ⅰ期段階に遡って施工された可能性も指摘されており，観世音寺の寺地選定時期がどこまで遡るか，さらに実際の着手年代の問題とも深く関わってくるのである。いずれにせよ，観世音寺の寺地が斉明天皇が崩御した朝倉橘広庭宮の近傍ではなく大宰府の地であることは，逆に観世音寺の位置決定がなされた段階で，すでに広域行政府としての大宰府（筑紫大宰）が現在地に存在するか，あるいはそのプランが敷設されていたと考えられるのである。

観世音寺の落慶

大宰府と観世音寺との密接な関係は，観世音寺が完成に至る過程でも知ることができる。天智朝の発願以来，造寺が遅々として進まなかったが，天平18年（746）に至ってようやく落慶供養の日を迎える（『元亨釈書』）。遅延の理由には複数が認められ，一つには大宰府政庁（政庁Ⅱ期）の建設が影響を与えていたことが考えられる。さきの和銅２年の詔から，造寺活動が大宰府の庇護のもとに推進されていたことが窺い知れるが，その大宰府政庁の建設という大事業が優先されたために，この間の造寺活動が延滞していたことは推測できよう。また，完成間近の天平12年（740）の大宰少弐藤原広嗣による大宰府での蜂起に伴う大宰府の廃止といった混乱も，少なからず影響を与えていると考えられるのである。

上記のように，観世音寺の建立が斉明天皇崩御に伴う天智天皇の発願に端を発すること，寺地が中央政府の出先機関としての大宰府を含めた都市計画図の中に配されていることをみれば，その成立経過・背景を察することが可能である。さらに，伽藍配置と創建瓦にも官寺としての性格が如実にあらわれている。まず，伽藍については，中門から延びる回廊が東の塔と西の東面金堂を囲繞し，講堂に取り付くという「観世音寺式伽藍配置」をとる。この配置は現在までに，対蝦夷政策の中枢として設置された多賀城に付属する多賀城廃寺で確認されているのみである。観世音式伽藍配置は，その成立にあたって，同じく斉明天皇ゆかりの大和川原寺の影響を受けていると，いわれる。即ち，川原寺の中金堂の位置に講堂を移すと，観世音寺の伽藍配置と重なってくる。なお，観世音寺からは川原寺式軒丸瓦が一点出土している。一方，創建瓦の老司Ⅰ式軒瓦に関しては，未だ成立過程や時期が詳らかでない点もあるものの，藤原宮式軒瓦の影響を受けて成立したことは疑いない。

観世音寺式伽藍配置

老司Ⅰ式軒瓦

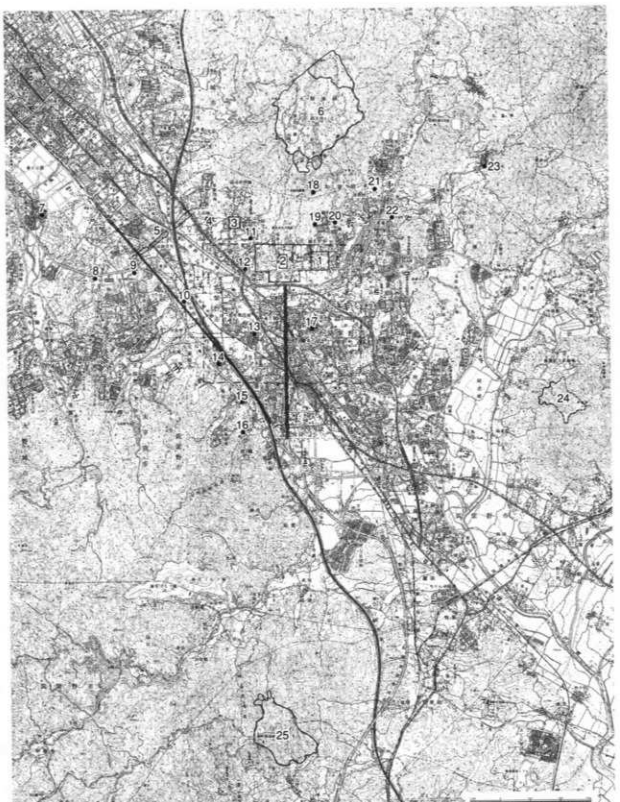
観世音寺の建立にあたって，直接的には大宰府という地方行政機関が介在したにもかかわらず，諸国の国分寺等の地方寺院とは明らかに異なる中央の影響を受けた側面を有していることが窺い知れよう。

『続日本紀』に「府の大寺」と謳われた観世音寺は，天平宝字5年（761）の戒壇院の設置によってその存在を確固たるものとする。従って大宰府の権限が及ぶ西海道，ひいては中央に存する寺院にまで言及せねばなるまい。しかしながら，これらについては，これまでに公表された多岐にわたる論考に委ねることとし，以下では，観世音寺の位置づけを明確にするために，寺が存する狭義の「大宰府」（＝大宰府郭内）と関連する寺院を主として概観しておく。

戒壇院の設置

まず挙げねばならない寺院は大宰府北辺の郭外に存する筑前国分寺であろう。国分寺建立は一般に聖武天皇の治世，天平13年（741）の詔（『続日本紀』）によるものとして捉えられている。しかしながら，藤原不比等の四子の相次ぐ病没といった事件が起こった天平9年（737）には，「諸国に丈六の釈迦像一体，脇侍二体を造り，大般若経一部を移すこと」を命じている（『続日本紀』）。また，すでに神亀5年（728）には「金光最勝王経を国別に一巻ずつ領かち，国家平安のために転読せしむ」の記載もみられる。このように，当時蔓延していた疫病や，天災のほか，天平12年（740）の藤原広嗣の乱などによる社会不安なども重なって，いわゆる国分寺建立の詔が出されるに至ったものと考えられる。しかしながら同時に，仏教という官民共通の精神的な拠りどころを設けることによって世情不安を解消する意味合い以外にも，民衆を動員しての建設事業自体を通して，すでに確立されていた天皇中心の中央集権国家のさらなる整備をはかる役割が目論まれていたのであろう。このようななか西海道においては，『続日本紀』の記載から知れるように，すでに薩摩・大隅を除く西海道の各国分寺が天平勝宝8年（756）段階に存在している。従って，大宰府をひかえる筑前国の国分寺についても遅くともこの時期には完成していたとされる。これまでの発掘調査成果もこの考えには矛盾しない結果となっている。ただ，創建年代に関しては，8世紀初頭の大宰府政庁の建設，天平12年（740）の藤原広嗣の乱とそれに伴う大宰府の廃止等々，諸般の社会情勢によって創建が遅れた官寺である観世音寺の盛衰を遡ることはないと考えられる。なお，筑前国分寺の伽藍は，中門をくぐって東に七重塔，正面に金堂，その背後に講堂を配するもので，寺域の東西を限る溝・柱列と南面築地が確認されている。北面については区画を示す材料に乏しいが，推定東西幅188mと

筑前国分寺



1　観世音寺　2　大宰府政庁跡　3　筑前国分寺跡　4　筑前国分尼寺跡　5　水城跡
6　大野城跡・四王院跡　7　春日水城跡　8　上大利水城跡　9　神ノ前窯跡　10　前田遺跡
11　御笠団印出土地　12　遠賀団印出土地　13　市ノ上遺跡　14　杉塚廃寺　15　塔原廃寺
16　武蔵寺　17　般若寺跡　18　岩屋城跡　19　推定金光寺跡　20　崇福寺跡　21　原山無量寺跡
22　安楽寺跡　23　有智山寺（大山寺）　24　宮地岳古代山城跡　25　基肄城跡

Fig.4　観世音寺周辺主要遺跡分布図（1/62,500）

方2町に近い寺域が復原可能である。

筑前国分尼寺

筑前国分尼寺は筑前国分寺の西約400mに存在する。伽藍中枢の建物跡は確認し得ていないものの，近年の調査によって南門と考えられる東西棟掘立柱建物とそこから南に延びる参道・寺域東限溝などが確認されている。筑前国分尼寺の設置年代は国分僧寺に準じる頃であろう。

般若寺

大宰府郭内には般若寺と杉塚廃寺の2寺がある。般若寺は観世音寺の約900m南方の標高50mほどの丘陵上にある。白雉5年（654）に崩御した孝徳天皇の菩提寺として，大宰帥蘇我日向が建立したとの説，あるいは蘇我日向が建立したのは後述する塔原廃寺であり，それが現在の般若寺に移転したとの見解もあるが未だ説が定まってはいない。遺構としては瓦積基壇を有する塔跡と寺域北辺を限る可能性のある東西方向の構列等が確認されている。なお，出土瓦は老司Ⅰ式・鴻臚館式軒瓦のセットの他，京都府西賀茂瓦窯出土例に類似する均整唐草文軒平瓦が出土している。また，塔に先行する大規模な掘方を持つ掘立柱建物も確認されており，これらの遺構を般若寺の前身として捉えるのか否かによって評価が異なってくる。仮に後者だとすれば政庁Ⅰ期段階に相当し，政庁地区で検出された掘立柱建物群との関係が課題として残る。

杉塚廃寺

一方，杉塚廃寺は左郭に存在する。中門・金堂と考えられる2棟分の礎石建ちの建物基壇が確認されているが，伽藍等の建物配置についての詳細はわからない。軒丸瓦には百済系単弁瓦・老司系複弁瓦，軒平瓦には老司Ⅱ式瓦などがある。後述する塔原廃寺とともに水城西門から延びる官道沿いに位置している。

塔原廃寺

郭外においては，大宰府周辺に存する最古の寺として，大宰府郭南辺近くに位置する塔原廃寺が知られている。塔心礎が残るのみであるが，円形枘穴の中央部に方形2段彫りの舎利孔が設けられる。このように舎利孔を有するものは九州では豊前上坂廃寺以外には例を見ない。また，塔原廃寺では山田寺の系譜を引く軒丸瓦と重弧文軒平瓦のセットが出土している。このように塔心礎にみられる舎利孔や山田寺系軒瓦の存在などから，先に述べた蘇我日向が建立した「般若寺」をこの塔原廃寺にあてる説もある。いずれにせよ，塔原廃寺は大宰府においては上記の要素をもつ点で異質な寺院ということができ，仮に史料に見える「般若寺」だとすれば，大宝律令によって中央官制とともに整備された大宰府が成立する以前の「筑紫大宰」との関連で捉えるべきであろう。なお，畿内系（法隆寺系）の瓦を出土する寺院は，虚空蔵寺や法鏡寺の他，豊前国分寺など豊前地方に数例がみられる。

四王院

次に四王院をみてみよう。四王院は，都市大宰府の北側に存する大野城の四方の土塁線上に配され（毘沙門天・広目天・増長天・持国天），四王寺山の由来となった。現在，創建期に遡る確実な遺構については明らかではないが，関連遺構の一部が知られている。宝亀5年（774）に「大宰府に四王院を起こす」とある（『扶桑略記』）。また，太政官符には四天王像を作らせて僧4人を配したことが記される（『類聚三代格』）。四王院は，当時，敵対していた新羅の呪詛に対して建立され，平安時代前期までは事あるごとに読経などの寺院活動を行っている。このように，単に地方の一寺院というよりも，国家安泰の役割を担う特殊な寺院であることは，その建立の契機や，対外を強く意識した大野城の高所という場所に設置された事から容易に推察されよう。

長安寺跡

朝倉町に所在する長安寺跡は，大宰府とは地理的な隔たりがあるものの，近隣に百済救援のために西下した斉明天皇の朝倉橘広庭宮が所在した可能性が指摘されており，観世音寺を語る

上では看過できない寺院の一つであろう。長安寺の伽藍は詳らかではないものの，鬼瓦の他，「大寺」等の墨書土器が出土しており，官寺に準じる性格の寺院である可能性もある。

初期寺院

なお，奈良時代以前に遡る寺院は，比恵遺跡の百済系単弁軒丸瓦や，ウトグチ瓦窯跡から出土した重弧文軒平瓦・山田寺に類似する文様構成の鴟尾などの資料によって，その近隣に存在が想定される。また，上岩田廃寺では四面廂の礎石建物のほか，高句麗百済系軒丸瓦や山田寺式鬼板・種先瓦が出土し，初期評衡の付属寺院と目されている。先に触れた塔原廃寺も含め，九州における初期の古代寺院の造営に際しては，蘇我氏が深く関与していたことが窺える。

安楽寺

以上にみた飛鳥～奈良時代に創建された寺院は，平安期のある時点で衰退していく傾向にあるが，対照的に台頭してくるのが大宰府の北東に位置する安楽寺である。この寺は延喜3年(903)に没した大宰権帥菅原道真の御廟としての起源を持つ。律令制の弛緩期に成立したためか中央政府の庇護下から脱却し，有力者からの寄進系寺領に経済基盤をおいて発達していった。寺の勢いは寺領が西海道各地に散らばっていることにもあらわれ，また，宋との私貿易を通じて平安時代後半には宇佐神宮とともに西海道に確固たる地位を占めるようになる。宇佐神宮には神宮寺として弥勒寺があるが，同じように神仏習合の流れの中で，

竈門山寺

竈門神社には竈門山寺が建立される。竈門山寺（大山寺）は大宰府の北東部にある霊峰宝満山頂の上宮と中宮・下宮からなる。最澄は唐に渡るに際し，この竈門山で渡航の平穏無事を祈願し，同時に渡航僧侶の寄宿舎ともなっていた。創建は出土遺物からみて奈良期まで遡るものとみられる。先に見た安楽寺・竈門山寺ともに日宋貿易によって利益を得ていたとされる。

その他の寺院

西海道唯一の戒壇院を擁する観世音寺を取り巻く寺院として，鉄義の都市大宰府から広義の大宰府（大宰管内）に目を転じると，西海道各国に置かれた国分寺・島分寺等々もあげられよう。また，宇佐神宮の神宮寺としての弥勒寺は，官寺的な性格をもつ顕著な事例である。

以上に述べた古代から続く寺院に加え，鎌倉期以降に至って崇福寺や原山無量寺など，新たな寺院が創建される。崇福寺は禅宗寺院で，仁治元年（1240）に滅却が開山した。仏殿・僧堂などが確認されている。江戸期のはじめに黒田藩主の菩提寺として福岡市に移された。四王院の別院とされる原山無量寺は，太宰府天満宮の西側の丘陵上に位置している。

衰退期の観世音寺

これら新興寺院に対して，古代より連綿と続く観世音寺は大宰府の衰退に呼応するように保安元年（1120）に東大寺の末寺になる。その後の観世音寺は『筑前続風土記』に記載される49の別院について三別当を介して坊による支配形態をとるようになる。49院は鎌倉期から順次成立して室町頃には揃って存在したとされ，この時期が観世音寺の再興期とも言える。しかしながら総体としてみると，観世音寺に代って大宰府における主導権を握ったのが安楽寺であったことは先述したとおりである。その後の観世音寺は『太宰府観世音寺開基由来』に見えるように，豊臣秀吉による寺領没収等を大きな契機として衰退の一途を辿る。伽藍に関しても，唯一残っていた講堂が寛永7年（1630）の大暴風雨で倒壊する。元禄元年（1688）に至り黒田家の庇護のもと講堂が再建されるものの，元禄16年（1703）には日本三戒壇の一つとして設置された戒壇院の支配権をも失ってしまうこととなるのである。

（吉村　靖徳）

Ⅲ　観世音寺研究史

1　はじめに

大宰府政庁の東に位置する観世音寺は，いうまでもなく古代西海道における官大寺であった。現在では，江戸時代に再興された講堂と金堂が存するのみで創建当時の建物は一切残っておらず，古代の伽藍配置を復原するにあたって有力な手がかりとなるものとしては，いくつかの遺存する礎石と延喜５年（905）の『観世音寺資財帳』（以下，資財帳）があるに過ぎない。したがって，金堂・塔をはじめとする各建物や伽藍配置に関する考古学的，建築学的研究は必ずしも活発に行われてきたとは言い難く，古くは福山敏男や服部勝吉の研究があるくらいであり，また戦後では九州大学に設置された九州文化綜合研究所によって行われた発掘調査の成果を取り入れた鏡山猛の伽藍配置復原および寺域の復原に関する研究が主なものである。

また，出土遺物としての古瓦類については，中山平次郎・小田富士雄によるものが主なもので，その他には観世音寺の古瓦類を取り上げた研究は見られない。ここでは，これらの諸先学の研究論文をもとに昭和43年（1968）に大宰府史跡の本格的発掘調査が始まる以前における観世音寺の伽藍に関する研究の歴史を振り返ってみることにする。

2　伽藍の盛衰

創建と盛衰

観世音寺の創建については，『続日本紀』和銅２年（709）２月１日の条が拠り所となっており，それによると斉明７年（661）筑紫の朝倉宮で亡くなった斉明天皇の追善のため天智天皇が発願されたものとされている。しかしながら，具体的な造営着手の時期については明らかではない。この点について福山敏男は，最初の計画ができたのは天智天皇の末年の670年頃ではなかったかとしている。また，服部勝吉は『続日本紀』大宝元年の条に観世音寺の名がみえていることから造営着手年次は斉明７年（661）から大宝元年（701）の間で，しかも造営着手が天智天皇崩御後におよんだとは考えられないところから天智10年（671）までの事であったとし，福山同様に670年頃ではないかとしている。

造営開始以来，工事は遅々として進まず，養老７年（723）２月には，沙弥満誓が造筑紫観世音寺別当として筑紫に下向している。さらに，天平17年（745）には僧玄昉が観世音寺検校のため遣わされ，翌年の天平18年（746）に落慶供養をむかえ，およそ80年の歳月を経てようやく完成をみたのである。その後，天平感宝元年（749）には定額寺となり，さらに天平宝字５年（761）には戒壇院が設けられた。平安時代に入ると延喜５年（905）に資財帳が成立するが，福山はこの資財帳の記事から貞観３年（861）から仁和元年（885）の25年間に５度の暴風のため諸堂宇が破損し，また修理されたとしている。この延喜５年の資財帳成立以後，康平７年（1064），康治２年（1143）の２度にわたって火災に遭うが，福山は諸堂宇の罹災と再建の状況について，次のような解釈をしている。即ち，康平７年の火災では堂塔回廊僧房以下伽藍の大部分が焼失したが，治暦２年（1066）に講堂・金堂は再建され，塔は再建されなかった。さらに，康治２年の火災では金堂のみが焼失し，講堂は被災を免れたとしている。

中世の観世音寺

鎌倉時代にはいると仏像に関すること以外資料は見いだせず，諸堂宇に関する状況は不明の

ようである。文明12年（1480），筑紫の地を訪れた連歌師の宗祇は観世音寺にも立ち寄り，当時の寺の様相について「（前略）諸堂塔婆回廊皆跡もなく，名のみぞ昔のかたみとは見え侍る。観音の御堂は今に廃せる事なし。さては阿弥陀仏のおはします堂，また戒壇院かたの如く有り」（「筑紫道記」）と記しており，これによりこの当時，講堂・金堂・戒壇院のみが残り，他は礎石のみとなっていたことが伺われる。更に時代が下り，慶長３年（1598）には講堂のみが残り，金堂は滅失していたようである（「九州下向記」）。

近世の観世音寺

江戸時代に入ると荒廃はさらに進み，寛永７年（1630）８月，暴風のため講堂は倒壊し，その後，元禄元年（1688）に再建された。これが現在の本堂（講堂）である。また，金堂は寛永７年倒壊後，同８年に建立された講堂仮堂を移築したものといわれている。このように，江戸時代初期には創建時の建物は完全に滅失してしまっていたと考えられ，服部勝吉は「其の天平完成時の堂塔婆は完全に一つも遺存しない。恐らくは康平の災後は全く残礎のみ旧を伝へ，堂塔婆は再建により一変してしまったものと察せられる」と述べている。

この様な江戸時代の状況を伝えるものとして少し時代は下がるが，文政３年（1820）に描かれた「観世音寺村之内旧跡礎現改之図」（Fig.5）がある。これによると講堂跡に４個，塔跡に12個，中門跡・南大門跡に11個の礎石が描かれている。これを現況と比較してみると中門跡の礎石は全く残っておらず，塔跡も心礎の他に４個の四天柱・個柱礎石を残すのみである。ただ，講堂跡のみは19個の礎石が整然とならんで残されており，創建時の位置を留めているものと理解されてきた。

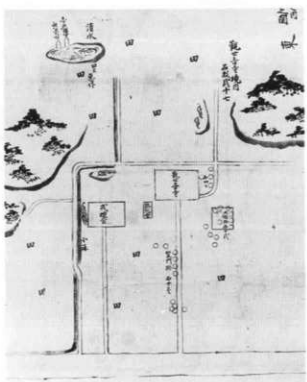


Fig.5　観世音寺村之内旧跡礎現改之図（部分）

3　伽藍の復原

福山敏男の研究

この観世音寺創建時の伽藍配置の復原を試みたのは，昭和２年（1927）に３回にわたって『建築学雑誌』に発表された福山敏男の「観世音寺の研究」が最初であろう。復原にあたっては，比較的良好な状態で遺存している講堂の礎石と資財帳が有力な資料となっている。講堂の礎石は報文によると，昭和２年６月に同寺の石田住職によって３個の礎石が発見されたとあり，これを合わせてFig.6に示したように14個の礎石が確認されている。福山はこれらの礎石相互の計測値をもとに講堂が高麗尺および唐尺の何れで計画されたかについて検討を加え，次のような数値をはじき出している。

高麗尺 …… 桁行＝9＋13＋13＋13＋13＋13＋9＝83
梁行＝9＋12.5＋12.5＋9＝43
唐　尺 …… 桁行＝11＋16＋16＋16＋16＋16＋11＝102
梁行＝11＋15＋15＋11＝52

この両者のいずれをとるべきかについては，にわかには決定し難いとして，それ以上には言及していない。その他の堂宇それぞれについては資財帳によらざるを得ないが，それをもとに検討を加えFig.7に示すような伽藍配置を復元している（唐尺使用）。

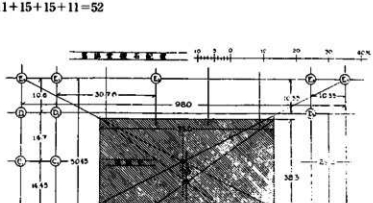


Fig.6　講堂跡遺存礎石配置図

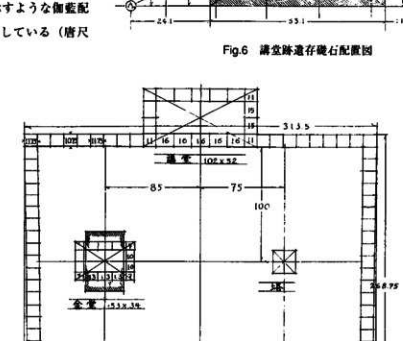


Fig.7　伽藍配置復原図（福山敏男案）

なお，金堂については現在の建物が東面していることから創建当初から東面して建造されたのか，或いは本来南面していたものを後に東に向きを変えたものかについては，この段階では断定し得ないとしている。いずれにしても「観世音寺は法隆寺式伽藍配置法に多少の

modificationを行って出来たもので，法隆寺式配置の時代の下限をなすものであるかも知れない」としている。なお，寺地については，「現在の県道を以て南境とし，もとの北築垣を北境とし，講堂，南大門を貫く伽藍中心線の左右に各500尺づつ，即ち方1,000尺であったらしい。西境は現在南北に横る小径及び溝と略々一致し，東境は寺の東北方にある村道の一部と一致する」としてFig.8のような寺地を想定している。

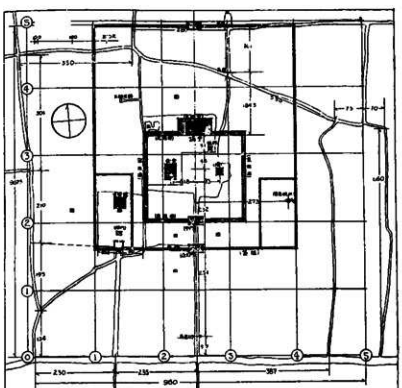


Fig.8　寺域復原図（福山敏男案）

服部勝吉の研究

この福山の論文が発表されて間もない昭和４年（1929）には，服部勝吉によって「筑紫観世音寺伽藍の平面復原案に就いて」と題して伽藍配置と寺地の復原を試みた論文が「歴史と地理」に発表されている。復原を試みるにあたって使用した資料は，福山と同様に遺存礎石の計測値と資財帳および周辺の地形等である。最初に講堂跡遺存礎石間の計測値をもとに創建時使用尺が高麗尺であったか唐尺であったかについて考察を加えているが，福山と同様に講堂跡のみの実測値だけでは，いずれであるとは断定し得ないとしている。この点については，後に再度述べる。各堂宇の復原については，①講堂址より算出した唐尺値によるもの，②一般唐尺値によるもの，③講堂址より算出の高麗尺値によるものの三つの尺による算出値について各堂宇の柱間数値を算出しているが，②の一般唐尺値換算によるものが最も誤差の少ないものであるとしてFig.9のような伽藍配置を想定している。

また，寺地については，伽藍周辺の地形をもとに「南端は即ち太宰府に通じる街道にしてほぼ東西に通じ，西端は単なる里道なれど小曲ありながら，前述東西大路より北におれて寺域の全西端線に沿ひ，（中略）東端路は一層の小里道にして南北に貫通せず，されど其の大部はよく街道と直交して伽藍中心線と並行せるを示すものとす。北端は全く判明せず，殆ど一杯に山地にかかるの有様を呈す」とし，Fig.10のような範囲を想定し，その範囲は方1,080尺の地域で，

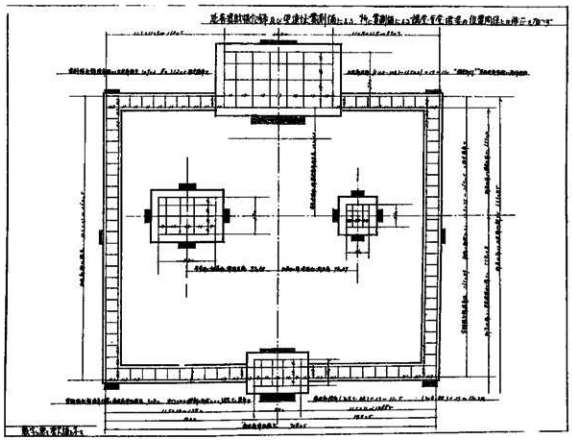


Fig.9　伽藍配置復原図（服部勝吉案）

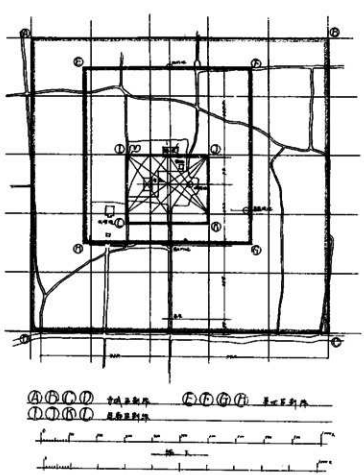


Fig.10　寺域復原図（服部勝吉案）

これは条里制の単位である1里方6町の4分の1地域を占めているものであったとして条里制との関連性を指摘している。以上，講堂址に於ける計画尺の吟味，資財帳記載数値に対する換算値の吟味，寺域と建物配置関係による計画尺の吟味の3項目にわたる吟味によって観世音寺伽藍は唐尺によって計画されたと断じてほぼ誤りないものとしている。

この他，昭和5年（1930）には，当時九州大学法文学部の学生であった鏡山猛が講堂跡をはじめとする境内に残っている礎石の実測を行っている。

戦後に入ると九州大学に九州文化綜合研究所が設置され，九州地方の文化を対象とした研究が行われることとなった。昭和26年（1951），この研究所と福岡県教育庁とによって大宰府に関する共同研究が開始された。その一環として昭和27年，観世音寺境内の金堂跡・講堂跡・回廊跡・鐘楼跡の発掘調査が行われ，講堂跡では基壇の一部や礎石根固めの石などが確認されている。さらに，昭和32年（1957）には，仏像収蔵庫の建設に伴う事前調査が福山敏男・鏡山猛らによって講堂跡・中門跡・回廊跡の位置関係を究明することを主眼とした調査が行われた。その結果，講堂は桁行7間，梁行4間の建物であったことが明確になるとともに講堂側柱礎石から約2.4mを隔てて基壇外面の列石が発見され，さらに側面中央部礎石の南北両側に一個ずつの小礎石が遺存していたことから，回廊は講堂側面の中央部に取り付いていたことが明らかとなった。

発掘調査

鏡山猛の研究

これらの発掘調査に調査員として参加した鏡山は，講堂跡の礎石や資財帳はもとよりこれらの発掘調査の成果をも取り入れてFig.11のような伽藍配置の復原案を提起している。その中で創建時の金堂について福山が東面であったか南面であったかにわかには断定できないとして保留した件については，昭和27年の調査において平安時代再建期に築かれたと推定される基壇が南北に長いことや，昭和32・33年に行われた大和川原寺の発掘調査において中門と金堂をつなぐ回廊内に塔と南北棟の金堂が配置された伽藍配置であったことが明らかにされた事などから観世音寺の金堂は創建当初から東面していたとした。また，使用尺については講堂跡礎石の実測値に検討を加え，唐尺が使用されたと推定している。さらに鏡山は，昭和42年（1967），塔の心礎及び周辺に残る四天柱・側柱の実測を行い，心礎および西南の四天柱，東南の隅柱，東南東の側柱は原位置を保っていることを確認し，これをもとに塔は中の間7尺，脇間6.5尺で，一辺が20尺で設計されたと推定している。

次に，寺域の範囲については服部が方3町とし条里制との関わりの中で位置づけたのに対し，鏡山は彼が大宰府研究の一環として取り組んだ大宰府条坊制の復原との関わりの中で考察を加えていることは特筆すべきであろう。まず，寺域を推定するにあたっては，福山・服部と同様に観世音寺前面を東西に走る県道を南の界線とするとともに原位置を保っている塔心礎と講堂跡の礎石等との位置関係を根拠にし，道路の中心から塔心礎の中心までの距離が実測の結果，544尺であり，この数値は1町半（540尺）に近似した数値であることから次のような仮説を提起した。即ち，「金堂，塔婆の中心線を結ぶ東西線と伽藍南北中軸線との交点を寺域の中心点として東西南北に1町半ずつの範囲をとって全寺地とする。ここに寺地は方3町である」，これを周辺の地形との関係で見れば南は県道，東及び西にはそれぞれ溝ならびに小径があり，これが寺域を限ったものと推定していることは福山・服部の寺域復原と同様である。鏡山は，この観世音寺の寺域の復原とともにその西側に位置する大宰府政庁の庁域の復原も行い，これを

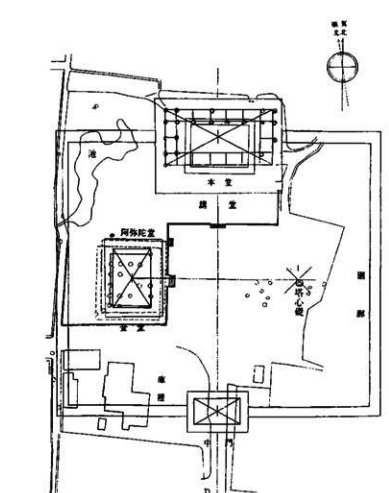


Fig.11　伽藍配置復原図（鏡山猛案）

方4町とした。これをもとに政庁と観世音寺の周辺には方1町の地割りがあったと推定し，さらに大宰府郭内の田地を条坊をもって示した観世音寺文書から大宰府には1条1坊を1町を単位とする南北22条，東西24坊からなる条坊制が敷かれていたと推定した。このような条坊制復原案の中で観世音寺の寺域である方3町の地が，どの部分を占めていたかについては，寺領に関する長徳2年（996）の観世音寺文書3通の分析を行い，方3町の東南隅が左郭4条7坊にあたるという結論に達したのである。

4　境内採集の古瓦

金堂，塔をはじめとする古代寺院の建物と密接な関連を有する遺物として瓦類がある。北部九州には大宰府をはじめとして古代寺院跡が数多く知られており，過去においてこれらの遺跡から採集された古瓦はかなりのものがあったと思われるが，その殆どは好古家の手元に死蔵され学会に紹介されたものは，その一部にすぎなかったと思われる。これら北部九州の遺跡で採

中山平次郎の古瓦類雑考

集された古瓦類を網羅的に初めて紹介したのは中山平次郎である。中山は大宰府をはじめ北部九州の古代寺院跡から採集された古瓦について調査を行い，その成果を「古瓦類雑考」と題して大正４年（1915）から５年にかけて『考古学雑誌』に発表している。

その中で観世音寺周辺から採集された古瓦について「観世音寺境内発見の古瓦」として軒丸瓦２点（Fig.12），軒平瓦６点（Fig.13）を紹介している。まず，軒丸瓦Fig.12－１（老司式）については，外区を殆ど欠失した破片であるが，瓦当文様の構成を綿密に観察し，奈良時代前期のものであり，創建期の講堂に葺かれたのではないかと推測している。Fig.12－２は中房部の小片であるため文様の詳細については知り難いとしているが，時期的には平安時代後期の頃のものとしている。

Fig.12　境内採集軒丸瓦

軒平瓦についてはFig.13－１は同類のものが筑紫館跡（鴻臚館），都府楼跡，水城西門跡から出土していることから天智期ないしはそれを少し下る時期のもので観世音寺の建物の中でも早く落成した建物に使用されたものではないかと推測している。Fig.13－２～４は同じ文様の軒平瓦（老司式）であり，この３点をもとに瓦当文様の全形を復原し，これが藤原宮跡，本薬師寺跡，薬師寺跡等から出土するものと同型式の軒平瓦であることを指摘し，その出土地点からみて塔に葺かれたのではないかと推測している。５については内区文様が特異であること，縄曲文が肥大化するとともに断面が撥形を呈していることなどから奈良時代後期頃ではないかとしている。６については瓦当面に文字を有することや額の断面が段額になっていることなどから鎌倉時代のものと指摘している。

Fig.13　境内採集軒平瓦

以上，中山が「古瓦類雑考」の中で使用した資料は発掘調査に基づくものではなく，何れも採集品であり，かつ小破片であるにもかかわらず瓦当文様の復原や時期観についてはほぼ正当な

判断を下していることは，その後の古瓦研究の基礎となっている。この中山の「古瓦類雑考」が発表された以後は，観世音寺の古瓦に関する論文はしばらく見られない。

戦後に入ると遺跡の発掘調査も行われるようになり，これに伴って古瓦類の研究を志す人もしだいに増加し，古瓦に関する論文も発表されるようになっていった。なかでも看過できない論文として，中山と同じように大宰府を中心として北部九州の寺院跡から出土した古瓦類を網羅的に集大成し，分類を試みた小田富士雄の労作がある。小田の古瓦類に関する研究は多岐にわたるが，その中で大宰府文化を代表する考古資料として老司系古瓦と鴻臚館系古瓦を取り上げて分析した「大宰府系古瓦の展開」は，その後の大宰府研究にとって欠くべからざる基本的な論文となっている。小田はその中で鴻臚館式軒瓦については，軒平瓦を8類に，軒丸瓦を4類に，また老司式軒瓦については軒平瓦を9類に，軒丸瓦を4類に分類し，その分布と変遷をたどり，それぞれの時期観を提示している。

小田富士雄の研究

観世音寺境内からの出土古瓦については，「観世音寺古代史」の論文で取り上げ，老司系軒丸瓦として1・2・4式が，軒平瓦では1・2式が，また鴻臚館系軒丸瓦は1式が，軒平瓦では1・5式が出土していることを紹介し，そのうち老司系軒丸瓦1式と軒平瓦1式とがセット（Fig.14）をなし，その組み合わせが最古式に属するものであり，境内ではこの組み合わせの軒瓦が多いことから白鳳～奈良前期には伽藍の造営もある程度進展していたのではないかと推測している。

Fig.14　老司Ⅰ式軒瓦

（石松　好雄）

Ⅳ　調査の記録方法と概要

（1）調査の記録方法

史跡の保護・整備

大宰府史跡は，大宰府政庁跡を中心に観世音寺，学校院跡，国分寺，水城跡，大野城跡など広範な面積に及ぶ。九州歴史資料館では，これらの遺跡の実態を解明するとともに，史跡を保護・整備してゆく資料を得るために５ヶ年を一区切りとした年次計画を策定し，各年度ごとの計画に従って発掘調査を行い，その成果を積み上げる方法を採っている。

しかしながら，遺跡が大規模で，特に大野城跡は太宰府市・大野城市・宇美町の２市１町にまたがっていることもあり，遺跡の解明は一朝一夕と言うわけにはいかない。この様に，長期間にわたる発掘調査を円滑に，しかも一貫して高精度に遂行するためには，遺構・遺物の調査と記録の方法を統一しておく必要がある。当館調査課では，遺構・遺物の調査及び記録化に際しては，以下の方法に依っている。

遺跡の表示方法

大宰府史跡の発掘調査及び記録類の整理にあたっては，奈良国立文化財研究所が作成した遺跡の分類記号（奈文研1962）を準用し，それぞれの遺跡ごとに略号を付して対処している。

遺跡を示す略号は，算用数字とアルファベットの大文字とを組み合わせた４文字からなり，先頭の算用数字が時代を示し，２文字目のアルファベットが遺跡の種別を示し，最後の２文字には遺跡の略名称を付けるといった具合である。観世音寺で使用した６ＫＫＺの略号は，先頭の数字６が奈良時代で，２文字目のＫは遺跡の種別が寺院であることを示し，ＫＺが観世音寺（KANZEONJI）を表す。

地区割

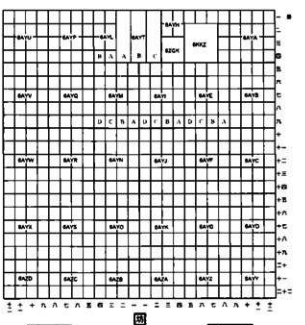
この４文字の略号は，遺跡名・種別を示すとともに遺跡の範囲も表しており（大地区），この大地区の遺跡表示を細分することによって，遺跡・遺構の場所を的確に示すことが可能となる。

大地区

観世音寺については，これまでの研究による方３町の寺域（鏡山案）を現地形から検討し，寺域を地形に応じて西からＡ・Ｂ・Ｃの３地区に分け，遺跡略号の下に続けて６ＫＫＺ－Ａと言ったように中地区割を設定している。

中地区割

つまり，６ＫＫＺが観世音寺寺域全体を表す遺跡略号である。



図

Fig.15　大宰府条坊地区割番号図

Fig.16　観世音寺地区割図（1/4,000）

また，観世音寺の調査では，さらに細分した地区設定（小地区割）を行っている。小地区割は，田畑の畦畔をもとに上方からA・B・Cとアルファベットを付している。例えば，金堂は6KKZ－B－M，講堂は6KKZ－B－Lという略記号で表示される。

小地区割

大宰府史跡の発掘調査にあたっては，大宰府史跡全体を対象とする基準線の設定を行い，地区割はこの基準線に則って統一的に設ける必要がある。しかし，観世音寺の場合，南門・中門の礎石が原位置を留めていないため，正確な伽藍中軸線を設定するのが困難であった。そこで，現在の参道を中軸線とみなし，推定寺域の南端（県道筑紫野古賀線）を基準点として3m方眼を設定し，西側へ01・02…99と昇順で数字による番号を付けた。南北方向については，各次調査区の南端からA・B…Yとアルファベットによる番号で表した。この番号と2桁の数字を組み合わせた記号に小地区割のアルファベットを付加した4文字が方眼の最小単位となる。

基準線の設定

遺構・遺物の表示記録

発掘調査において検出された遺構は，検出時点では性格が不明なものが大半を占める。そのため，すぐさま性格に応じた遺構の名称を付けることは困難である。しかし，遺構番号を付けないと遺物の取り上げに支障をきたす。そこで，発掘調査段階においては，S－1・S－2という様に単純化した番号を遺構検出順に付け，遺物を取り上げている。また，1/100遺構配置図を作成し，遺構番号を記入するとともに出土遺物の情報も合わせて記録している。（小田和利）

（2）調査の概要

調査の経過については，既往の調査，主要伽藍の調査，寺域周辺部の調査の３項目に分けて記述する。

1）既往の調査

昭和44年，県教育委員会に調査体制が確立して，本格的に遺跡の発掘調査が進められるようになる以前，観世音寺の発掘調査は，昭和27年と昭和32年に発掘調査が行われている。両年の調査報告が希薄なため，この項においては詳細に記述することができないが，写真及び一部の図面などを手掛かりに記すこととしたい。

1　昭和27年の発掘調査概要

S27年の発掘調査

昭和27年の発掘調査は，鏡山猛を調査団長とする九州綜合文化研究所によって行われた。調査は観世音寺の伽藍を復原するために，先ず，地形図を作成している。南門・中門・講堂（本堂）・塔・金堂（阿弥陀堂）などの配置関係から寺院中軸線を求め，金堂・講堂の発掘調査を行っている。調査結果は，「大宰府都域の研究」にまとめられており，それによると，金堂跡は２回の建替えがあり，講堂と回廊の取付きは講堂側面中央に復原されている（Fig.11）。これにより，観世音寺に関する寺院通史及び伽藍配置は，創建時期などの課題を残して固まりつつあった。ここでは，その概要について記しておく。

講堂跡　本堂内をボーリングした結果，旧礎石はそのままに埋存しており，本堂周囲の礎石は19個で[11]，花崗岩製の円板形柱座を有した礎石である。この時，地覆座のある礎石も確認され，

7×4間の建物

礎石の配列から桁行７間×梁間４間の建物と判断されている。

金堂跡　現在の金堂は，元禄の再興の時，本堂の仮堂をここに移したもので阿弥陀堂と言った。また，堂内をボーリングした結果，古い礎石は皆無であった。金堂周囲の発掘から二重の基壇を確認されており，平安時代の２度の火災により再建したものと判断されている。また，建物

建物は東面

は南北に長く，東面するものとした。

南大門跡　参道の左右に礎石が６個残存する。礎石は現位置に近いが，傾斜・移動していることから柱間の数値を知ることはできないと判断された。

中門跡　「文政３年観世音寺旧村之内礎現改之図」を引用し，南大門の北に６個の礎石を描き仁王門としている。仁王門は中門跡であるが，現在はこれに該当する礎石は皆無と説明。

北門跡　かつて，日吉神社石段下から西方５～６間（９～10.8m）の所から礎石が発見された。

唐居敷礎石

礎石には円形の刳込があり，唐居敷の礎石と考えられ，北門関係のものと想定されている。

この他，戒壇院や菩薩院などを資財帳及び観世音寺絵図から考察されている。観世音寺における考古学的調査は，これが初めてと言ってよい。

鏡山は調査結果を基に，観世音寺講堂跡の礎石配置から柱間寸法を高麗尺及び唐尺を用いて

唐尺の使用

計算し，観世音寺の単位尺にも大宰府政庁跡と同じ「唐尺」が使用されたと推定した。さらに，資財帳の各堂宇を検討し，各建物の距離を計測して伽藍・寺地の復原を試ている。参道入り口を東西に走る現在の県道筑紫野古賀線を「府の目大路の名残」とし，その道路の中心から塔心

礎までの距離が544尺いう数字を導いた。それは1町半（540尺）に近似した数値であるとして，寺地を方3町の範囲であると推論した。この調査・研究成果によって，昭和44年以降開始された観世音寺の発掘調査は，氏が推論した寺地を基本に発掘調査を行い，現在に至っている。

寺地は方3町

また，鏡山は，観世音寺の調査を行っていた頃を偲んで次のように語っている。

「塔跡は後世の地下げが激しく基壇は旧態を止めていない。正面に講堂，右に塔，左の金堂は南北に長く東面している。これは大和の川原寺の東金堂様式であるが，金堂が一つの場合，法起寺式のように南面でもなく，私は観世音寺式と提唱したい。」

観世音寺式伽藍配置

Fig.17　金堂発掘状況1（二重の基壇化粧）

Fig.18　金堂発掘状況2（正面の基壇化粧）

2　昭和32年の発掘調査概要

①経　緯

調査に至る経緯は，金堂・講堂に安置されていた諸仏像の朽損が著しく，大正年間に国の援助を得て修理されたが，十分でなかったため，昭和32年に金堂本尊阿弥陀如来座像，講堂本尊聖観世音菩薩座像及び十一面観世音菩薩立像の3体が美術院国宝修理所によって修復された。修復された仏像を以前のように金堂・講堂に安置すれば，朽損していくことは明らかだとして，諸仏を後世に伝承するためにも文化財収蔵庫の建設が急務となった。

S32年の発掘調査

こうして，国・県・地元有志の方々の力強い援助のもと，昭和34年に，寺地東側の菩薩院旧位置付近に宝蔵庫が建設されるに至った。今回の調査は，観世音寺収蔵庫建設に関連して行われた伽藍の解明調査である。

②調査期間

昭和32年5月26日～6月17日

③調査者

調査員	（主任）	福山　敏男	東京国立文化財研究所
		澤村　仁	東京大学
		丸山　時男	文化財保護委員会建造物課
		金関　恕	奈良国立文化財研究所
		鏡山　猛	福岡県文化財専門委員
		森　貞次郎	福岡県文化財専門委員
調査協力者		伊藤　要太郎	東京芸術大学
		佐治　泰次	九州大学建築学教室
県教育委員会		鈴木　健次郎	社会教育課長
		鍋水　逸太	同　課長補佐兼文化財保護係長
		筒井　清水	同　庶務係長
		筑紫　豊	同　文化財保護係技師
		波多江一俊	同
調査補助員		渡辺正気・小田富士雄・大神邦博・岩下正忠（九州大学考古資料室）	
地元関係者		森田　久	太宰府町長
		永田　石次郎	同　助役
		滝口　義資	同　教育長
		有岡　義雄（観光係），原野三次郎（土木係）	
観世音寺（住職）		石田　琳樹・石田　琳圓	
（舎主）		田中　勇雄	

なお，調査時に石田茂作・藤島亥治郎・賀川光夫氏などが来訪され，指導・助言を受けた。

④検出遺構と調査結果

福山敏男は，今回の調査結果を「日本考古学年報」（昭和32年，日本考古学協会）に発表しており，それに従って記すこととする。この調査では，講堂・東回廊・中門などの位置関係を究明することを主眼とされた。

講堂跡　講堂跡は現存する礎石によって，正面柱間7間（99尺：30m），側面柱間4間（50.5尺：15.3m）で，側柱礎石の中心から約8尺（2.4m）の所で基壇外面の列石（Fig.20）を検出した。通常，講堂の両側面の南第一間に回廊が取り付くことが原則であるが，観世音寺ではその箇所には回廊の痕跡は認められなかった。この講堂の側面中央礎石の南北両側に一個づつの小礎石が遺存することやそれに相当する旧基壇外側で認め

Fig.19　講堂発掘状況1（基壇外面の列石）

られた列石（Fig.21）の有無・方向などから，回廊は講堂側面の中央部に取り付いていたと判断された。

この他，旧基壇前面に近世の拡張部が認められたが，それに相当する建物の痕跡は調査しなかった。

塔跡・その他 回廊や中門は，延喜5年（905）の資財帳に記される丈尺によって，大体の位置は推知されるので，その推定位置付近に数箇所のトレンチを設け遺構の有無の確認を行った。

Fig.20　講堂発掘状況2（北面回廊の取付部）

その結果，塔跡を含む伽藍の南東部分は，旧地表が甚だしく削平されており，調査箇所に関する限り，中門及び回廊の礎石や，基壇の痕跡は確認されなかった。また，回廊南東隅推定地付近で，菩薩院西側の溝，または池の一部が発見された。その西側に列をなして発見された小柱穴の性格は不明である。

伽藍の南東は削平顕著

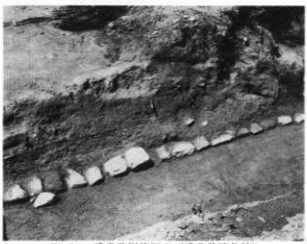


Fig.21　講堂発掘状況3（講堂基壇化粧）

Fig.23　中門周辺発掘状況（奥は鐘楼）

Fig.22　回廊周辺発掘状況（北から）

Fig.24　回廊南東隅部発掘状況（小柱穴列）

⑤出土遺物

瓦　類　発見遺物の大部分を占め，かつ多量に出土したものは瓦類である。観世音寺創建当初より近世に至るまで，各時代各種類の瓦が豊富である。従来，境内から採集された瓦類も多数あったが，今次調査では，これまでに類例のなかった新資料も得られた。

新資料の発見

イ）素弁軒先丸瓦：奈良前期（白鳳）としては珍しい古式のものであるが，一個だけ講堂の東側から発見され，中心堂字建築の早かったことを物語る。

ロ）複弁八葉軒丸瓦：奈良時代末頃で，複弁八葉のうち一つだけが単弁となる。北九州に2～3の出土例がある。

ハ）剣巴文軒平瓦：鎌倉時代と推定される。軒先平瓦に剣文と巴文を交えるもので，以前に，「観世」・「音寺」の文字を入れたものが知られていたが，今回「瓦也」の文字が出土し，「観世音寺瓦也」が解ったことは新資料の発見である。

ニ）刻　銘　平　瓦：平瓦の片面に陽刻の押型文字がある。「観世音寺」・「平井」・「門司」・「安楽寺」などの銘がある。

ホ）道　具　瓦：この他，無文塼や鬼瓦の破片が出土した。

ヘ）土器・陶磁器類：土器には土師質及び須恵質のものがあり，盤・盌（墨書のあるものが一点）・壺・甕の器形が見られる。また，須恵質獣脚片や緑釉陶器残片がある。各種青磁・青白磁の残片は，輸入磁器として貴重な資料である。中世の瓦器の中には，火舎の断片と思われるものが含まれている。

ト）そ　の　他：瓦釘その他鉄製品残欠が若干出土した。また，蔓草・花文を刻出した印章形の滑石製品1個が発見された。

その後，調査員の一員であった澤村仁は，「観世音寺－二三の問題」と題して，1989年に講演を行い，福山敏男が発表しなかった部分を補填している。

それによると，調査目的は収蔵庫建設の事前調査ばかりでなく，「中心伽藍の状況が不明だと，周辺のみの調査では責任ある結論を得にくい」として，講堂などの調査を実施したこと。「回廊は講堂最前列の柱に取り付くものではなく，中央付近に取り付くこと。それは中門の推定位置にも影響する」と述べられている。さらに，講堂正面に3箇所の階段があった可能性があるとされ，回廊基壇の東側で玉石積の基壇化粧（Fig21）を確認したと話されている。

講堂正面に階段3ヶ所

また，「中門は削平されているが，東側で土器の整理坑が中門推定位置の北側にあり，完掘していないので，基壇または雨落ちの痕跡の可能性がある」とされている。

さらに，氏は出土瓦と梵鐘の唐草文様にふれ，京都妙心寺の鐘との類似性及び天台寺・大分廃寺などの軒先瓦と比較され，確かに類似しているものの，細部では小郡井上廃寺の軒平瓦と近似していることを指摘されている。（高橋）

井上廃寺の瓦に近似

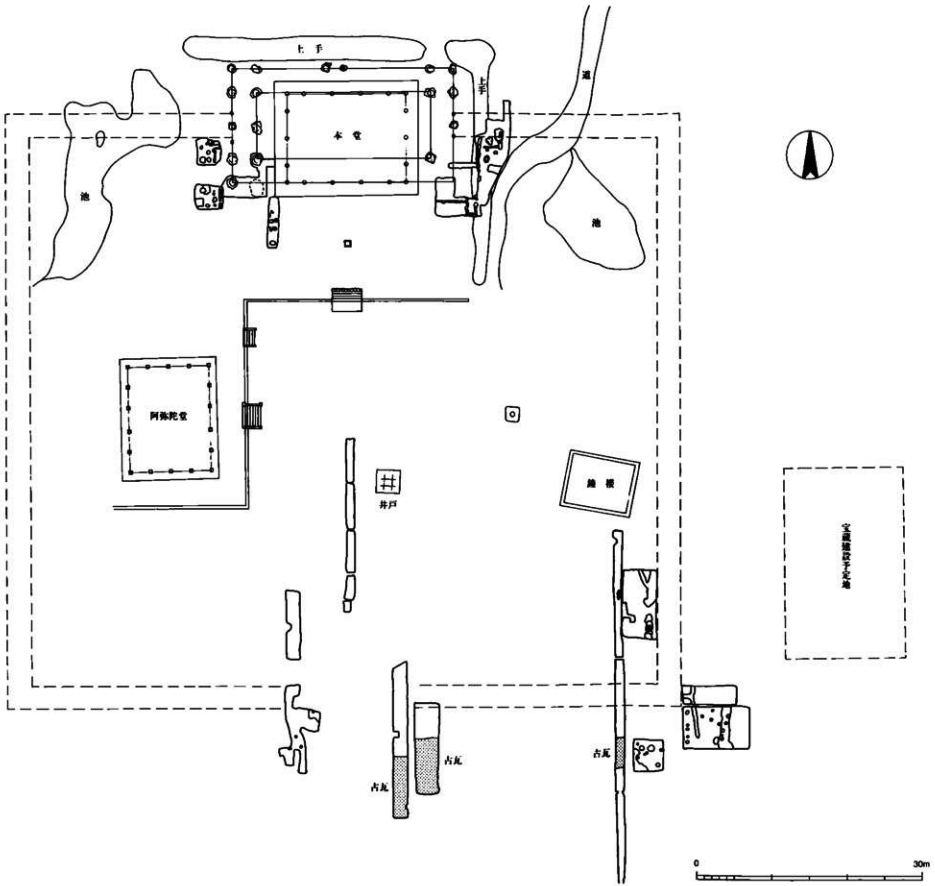


Fig.25　昭和32年調査トレンチ配置図（1/500）

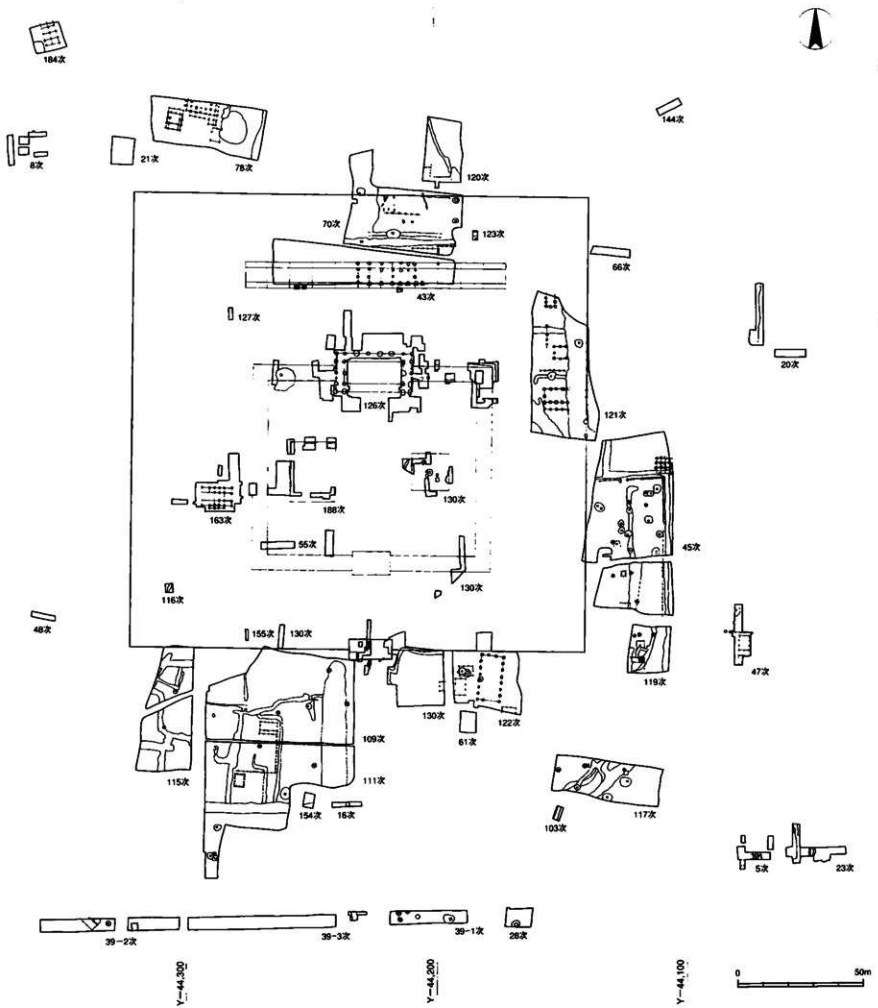


Fig.26 調査区配置図（1/1,500）

2）主要伽藍の調査

福岡県（九州歴史資料館）が実施した観世音寺に関する発掘調査は，補足調査を数えると現在までに44次数数えるが，観世音寺単独で調査次数を設けておらず，大宰府史跡の調査次数に連続して付けている。例えば，僧坊は大宰府史跡第43次調査，金堂は大宰府史跡第188次調査（以下，第○次調査）として実施している。

伽藍関連の調査には，塔（130次），金堂（188次），講堂（126次・補足），南門（130次），回廊（南面－55・130次，東面－126次，北面－126次・126次補足，西面－188次），僧房（大房－43・127次，小子房－70・123次），戒壇院（163次），築地（南面－130・155次，東面－45・66・119・121次，北面－78・120次，西面－21・68・116次）がある。

ここでは，築地で囲繞された範囲内の発掘調査を主要伽藍の調査としてふれ，築地から方3町の推定寺域までの発掘調査を寺域周辺部の調査として述べる。なお，地番・調査期間・面積については，Tab.1 観世音寺発掘調査地域一覧を参照願いたい。

塔（第130次調査）

第130次調査は，塔・南門・南面回廊・南面築地及び南門南面域の解明を目的として調査を実施した。

かつて，五重塔が建っていた場所には，心礎を含め礎石4個が原位置を保っている。調査の結果，基壇の版築土層は約30cm残存し，基壇化粧の地覆石も残っていた。心礎・四天柱礎石・側柱礎石及び地覆石をもとにして基壇及び建物の復原が可能である。

基壇規模は東西・南北ともに15.0mで，地覆石の配列から東西2箇所に階段を設けていたものと推察される。建物は側柱柱間6.5尺・7尺・6.5尺で，一辺20尺四方の塔建物が考えられる。なお，地覆石が花崗岩の自然石を用いていることから，創建時のものか疑問が残る。

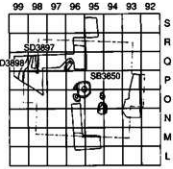


Fig.27 第130次調査塔発掘区（1/600）

金　堂（第188次調査）

現在，金堂の推定場所には，元禄時代に再建された建物が存在しているため，建物の周囲に調査区を設定し，基壇の規模・構造を把握することとした。調査の結果，創建期から明治期に及ぶ5期の基壇変遷が明らかとなった。

創建当初は瓦積基壇で，東西18.0m，南北推定長24.0mと南北に長い基壇である。Ⅱ期（平安時代）は乱石積基壇で，基壇の前面には焼土層が広がり，石も火熱を受け黒くなっていた。この焼土層は康治2年（1143）の火災によるもので，建物消失後

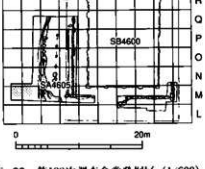


Fig.28 第188次調査金堂発掘区（1/600）

再建したのがⅢ期基壇（中世）である。石垣積基壇で，南北20m，東西21mと方形に造り変えている。Ⅳ期が江戸時代，黒田藩によって再建された現存建物に伴う基壇で，Ⅴ期は明治期に組まれた南辺部の石垣である。

講　堂（第126次・補足調査）

元禄元年（1688）に再建された現本堂の周囲には，旧講堂の礎石が露出している。この講堂については，戦後に２回の調査が実施されており，鏡山氏によって尺度の問題など幾つかの検討がなされている。今回は，現存する礎石を含めた建物周囲を発掘することによって建物及び基壇全体の把握と時期変遷の問題を解決すべく調査を行った。また，講堂に接続する北面回廊についても規模・講堂との取付方などを明らかにするため発掘範囲を拡張した。

調査の結果，現地表面に見える礎石建物（SB3800）は，桁行５間，梁行２間の母屋の周囲に廂を巡らせ，全体は７間×４間とした四面廂建物で，柱間は桁行30.0m，梁行15.36mを測る。創建当初の基壇は乱石積みで，正面３箇所に階段を設けていたことが確認された。また，基壇南辺を３度拡幅していることも明らかとなった。

この様に，第126次調査時点では，礎石は創建時のもので，後世，動かされていないとの判断を下していた。しかし，平成14年度に実施した金堂の調査では，創建時の基壇が瓦積みであるということが明らかになった。講堂の基壇化粧は乱石積みであり，基壇版築土層も金堂に比して粗雑であることから，礎石が当初の位置を保っているか疑義が生じ，平成15年度に補足調査を実施し，一部は再発掘を行い，土層及び礎石の据え方など再確認を行った。

その結果，基壇の下部から創建当初の礎石根石及び礎石抜取穴を検出した。土層観察からも礎石が動いていることが確認され，従来の見解は完全に否定された。

従来の見解は否定

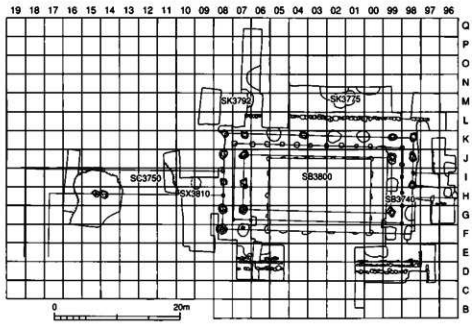


Fig.29　第126次・補足調査講堂・北面回廊発掘区（1/600）

南　門（第130次調査）

現参道の両脇には，南門跡の礎石とみられる７個の石が点在する。内１個は柚の根に抱かれ，ほぼ水平に座っているが，他の石は傾斜したり，裏返しの状態になっている。調査の結果，３個の石は柱座を有しており，礎石として使用されたことは明らかであるが，何れも原位置を留めていないことが判明した。唯一，水平を保つ石は，柚の根に埋まり込んでおり，原位置であるのか確認できなかった。

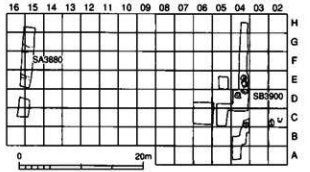


Fig.30　第130次調査南門発掘区（1/600）

従来より，この礎石の存在を根拠として，この付近が南門跡とされてきた。調査の結果は，南門跡の基壇を示す痕跡は残っておらず，位置を確定するには至らなかったが，礎石がこの付近に集中していることを考慮すれば，この位置を南門跡とする従来の見解は否定できない。

南面回廊（第55次・第130次調査）

第55次調査は観世音寺庫裡の改修に伴う事前調査として実施した。当該地は，南面回廊の南西隅部に推定される箇所で，回廊に関する遺構の検出を期待したが，溝・小土坑・ピットなどを検出したのみで，回廊に関する知見は何ら得られなかった。

また，第130次調査では，南面回廊の推定場所にＡ・Ｂ２箇所のトレンチを設定した。調査の結果，Ａトレンチで東西方向の溝ＳＤ3886を検出した。調査時点では回廊雨落溝かと考えられたが，金堂及び講堂補足調査をもとに伽藍を検討した結果，回廊とは無関係のものであることが判明した。他の遺構としては，鋳造関連土坑，瓦溜などがある。

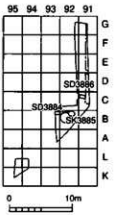


Fig.31　第130次調査
南面回廊発掘区（1/600）

東面回廊（第126次調査）

東面回廊に関しては，北東隅部に残る１個の礎石がその手掛かりとして推定されていた。講堂の東側に設定した調査区により，北東隅部の礎石は動いていることが判明したが，Ｌ字形に折れる南北溝ＳＤ3715・3725とそれに平行する南北溝ＳＤ3735を検出した。溝の幅1.0～1.4m，深さ0.3～0.5mで，両者の心々距離は6.3mを測る。

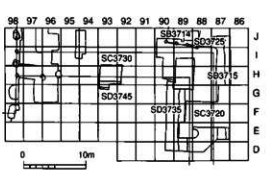


Fig.32　第126次調査東面回廊発掘区（1/600）

北面回廊（第126次・補足調査）

北面回廊については，昭和32年の調査によって講堂側面中央部に取り付くこと，回廊の基壇化粧が玉石積み（Fig.20，乱石積基壇）であることが判明していた。しかし，規模については，調査区が限られていたため必ずしも明らかではなかった。そこで，講堂東側に調査区を設定し，回廊の規模をつかむこととした。

調査の結果，前回確認していた玉石積みの地覆石と東西溝SD3745を検出した。SD3745は東面回廊の南北溝SD3735に接続するものと考えられる。なお，『延喜五年資財帳』（以下，『資財帳』）に記された北面回廊の規模と今回検出の遺構が規模的にほぼ合致することから，創建時の回廊との結論を得ていた。しかし，講堂の補足調査の結果，創建期の回廊礎石根石を検出することができた。それによると，当初の北面回廊は，講堂側面中央に取り付くのではなく，梁側礎石列の南端から２・３番目の柱に取り付くことが判明した。

西面回廊（第188次調査）

西面回廊に関しては，これまで全く発掘調査がなされていなかった。そこで，平成14年度に金堂の調査を行った際に調査区を西側に延長し，西面回廊に関わる遺構の検出を目指した。調査の結果，現道路面から１ｍ程下層で整地層中に小礫を敷き詰めた遺構を検出した。性格的に，回廊基壇に関わる暗渠的な遺構と考えられた。

大　房（第43次・第127次調査）

僧房（大房）に関する知見を得るために調査を行った。調査の結果，礎石建物ＳＢ1080を検出した。『資財帳』の僧客房章には，大房・小子房・馬道屋・客僧房などの建物が記載され，貞観３年（861）に小破したとの記事がある。大房に関しては，康平７年（1064）に火災に遭い，康和４年には大風で倒壊し，嘉承元年（1106）に再建したとされる。

大房は最大な建物

今回，検出された礎石建物SB1080は，『資財帳』記載の規模と近似することから古期の大房と考えられる。なお，SB1080は桁行33間（103.8m）×梁行４間（10.2m）の長建物で，左右各５室の東西棟建物に復原可能である。また，井戸SE1080，土坑SK1084は奈良時代後半であることから，両者の関連が注目される。

第127次調査は住宅改築の事前調査として実施した。調査の結果，中世の泥濘により古代の遺構は失われており，大房に関する資料は得られなかった。

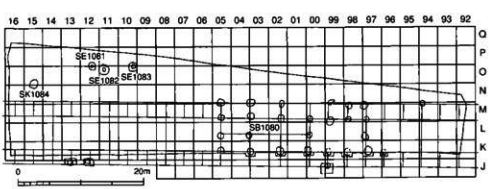


Fig.33　第43次調査大房発掘区（1/600）

小子房（第70次・第123次調査）

第43次調査で大房建物SB1080を検出していたため，その後方に推定される小子房の確認を目的として調査を行った。調査の結果，上層には中・近世の遺構が錯綜しており，古代の遺構の検出は困難を極めた。小子房に関する建物掘方などは見られなかったものの，規則的に並んだ土坑・溝によって区画された細長い空閑地，その空閑地の地下に埋設された数条の瓦組暗渠の存在は，ここに何らかの構造物が存在した可能性を強く示唆するものであった。また，墨書土器・硯・瓦などの出土遺物は，小子房の存在を暗示する。

第123次調査は浄化槽埋設に伴い調査を行った。狭小な調査区であったが，70次調査検出の東西溝SD1786に接続すると考えられる溝（SD3702）と柱掘1個を検出した。

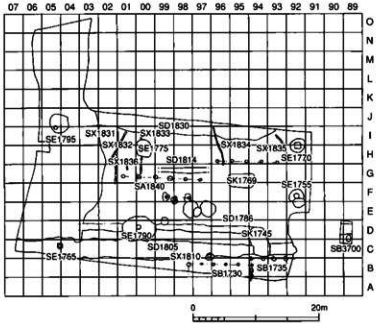


Fig.34　第70次・補足調査・第123次調査小子房発掘区（1/600）

戒壇院（第163次調査）

戒壇院庫裡改築に伴い発掘調査を行った。戒壇院推定地における本格的な調査であり，古代の戒壇院に関する遺構の検出に期待が持たれた。

調査の結果，江戸時代（元禄期）の礎石建物SB4180を検出した。福岡市東長寺が所蔵する戒壇院関係文書の中に戒壇院周辺を描いた絵図（17世紀末）があり，それによると戒壇院の背面に常住（庫裡）が記されており，今回検出の礎石建物が絵図記載の建物に該当すると考えられる。江戸元禄期の遺構は，予想以上に遺存状態が良好である

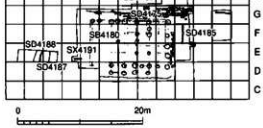


Fig.35　第163次調査戒壇院発掘区（1/600）

こと，元禄期の戒壇院復興に関わる貴重な遺構であることから保存措置が採られた。従って，古代の遺構の検出は部分的にならざるを得ず，十分な成果を上げることができなかった。古代の遺構には，瓦組暗渠SX4191と南北溝SD4188を検出したにすぎない。

南面築地（第130次・第155次調査）

第130次調査は，塔・南門・南面回廊・南面築地及び南門南面域の解明を目的として調査を実施した。南門推定地の西側には東西方向に土塁状の高まりがあり，南門に取り付く築地の痕跡とする見解があった。この高まりを断ち割り，土層観察を行ったが，明確に築地と断定できる土層の堆積状況ではなかった。

また，第70次・補足調査で検出した東西溝SD1850は，北面築地に関わる遺構と考えられ，溝から『資財帳』記載の築地の長さ（65丈：約195m）をとると，先の高まりより約20mも南に築地が位置することになるが，これまで実施した南面域の調査（第109・115・122次調査）では，その場所に築地が存在した痕跡は何ら確認されていない。しかし，南門礎石の位置から考えると，この高まり付近に築地を想定することは十分可能である。

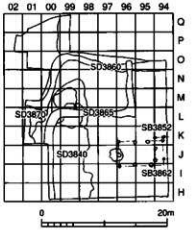


Fig.36　第130次調査南面築地発掘区（1/600）

第155次調査は，戒壇院の築地塀改築工事に伴うものである。この場所は綿山氏による南面築地の推定箇所で，推定南門跡から西に続く高まりの西側延長線にあたる。調査の結果，撹乱が著しく，築地に関連する遺構・遺物は認められなかった。

東面築地（第45次・第66次・第119次・第121次調査）

第45次調査は東面築地の検出を目的として実施した。調査の結果，築地に関する知見は，痕跡すら得ることができなかった。検出した遺構は主として中世の遺構であるが，櫓SA1235と溝SD1230で区画された内部には，掘立柱建物・井戸・土坑が存在し，塔婆・鞴羽口・鉄滓・銅滓などの鍛冶に関連する遺物も多く見

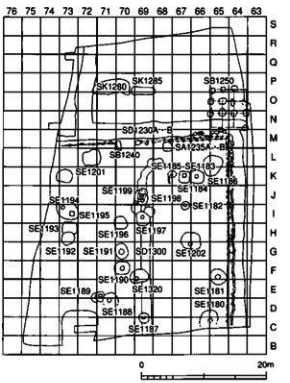


Fig.37　第45次調査東面築地発掘区（1/600）

られた。遺構には直接伴わないが，奈良時代の遺物として「□□東院」，「厨」と記した墨書土器が出土しており，この区画に古代から中世を通じて工房・厨が存在した可能性が推察される。また，溝SD1300からは唐三彩三足壺が出土し，日本国内における4遺跡目として大きな反響を得た。

第66次調査は住宅改築に伴うものであるが，当該地が東面築地の推定場所にあたるため築地遺構の検出を目指した。調査の結果，発掘区の東端部で地山の土に類似した土が堆積した落込を検出した程度で，北面築地に関する遺構は削平により遺存していないものと判断された。

第119次調査地は，昭和52年に発掘調査を実施した第45次調査地の南に隣接する地域で，東面築地の検出と周辺部の状況を把握することを目的とした。

調査の結果，第45次調査地に連続した3時期の遺構を検出した。Ⅰ期は8世紀後半～11世紀後半代，Ⅱ期は12世紀前半代，Ⅲ期は12世紀後半～14世紀代である。注目される南北溝SD1300は11世紀まで降るものであり，東面築地に関連する区画施設と断定するには至らなかった。また，第45次調査で検出していたⅢ期の南北方向の石組溝SD1230の性格も明確にできなかった。

第121次調査も東面築地及び東辺地域の状況を把握することを目的として調査を行った。調査の結果，伽藍の推定中軸線の東側約85mで構SA3625を検出した。築地に伴う版築基壇がみられないことから，この構を東面築地とは即断できなかったが，『資財帳』に記された規模（57丈：約171m）の半分に近い数字であることから東面築地と同様の役割を果たした遺構と推定するに至り，貴重な発見となった。

また，構の西側では8世紀後半～9世紀中頃の掘立柱建物3棟，構2条，9世紀前半～中頃の鋳造遺構SX3640を検出した。この地区からは，「東院」・「西院」と書いた墨書土器が出土しており，これらの建物との関連も注目される。

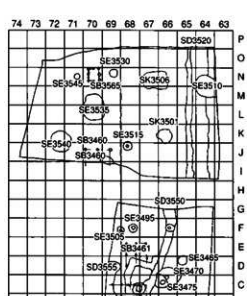


Fig.38　第119次調査東面築地発掘区（1/600）

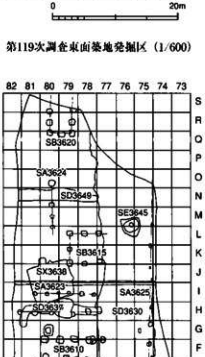


Fig.39　第121次調査東面築地発掘区（1/600）

北面築地（第78次・第120次調査）

第78次調査は北面築地の検出を目的として行った。調査の結果，14世紀中頃の建物群と池を良好な状況で検出した。池は16世紀後半代まで存在したと考えられ，そこからは卒塔婆・柿経をはじめ多量の木製品・土器が出土し，中世観世音寺の実態を明らかにする貴重な調査となった。

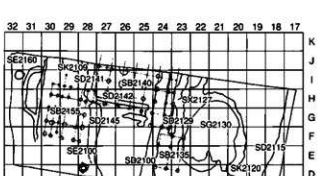


Fig.40　第78次調査東面築地発掘区（1/600）

文化3年（1806）に描かれた「太宰府旧跡全図」によると，調査地付近に観世音寺子院の一つである「サイフクジ」の記載があり，それに関連する遺構とみられる。しかしながら，古代においては，当調査地は氾濫原となっており，北面築地については検出できなかった。

第120次調査も北面築地の検出を目的として行った。当該地は北面築地推定地のほぼ中央部にあたり，第70次調査地（小子房推定地）の北側に隣接する地域である。かつて，この付近から北門礎石と目される石1個が発見されており，北面築地に関する遺構検出の期待が高まった。

調査の結果，奈良・平安後期・鎌倉期の各時期の遺構を検出したものの，築地遺構に関する遺構は何ら検出できなかった。ただ，性格不明のSX3600からは多量の製塩土器が出土しており，この付近に厨的施設が想定できるならば，そうした施設は主要伽藍を囲繞する築地外に置かれていたことが考えられ，築地の位置は南（第70次調査地内）に存在していた可能性が指摘される。

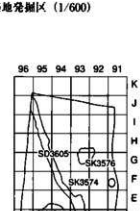


Fig.41　第120次調査東面築地発掘区（1/600）

西面築地（第21次・第68次・第116次調査）

第21次調査及び第68次調査は，住宅建設に伴う調査として行った。当該地は西面築地の推定場所にあたるため築地関連遺構の検出を目指した。第21次調査では上下2層の遺構面を検出し，上層からは石組遺構，下層からは石組溝などを検出したが，両調査とも西面築地に関する遺構は見いだせなかった。

第116次調査は戒壇院墓地建立のための緊急調査で，現戒壇院の境内地内に小トレンチを設定し調査したが，顕著な遺構は検出できなかった。出土遺物として，老司Ⅰ式のほぼ完形に近い軒平瓦1点がある。

（横田　賢道）

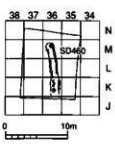


Fig.42　第21次調査東面築地発掘区（1/600）

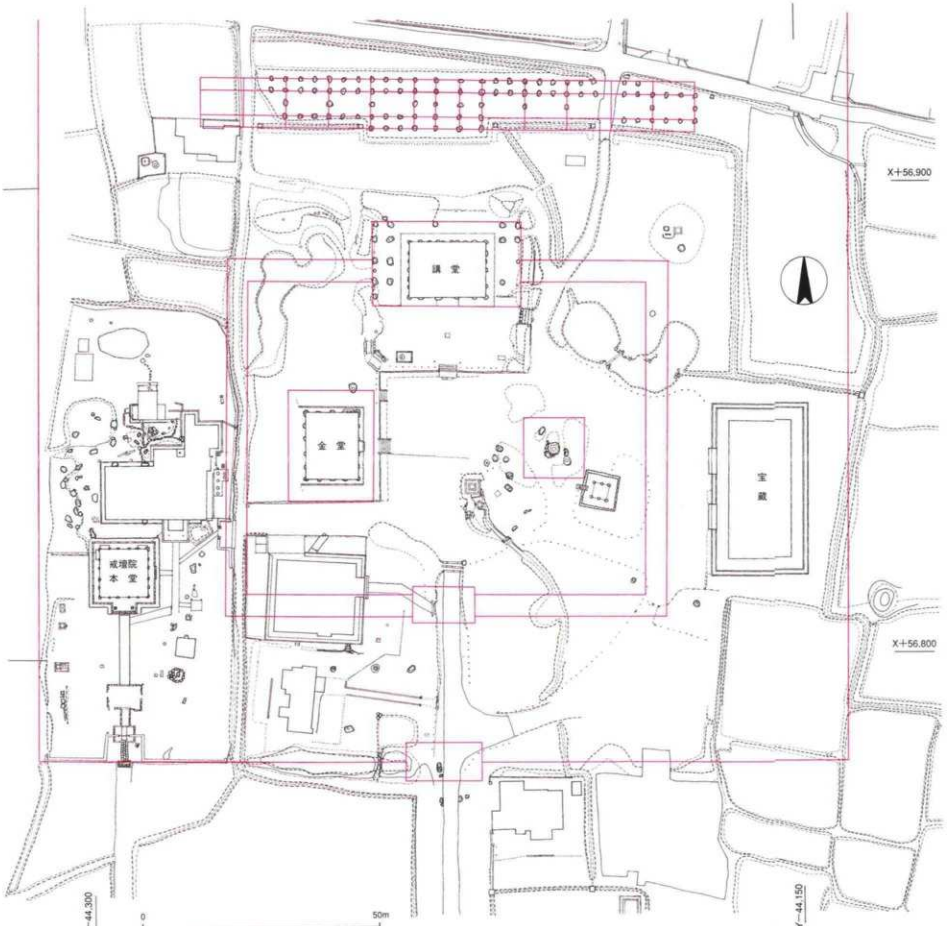


Fig.43　観世音寺地形測量図（1/800）

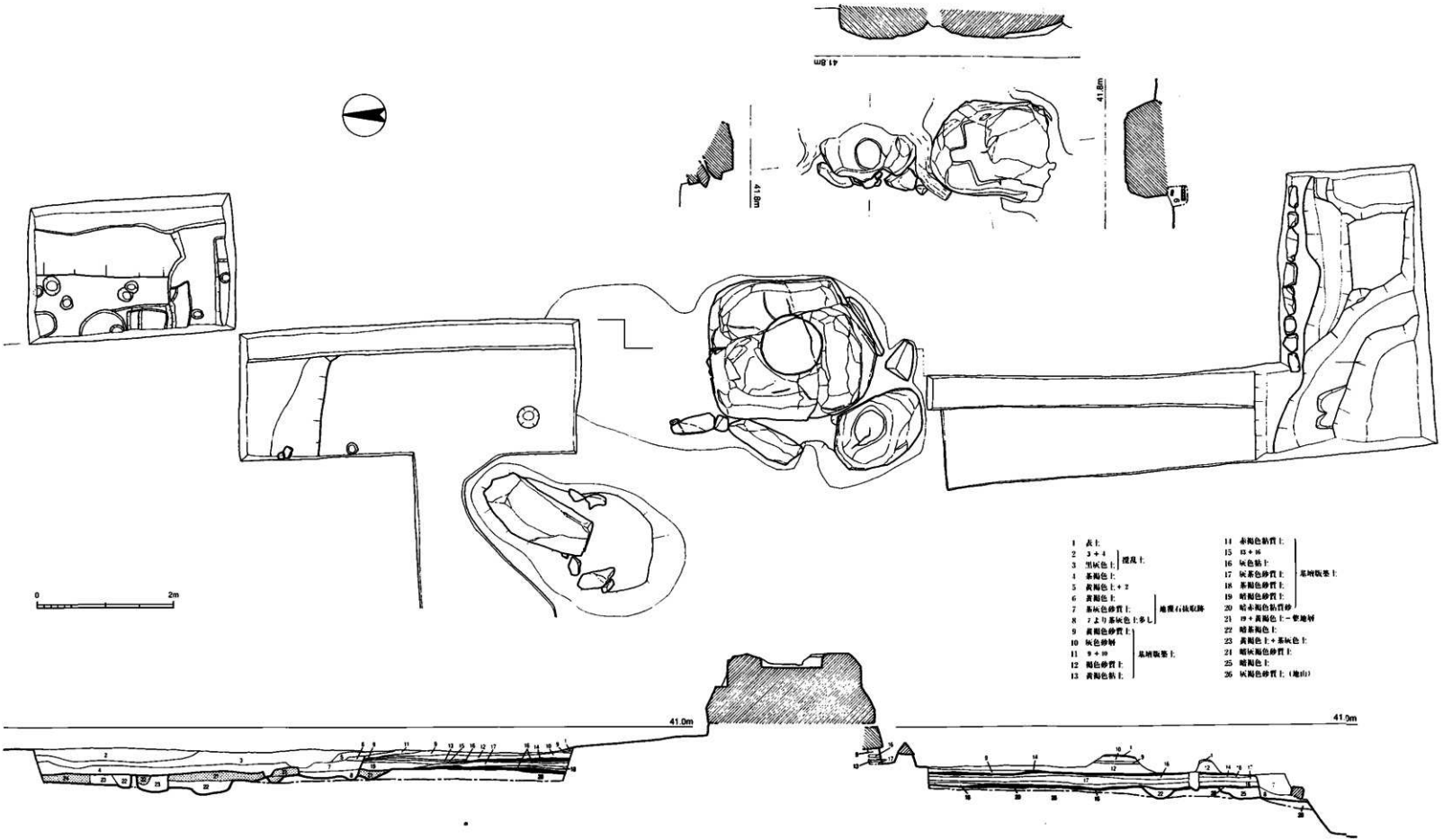


Fig.44 基壇土層実測図（1/50）

V　伽藍の調査

今回の『観世音寺－伽藍編－』は，観世音寺の伽藍解明を目的として行った発掘調査で検出された遺構のみを報告し，出土遺物に関しては次年度刊行予定の『観世音寺－遺物・考察編－』で報告する。従って，ここでは各遺構の時期については大枠を示し，詳細な時期については遺物・考察編に譲りたい。また，金堂・講堂などの建物は，罹災の都度，再建されており，建物それぞれで再建時期を異にしている。そのため，観世音寺の伽藍全体として統一した時期設定を行うのは困難である。よって，遺構の説明には，個々の時期設定を用いる。

なお，観世音寺の調査に際しては，『延喜五年資財帳　在庄々惣目録』（以下，『資財帳』）及び大永６年（1526）模写の『観世音寺絵図』（以下，『絵図』）が大きな拠り所となっており，本項でも遺構と両者を対比させながら述べることとする。

（1）塔

1）概　要

心礎の周囲には，楠・樫などの樹木が根を張っているため樹木を避け，心礎を中心に東西南

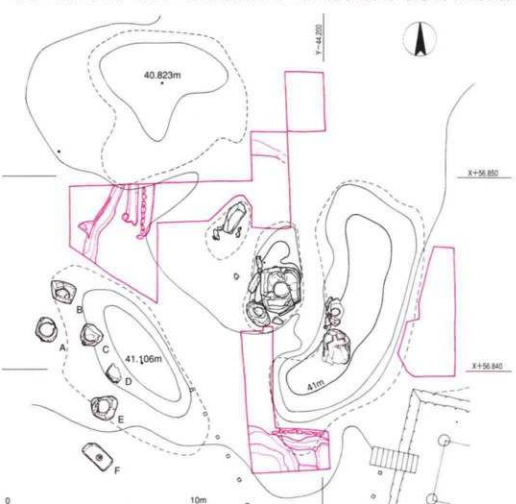


Fig.45　塔周辺地形測量図（1/200）

北の4箇所に調査区を設定した。調査の結果，B・C区で地覆石を検出し，基壇規模は一辺15mであることが判明した。最終的に，A・C区で基壇を断割り，版築上層と心礎が当初の位置を保っているかの確認を行った。

周辺地形（Fig.45，PL.3・4）

現在，塔跡には心礎と側柱・四天柱礎石と見られる礎石3個が存在し，心礎の南西側にも礎石6個が存在する。何時の時期か，基壇が掘削されてしまったため，心礎を含め全ての礎石は完全に露出し，地表から浮き上がった状態を呈する。辛うじて，樹木の周囲に基壇の残数を留めている。なお，基壇の残存部と現地表面の比高差は，最大で0.75mを測る。

2）塔SB3850

基　壇（Fig.46，PL.7・8）

調査に入る当初は，心礎が完全に露出するまでに基壇が掘削されているため，基壇積土は完

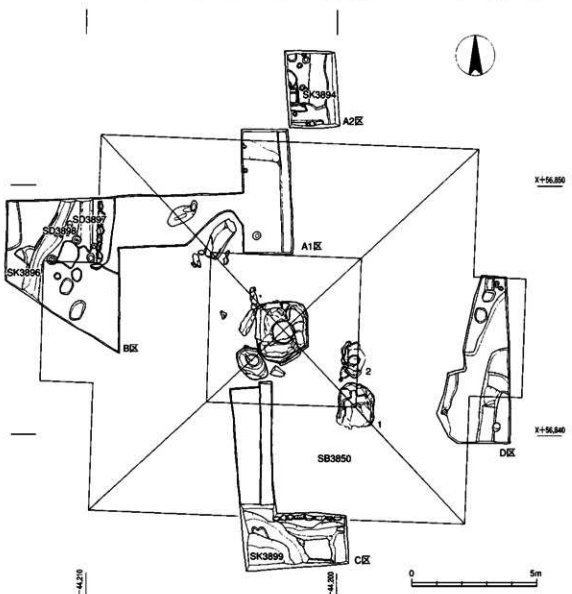


Fig.46　塔調査区遺構配置図（1/150）

全に削平されているものと考えていた。しかし，最終的にA・C区を断ち割ったところ，心礎の北側（A区）で40cm，南側（C区）で25～48cmの版築土層を確認した。

緻密な版築作業

基壇築成　版築土層は砂質土と粘土を交互に突き固めたもので，非常に緻密な版築作業の印象を受けた。塔基壇の版築状況を復原すると次のようになる。①基壇の周囲を灰褐色砂質土の地山面まで削平し，硬化した地盤を露出させる。②整地（21層）を施し，平にならす。③最下部に暗赤褐色粘質砂（20層，厚さ2～5cm）を敷き詰める。④灰色粘土（16層，厚さ2～7cm）と灰茶色砂質土（17層，厚さ5～10cm）を交互に入れて突き固める。⑤赤褐色粘質土（14層，厚さ2～5cm）を間層として入れる。⑥灰色粘土から赤褐色粘質土までの厚さ約20cmの土層を一単位として9回程積み上げることによって基壇を構築する。

なお，地山のレベルはA区北端で40.2m，基壇北側で40.4m，心礎付近で40.25m，基壇南端で40.2mを測り，基壇北側が一段高くなっている。このことは，Fig.44の基壇土層図からも判るとおり，基壇北半部は地山面を高さ約30cmの壇状に削り残している点である。この基礎地形が北半部だけなのか，基壇全体に及んでいるのかは，南北方向にしか断割りトレンチを入れていないため断定はできないものの，西辺地覆石の下場が地山面より下がっていることからすると，塔基壇の基底部は地山削り出しによる可能性が高い。

地山削り出し

地覆石（Fig.47，PL.5－2・6）　基壇の西側と南側で検出した。調査以前，西辺の地覆石は地表に露出しており，掘り下げた結果，石面を西側に向けて9個，長さ2.7m分を確認した。石材は花崗岩の自然石で，長さ22～37cm，幅16～26cm，高さ15cm前後の大きさである。南辺の

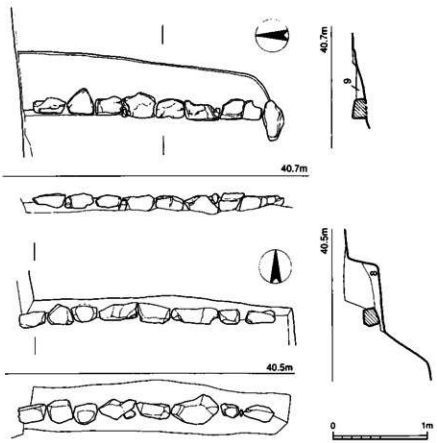


Fig.47　基壇地覆石実測図（1/40）

地覆石は石面を南に向け７個，長さ約2.7m分を確認した。石材は西側同様，花崗岩の自然石であるが，長さ20～50cm，高さ10～30cmと西側に比較してやや大振りである。

西辺及び南辺の地覆石は，心礎の中心から7.5mの距離にあり，両地覆石の延長線が直角に交わるように線を引くと一辺15mの基壇が復原できる。ただ，基壇一辺の長さが15mというのは一重基壇にしては大きすぎるので，今回検出した基壇は二重基壇で，下成基壇の可能性が考えられる。興味深いことに，『絵図』では基壇（下成）の上に須弥壇（上成）が描かれ，格狭間まで表現されており，あたかも二重基壇を表しているかのようである。なお，北側（A1区）では，地覆石の抜き取り跡を確認したが，東側（D区）は撹乱が著しく，地覆石はおろか掘方すら検出できなかった。

二重基壇？

また，地覆石の下場のレベルは西辺側で40.3m，南辺側で40.0mと30cmの比高差があり，南側に下がっている。これは，観世音寺が立地する地形そのものが南側に下がっていることと関連するものと思われる。南辺地覆石下場から心礎側込面までの高さは約２mを測る。

基壇化粧　基壇化粧に関しては，地覆石のみの遺存状態であるため想像の域を出ないが，講堂Ⅱ期基壇が乱石積基壇で，地覆石に花崗岩の割石を用いており，塔の地覆石と構造的に非常に類似している。また，金堂創建期基壇は瓦積基壇で，地覆石には砂岩製の切石を用いている。原位置は留めていなかったが，講堂からも砂岩製地覆石が出土しており，講堂創建期基壇も瓦積基壇の可能性が指摘できる。以上のことから，今回検出した塔基壇は乱石積の二重基壇で，しかも創建当初のものではなく，基壇のみ修復した可能性が考えられる。

基壇のみ修復したか

階　段（Fig.46，PL.5）　西辺の地覆石は南端の石が西側を向いており，階段の取付き部にあたる。基壇推定北西コーナーから5.1mの距離である。調査区を西側に拡張して階段の規模把握に努めたが，階段に関する知見は得られなかった。しかし，雨落溝SD3897が南端石の手前で終わっていること，溝SD3898が階段を避けるかのように曲がっていることからすると，階段幅は4.8m，階段の出2.1mに復原できる。

また，南辺の地覆石は基壇中心線の部位にも配列していることから，南辺部には階段を設けていないことが判る。従って，塔基壇は東西２辺の中央に階段を設けていたことになる。基壇長との比率からすると一辺の３分の１を占める。ちなみに，『絵図』では基壇の東・南辺に階段が描かれているが，北・西辺は死角になっているため４箇所設置していたことになる。

階段は東西の２辺

雨落溝

SD3897（Fig.46）　西辺地覆石の前面に位置し，長さ2.1mを検出した。南端は西を向いた地覆石の手前で終わっている。幅0.5mで，深さは6cmと浅い溝である。

礎　石

現在，塔跡には心礎と四天柱礎石１個，側柱礎石２個が存在する。また，心礎から10m程南西側の位置にも礎石６個が点在している。何れも地表から浮き上がった状態である。

心　礎（Fig.44・48，PL.9）　心礎の南端部分で上層観察を行った結果，心礎の根石の直下まで緻密な版築土層が確認できた。これにより，心礎は創建時から原位置を保っていると判断される。また，西辺地覆石上面から心礎上面までの高さは1.7m，南辺地覆石上面から心礎上面までの高さは2.0mを測ることから，心礎は基壇上面に据えられていたと察せられる。

心礎は現位置

石材は花崗岩で，南北長2.43m，東西幅2.06m，厚さ1.04mを測る。上面は平滑に仕上げられ

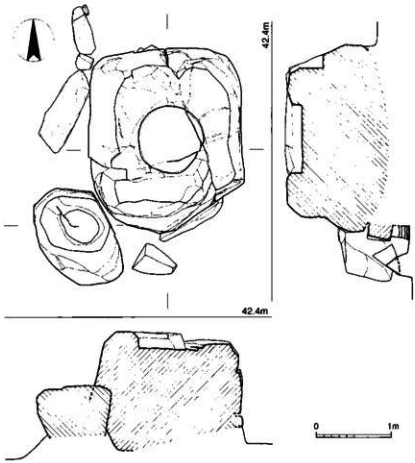


Fig.48　心礎・四天柱礎石実測図（1/50）

ており，中央に上面径90cm，深さ21cmの円形刳込を設けている。心礎には舎利孔は認められず，舎利孔は未確認
恐らく心礎の直下，或いは心柱に舎利容器を埋納したのであろう。

なお，心礎の東側と南側にかけて丁字形の亀裂が底部まで貫いており，辛うじて現状を維持しているものの，このまま放置していると亀裂が大きくなり，心礎自体が崩壊する恐れがあるため適切な保存措置を講じる必要がある。

四天柱礎石（Fig.44・48，PL.9）　心礎の南西側で，心礎に寄り添う様に位置する。礎石の下には根石はみられず，柱座の高さも心礎刳込面から48cm下がり，心礎上面からは70cmも下がることになる。また，礎石と版築土との間には丸瓦が入っていた。石材は花崗岩で，長軸1.46m，短軸0.96m，厚さ0.72mの大きさである。柱座は楕円形を呈し，上場での長径56cm，短径40cmで，高さは5cmを測る。

側柱礎石（Fig.44・49，PL.10）　心礎の南東側に2個存在する。側柱礎石1は心礎の中心から4.2mの距離に位置する。礎石が原位置を保っているかを確認するためサブトレンチを入れたところ，礎石の下には根石はなく，平瓦片・花崗岩片が入っていた。また，版築上層は認められず，礎石は黄色土の上に直に乗った状態であった。この礎石の上には石仏が奉ってあり，実測のために石仏を移設したところ方形の柱座を有することが確認された。方形の柱座

石材は花崗岩で，長軸1.8＋α m，短軸1.42m，厚さ0.5mを測る。方形柱座の南半部は欠損し

ているものの一辺90cmを呈し，柱座の北面中央に幅20cm，長さ23＋αcm，高さ4cmの地覆座を作り出している。西面にも下場が鉤形に廻っていることから地覆座が存在したことが判る。北・西面の2方向に地覆座を有することから隅柱の礎石である。なお，方形柱座を有する礎石は，飯世音寺ではこれ唯一である。

佃柱礎石2は心礎の中心から3.1mの距離で，隅柱礎石からは1.95m北側に位置する。礎石の下には模石状に花崗岩割石（長さ45～60cm）が入っているが，礎石と比較して大きすぎるきらいがある。また，創建期の講堂及び回廊礎石模石の大きさからしても非常に大きい印象を受ける。模石の下には綺麗な版築土層がみられるが，版築土と模石の間には厚さ3cmの黒色土が入っていた。石材は花崗岩で，長軸1.4m，短軸0.87＋αm，厚さ0.4mを測る。柱座は長径44cm，短径36cm，高さ2cmの円形を呈するが，柱座部分を残して周囲をはつることによって作り出している。また，心礎の4.5m北西側には，長さ1.72m，幅0.74m，厚さ0.73mの大きな花崗岩が横たわっている。柱座がなく，形状的にも礎石ではないが，位置的には佃柱の北西隅部にあたるため何かしら示唆的である。

以上，述べてきたように，四天柱礎石・佃柱礎石は心礎よりも70cm低いこと，礎石下部及び模石の状況を勘案すると，創建当初の位置は留めていないものと判断される。ただ，三つの礎石の柱座レベルはほぼ同じであるため，康平の焼失後，再建を意図して佃柱礎石・四天柱礎石の位置を変えずに掘り下げた可能性も考えられよう。改めて，礎石が原位置を保っているか確認する必要がある。

建　物（Fig.46）

『絵図』には柱間3間の五重塔が描かれているが，『資財帳』は「瓦葺五重塔一基　戸肆具」と記すのみで，建物規模は判らない。また，五重塔は康平7年（1064）に焼失するが，それ以前・以後も焼失・倒壊により再建したとの記事は見られない。

ここでは，四天柱礎石・佃柱礎石の位置が変わっていないとの前提のもとに建物平面を考えてみる。先ず，心礎中心点から隅柱礎石柱座中心点を通って基壇南西隅に線を引くと，心礎中心点から隅柱礎石柱座中心点までの距離は4.24mを測る。次に，心礎中心点から基壇北東隅に向かって4.24mの点と隅柱礎石柱座中心点を結ぶと5.996（≒6）mの数値が得られる。隅柱礎石の北側に佃柱礎石2が存在するので，柱間3間，佃柱距離6mに復原できる。また，隅柱礎石柱座中心点から佃柱礎石2の柱座までは1.95mなので，柱間は脇間1.95m（6.5尺）・中ノ間2.1m（7尺）・脇間1.95m（6.5尺）となり，鏡山復原案[1]と同じ結果が導き出された。

基壇周囲の礎石（Fig.49，PL.5－1・11・12）

現在，塔跡の南西側の一画にも礎石6個が点在しているが，後世，この場所に集め置かれたものである。礎石Aは最も遺存状態の良好なもので，円形柱座と地覆座を有する。柱座は上面径59cm，高さ3cmで，地覆座は幅18cm，残存長12cmを測る。礎石Bは柱座を半分欠損するが，円形柱座で，上面径56cm，高さは4cmである。礎石Cは柱座の4分の1程が遺存する。円形柱座であるが，径は不明。礎石Dは裏返っているものか，上面には柱座は見あたらない。礎石Eの柱座は歪な円形を呈し，上面径56cm，高さ3cmを測る。礎石Fは日吉神社の西方10m程の場所から発見された礎石で[2]，中央に径24cm，深さ21cmの穴を穿っている。唐居敷の礎石であり，出土した場所が北門推定地であることから北門関連の礎石になろう。

北門の礎石

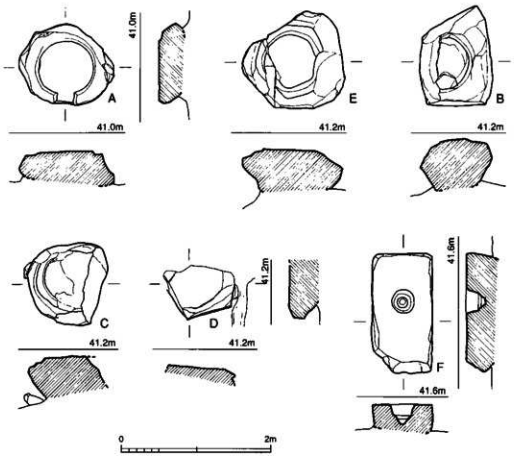


Fig.49　周辺礎石実測図（1/50）

3）その他の遺構

その他の遺構として，溝・土坑・落込・ピットなどを検出した。

溝

SD3898　B区で検出した。調査区を北から南西に走る溝で，SK3896を切っている。検出長4.2m，幅0.5～0.74m，深さ0.2～0.32mを測る。溝底は南側に深くなっており，最下層には砂の堆積がみられることから排水路として機能したものと考えられる。また，前述したように，階段を避けるかの如く西側にカーブしている。

土　坑

SK3896　B区で検出した。溝SD3898に切られる。不整形を呈する小土坑で，南北幅0.7m，深さ0.16mを測る。また，西側には浅い段を有する。

SK3899（PL.6－1）　C区南端で検出した。現代のゴミ穴で，埋土中からは近代の瓦類，陶磁器，ビール瓶などが出土した。

SX3894　A2区で検出した。南北方向に走る溝状の落込で，深さ24cmを測る。

（小田）

註1　鏡山　猛　『大宰府都城の研究』　1968　風間書房
註2　註1に同じ

（2）金　堂

1）概　要

当館は昭和45年から観世音寺に係る発掘調査を実施しているが，諸般の事情により重要な伽藍の一つである金堂の発掘調査は行っていなかった。観世音寺の正式報告書を刊行しようにも，金堂の規模・構造などを明らかにしないことには伽藍復原に支障を来すため，平成14年度に発掘調査を行う運びとなった。

金堂跡には江戸時代に再建された既存建物（阿弥陀堂）が存在するため，建物の周囲にA～E５箇所の調査区を設定した。調査の結果，44次に及ぶ観世音寺の発掘調査で，今回初めて創建期と考えられる瓦積基壇を検出した。また，奈良時代から明治期に及ぶ５期の基壇変遷が明らかとなるなど大きな成果を得た。

５期の基壇変遷

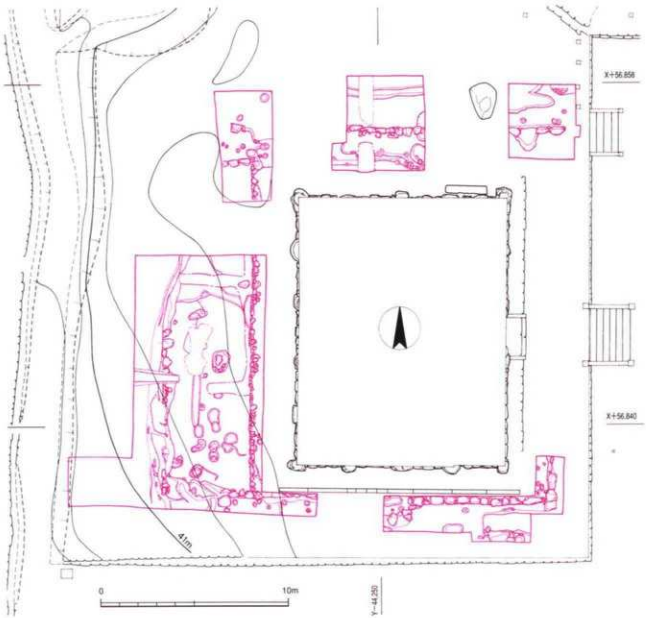


Fig.50　金堂周辺地形測量図（1/200）

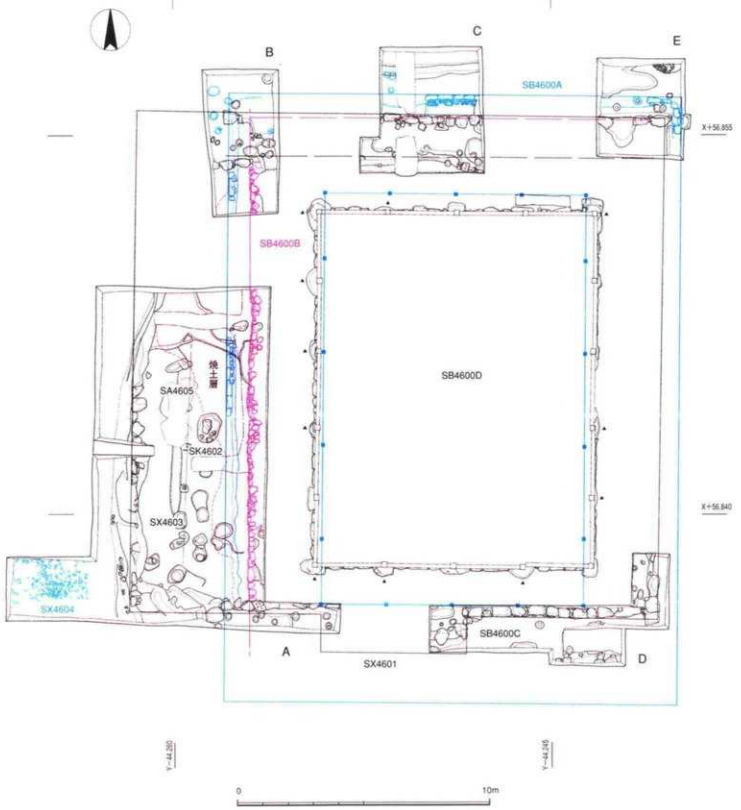


Fig.51　金堂調査区遺構配置図（1/150）

周辺地形（Fig.50，PL.13－1）

現在，金堂跡には江戸時代再建の阿弥陀堂が存在する。阿弥陀堂は東側に正面を向け，東辺と南辺には江戸・明治期の石垣が築かれている。この石垣は高さが1.3mあり，西辺の戒壇院との境になっている小道より0.7m高く，恰も基壇の上に建てられているようである。阿弥陀堂の東から北側にかけてはフラットであるが，背面に当たる西側は小道に向かって緩やかに傾斜している。また，本堂（講堂）石垣は，阿弥陀堂立地面より更に0.7m高くなっていることから境内中央部が大きく削平され，現在のような景観を呈するに至った印象を受ける。

2）土 層

A区北壁土層（Fig.52） 阿弥陀堂の周囲にA～E5箇所の調査区を設けたが，基本土層を説明するのにはA区の状況が最も適しているので，A区北壁で説明を加える。なお，Ⅰ期－創建期，Ⅱ期－平安，Ⅲ期－中世，Ⅳ期－江戸元禄期の大枠を示しておく。

土層図の右手が建物側で，左手が小道側にあたる。1～12層は西側に向かって堆積しており，9・11層には近世瓦を多く含む。また，2層には瀬戸や近世陶磁器が含まれていた。調査区南半部の最下層からは，ビール瓶や駐車鍋が出土したことにより，1～13層は近代以降の埋土と判った。調査区の西側は溝状になっているが，本来，ここからⅡ期基壇が立ち上がり，一段高くなっていた。それを近代以降に埋め立てた結果，現在みられる平坦地になった。

18～23層は褐色土を基調とするⅢ期の基壇積土である。24層は焼土層で，下部には炭化物もみられた。金堂は康治2年（1143）に焼失するが，この焼土層はその時のものと考えられる。

康治2年の焼土層

右端にみえる石積は，Ⅱ期の基壇化粧である。図面をみる限り，14～17層はⅡ期基壇化粧掘方埋土のようであるが，実は鏡山氏が昭和27年に調査されたトレンチの跡（以下，鏡山トレンチ）で，実際の掘方埋土は28層になる。焼土下位の25～27層がⅡ期基壇に伴う整地層であり，29～41層がⅠ期基壇積土，それ以下は地山である。なお，図中▼印で示した箇所が，Ⅰ期瓦積基壇の地覆石下場にあたる。この付近で地覆石・掘方が検出されなかったのは，Ⅱ期基壇整地時に

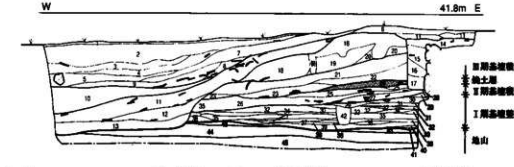


Fig.52 A区北壁土層実測図（1/60）

削平されたためと考えられる。Ⅰ期積土は灰黄色砂と黄色粘土を基調とし，▼印付近で50cmの厚さを測る。積土という表現を用いたが，土層の状況は緻密であり，版築と呼ぶに相応しいものであった。また，調査区西端まで積土を施しており，金堂の基壇築成は整地段階から丁寧な作業を行っている。

丁寧な版築

3）金堂SB4600

調査区の設定

前述した如く，阿弥陀堂の西側は戒壇院に向かって緩やかに傾斜しているが，長さ27m×幅11m程の平坦面となっている。建物の周囲では，この平坦面が最も広かったので，先ずここに調査区（A区）を設定し，基壇の痕跡をつかむことにした。A区東端で南北方向の石列（Ⅱ期基壇化粧）を検出したので，石列の北側延長部にB区，B区の東隅にC区を設定した。また，A区南端で南北石列を切って東西方向の石列（Ⅲ期基壇化粧）が存在するため，その東側延長部にD区を設定した。更に，C区で創建期の瓦積基壇を検出したので，基壇コーナーを押さえるため建物北東隅にE区を設定した。

なお，Ⅰ・Ⅱ期基壇とも南北に長いことから基壇東辺に階段が想定され，階段規模をつかむため建物東側に調査区を予定していたが，調査区の設定場所が阿弥陀堂正面に当たり，参拝者の支障となるので調査区設定を断念した。

今回の調査では，瓦積・乱石積・石垣積の三種類の金堂基壇を検出した。時期的に瓦積→乱石積→石垣積基壇へと変遷する。以下，説明に際しては，Ⅰ期基壇（瓦積）をSB4600A，Ⅱ期基壇（乱石積）をSB4600B，Ⅲ期基壇（石垣積）をSB4600C，Ⅳ期基壇（石垣積）をSB4600Dとしてそれぞれに報告する。

SB4600A

基　壇（Fig.51）

瓦積基壇

瓦積基壇で，砂岩製の切石を地覆石として据えている。A・B区で基壇西辺の一部，C区で基壇北辺の一部，E区では基壇北東隅部を検出したことにより，基壇規模は東西幅18.0m，南北長は伽藍配置を検討した結果，24.0mに復原できる。基壇推定南辺は，丁度，明治期の石垣にあたるため破壊されている可能性が高い。基壇西辺は1°東に振っている。

基礎地形　金堂調査時にA区南西隅部を一部拡幅し，暗渠状の遺構を確認していたが，時間・予算的な制約により調査を中断していた。改めて，講堂補足調査において調査区を設定し，掘り下げた。その結果，礫敷と暗渠を検出した。

礫　敷

SX4604（Fig.53，PL.20−3）　A区南西拡幅部で検出した。レベル的には基壇整地土の最下部にあたり，基壇築成に伴う基礎地形で，5〜20cm大の花崗岩割石を敷き詰めている。基壇直下の整地土中にも小礫を含んでいたが疎らであり，これ程ではない。調査時点では湧水が著しく，地盤強化と排水的な役割が考えられよう。

暗　渠

SX4607（Fig.53）　礫敷の下層で検出した。東西方向に走り，長さ5m分を確認した。全体の長さ・幅は不明であるが，深さは30cm程である。埋土は暗灰褐色粘砂・灰青色粘砂で，暗渠

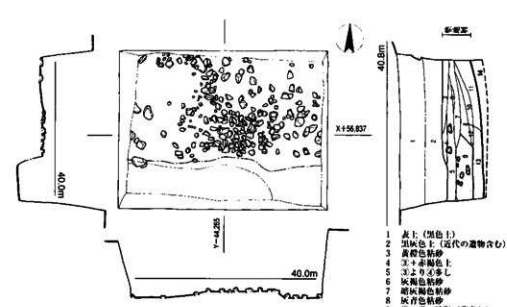


Fig.53 礎敷SX4604実測図（1/60）

内には花崗岩の割石が詰められていた。

基壇築成（Fig.54・56，PL.20−2・23−2・24） 基壇北辺中央部（C区）と西辺の中央付近（A区）で確認した。北辺の状況は，基本的に黄色粘質土と灰色砂を交互に突き固めているが，一層の厚さは5cmと均一的かつ水平を意識した版築を行っている。版築土層は1.05m遺存し，C区北端での地山レベルは40.3mで，南端の鏡山トレンチでは40.1mと20cm下がっている。

西辺部の状況は北半部とは異なり，地覆石から上は水平を意識した版築（Fig.54の40〜42層）を行っているが，それより下はレンズ状の堆積を示し，版築と言うより盛土的である。土層の項でも説明したように，基壇外側まで広範囲に整地を行っている。 広範囲な基壇整地

なお，地覆石から1.8m西側の地山レベルは40.2mで，建物側が40.05mと15cm下がることから，金堂基壇築造に際しては小規模ながら掘込地形を行っている。言葉を換えると，掘込地形部分はレンズ状の盛土で，地覆石から上は版築による。塔心礎付近の地山面レベルが40.25mなので，塔・金堂の築造に際しては，同一レベルで基礎地形を施していることが判明した。 掘込地形

地覆石（Fig.54〜56，PL.20−1・21・22−2） 地覆石は基壇北辺中央（C区），西辺中央（A区），西辺北側（B区），北東隅（E区）で検出した。砂岩製の切石で，長さ33〜70cm，幅18〜23cm，高さ13〜17cmを測るが，基本的に30cm程の小型品と60cm程の大型品の2種類である。基壇の外側にあたる前面と瓦が乗る上面は丁寧に研磨しているが，底・背・側面の見えない部分は粗く削ったままで，整痕が見られる。 砂岩切石の地覆石

A区では北半部に7個（総長3.13m）遺存するが，南半部は抜き取られ，掘方のみである。B区では長さ70cmの大型品1個とその両脇に半裁品2個（総長1.13m）を並べている。また，その北側に辛うじて底部を残す小片が遺存する。最初に発見したC区では5個（総長2.16+α m）遺存している。西端の地覆石から40cm西側には鏡山トレンチがあるが，地覆石1個分抜かれていたため昭和27年時点では発見できず，金堂の最初の調査から半世紀を経て姿を現した。

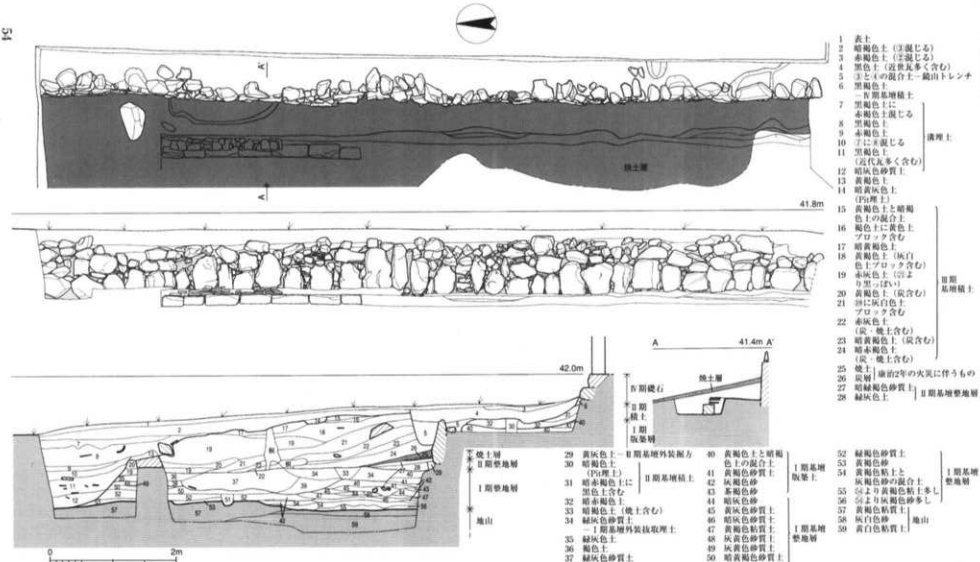


Fig.54 A区SB4600A・B基壇化粧実測図（1/60）

E区は基壇隅部で，L形に地覆石6個が遺存していたため基壇幅をつかむことができた。東辺壇部は地覆石の外面に花崗岩を3個当てており，基壇を補修した可能性がある。

また，地覆石の並べ方には，大小交互に並べるといった規則性はなく，B区の状況からすると大小適当に並べてゆくうちに隙間ができたため，隙間を平瓦品で充填したようである。

基壇化粧（Fig.54～56，PL.20－1・21・22－2）　I期は瓦積基壇で，地覆に砂岩製の切石を据え，その上に老司I式の平瓦片（10～15cm大）を積み上げたものである。基壇化粧は後世の建物再建などにより著しい削平を受け，B・E区では僅か1段の遺存状態で，A・C区では辛うじて4段の瓦積が遺存していた。また，瓦積は地覆石外面から行うのではなく，北辺では外面から17cm，西辺では外面から10cm内側に引っ込めてから積んでいる。東辺と南辺の瓦積については不明。先の東西18m，南北推定長24mの基壇規模は，地覆石外面での数値であるため瓦積外面での数値はそれより若干小さくなる。また，地覆石上面から礎石までの高さは1.3mを測る。

Fig.56の土層図から基壇化粧を復原すると，①基壇外縁を切り落とす（地覆石背面の掘方）。②地覆石を据える。③地覆石の高さまで裏込をする（26層）。④地覆石に葺土（瓦を安定させる接着剤の役割）を施し，平瓦片を乗せる。⑤瓦の外面を揃えながら瓦と葺土を交互に施し，基壇の高さまで積み上げるといった工程がたどれる。

また，地覆石を基底部に据えることにより，基壇規模が確定し，瓦を積み上げる位置・施工範囲も明瞭となる。伽藍の設計においては，地覆石を基準としてなされたものと考えたい。

階　段　階段に関わる遺構は検出していないため，復原建物（Fig.51）と瓦積基壇の状況から考える。先ず，北辺に階段を想定すると基壇中央の位置になるが，その場所は基壇が張り出していないことから北辺中央には階段を設けていなかったことが判る。

次に，金堂の背面に当たる西辺部であるが，階段を想定すると西辺中央部に1箇所もしくは，桁側柱列の南から2－3列と4－5列間の2箇所に想定できる。しかし，瓦積及び掘方が北辺中央から連続しているので，西辺にも階段を設けていなかったと判断される。

東辺と南辺は未調査であるため詳細は不明であるが，南辺は北辺の状況からすると設けていない可能性が高く，消去法的に金堂の正面にあたる東辺のみに設けていたことになる。ただ，階段が1箇所であるのか2箇所設けていたのかは，今後の調査に委ねたい。

階段は東辺に施設

礎　石

現存建物の礎石を詳細に観察すると，円形柱座を有する礎石が数個あり，明らかに創建建物の礎石を転用したことが窺われた。建物外側から実測を行ったが，礎石であるか判断する必要があったため講堂調査の折，建物内部に入り礎石を実見させて頂いた。実見によると，身舎2×3間の礎石10個中8個に円形柱座を有し，礎石と確認できた。側柱は4×5間の18個中11個が礎石（▲印）と確認できた。ただ，Fig.51の創建建物復原図からすると，原位置は留めていないものと判断される。

建　物

「資財帳」によると，金堂建物は「瓦葺二層金堂一宇　長五丈四尺　広三丈四尺五寸　高一丈四尺五寸」とある。講堂の単位尺（桁・梁行平均値0.30068m≒0.30m）を準用すると，建物の長さ16.2m，幅10.35mの数値が得られる。推定基壇長24.0mから建物長16.2mを引くと7.8m

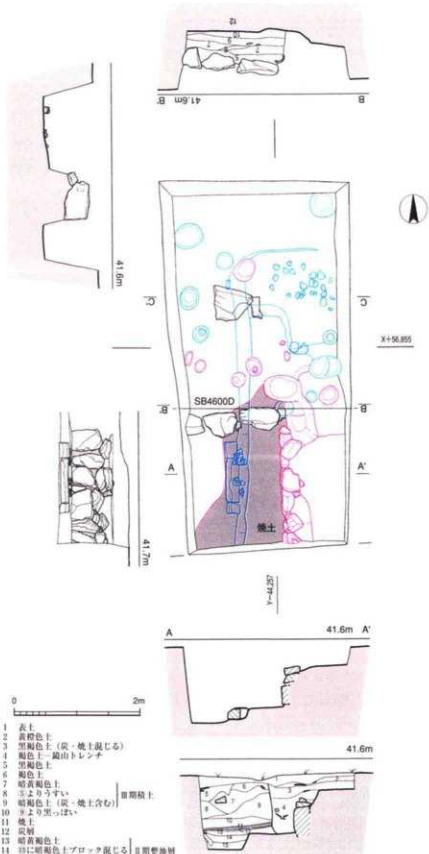


Fig.55　B区SB4600A・B基壇化粧実測図（1/60）

で，2で割ると3.9mとなり，それが北・南辺基壇からの建物距離になる。同じく，基壇幅18.0mから建物幅10.35mを引くと7.65mで，2で割ると3.825mとなり，東・西辺基壇からの建物距離となる。その4辺を結んだのが，Fig.51の建物復原図（■印は柱位置）である。

承暦であることと建物内部の礎石数からすると，身舎は梁行2間，桁行3間で，周囲に廂を巡らせるため側柱は梁行4間，桁行5間となり，柱間は梁行2.5875m等間で，桁行は2.5875m・3.675m・3.675m・3.675m・2.5875mが復原される。

SB4600B

基　壇（Fig.51）

Ⅱ期は乱石積基壇で，A区で基壇西辺の大半，B区で基壇西辺の北端付近を検出した。B・C・E区では基壇北辺を検出できなかったので，Ⅲ期基壇築造時に破壊された可能性が高い。Fig.56のC区上層図を見ると，Ⅲ期石垣積基壇の下に掘方状の穴（20層）がある。石が掘方下場から20cmも浮いていることから，この穴はⅢ期基壇に伴う掘方ではない。埋土は暗黄褐色土であるが，Ⅰ期基壇版築土をベースとしており，Ⅱ期基壇化粧の抜取り穴と考えられる。抜取り穴の北側下場は，Ⅰ期基壇地覆石外面から80～90cm南側で，レベル的には地覆石の上面とほぼ同じ高さである。

Ⅱ期は乱石積基壇

A区では基壇化粧が連続して12.3m検出されたが，南端はⅢ期基壇に切られている。基壇西辺はⅠ期基壇地覆石外面から90cm内側（東側）に入っており，レベル的にはⅡ期基壇化粧下場と地覆石上面とがほぼ同じ高さである。Ⅱ期は基壇化粧のみ改修したと仮定すると，北・西辺がⅠ期基壇地覆石外面から90cm内側に入っているので，南北長22m，東西幅16m程の基壇規模が推定される。基壇方位は1°東に振っている。

基壇築成（Fig.52・54，PL.20－2）　Ⅱ期基壇はⅠ期基壇の外縁のみを改築しただけなので，基壇築成はⅠ期を踏襲しているが，基壇化粧の前面には厚さ20cm程の整地を施している。

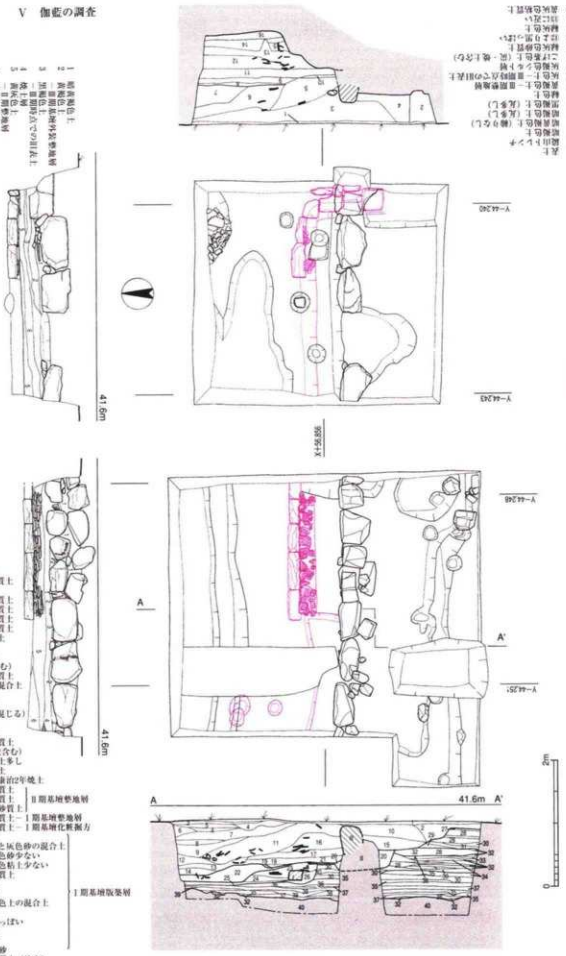
基壇化粧（Fig.54・55，PL.16～19・21）　乱石積基壇で，A区で検出長12.3m，B区で検出長1.8mを測り，両者を合わせると17.1mの遺存状態である。地覆石は見られず，直接，花崗岩の自然石を立て並べている。基部に高さ60～75cm，幅40～50cmの大きめの石と高さ40cm，幅20～30cmの小振りの石を用い，大きめの石の間に小振りの石2～3個を挟み込むようにし，その隙間に10～15cm程の角礫や平瓦片で充填している。石積みは整然としておらず，まさに乱石積みである。また，部分的に石積みが乱れ，積み直したと思われる箇所も見られる。さらに，康治2年（1143）の火災により，表面が黒変している石も多く見受けられた。

基壇化粧の工程を復原すると，①Ⅰ期基壇外縁を90cm程掘り込む。②基壇周辺に厚さ20cm程の整地を施す。③石を据える掘方を掘る。④基部に石を立て並べる。⑤石を基壇の高さまで積み上げるといった工程になろう。

階　段　Ⅱ期基壇についても階段に関わる痕跡は検出していないため想像の域を出ないが，Ⅰ期同様，基壇東辺に付設していたものと推察される。

焼土層（Fig.54，PL.16－3・17・18）　Ⅱ期基壇の西側から北西側にかけて焼土層が広がっている。焼土層は最も厚い部分で10cmを測り，焼土塊の一部には平滑な“面”がみられることから，建物の壁面が強い火熱により赤く焼けたものと思われる。また，焼土層から出土した炭化材の年代測定結果は，A D645～A D1190の年代が得られており，クスノキ科と針葉樹が含

康治2年の焼土層


1 表土
2 黒褐色土
3 黒褐色土
4 黒褐色土（細や丸）
5 黒褐色土（礫多い）
6 黒褐色土（礫多い）
7 暗色土
8 黒褐色土～暗褐色土
9 暗色土～暗褐色土
10 黒褐色土～灰
11 にぶい黄色土（礫～小石）
12 暗色帯土
13 ローム
14 黒褐色土
15 黒褐色土
16 表土
17 カクラン
18 黒褐色土
19 暗褐色土
20 暗褐色土
21 暗褐色土
22 暗褐色土
23 暗褐色土
24 暗褐色土
25 暗褐色土
26 暗褐色土
27 暗褐色土
28 暗褐色土
29 暗褐色土
30 暗褐色土
31 暗褐色土
32 暗褐色土
33 暗褐色土
34 暗褐色土
35 暗褐色土
36 暗褐色土
37 暗褐色土
38 暗褐色土

まれていた[19]。

『東大寺文書』には，観世音寺　注進　堂舎門廊損色事として「一金堂一宇，焼失　其後御仏上許屋形造立，板葺，康治二年六月廿一日　一東西回廊之中　西南回廊卅三間，掃地焼失，康治二年六月廿一日焼失」とあり[20]，康治２年（1143）に金堂と西面回廊が33間に渡って焼失したことが記録されている。焼土層の状況は，まさに金堂から西面回廊にかけて広がっており，康治の火災は金堂からの失火が原因で，回廊に飛び火したものと想像される。

金堂から回廊に飛び火

また，『本朝世紀』によると，「中尊丈六金銅阿弥陀如来像在猛火之中，尊容無変，昔自百済国奉渡之云々」とあり[21]，金堂に安置されていた金銅阿弥陀如来像は，百済からの献上品で，猛火の中にあっても尊容が変わらなかったと記されている。

建　物

建物に関しては，康和４年（1102）８月の大風による倒壊記事（『観世音寺古文書』）以前は，貞観３年（861）の小破記事及び貞観８年（866）の修復記事しか見あたらず，大風で転倒するまでの凡そ400年間は創建建物が存在したことになる。しかし，再建建物も40年後には火災に遭い，灰燼に帰してしまった。ただ，阿弥陀如来像のみは無事であったため，阿弥陀仏を覆う程度の板葺き小屋を築いたことが知られる。

SB4600C

基　壇（Fig.51，PL.13－2・14）

Ⅲ期は石垣積基壇で，Ａ～Ｅ全ての調査区で検出した。Ａ区では基壇西辺，Ｂ・Ｃ・Ｅ区では基壇北辺，Ｄ区では基壇南東隅部と階段が遺存していた。これにより，基壇規模は東西21ｍ，南北19.8ｍで，東西にやや長い方形基壇であることが判った。Ⅰ・Ⅱ期の南北に長い基壇から方形の基壇に改築し，建物自体も変容したことが窺われる。

Ⅲ期は石垣積基壇

基壇築成（Fig.52・57）　基本的にはⅠ・Ⅱ期の基壇を踏襲するが，西側のみⅡ期基壇化粧外縁から4.7ｍ拡幅している。Fig.54の土層図を観察すると，Ⅱ期基壇化粧に持たせかけるように傾斜させて積土を行い（21～24層），その後水平を意識した積土を行う（15～20層）。積土は黄褐色土・赤灰色土を主体とし，よく締まっていた。

基壇化粧（Fig.56～58，PL.15－1・2・22・23－1・25）　石垣積基壇で，花崗岩の割石を２～３段積んだものである。基壇西辺はＡ区で8.6ｍの基壇化粧を検出した。花崗岩割石を１段並べたものであるが，Fig.54・57の土層図をみると，石を据えるための掘方はなく，19層の直に石を置き，背面を20層で被せているので，基壇築成と一連の作業であることが判る。石材の大きさは幅30～55cm，厚さ20cm前後で，石の下場は南側に向かって下がっている。

基壇北辺はＢ・Ｃ・Ｅ区で検出した。Ｂ区は基壇化粧の花崗岩１個が遺存する程度であるが，Ｃ区では4.1ｍ，Ｅ区では3.6ｍの基壇化粧を検出した。花崗岩割石を１～２段積んでいるが，表面が火熱により黒変した石があり，Ⅱ期基壇化粧を転用した可能性が考えられる。Ｅ区では幅70～80cm，高さ45cm程の大きな石を横倒しにして用いている。

基壇南辺はＡ・Ｄ区で検出した。Ａ区では部分的に石が抜かれていたが，4.7ｍ分確認した。石積みは２段遺存し，表面が火熱を受けて赤化した石がみられる。西端の石は石列からずれており，本来の位置ではない。また，蚕状穴を有する石もある。石列の前面には足場穴SB4608が設けられている。Ｄ区では基壇南東隅部と階段を確認した。石積みは２段の遺存状況で，大

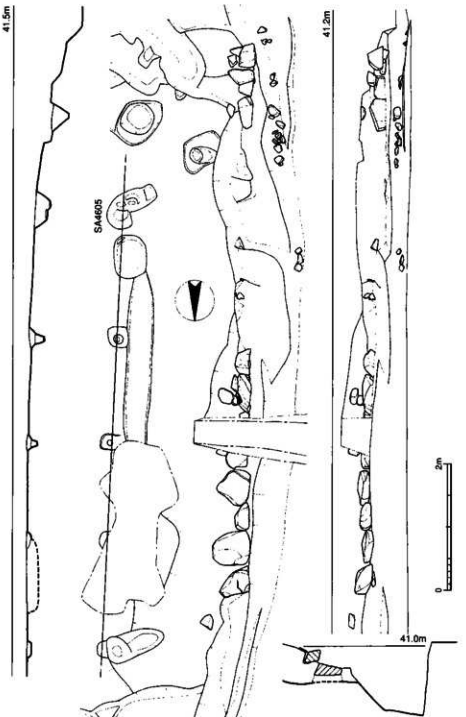


Fig.57　A区SB4600C基壇化粧瓦溜阿（1/60）

きなものでは長さ100cm，幅50cm，高さ40cm程の石を横に並べている。小さな石は長さ・幅とも30cm位のものであった。石積みの特徴は，建物の背面に当たる西辺以外は大きな石を用いており，視覚的な効果を意図したものと思われる。注目されるのが，北辺東端と東辺南端の石で，北辺の石は東側に突出し，東辺の石は南側に突出しており，縁束を支える石になるか。また，基壇化粧の下場レベルは階段付近が最も高く，東西両側に向かって下がっていた。

階 段 階段は北・西辺には付設していないのは明らかであるが，東辺に付設していたかは未調査のため不明。『絵図』では，南辺と東辺に階段が描かれている。

SX4601（Fig.58） D区西端部で，階段の東縁を検出した。基壇南辺の基壇化粧がL形に折れ曲がり，南端の石が立っていることから階段と判明した次第である。立石は東縁にあたるが，その西側の石は浮いている。南辺中央に付設されていたとすると幅は5.8mに復原できるが，A区では西縁は検出していない。また，階段の出は1.5mとした。

足場穴

SB4608（Fig.58） A区南東部で，Ⅲ期基壇化粧前面に位置する。Ⅰ期版築面で検出したため，深さは15cm前後となってしまった。径0.3mの円形を呈し，4個確認した。柱間は1.3m前後の間隔で，底面は西側に傾斜している。

礎 物

基壇は東西21m，南北19.8mで，東西にやや長い方形基壇であるため建物平面も方形を呈したと推察される。礎石が判然としないため建物の規模・構造は不明であるが，ここで参考になるのが『絵図』である。しかし，絵図であるため誇張され，信憑性に乏しいとする意見も一方にはある。実際，『絵図』には，建物の古い様相と新しい様相が渾然一体となって表現されているが，遺構と比較・検討した場合，ある時期の建物の様相をよく捉えており，無視できない存在である。

『絵図』では，金堂建物は瓦葺で，東西5間4戸，南北4間4戸の単層方形造に描かれ，南側の半開きの扉から東面する仏像（金銅阿弥陀如来像）が姿を見せている。また，建物の周囲には縁が廻り，東・南辺に階段も描かれるなど，今回検出した方形基壇に適う建物と言える。また，金堂建物の背面には，小建物が表現されており，指導委員の鈴木・澤村両氏からは閼伽棚 閼伽棚であろうとの意見を頂戴した。調査では，閼伽棚遺構の検出を目指したが，構造的には直に縁に乗る当麻寺曼陀羅堂例や本体は縁に乗るものの柱は礎石を必要としない東大寺三月堂・元興寺極楽坊例であるため，結局，閼伽棚の痕跡は検出できなかった。

SB4600D

現在の金堂建物（阿弥陀堂）は，寛永7年（1630）に暴風により倒壊した講堂の仮堂（寛永8年に建立）を移築したものとされている。ここでは，基壇・建物について若干ふれておこう。

基 壇（Fig.51）

B区中程で東西方向の石列を検出した（Fig.55）。花崗岩3個を並べたものであるが，C区では抜取られていた。鏡山氏の調査では，阿弥陀堂建物とⅢ期基壇化粧との間で石列（Fig.17）を検出されている。これが，その石列に該当するものと思われる。『筑前名所図絵』[11]によると，19世紀前半段階で講堂と金堂の石垣は現在見るように描かれているので，前述した石列が阿弥陀堂に伴う基壇化粧の可能性が高い。建物と基壇化粧との距離は2.1mなので，南北18m，東西15m程の南北に長い基壇が想定される。

礎 物（Fig.51，PL.13－1）

阿弥陀堂は本瓦葺で，桁行5間（13.9m），梁行4間（11.0m），単層入母屋造で，東壁中央に観音開きの扉を有する。▲印の礎石は柱座を有し，創建期の礎石を転用したものと思われる。また，地覆石には花崗岩割石を3～6個並べており，この石もⅡ期基壇化粧の転用品か。

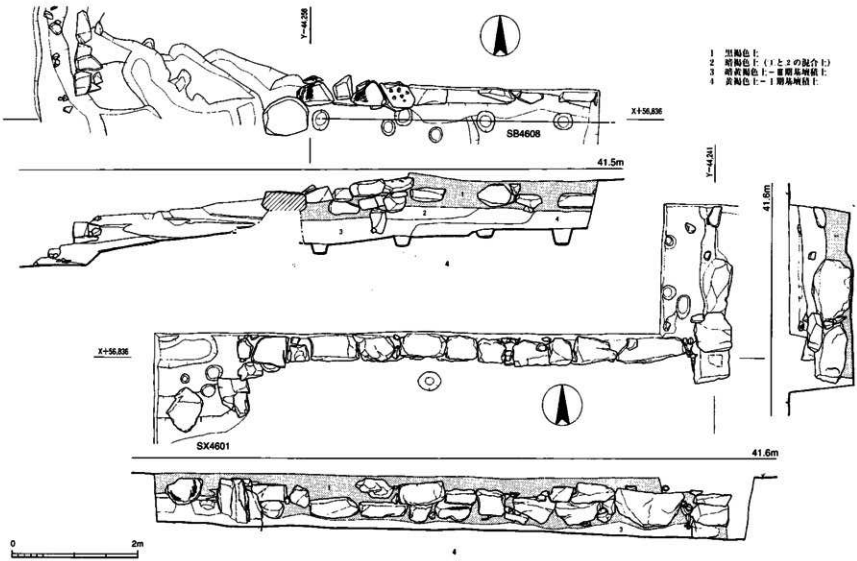


Fig.58 A・D区SB4600C基壇化粧実測図（1/60）

4）その他の遺構

構

SA4605（Fig.51，PL.14－1）　A区の中央に位置する。Ⅲ期基壇上面から掘り込まれており，4間分の長さ6.9mを検出した。柱間は北から1.73m，1.54m，1.63m，2.0mを測る。柱穴は30cm前後の隅丸方形を呈し，検出面からの深さは7～18cmで，底面は南側に向かって下がっている。方位は東に2°振っており，Ⅲ期基壇とは平行にならない。Ⅳ期以降のものか。また，炭化した柱痕が残っており，径10cmを測る。

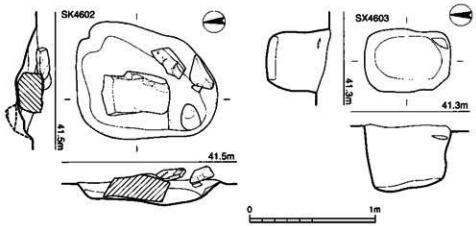


Fig.59　土坑SK4602，火葬墓SX4603実測図（1/30）

土 坑

SK4602（Fig.59）　A区の中央で検出した。Ⅲ期基壇上面から掘り込まれている。平面形は不整形を呈し，長軸1.12m，短軸0.91mで，検出面からの深さ0.19mを測る。底面中央には，長さ0.55m，幅0.34m，厚さ0.2cmの石が据えられており，建物の礎盤かと思われ精査したが，対応する穴は検出できなかった。また，穴の南側には焼けた石が2個あり，石の下から龍泉窯系青磁碗の破片が出土した。

瓦 溜

SX4606（PL.19－4）　焼土層に切り込んでおり，焼失した建物の瓦を集積したものと考えられる。平面的には2×3mの三角形をなす。パンケース8箱程の瓦類が出土した。

火葬墓

SX4603（Fig.59，PL.15－3）　調査区の南半部に位置し，構SA4605と重複する。他の遺構同様，Ⅲ期基壇上面から掘り込んでいる。平面形は隅丸方形を呈し，長軸0.68m，短軸0.50m，深さ0.51mを測る。埋土は基壇積土と異なる灰白色粘土を主体とすることから，別の場所から運んだ土で埋めたものと思われる。埋土中からは火葬骨・炭・土師器が出土しており，Ⅲ期基壇の下限を押さえる重要な遺構である。（小田）

註1　炭化材の年代測定結果内容は，－遺物・考察編－で掲載する予定である。
註2　竹内理 三編『太宰府・太宰府天満宮資料』巻六　1970　太宰府天満宮
註3　註2に同じ
註4　奥村玉欄編で，文政4年（1821）に休哉を修えたとされる。

（3）講　堂

1）概　要

講堂の調査は，昭和27年と昭和32年の過去２回実施され，講堂建物が桁行７間（99尺），梁行４間（50.5尺）であり，側柱礎石の心から８尺の距離で基壇外面の石列が存在すること，回廊が講堂側面の中央に取り付くことなどが明らかとなった。また，建物前面で基壇拡幅の石列を検出していたが，それに関連する建物の調査はなされていない。

第126次調査は，過去の調査の追認，基壇拡幅石列と建物との関係，及び回廊の規模確認を主たる目的として実施した。調査の結果，建物正面における基壇の拡幅などから５期の建物及

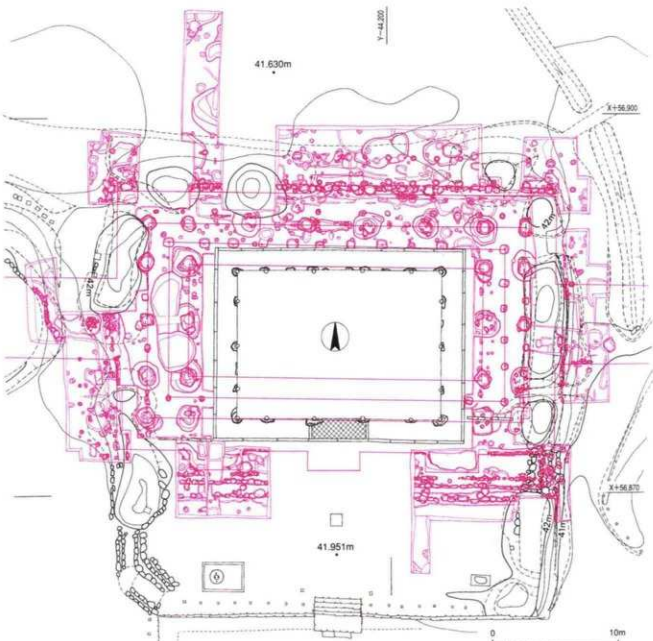


Fig.60　講堂周辺地形測量図（1/300）

び基壇の変遷（SB3800A～E）が把握できた。また，北面回廊の雨落溝SD3725・3745及び東面回廊の雨落溝SD3715・3735を検出した。溝の心々距離は6.2mで，講堂側面中央に回廊が取り付くことが追認されるなど一定の成果を得た。

しかし，金堂の調査において，創建基壇が瓦積みであったことから，講堂の創建基壇とした乱石積基壇が創建時のものであるか。また，通常，回廊は講堂の南端柱列間に取り付くが，回廊が講堂側面中央に取り付く観世音寺の状況は，創建当初からのことであるかの点に疑義が生じ，この2点を観世音寺正式報告書刊行以前に明確にする必要があったため補足調査として一部再発掘を行った。調査の結果，創建時から動いていないとみなされていた礎石の下から礎石据付穴を検出し，現在みられる礎石は再建後（Ⅱ期）のものであること。また，回廊の礎石据付穴も発見され，当初から講堂側面中央に回廊が取り付く構造ではなく，創建時は1間分南側に取り付くことが判明し，従来の学説が覆ったことは，前述の如くである。　学説覆る

周辺地形（Fig.60，PL.26）

現在，講堂跡には江戸元禄期に再建された建物（観世音寺本堂）のみ存在する。再建講堂は正面を南に向け，南辺から東辺にかけて江戸期の石垣が築かれている。この石垣は高さが1.5mと目線より高く，その中央に建つ講堂は境内の中でも一際目を引く存在である。また，本堂の周囲は土手状になっているが，この土手には楠の大木が根を張り，恰も森の中に建物が存在するかのようである。

2）土　層（Fig.62・64）

本堂建物の周囲に調査区を設定したが，土層の状況はそれぞれ異なるため東西南北各部で説明する。また，基壇積土については，基壇築成の項で一括して述べる。

北辺部　建物の背面にあたる。4区西壁での土層堆積状況は，Fig.64土層2によると，上層から①表土，②瓦層（4・5層－近世瓦を多量に含む。厚さ50cm），③暗灰色土（6層，厚さ20cm），④灰色砂質土（7～9層，10cm），⑤茶灰色砂質土（13～15層－落込の整地土），⑥基壇積土（21～30層，厚さ50cm），⑦整地層（18～20層，厚さ25cm）を基調とし，地山（黄白色粘土）から表土までの高さは1.2m程であった。また，4区南壁（Fig.64土層3）では砂層が厚く堆積し，基壇北東隅部の下層は自然流路であったことが窺われる。

西辺部　基壇土層図Aでは，上層から①表土，②撹乱土（昭和32年調査埋土），③瓦層（5・6層－近世瓦を多量に含む。厚さ20～70cm），④黒灰色土（7～10層），⑤黄褐色土（17層－Ⅰ期整地土）を基調とし，地山の黄白色粘土から礎石までの高さは1.4mを測る。

東辺部　基壇土層図Cでは，礎石と石列間が土手状に高くなっている。上層から①表土，②褐色土（3層－締まりが無く，厚さ30cm），③暗褐色土（4～7層－瓦を含み，厚さ30cm），④暗茶褐色土で，地山から礎石までの高さは1.2m，土手の上場までの高さは1.7mを測る。また，西辺側での地山のレベルは40.6mで，東辺側での地山のレベルは40.65mなので，東西はほぼ同じ高さである。

南辺部　Fig.69の上層図では，上層から①暗褐色土（2層－厚さ20cm），②褐色土（4層－厚さ90cm），③瓦層（5・7・12層－近世瓦を多量に含む），④黄褐色砂質土（27・28層－SB3800E

整地層）を基調とする。建物前面にあたる南辺部は，元禄再興の折りに，寛永７年（1630）の暴風雨で倒壊した講堂建物の瓦を埋め立てた大規模な整地を行っている。また，地山面のレベルは北辺側で39.8m，南辺側は40.4mを測るので，南辺側が60cm下がっており，地形的には北から南側に傾斜している。

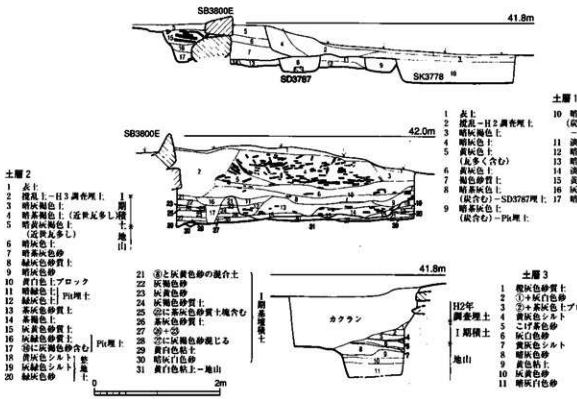


Fig.64　基壇北辺土層実測図（1/60）

3）講堂SB3800

調査区の設定

第126次調査では，本堂建物の周囲に調査区を設定し，遺構の状況に応じてその都度調査区を拡幅していった。補足調査では，講堂Ⅰ期とした乱石積基壇は創建基壇ではなく，講堂創建基壇は金堂と同じ瓦積基壇との前提のもとに創建基壇を検出し，規模・構造をつかむことを主眼とした。そのため，調査区の設定に際しては，基壇の北東・北西両隅を押さえるため２・４区を設定し，東・西の両辺で回廊の取付き状況を把握するため３・５区を設定し，基壇規模に

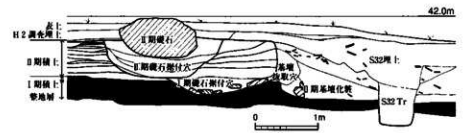


Fig.65　講堂土層模式図（1/60）

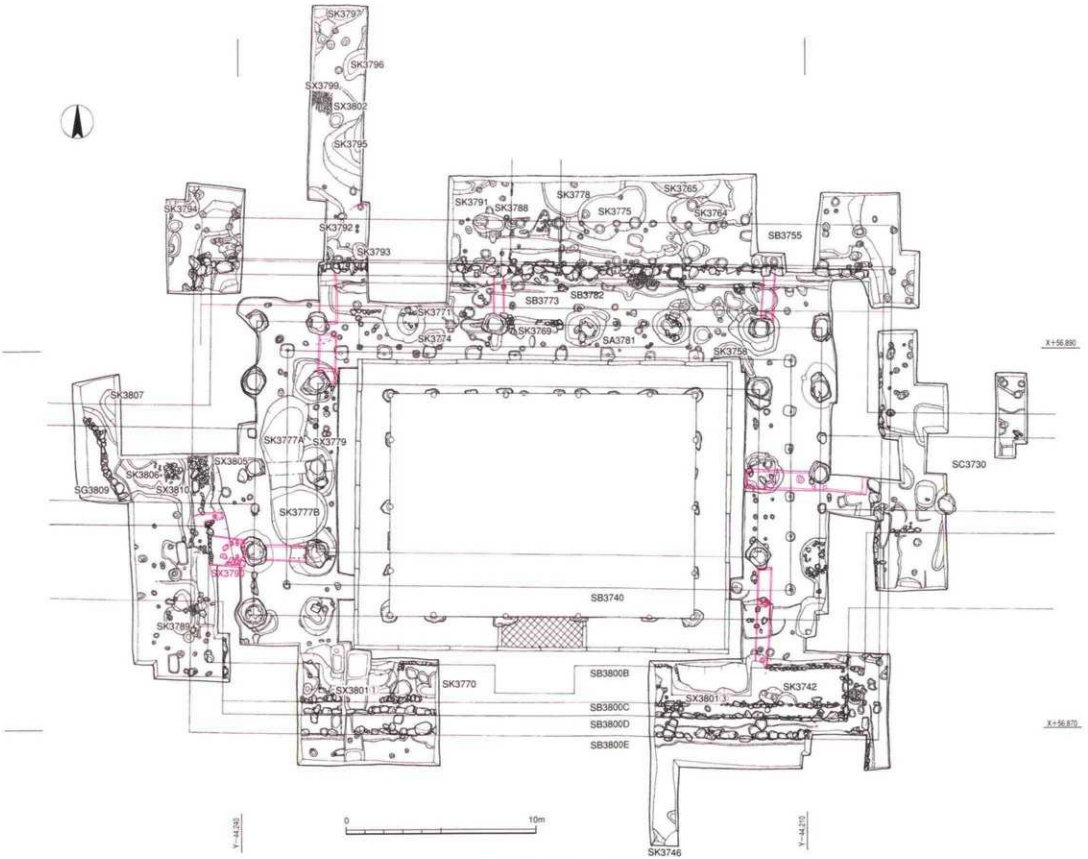


Fig.61　講堂調査区遺構配置図（1/200）

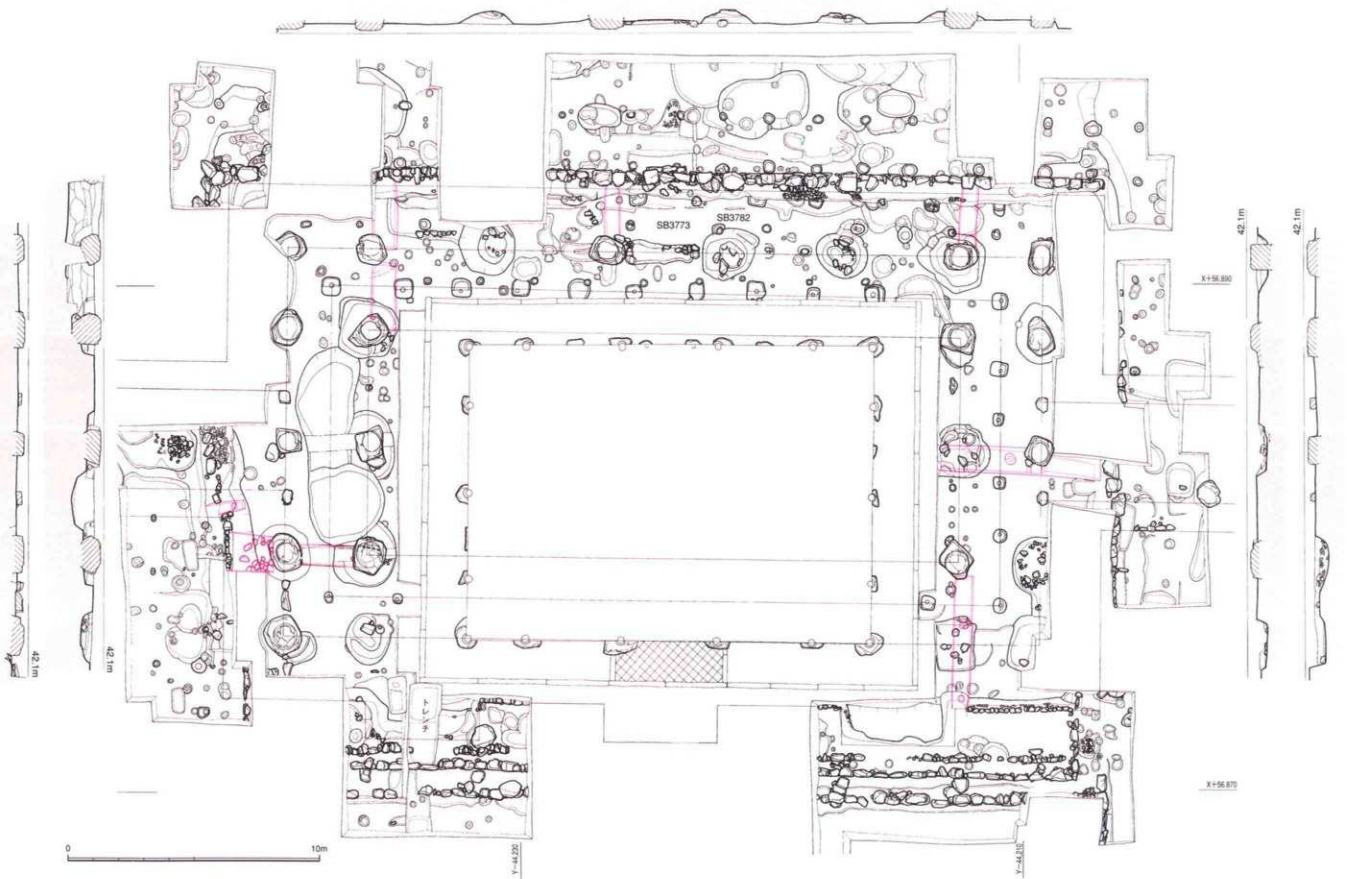


Fig.62　礎石建物SB3800実測図（1/150）

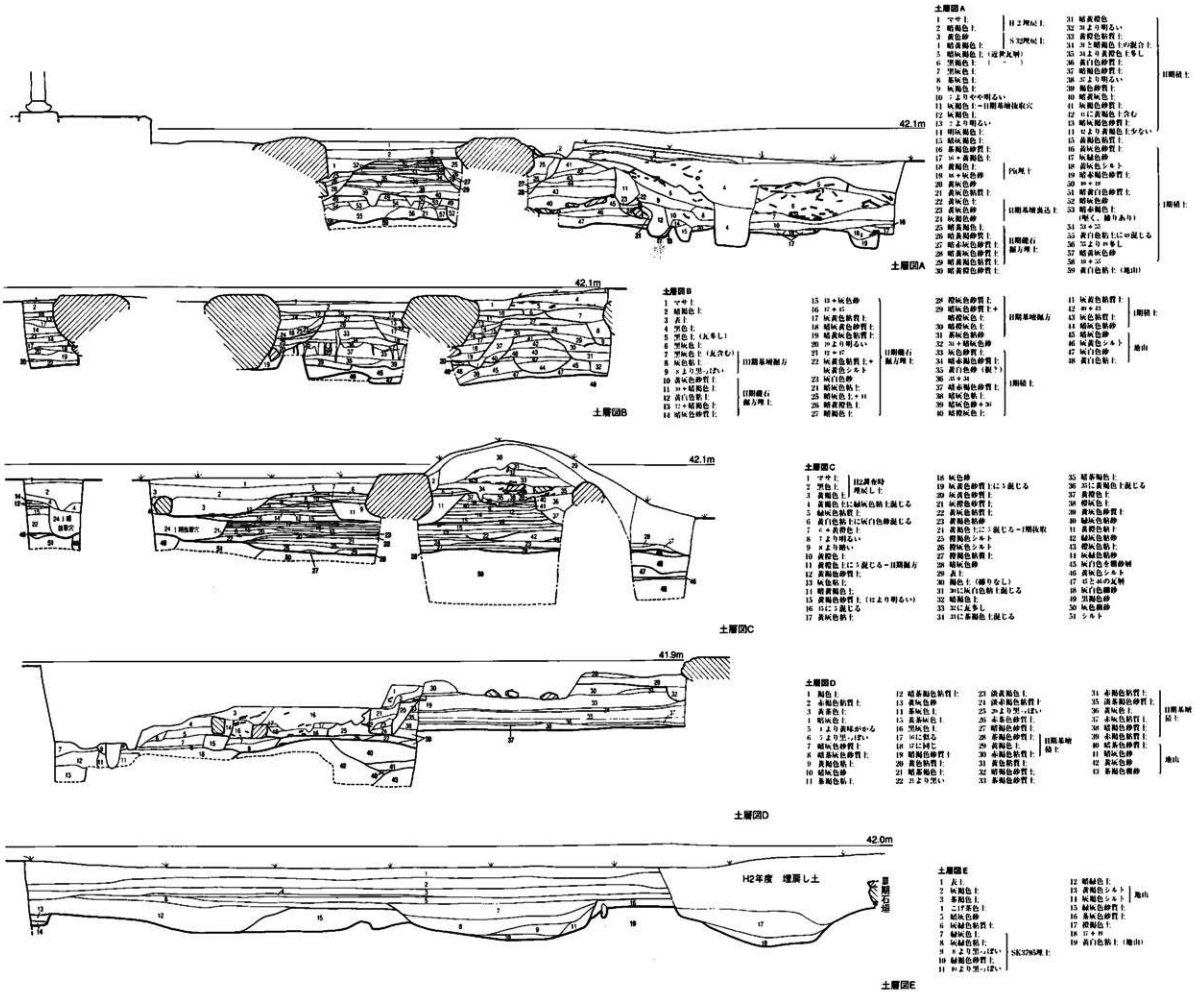


Fig.63 SB3800基壇土層実測図（1/60）

関して十分な情報が得られれば，南辺側に反転することで基壇を復原するという手法により，最小限の調査区設定で大きな成果を得ようと目論んだ。なお，1区は講堂背面と僧房との状況を把握するために敢えて長く伸ばすことにした。

講堂の調査では，瓦積・乱石積・石垣積の三種類の基壇を検出した。時期的には，金堂基壇同様，瓦積→乱石積→石垣積基壇へと変遷する。以下，説明に際しては，Ⅰ期基壇（瓦積）をSB3800A，Ⅱ期基壇（乱石積）をSB3800B，Ⅲ期基壇（石垣積）をSB3800C・D，Ⅳ期基壇（石垣積）をSB3800E，Ⅵ期基壇をSB3800Gとしてそれぞれに報告するが，現時点では遺構に伴う遺物の詳細な検討ができていないため，Ⅰ期－創建期，Ⅱ期－10C前半頃，Ⅲ期－11C後半，Ⅳ期－13C頃，Ⅴ期－江戸寛永期，Ⅵ期－江戸元禄期と概報段階での年代を提示することとし，仔細は次年度刊行の－遺物・考察編－で明らかにしたい。

SB3800A

基　壇（Fig.63，PL.7・8）　3区中央部のピット内から地覆石とみられる砂岩製の切石片が1点出土している。原位置は留めていなかったが，金堂創建基壇と同じ瓦積基壇と考えられる。Ⅱ期基壇築成時にⅠ期基壇が破壊されているため基壇規模は推測の域を出ないが，4箇所で確認されたⅠ期礎石据付穴から復原すると東西36.3m，南北22.8mの東西に長い基壇となる。

基壇築成（Fig.63，PL.40・41）　基壇西辺中央（3区），北辺西端（1区），東辺中央（5区）の断割りで確認した。西辺部の状況はFig.63土層Aによると，建物側は版築によるものではなく，赤褐色土（49・53・54層）と黄白色土（55・56層）を積み，層の厚さも10～20cmと厚いものであった。ただ，土質的には非常に堅く締まっていた。基壇端部側は黄褐色土を主体とするが，層の厚さは10～15cmと厚く，金堂基壇の版築状況に比して極めて粗い印象を受けた。北辺部の状況はFig.63土層Bによると，下層に堅く締まった灰色砂質土（33層）・暗赤褐色砂質土（37層）を積み，西辺とよく似た土層の状況であった。

東辺部の状況は北・西辺と大きく異なり，黄灰色粘土・灰黄色砂質土・橙褐色シルト・暗灰色砂を5～10cm程の厚さで水平に積んでおり（Fig.63土層C），まさに緻密な版築土層である。これは，基壇東側下層に灰白色粗砂・黄灰色シルトの互層からなる自然流路が走るため，版築による丁寧な基壇築成を行った結果と考えられる。

地覆石　金堂同様，砂岩製の切石を地覆石として据えていたものと考えられる。長さ9cm，幅8cm，厚さ4cm程の破片が1点出土したのみで，地覆石自体の大きさは不明。

基壇化粧　基壇基底部に砂岩製の切石を地覆石として据えているので，金堂基壇と同じ瓦積基壇が想定される。

階　段　今回，基壇南辺部は補足調査の対象から除外したので，階段については確認し得ていないため不明であるが，Ⅱ期同様，前面に3箇所，背面に1箇所付設していたものか。

礎　石

創建建物の礎石を抜き取って，Ⅱ期建物の礎石として転用したものと考えられる。1・3区で礎石掘付穴，5区で礎石抜取り穴を検出した。

礎石据付穴

SX3790（Fig.66，PL.39－1・39－3）　第126次調査時点で既に検出していたが，図面を詳細に検討した結果，石が円形に配されており，礎石根石である可能性が疑われ，再発掘を行った。

マサ土で埋め戻していたため，早る心を抑えながらも半日で埋土を除去し，石を露出させた。位置的には礎石２の１m西側で，礎石柱座上面から1.1m下部に存在する。石は長さ15～40cm，幅10～20cm大の花崗岩で，周囲の石が高く，内側の石は低く，上物を受けるような格好で円形に配されていたため礎石根石と判断した。

礎石根石

改めて，南壁土層（Fig.65土層A）を精査すると，緻密な金堂基壇版築土層と比較して，層の厚さが10～15cmと厚く，版築土とは呼べない粗雑なものであった。また，礎石２の掘方下部には根石が見られないことから，礎石は動かされていると判明した次第である。仮に礎石２がSX3790の場所に据えられていたとすると，礎石上面の高さは40cm程低かったことになる。

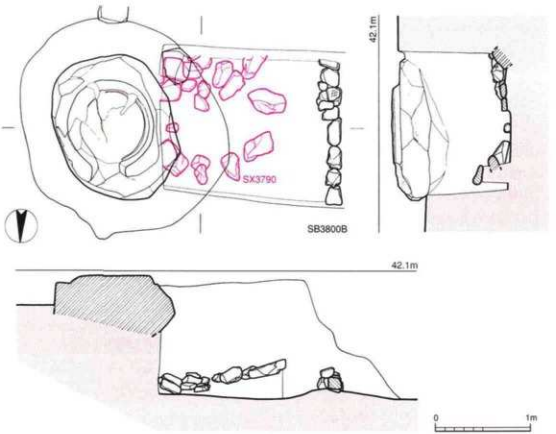


Fig.66　ＳＢ3800Ａ礎石根石実測図（1/40）

建　物

１期建物の礎石は全く遺存しておらず，礎石据付穴での計測は厳密さに欠ける恐れがあるが，礎石２下部の根石SX3790と礎石31下部の礎石抜取り穴の平行距離が27.0mであることから，柱間数６で割ると4.5m（15尺）となる。非常に大胆ではあるが，柱間を4.5m等間として，梁行２間（9.0m），桁行５間（22.5m）の身舎の周囲に廂を巡らせた側柱梁行４間（18.0m）×桁行７間（31.5m）に復原した。ちなみに，基壇規模はⅡ期を参考に礎石の心から2.4mの出をとると東西36.3m，南北22.8mの東西に長い基壇が復原できる。

通　路

SX3780（Fig.67）　講堂基壇北辺中央で検出した。足場穴SB3755，溝SD3787，土坑SK3778などの遺構に切られる。幅15cmの溝を2.4m間隔で南北に掘り，溝の中に横位置にした塼を

立てて通路の仕切としている。

塀は北西隅部で2個遺存する程度で，路面長も4.35mの検出に留まるが，僧房側に向かって延びており，講堂と僧房とを結ぶ通路と考えられる。

通路上面は既に削平されているが，側縁に塀を用いていることから塀敷きであった可能性が高い。また，通路の軸線が東に1°振っていること，位置的にⅡ期講堂中心線ではなく，Ⅰ期講堂の推定中心線上に位置すること，Ⅱ期基壇北側階段の下に潜ることなどからⅠ期講堂に伴う通路と判断した。

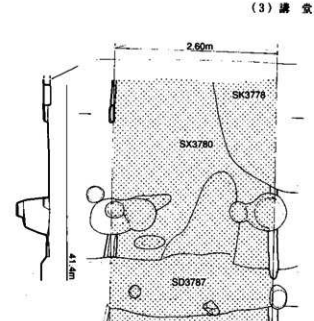


Fig.67　通路SX3780実測図（1/60）

SB3800B

基　壇（Fig.61，PL.7・8）

Ⅱ期は乱石積基壇である。昭和32年度の調査によって，基壇西辺で回廊との取付き部分，南辺で基壇裾部及び階段が検出されていた。また，側柱礎石の心から8尺（2.4m）の位置に基壇化粧が存在することも確認されていた。第126次調査は，昭和32年度調査の追認調査に終始したが，地覆石の距離は南辺が側柱礎石心から2.55mで，西辺は2.4mであることを確かめた。これにより，基壇規模は東西34.808m，南北20.465mに復原される。また，地覆石下場から礎石柱座までの高さは1.25mを測る。礎石柱座のレベルは41.95mで，塔心礎刳込までの高さと等しいことから，塔基壇の高さに合わせてⅡ期講堂基壇を改築したと考えられる。

Ⅱ期は乱石積基壇

基壇築成（Fig.65，PL.40・41）　基壇築成の状況は，1・3・5区の断割りで確認した。Ⅱ期基壇はⅠ期の建物礎石を完全に抜き去ってから構築している。基壇築成状況をFig.65の土層図から復原すると，①Ⅰ期建物礎石を抜き取り，別の場所に移動する。②礎石抜き取り穴を埋めながら，Ⅱ期基壇の積土を施す（厚さ30～50cm）。③基壇上面に礎石据付穴を掘削する。④礎石を据え付ける。⑤礎石据付穴を埋め戻しながら，礎石肩部付近まで積土を施すといった作業工程が復原できる。結果として，Ⅰ期基壇上面から30～40cmかさ上げしたことになる。

地覆石（Fig.68・69，PL.39－1・2）　地覆石は基壇西辺の回廊取付き部分及び南辺部分に遺存する。回廊取り付き部分では1.9m分を検出した。長さ20～30cm，幅15cm，厚さ15cmの大きさの花崗岩自然石を横長に並べたものである。南辺では東半部10.1m，西半部6.9mを検出したが，階段部分には遺存していなかった。花崗岩の自然石で，東半部は長さ20～25cm，幅15～20cm，

厚さ10～20cm大の石を並べているが，西半部では長さ40～50cm，幅20cm，厚さ20cmと東側より大振りの石を並べている。また，階段SX3801①の隅部では，格子目の平瓦と縄目の平瓦を2～3段積んで地覆としており，修復した可能性が考えられる。

基壇化粧（Fig.68，PL.39－1・2）　乱石積基壇である。辛うじて，西辺は地覆石の上に立つ

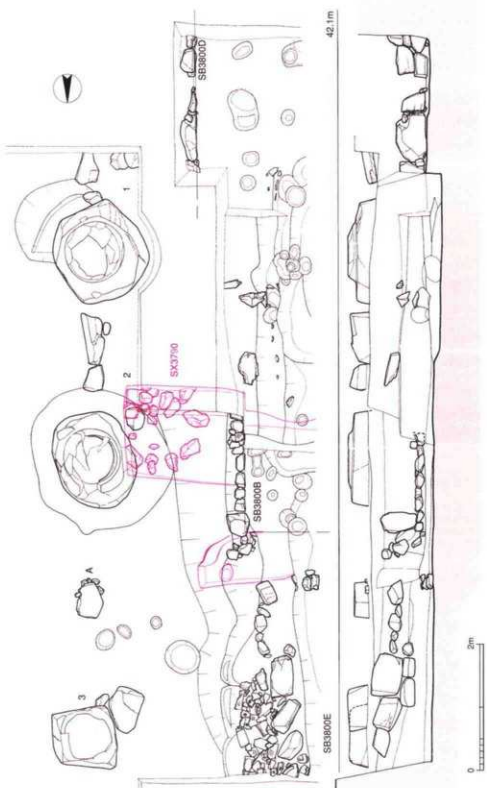


Fig.68　SB3800B基壇化粧実測図（1/60）

石が遺存していた。立石は長さ58cm，幅33cm，厚さ35cmの大きさであるが，石の上面から礎石柱座までは50cmの比高差があることから，あと3個程度石を積み上げていたものと思われる。南辺は地覆石の上にそれより小さい石が僅か1段残る程度であり，回廊取付き部のように比較的大きな石を用いていたかは判らない。ただ，金堂Ⅱ期の乱石積基壇と比較すると，講堂の方が基底部に地覆石を据えて石を積み上げている分丁寧といえる。

階　段　基壇南辺において東側と西側の2箇所で確認した。基壇南辺は講堂建物の正面に当たり，東部・中央部・西部の3箇所に階段を設置していたとみられるが，中央部は現存建物の正面にも該当し，参拝者・見学者の支障となるため発掘を行っていない。西側階段をSX3801①，東側階段をSX3801③とした。

階段は3箇所

また，建物の背面に当たる基壇北辺では，階段に関わる痕跡を検出することができなかった。しかし，北辺中央には僧房と講堂を結ぶ通路が存在すること，Fig.65の土層Bでは側柱礎石6から2.55m北側の位置に地覆石掘方の段がみられることから考えると，北辺には基壇中央に1箇所設けていたものと推測される。

SX3801①（Fig.69，PL.27－2・33）　基壇南辺西側の階段で，側柱礎石21－22間に設置されている。掘図中央の階段を壊している長方形の穴は鏡山トレンチである。階段部分には地覆石が遺存していないため正確な規模はつかめないが，現状で階段幅4.0m，階段の出1.45m，高さ0.63mを測る。階段が柱間間（4.7m）に収まっていることから階段幅は4.2mで，西隅には地覆石とみられる残欠があることから階段の出1.5mに復原した。なお，地覆石下場から礎石肩部までの高さが1.1mを測ることから，唐招提寺講堂正面階段の蹴上げ高20cm，踏面幅28cmで復原すると，基壇上面まで6段の階段が復原される。唐招提寺の場合，階段の出1.6m，基壇の高さ1.56mで，基壇上面まで7段の階段を数える。

SX3801③（Fig.69，PL.27－1・32－1・32－3）　基壇南辺東側の階段で，側柱礎石17－18間に設置される。当階段も地覆石が遺存していないため正確な規模はつかめない。現状では階段幅4.22m，階段の出1.35m，高さ0.58mを測る。また，階段の上面には地覆石列に沿って幅20～40cmの溝が存在するが，この溝の性格は判らない。

礎　石（Fig.70・71，PL.27～30・42・43）

講堂建物は2×5間の身舎の周囲に廂を巡らせ4×7間とした建物で，礎石は総数36個数えることになる。現在，講堂には側柱礎石22個中14個が現存し，3個は本堂建物の側柱礎石として転用している。入側柱礎石は14個中10個が現存し，5個を本堂建物の礎石に転用している。

Fig.70は側柱礎石の実測図で，地表に露出している礎石を掲載した。礎石は全て花崗岩で，1.0×1.4m程に粗割りした石材に上面径70～90cm，高さ5cm程の円形柱座を作り出す。2・5・6・8は高さ2cmと僅かであるが二重の柱座を有し，上段柱座は径72cmと等しい大きさであることから柱のアタリとして表出したものか。2は欠損しているが，長さ23cm，幅22cmの地覆座をもつ。5・6・8・11・12は地覆の領込を有するもので，8の上面に引いた線が本来据え付けるべき方向を示すが，地覆の領込が30°程振っており，動かされたことを証明している。

Fig.71は入側柱礎石の実測図で，地表に露出している礎石を掲載した。礎石は全て花崗岩で，1.0×1.6m程に粗割りした石材に上面径70～90cm，高さ5cm程の円形柱座を作り出す点は側柱礎石と同様であるが，厚さは25が120cm，23は70cmと大きいものを使用している。30は二重の柱

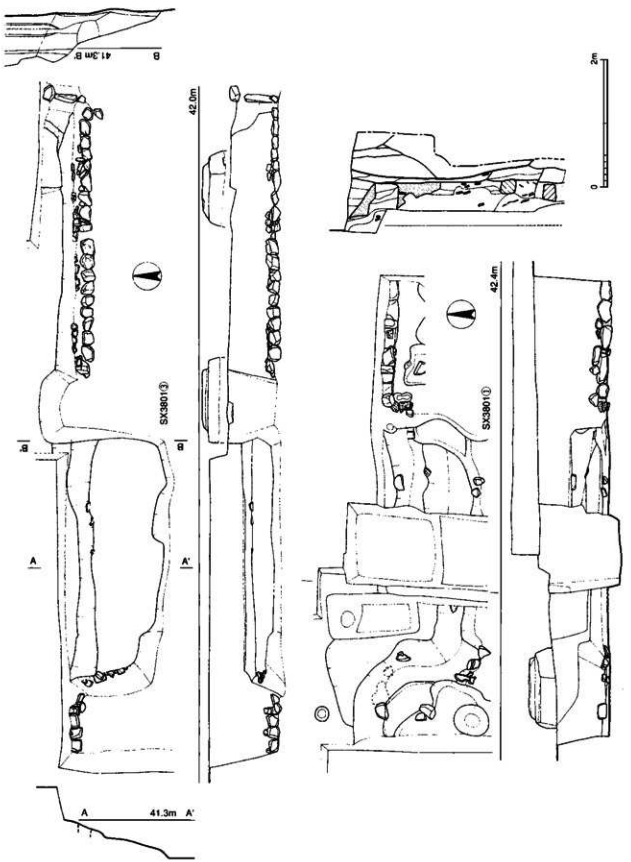


Fig.69 掘殻 SX3801実測図 (1/60)

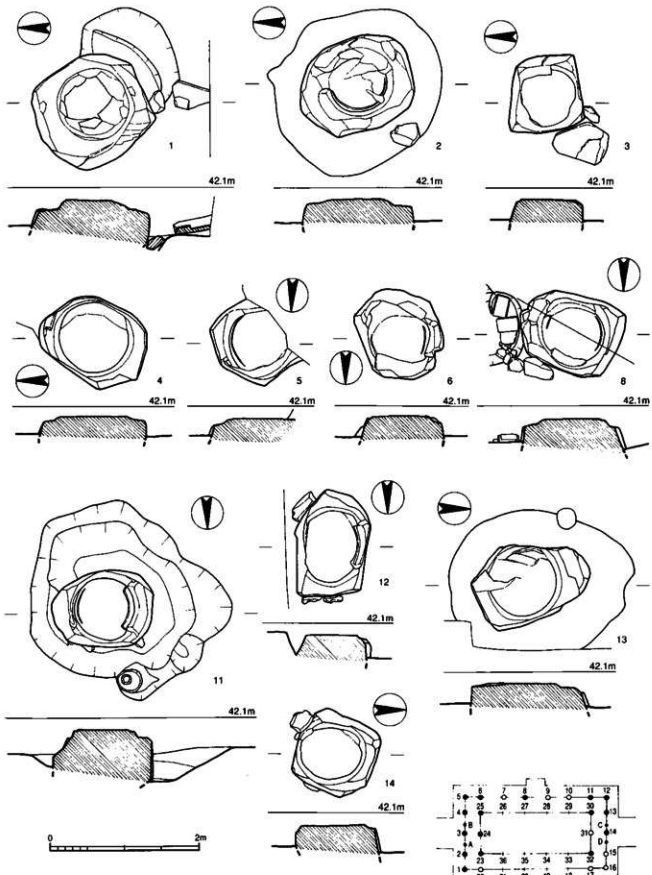


Fig.70 礎石実測図1（1/50）

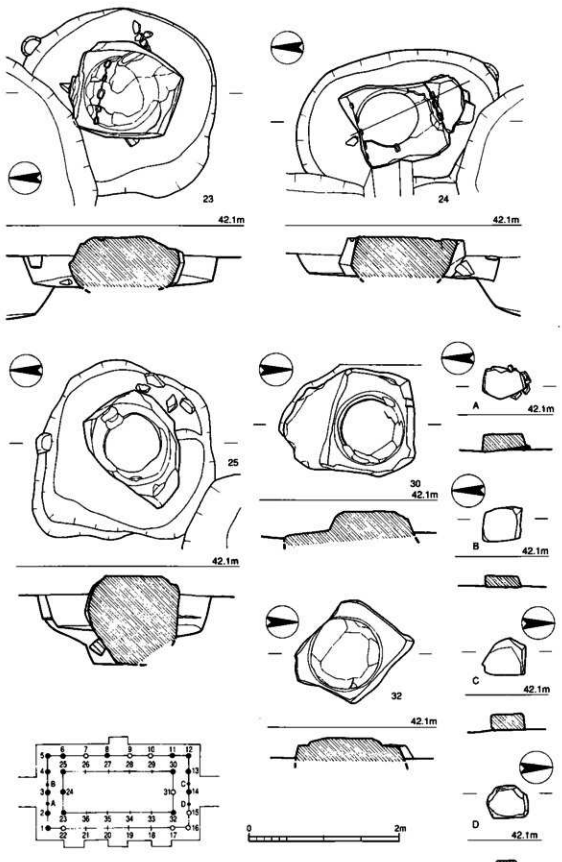


Fig.71 礎石実測図2 (1/50)

座を有し，24は幅26cmの地覆座をもつ。また，24の上面に引いた線が本来据え付けるべき方向を示しているが，地覆座が24°西に振っており，この石も動かされていることが判る。

建 物

講堂跡には，現在16個の礎石が露出している。この礎石は創建当初の位置を留めておらず，大規模な基壇の改修を行い，建物を再建したことが補足調査で明らかとなった。再建の時期が何時であるか，詳細な年代については－遺物・考察編－に譲るが，従前の調査では２×５間の身舎の周囲に廂を巡らせ，側柱４×７間とした建物に復原されている。

今回の調査に当たっては，スチール・メジャーを用い，礎石心々の距離を計測した。北側柱列は礎石７・９・10を欠くが，両隅の礎石が遺存しており，桁行30.008mを測る。西側柱列は礎石全てが遺存し，梁行15.365mを測る。身舎の桁行は本堂建物が存在するため計測できていないが，梁行は東側が12.055m，西側が12.098mを測る。隅間を除く柱間は，桁行が柱間平均4.709m，梁行が柱間平均4.436mで，隅の間は屋根の間係上等間にする必要があり，桁・梁側より狭くなっているが，柱間平均3.235mという数値を得た。

『資財帳』では，「瓦葺講堂一宇　長十丈　広五丈一尺　高一丈三寸　戸六具　貞観三年小破　七間間別長各一丈四尺」とあり，講堂建物は瓦葺の単層屋根で，長さが10丈，幅が5.1丈で，扉が６箇所あり，貞観３年（861）に破損したことが知られる。『資財帳』記載の講堂建物をSB3800Bと仮定すると，桁行は30.008mなので，１丈は3.0008mで，１尺だと0.30008mになる。同様に，梁行は15.365mなので，広5.1丈で割ると１丈は3.0127m，１尺は0.30127mとなる。両者の平均値は１丈3.00675m，１尺0.300675mとなり，30.0675（≒30.0）cmの単位尺が得られる。

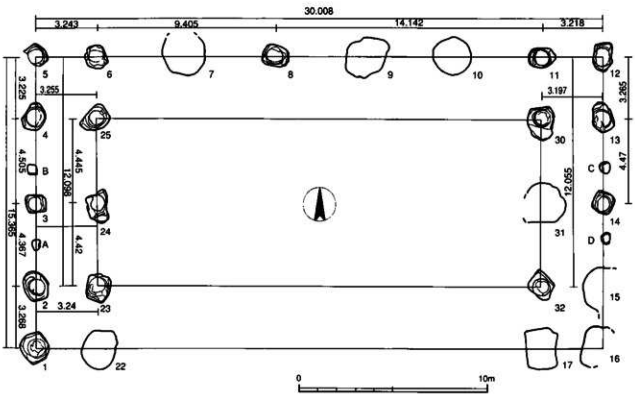


Fig.72　講堂礎石柱間計測図（1/200）

また，扉6具と言う数字は，基壇前面3箇所と背面中央1箇所に階段が付くので，その部分に扉が設けられる。残りの2箇所は，講堂側面中央に取り付く回廊へ出入りするため東・西の妻側にも扉を付けたと考えられる。

講堂建物に関しては，康平7年（1064）5月の焼亡記事（「扶桑略記」）以前は，貞観3年（861）の小破記事しか見あたらない。ただ，他の堂宇は，貞観2年（860）から元慶4年（880）にかけて大風により罹災し，修理・再建している。しかし，小破程度で基壇を大規模に改修し，建物を再建する必要があったのか，何故，「資財帳」に再建記事がみられないのか，等々大きな疑問が残る。この点についても，続編で改めて検討したい。

足場穴

SB3740（Fig.73・74，PL.29・30・45－1）　入側柱礎石を囲繞する掘立柱列で，本堂建物の東・北・西側で検出した。四隅の柱掘方は側柱礎石と入側柱礎石のほぼ中間に位置し，柱筋もⅡ期講堂建物に合わせていることからSB3800Bに伴う高所作業用の足場穴と判断した。桁行11間（26.7m），梁行5間（12.05m）で，隅柱を除いて礎石1間に付き2個づつ配している。柱間は桁側が隅柱1間の2.8mを除き2.25～2.45mで，梁側は隅柱1間の2.8mを除き1.96～2.45mを測る。掘方は隅丸方形を呈し，一辺0.5～0.9m，深さ0.5～0.6mで，径15～20cmの柱痕が遺存していた。

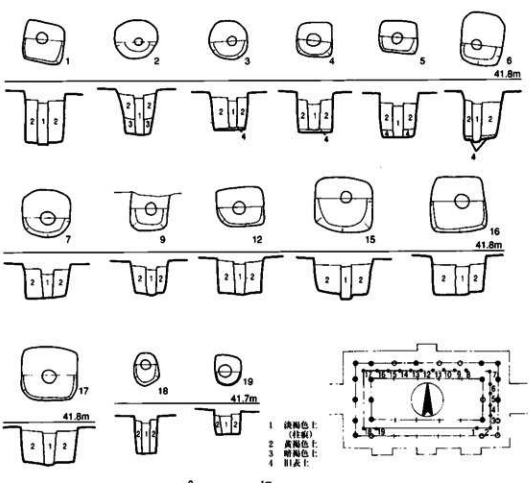


Fig.73　足場穴SB3740柱穴実測図（1/50）

SB3782（Fig.74，PL.45－2）　鋼柱礎石列の２ｍ北側で，それと平行して位置する。概報段階では，柱穴の規模・配列がSB3740と類似していることから一連の足場穴として報告したが，建物の外に配列するので別遺構として報告する。都合，桁行11間（24.0m）確認した。一辺0.4～0.7mの隅丸方形を呈し，柱痕は10cm前後。外面工事用の足場になるか。

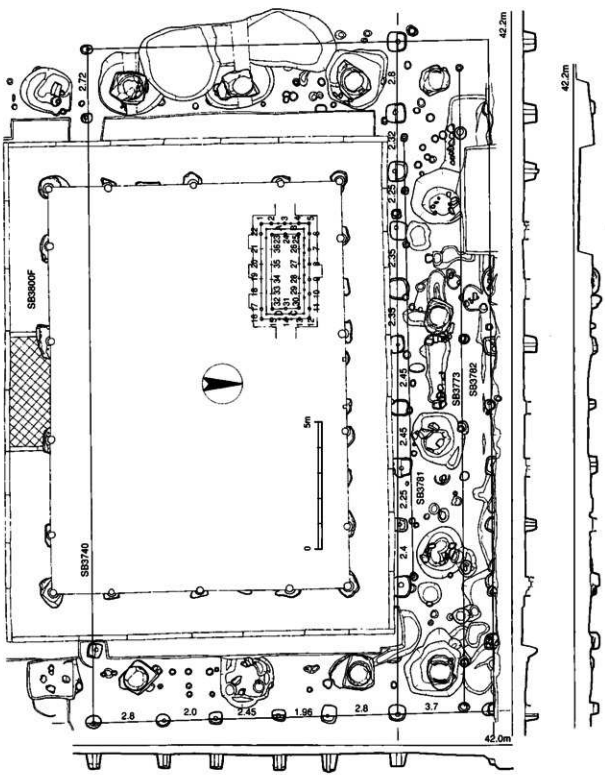


Fig.74　足場穴SB3740・3782実測図（1/150）

SB3800C・D

基　壇（Fig.64，PL.27・31・33）

Ⅲ期は石垣積基壇

Ⅲ期は石積基壇である。南東隅から南辺にかけてと南辺西半及び西辺の一部を確認した。SB3800CはⅡ期基壇裾部から2m南に拡幅しており，SB3800Dはさらに60cm南に拡幅している。基壇の南東隅部及び西辺部を検出したことにより，基壇規模は東西長33.2mと判明したが，北辺はSB3800Eの基壇化粧と重複しているため正確な数値は不明であるが，南北幅は大略24mになろう。また，3区には北辺西回廊の基壇側石が遺存しており，南辺部から回廊基壇側石までの距離は6.2mを測る。

Ⅱ期講堂建物は康平7年（1064）に焼失し，2年後の治暦2年（1066）に五間四面の瓦葺単層建物として再建されるが，SB3800C・Dが再建建物に伴う基壇と考えられる。

基壇築成　基壇築成の状況は，本堂建物南東部及び南西部で確認した。Fig.75の土層図は南東調査区の南壁，Fig.76の土層図は南西調査区の南壁である。土層を詳細に観察すると，Ⅱ期基壇の正面に黄褐色土（Fig.75－27～29層），茶灰色砂質土（Fig.76－28～30層）を主体とする厚さ20～40cmの整地を施し，Ⅱ期基壇裾部から2m南側の位置に基壇化粧の花崗岩割石を据え並べ（SB3800C），Ⅱ期基壇と石列間を暗褐色土（Fig.75－24層），黒灰色土（Fig.76－25層）で充填している。積土の24・25層は版築的な堅く締まった土質ではなく，埋土中には瓦・炭化物・焼土を多く含み，火災後の残滓を一度に埋めたようなものであった。

また，基壇化粧である石列の縁に礎石を乗せているため，石列は南側に追り出し，礎石も斜めに傾いている。そのため，改めて基壇Cの前面に石積み（SB3800D）を施したものと考えられる。このことは，Ⅲ期段階の整地面を調整することなく，SB3800Cと同一レベルで石列を設置していることからも窺える。さらに，Ⅱ期礎石とⅢ期礎石の高低差が30cmあるため基壇拡幅部には緩やかな傾斜が生じることになる。つまり，Ⅲ期基壇は，基本的にⅡ期基壇を最大限活用し，前面部を亀腹とすることで，基壇を構築している。

基壇化粧（Fig.75・76，PL.27・31～33）

SB3800Cは乱石積基壇で，南東調査区で9.8m，南西調査区で6.5mの都合28.5m分を検出した。南東部の石積みは，基部に長さ30～50cm，幅20cm，厚さ20cm大の花崗岩割石を横倒しに据え，その上に長さ20cm，幅20cm，厚さ10～20cmの小振りの石を積んでおり，3段遺存していた。

南西部の石積みは，基部に長さ20～50cm，幅20～30cm，厚さ20～30cm大の石を横倒しに据え，長さ30cm，幅20cm，厚さ10～20cmの小振りの石を小口積みしており，積石は3段遺存するが，礎

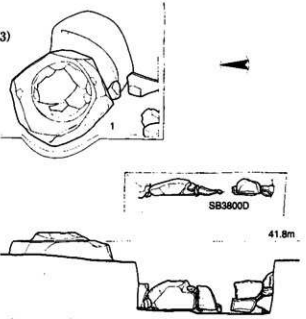


Fig.75　SB3800D基壇化粧実測図（1/60）

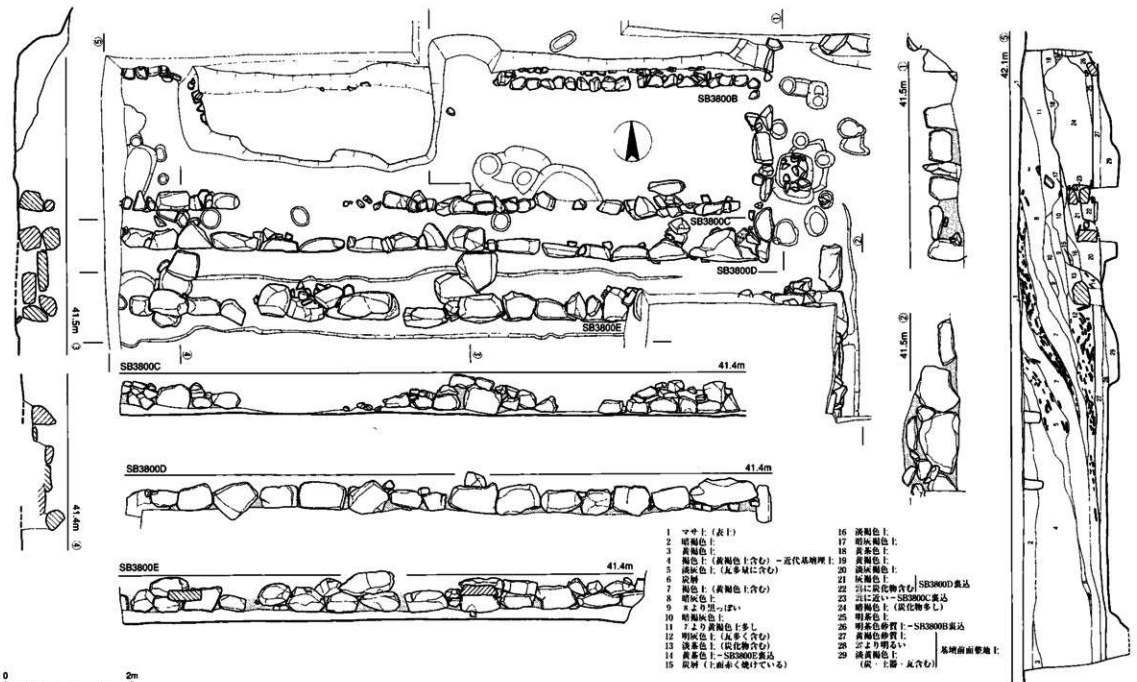


Fig.76　SB3800C～E基壇化粧実測図①（1/60）

Fig.77 SB3800C～E 半解化粧瓦測図(2) (1/60)

石の高さからするともう1段積んでいた可能性が高い。上段の石は大きさからしてⅡ期基壇化粧の転用品と考えられ，表面が火熱により赤変している石も見受けられた。

SB3800Dは石垣積基壇で，花崗岩割石を2～3段積んだものである。基壇東辺は南東調査区で3.5mの基壇化粧を検出した。石積みは長さ70cm，幅40cm，厚さ30cm大の花崗岩割石を1列立て並べたものである。南辺は南東調査区で10.2m，南西調査区で7mの都合28.9m検出した。東辺部と異なり，長さ40～110cm，幅30～50cm，厚さ20～40cm大の花崗岩割石を横倒しにして据えている。南東調査区では1段，南西調査区では2段の石積みを数える。SB3800C同様，表面が火熱により赤変している石が見られた。

西辺部は3区南端で検出した。東辺同様，雛柱列から4.6mの距離にあり，長さ2.2mを検出した。石積みは長さ40～80cm，幅20cm，厚さ20～50cm大の花崗岩割石を横倒しにして据えている点は，南辺部と同じ状況である。石列下場のレベルは40.7mで，東辺部と等しい高さに据えている。石材はSB3800Cに比べて大振りで，扁平な石を横位で使用していた。

階　段　発掘区内では階段遺構が検出できなかったので，南辺中央1箇所に付設していたものと推測される。背面についても未確認であるが，僧房は康和4年（1102）に大風で倒壊するが，4年後の嘉承元年（1106）には再建されているので，僧房との絡みからすると北辺にも階段を設けていた可能性が高い。

礎　石（Fig.78）

Ⅲ期建物は治暦2年（1066）に再建されるが，その際，Ⅱ期礎石を移設するようなことは行っていないためⅡ期礎石をそのまま使用し，南面部のみ礎石を新設したと考えられる。Fig.78は南面雛柱列の西端から2番目のものである。礎石は花崗岩を粗割りしたもので，長さ107cm，幅85cm，厚さ37cmを測る。雛縁は整形しておらず，上面のみ平坦に整えている。

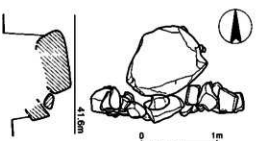


Fig.78　SB3800D礎石実測図（1/50）

建　物

『扶桑略記』によると，「治暦二年十一月廿八日，公家摂定吉宿，延百余僧，供養鎮西太宰府観世音寺，瓦葺五間四面講堂一宇奉造立，安置金色丈六観世音菩薩一體，又同丈六坐像，不空羂索像一躰，此像者，全逸猛焔之底，進現常住之相，殊加補修，如旧安置」とあり，康平7年（1064）年の建物消失（『本朝世紀』）後，五間四面の瓦葺き建物を再建し，丈六の金銅製観世音菩薩像を新造し，猛火をかいくぐった塑像の不空羂索観世音菩薩像の2体を安置したことが知られる。建物規模が五間四面なので，桁行は身舎5間，雛柱だと7間となる。

Ⅱ期建物は身舎桁行5間×梁行2間の4面に廂を設けた建物で，身舎の桁行はⅡ期建物桁行柱間平均4.709m×5間の23.545m，梁行は同じく梁行柱間平均4.436m×2の8.872mとなる。廂部分もⅡ期建物の雛柱礎石を再利用しているので，建物全体としてはⅡ期同様，東西30m，南北15.4mの規模が想定される。また，南辺は雛柱礎石列から3.9m南側に礎石及び抜取り穴がみられるので，孫廂を付設していたと考えられる。

孫　廂

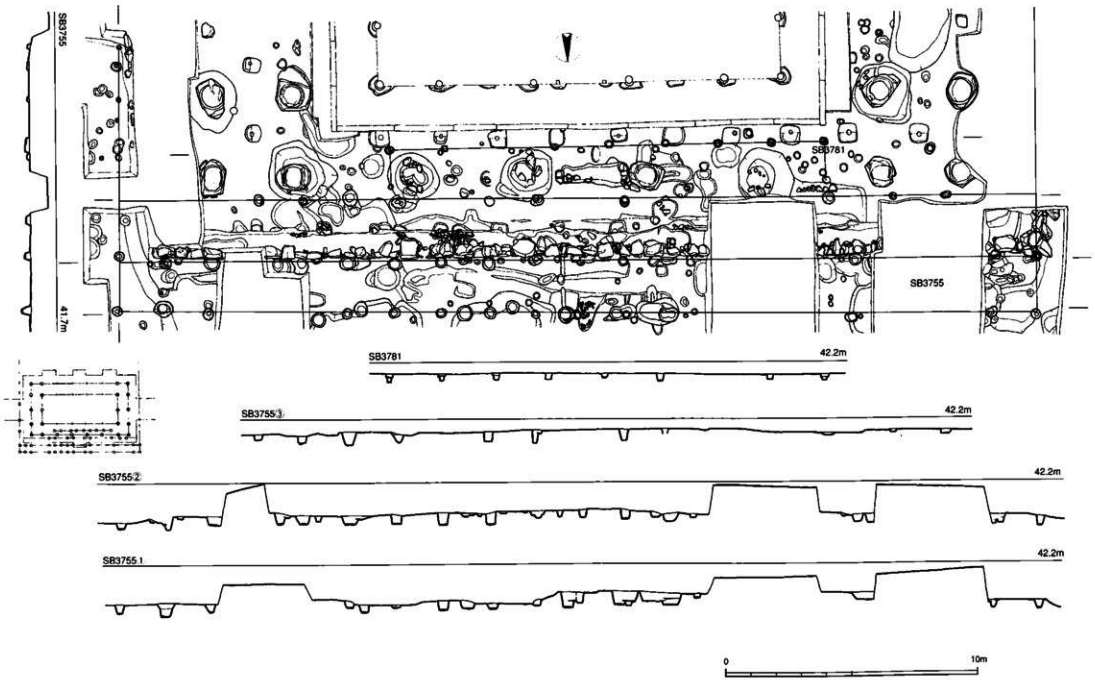


Fig.79　足場穴SB3755・3781実測図（1/150）

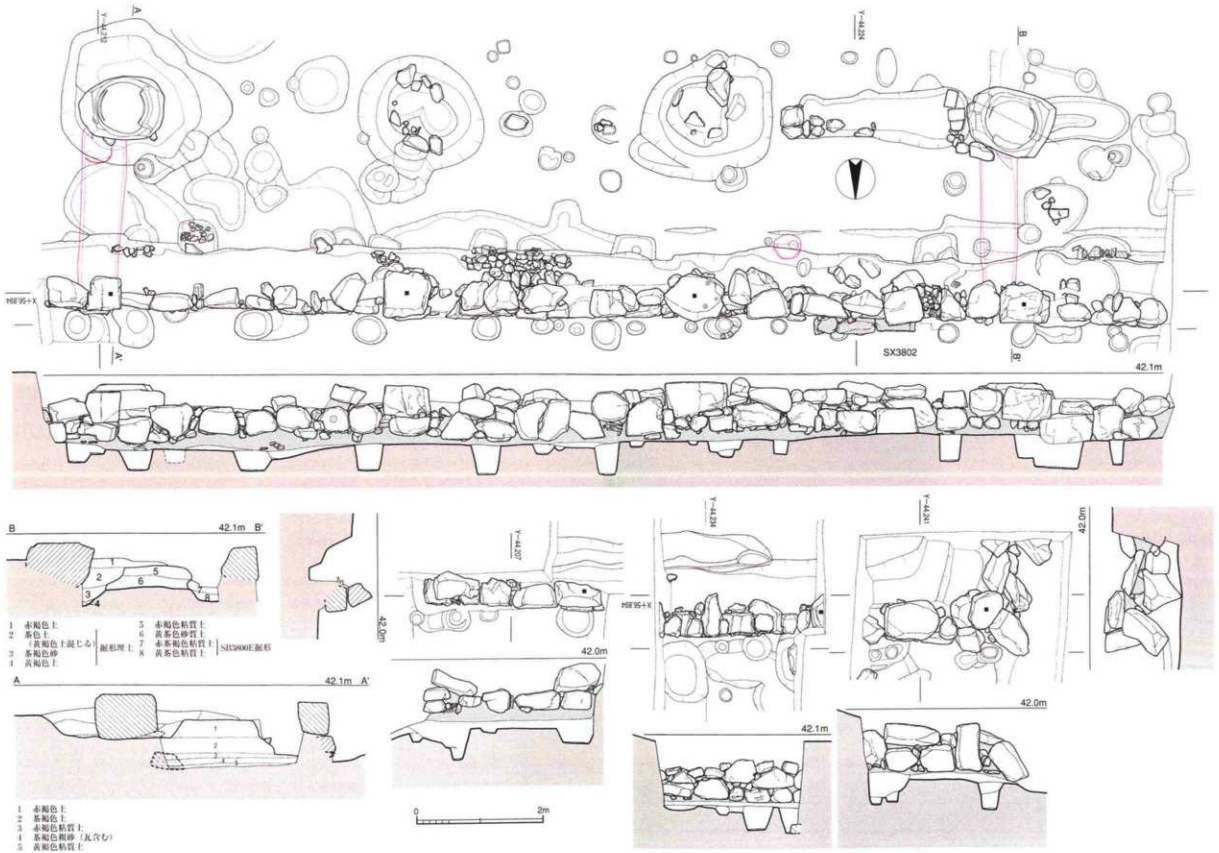


Fig.80　SB3800E基壇化粧実測図①（1/60）

足場穴

SB3755（Fig.79，PL.36－3）　基壇北辺部で検出した。第2柱列の一部がSB3800E基壇化粧の下部に潜っていることから，SB3800C・Dに伴う作業用足場穴と考える。柱穴は基壇を囲繞するが，北側は3列配されており，第1列と第2列の間隔は0.8mで，第2列と第3列の間隔は1mを測る。柱穴掘方は径30～60cmの円形を呈し，略1.8mの間隔で並ぶ。深さは50cm程であるが，柱痕は検出できず，抜き去ったものと考えられる。

SB3800E

基　壇（Fig.64，PL.34）

Ⅳ期は石垣積基壇で，調査区の全域において検出した。南辺は南東調査区で基壇の南東隅から南辺部にかけて，南西調査区では南辺基壇の一部，東辺は東調査区で基壇の一部を，北辺は北調査区・1区・2区で基壇の大半を，西辺は2区で基壇北西隅と3区で基壇の一部を検出した。基壇の北辺・南辺・南東隅・北西隅を検出したことにより，基壇規模は東西36.6m，南北24.9mの東西に長い基壇が復原できる。Ⅲ期SB3800C・D基壇外縁からは，左右に1.7m，南側に1.1m拡幅しており，講堂Ⅰ～Ⅵ期の基壇中において最大の基壇規模を誇る。　*Ⅳ期は石垣積基壇*

基壇築成　南辺部の基壇築成状況は，Fig.76の土層図から復原すると，①SB3800C・D基壇を灰褐色土で埋める。②基壇南辺部周辺を黄褐色砂質土による整地を施す。③基壇積土を切り落とす（基壇化粧背面の掘方）。④基壇化粧の花崗岩割石を据え並べる。⑤基壇化粧背面を埋める。⑥南辺及び西辺に緑束礎石を配置するといった作業工程が考えられる。

また，南辺の緑束礎石と建物礎石とは，比高差が80cmあることから基壇南辺部は亀腹にしていたと推察される。北辺と東辺の緑束礎石は，基壇化粧上に据えている。　*亀　腹*

基壇化粧（Fig.76・77・80・81，PL.27・33～37）　南辺の基壇化粧は，南東調査区で11.5m，南西調査区で7.2m分を検出した。石積みは溝状に掘方を掘り，花崗岩の割石を1～2段積んでおり，高さは0.6mを測る。葉廊礎石の位置には胎石を置き，廂が沈下するのを防止している。東辺の基壇化粧は9.5m検出した。Fig.81は東辺の基壇化粧実測図であるが，石列前面には石列と直交する形で小石が2個存在する。この石は建物の柱筋にあたる位置にあること，北側に石面をもつこと及び階段SX3802の状況からみて階段の積石と考えられる。また，この部分を境として石積みが大きく異なる。北側は大振りの石（長さ80cm，幅60cm程）を立て，その間を50cm大の石で充填しているが，南側は小さめの石を立てて積んでいた。

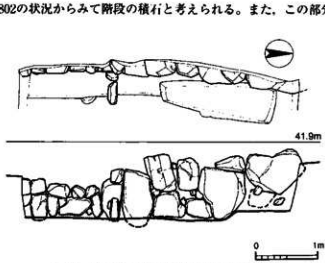


Fig.81　SB3800E基壇化粧実測図②（1/60）

北辺の基壇化粧は，北調査区で22.3m，1区で2.5m，2区で2.5mの都合27.3m分を検出した。石積みは縦横50cm大の花崗岩割石を多用しており，形

縁束礎石　状的に金堂Ⅲ期基壇化粧の石積みに類似している。図中■印を付した石が縁束礎石で，意図的に方形の石（50～70cm大）を使用している。2区は北西隅にあたり，石材を立てて使用していた。また，西辺の基壇化粧は3区で1.8mを検出したが，石が動いており，裏込中に巴瓦を含むなど，後世補修した可能性がある。

階　段

SX3802（Fig.81，PL.36－2）　北面中央に付設している。花崗岩4個を並べたもので，上面幅1.5m，階段の出0.25m，高さ0.4mを測る。また，縁束礎石までの高さは0.4mなので，この部分にも縁が廻るとすると直接階段には降りれない高さとなり，縁を切り込んでいた可能性がある。東辺部には，梁行礎石南端から2－3番目間に階段を設けていたようである。

礎　石

Ⅳ期建物もⅡ期建物礎石をそのまま使用している。側柱桁行はⅢ期建物同様，7間であるが，梁行が4間だと南側柱礎石列から縁束礎石までの距離が5.6mとなり，南辺のみ縁の幅が広くなる。この間に支柱を設ければ支障はないが，或いは，Ⅲ期建物の孫廂礎石を縁束礎石に再利用したと考えると，縁の出は他辺より1m余り長いものの4.3m程となる。また，基壇化粧上の礎石を縁束礎石とみなしたが，逆に孫廂の礎石と考えることもできよう。

北・東・西辺の基壇化粧上には，側柱礎石から3m外側に礎石を配置しており，北辺には7個，東辺には2個，西辺には1個の礎石を確認した（Fig.76・77・81■印）。廂の礎石と考えた場合，軒の出が基壇の外に大きくはみ出すことになるため縁束礎石と考えた次第であるが，幅が3mと縁にしては大きすぎるきらいもある。桁側は礎石と対応する位置に縁束礎石を置いているが，梁側は礎石13－14間と14－15間にも縁束礎石を置いている。

建　物

建物規模はⅢ期同様，側柱桁行7間（30m），梁行4間（15.4m）であるが，建物の周囲に縁を巡らせ，南辺に軒の出6.2mの孫廂を設けた建物として復原した。

『絵図』によると講堂建物は，桁行7間，梁行6間の瓦葺入母屋造として描かれ，南面には孫廂を設け，周囲には縁が廻り，中央1箇所と東側面に1箇所（南端から3間目）の階段が表されるなど，Ⅳ期講堂の状況に類似している。また，縁が巡ることから，床は板張りであったことが絵図から窺われる。

『筑前国続風土記』によると，観音堂の規模を「横十四間，長十八間 一説に，十間に十四間と伝う」と記している。Ⅳ期建物は桁行長30m

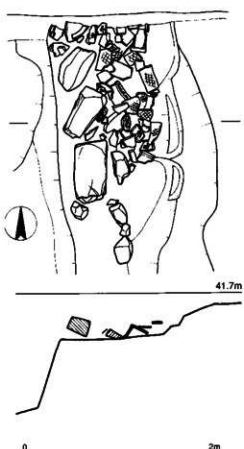


Fig.82　瓦溜SX3805実測図（1/40）

なので　一間は1.666mに換算できる。しかし，幅が14間だと23.333mとなり，梁行長15.4mより8m余り大きくなり，基壇規模に近い数字となる。『筑前国続風土記』に記された建物数値の信憑性自体が問われるが，参考までに提示しておく。

瓦　溜

SX3805（Fig.82，PL.38－2）　3区北端で，Ⅳ期基壇西辺の基壇化粧掘方内で検出した。石列埋土中には，巴文軒丸瓦・軒平瓦・平瓦片などの瓦類が裏込状に入っていたが，石列は掘方底部から浮いており，この部分は基壇化粧を修築したものと考えられる。

SB3800F

講堂Ⅳ期建物SB3800Eは，寛永7年（1630）の大暴風雨で倒壊し，仏像も不空羂索観世音菩薩像を除いてことごとく破損を被った。福岡藩2代目藩主黒田忠之は，寛永8年（1631）に仮堂を建てて諸尊を安置した。その仮堂を金堂に移築したのが現在の金堂とされている[7]。この寛永8年建立の仮堂が講堂Ⅴ期建物であり，建物及び基壇規模に関しては全く把握できないが，建物変遷として一時期を設定した。

SB3800G

講堂Ⅵ期建物は，仮堂移築後に再建された建物で，現在の本堂建物に当たる。現在，金堂に保存されている棟札には，「元禄元戊辰歳　再興観世音寺堂一宇　大檀越当国太守賜松平姓黒田氏光之公　八月□日」とあり[7]，元禄元年（1688）に3代藩主黒田光之が再建を行った。黒田藩による復興

基　壇（Fig.60，PL.26）

建物基壇は東西19.8m，南北15.3mの東西に長い基壇で，基壇化粧として長さ1.4～2.7m，幅0.2m，高さ0.5mの長方形切石を横倒しに据えている。また，基壇化粧の14m南には石垣が築かれているため金堂同様，恰も二重基壇の上に建てられている感がある。この石垣はⅣ期基壇化粧の東辺に連続させて9.4m南側に東西幅31mの石垣を築いたもので，南辺の中央1箇所と東辺及び南西隅に階段を設けている。中央階段の左右で石垣の積み方が異なり，建物に向かって右側は重箱積みであるが，左側は野面積みである。寛政5年（1793）に完成した『筑前国続風土記附録』の挿絵には，本堂の基壇化粧と南辺石垣が描かれているので，元禄元年から寛政5年までの築造と言えよう。

階　段　階段は南辺中央と東辺及び南西隅に付設している。中央階段は切石で，下段に幅1.4mの踊り場を有し，5段数える。東階段は自然石を並べたもので4段数える。南西隅は自然石を並べた階段を2箇所設け，南端が5段，その北側が4段を数え，ともに踊り場を持つ。

礎　石　側柱礎石は花崗岩若しくは凝灰岩の割石で，南桁側3個のみⅡ期礎石を転用している。その上に乗る礎盤は最大径42cm，上面径27cm，高さ18cmのもので，石材は花崗岩である。礎盤は柱径（25～30cm）に対して，出張りが大きいものである。また，表面が火熱を受けて黒化しているものも見られる。

建　物（PL.26）

本堂建物は入母屋造本瓦葺で，身舎桁行3間，梁行2間の四面に裳階を付している。建物規模は桁行側柱心々で16.0m，梁行側柱心々で11.6mを測る。また，建物正面中央に観音開きの

扉1戸と東西妻側南端と背面の平側中央に引戸を設ける。この建物も元禄の再建から100余年後の寛政9年（1797）には，建物を修理していることが，棟札[11]から窺われる。

足場穴

SB3781（Fig.79）　本堂建物の柱筋から2.5m北側で検出した。柱穴列が現存建物の柱筋と平行しており，SB3800Gに伴う作業足場穴と考えられる。柱穴は建物北面のみで9個あり，柱間は約2.1mの等間に配されている。柱穴掘方は円形若しくは隅丸方形を呈し，径26～30cmで，深さは16～34cm遺存する。柱痕を残すものが二三あり，10cm程の柱を立てていた。

4）その他の遺構

講堂基壇上及び周辺において，溝・土坑・瓦敷・鋳造土坑などの遺構を検出した。基壇北側には，比較的大きな土坑も掘削されている。

溝

SD3787（Fig.64）　SB3800E基壇の北側に位置し，1期の通路遺構SX3780を切っている。東西方向に走り，長さ7.2mを検出した。上面幅0.4～0.9mを測り，底面はほぼ水平である。埋土中から土師器の糸切り小皿が出土している。

土坑

SK3742（Fig.83）　Ⅱ期建物階段SX3801③の東側で検出した。楕円形土坑が二つ連続した形状を成し，長軸2.0m，短軸0.57m，深さ0.18mを測る。南半部はSB3800C基壇化粧の下に潜り込む。

SK3746　建物前面東調査区最南端で検出した。大半が調査区外にあるため詳細は不明。土坑内には多量の瓦が詰まっていた。

SK3758（Fig.83）　建物基壇上の北東で検出したが，大半が既存建物の下にあるため詳細は不明。足場穴SB3740を切り，南端は礎石と重複する。楕円形を呈し，残存長2.52m，幅1.71m，深さ0.68mを測る。

SK3764（Fig.84）　SB3800E基壇の北側に位置し，土坑SK3765・足場穴SB3755と重複するが，前後関係はつかめていない。L形を呈し，北半は調査区外に延びる。南半は長軸4.4m，短軸1.9m，深さ0.2mを測り，底面中央に楕円形の小土坑を掘り込んでいる。小土坑は長さ1.48m，幅1.06m，深さ0.18mの大きさ。

SK3765（Fig.84）　SK3764と切り合う。また，大半が調査区外にあるため詳細不明。長さ3.54mを検出した。また，西側は一段深くなっている。

SK3769（Fig.83）　建物基壇上の北側中央で検出した。礎石8・9間に収まるように位置する。長円形を呈し，長軸2.7m，短軸0.6～0.95m，深さ0.15mを測る。土坑の東側には花崗岩が，西側には無文塼と花崗岩の集積がみられた。東端の石は上面の高さが礎石と同じであり，地覆石状をなす。

SK3770（Fig.83）　Ⅱ期建物階段SX3801①の東側で検出した。小土坑二つが連続したクローバー形を成す。東半部は調査区外にあるため詳細は不明。深さは0.25mを測る。埋土中からは割合多くの土師器が出土しており，「佛」と刻書した須恵器坏も出土した。また，SB3800C基壇化粧と重複するが，土坑の方が古い。

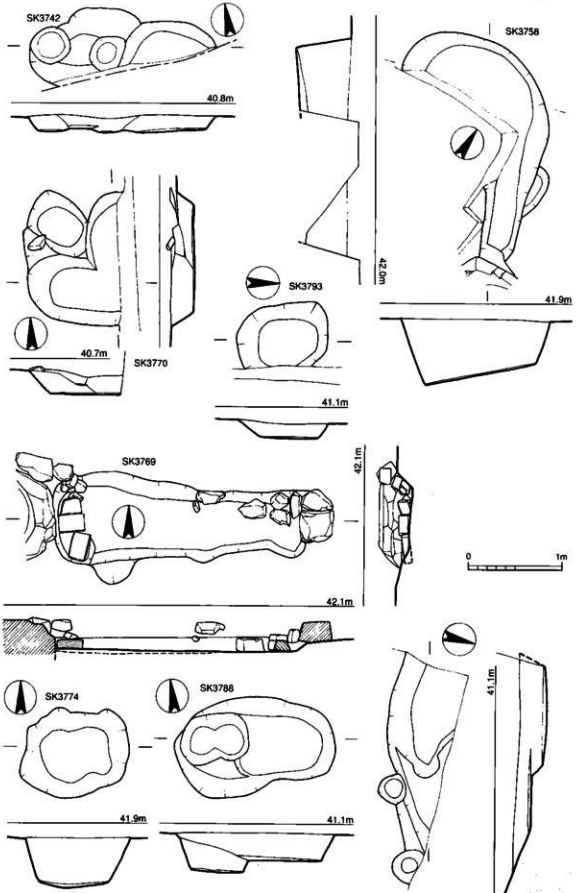


Fig.83 上坑SK3742・3758・3769・3770・3774・3788・3791・3793実測図（1/40）

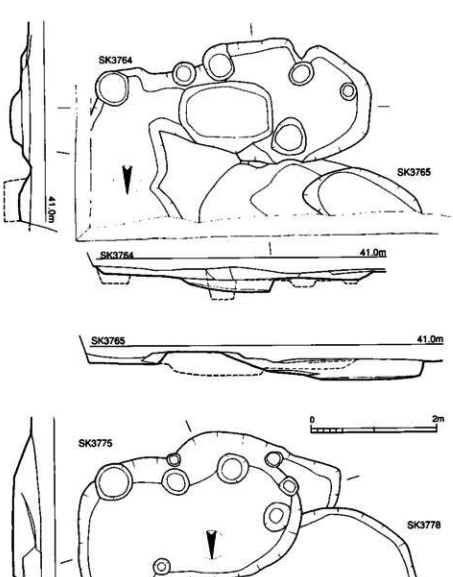


Fig.84　土坑SK3764・3765・3775・3778実測図（1/60）

SK3771（Fig.85）　建物基壇上の北側で検出した。不整形の浅い落込状をなし，長軸1.93m，短軸0.64m，深さ0.1mを測る。埋土中から土師器皿が出土している。

SK3774（Fig.83）　建物基壇上の北側で検出した。足場穴SB3740を切り，足場穴SB3781と重複する。楕円形の小土坑で，長軸1.23m，短軸0.96mで，深さは0.52mと深めである。

SK3775（Fig.84）　SB3800E基壇の北側で検出した。土坑SK3778を切り，足場穴SB3755と重複するが，足場穴との前後関係はつかめていない。上層は東西長12m以上の広がりがあり，

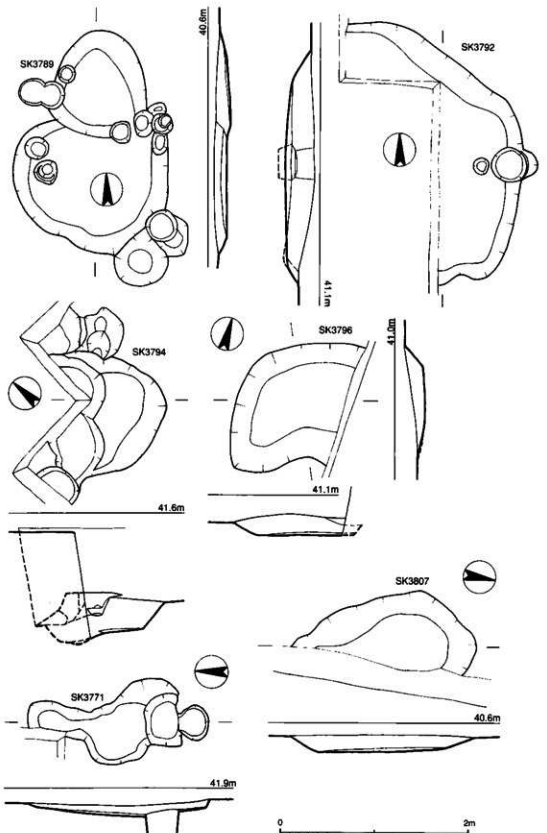


Fig.85　土坑SK3771・3789・3792・3794・3796・3807実測図（1/40）

落込状になっていた。下層は楕円形を呈し，長軸4.3m，短軸2.36m，深さ0.37mを測る。埋土中から土師器糸切り皿・坏が多量に出土している。

SK3777A（Fig.86）　建物基壇上の西側で検出した。礎石掘方及び足場穴SB3740を切っている。長大な土坑で，北半をSK3777A（古期），南半をSK3777B（新期）とした。長軸4.85m以上，短軸2.3m，深さ0.8mを測り，壁面は直線的に立ち上がる。土坑内からは多量の炉壁片が出土しており，東壁中央には火床穴も見られることから鋳造土坑と考えられる。近世瓦片も多量に出土しており，鋳造製品を取り出した後，炉壁とともに投棄したものであろう。

寛永銘の鬼瓦

SK3777B（Fig.86）　SK3777Aを切って，南側に位置する。円形を呈し，長軸3.4m，短軸3.0m，深さ0.9mを測る。この土坑内からは「寛永□□」の年号を篦書きした鬼瓦が出土している。また，19世紀前半代の近世陶磁器も出土していることから，文政年間の修理に伴う土坑

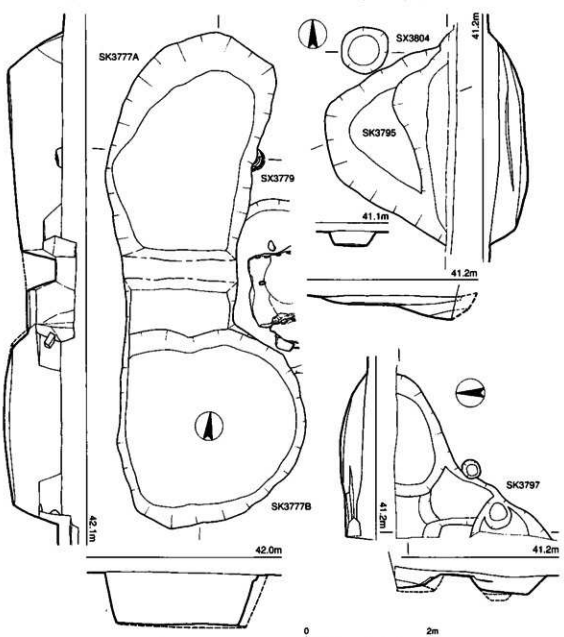


Fig.86　土坑SK3777・3795・3797，鋳造土坑SX3804，火床穴SX3779実測図（1/60）

の可能性が考えられる。

SK3778（Fig.84） SB3800E基壇の北側で，土坑SK3775に切られる。北半部が調査区外にあるため詳細は不明。東西長4.4m，深さ0.25mの大きさ。

SK3788（Fig.83） SB3800E基壇の北側で検出した。足場穴SB3755と重複するが，前後関係はつかめていない。西側の柱穴は足場穴である。楕円形を呈し，長軸1.7m，短軸1.03m，深さ0.28mを測る。埋土中から備前系の陶器壺が出土している。

SK3789（Fig.85・87，PL.47－1） 3区南半で検出した。浅い土坑二つが繋がった楕円形を呈し，長軸2.35m，短軸1.66m，深さ0.16mを測る。浮いた状態ではあるが，土師器坏・瓦片が出土した。土師器坏は3枚重ねたものもあり，一括投棄している。また，埋土中からは炭化した木片も出土した。

SK3791（Fig.83） SB3800E基壇の北側で検出した。大半が調査区外にあるため詳細不明。東側に浅いテラスを有する。或いはSK3795と一連の土坑になるか。

SK3792（Fig.85，PL.47－2） 1区南半に位置し，以前の調査で検出していたものである。足場穴SB3755と重複する。東壁にある柱穴が足場穴の柱穴である。大半が調査区外にあるが，平面形は楕円形を呈するか。南北長2.9m，深さ0.3mを測る。埋土中から土師器の甕が出土している。

SK3793（Fig.83） SB3800E基壇のすぐ北側に位置し，以前の調査で検出していた。楕円形を呈する小土坑で，長軸0.96m，短軸0.7m，深さ0.16mを測る。

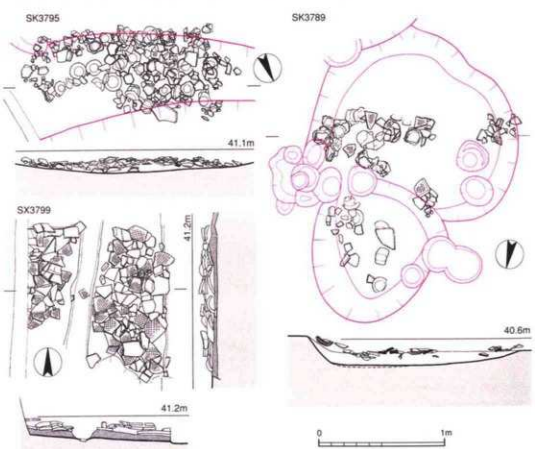


Fig.87 土坑SK3795・3789，瓦散SX3799遺物出土状況実測図（1/30）

SK3794（Fig.85）　2区北西隅に位置し，以前の調査で検出していた小土坑である。大半が調査区外に延びるため詳細は不明。50cmと深く，湧水が著しかった。埋土中から土師器ヘラ切り皿などが出土している。

SK3795（Fig.86・87，PL.48－1）　1区の中程で検出した。東半は調査区外に延びる。検出長1.95m，幅3.4m，深さ0.6mで，西側にテラスを有する。南壁際には土師器坏の集積がみられ，110点程出土した。土器の出土状況は，単に投棄しただけではなく，上面を暗黄褐色土で覆っていた。法要などで使用した土器を一括埋納したものと思われる。

SK3796（Fig.85）　1区北側で検出した。楕円形を呈し，東半は調査区外に延びる。検出長1.1m，幅1.3m，深さ0.2mを測る浅めの土坑。

SK3797（Fig.86）　1区北西隅で検出した。大半が調査区外にあるため詳細は不明。検出長3.6m，深さ0.35m。

SK3807（Fig.85）　3区北西隅で検出した。東半が調査区外にあるため詳細不明であるが，楕円形を呈し，検出長1.95m，深さ0.18mを測る。土師器・瓦片が出土した。

瓦　敷

SX3799（Fig.87，PL.48－3）　1区中程で検出した。鋳造土坑SX3802に切られる。平・丸瓦を3段程積み上げ，1.3m幅で平坦に並べていた。鋳造土坑検出時に瓦を取り上げてしまったため長さは1.1m程となったが，本来東西方向に敷設していたものと思われる。また，瓦の下には焼土層が5cmの厚さで堆積しており，康平7年（1064）の火災による焼土層と考えられる。なお，瓦敷中央の溝は最も新しい時期の溝である。

鋳造土坑

SX3804（Fig.86，PL.48－2）　1区中程で，土坑SK3795の北側に位置し，瓦敷SX3799を切っている。土坑の上面には炭・焼土・鋳型片が広がっており，掘り下げたところ長径80cm，深さ20cm程の円形土坑となった。埋土中から焼土・鋳型片・金銅製鋲などが出土しており，鋳造土坑と考えられる。

火床穴

SX3779（Fig.86）　建物基壇上の西側に位置し，土坑SK3777Aに切られる。径36cm，深さ10cm程の小さな穴で，壁面は火熱により赤く焼けていた　（小田）

註1　住職のご厚意により講堂建物内部の礎石を実見することができた。礎石は建物内部に8個，外部に16個存在するので総数24個現存している。

註2　石田琳彰「観世音寺の歴史と信仰」『古寺巡礼西国　観世音寺』　1981　淡交社

註3　住職の配慮で，阿弥陀堂内に入り，実見させて頂いた。

註4　阿弥陀堂内には，「寛政九年　観世音寺大講堂　字建修理　丁巳九月」と記された棟札が保管されており，寛政9年（1797）にも修理されたことが判る。なお，寛政9年は干支の丁巳にあたる。

（4）南　門

1）概　要

観世音寺の伽藍配置を復原するには，東西南北の伽藍中心軸を明確にする必要がある。そのためには，塔・金堂・講堂・中門・南門などの主要建物の発掘調査を行い，各建物の中心点を割り出す作業が前提となる。講堂・中門・南門の中心を貫く線が伽藍の南北軸線に該当する。講堂は平成元年に発掘調査を行い，Ⅰ期の建物規模が判明し，建物中心点も確定した。後に創建期の礎石抜き跡が発見され，実際はⅡ期となったことは前述の如くである。

しかし，南門の発掘調査はこれまで実施されておらず，伽藍南北中軸線を確定するために発掘調査を行う必要があった。南門推定地には，参道を挟んで7個の礎石が点在しており，この付近が南門建物の位置として従来から指摘されていた。そこで，礎石が点在する場所を中心に南門の発掘調査を進めることとした。

周辺地形（Fig.88，PL.49）

南門礎石が点在する参道の西側には，長さ7m，幅2m程の島状の高まりがあり，南北方向

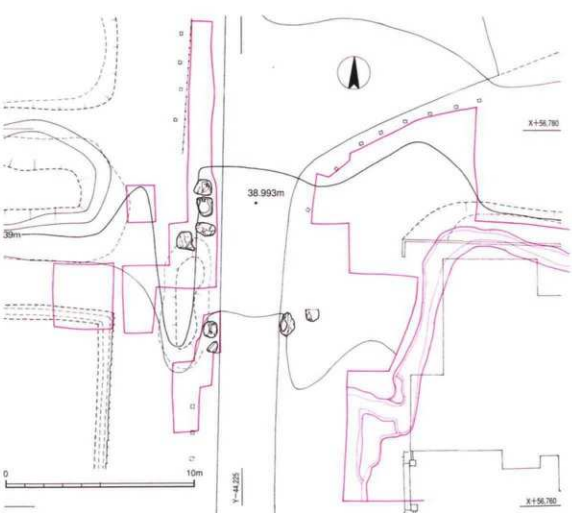


Fig.88　南門周辺地形測量図（1/200）

に張り出している。その西側には築地の痕跡かと思われる土手が戒壇院側に走っており，この高まりは基壇のなごりである可能性が高いものと思われた。周囲は後世の削平などにより平坦地となっている。南門礎石横の踏面での標高は38.5mで，講堂Ⅱ期階段前面が40.7mで，両者の比高差は2.2mを測る。

基壇のなごりか

2）南門SB3900

調査区の設定

南門の本格的な調査は，第130次調査の終了後に引き続き着手したが，第130次調査時点で北西隅に調査区を拡張し，基壇の状況を把握することにした。しかし，拡張区においては溝と防

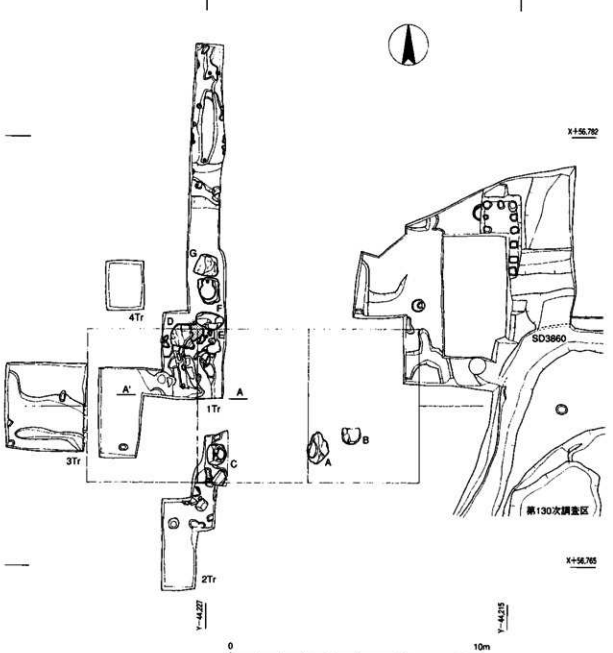


Fig.89　南門調査区遺構配置図（1/150）

空壕を検出した程度で，南門に関わる遺構は何ら確認されなかった。また，基壇版築土は完全に削平され，遺構検出面は地山の黄褐色粘質土となっていた。そこで，南門礎石を中心として参道の西側に4箇所の調査区を設定した。

1 Trは島状高まりと礎石4個を引っかける形で北側に延ばし，長さ14m×幅1mの調査区を設定した。2 Trは1 Trの土層観察用ベルトを挟んだ南側で，長さ6m×幅1.5mの大きさで設定した。3 Trは1 Trの西側で，東西3m×南北3.5mで設定した。4 Trは礎石の2m西側で，東西1.5m×南北2mで設定した。また，参道東側の礎石は植の根に埋もれており，掘ることすらできなかった。さらに，参道はアスファルト舗装されているのと常時車両が通行することから調査を断念した。

SB3900

基　壇（Fig.89・90，PL.49－2・49－3）

現在，南門推定地には礎石7個と基壇の痕跡かと思われる島状の高まりがあるに過ぎない。Fig.90は島状高まり部分の土層図である。これによると，上層から①表土（黒褐色土），②暗褐色土（2～5層），③黄褐色土（9～13層），④地山（黄灰色粘質砂層）を基調とする。②層の暗褐色土は水平堆積を呈しているものの土質に締まりはなく，粉っぽい印象を受ける。③層の黄褐色土を主体とする層は土質が締まっており，積土としては良好なものであるが，層が15cmと厚く版築土とは呼び難い。南門も大風により幾度か倒壊しており，③層をその際の基壇積土とみなすことも可能である。

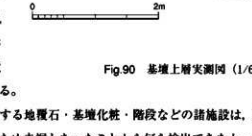


Fig.90　基壇上層実測図（1/60）

調査の結果，基壇に随伴する地覆石・基壇化粧・階段などの諸施設は，基壇の遺存状態が悪かったのと中央部が参道のため未掘となったことから何ら検出できなかった。

しかし，Fig.89の遺構配置図を詳細に検討すると，南門礎石Cの南側と礎石D・E間には円形の落込（網掛け部分）があり，花崗岩片や縄目瓦片などが入っていた。落込の間隔は6mで，これは『資財帳』記載の南門幅二丈二寸（6.06m）に近い寸法である。この穴を礎石抜取り穴とみなして南門建物を復原すると，長さが13.2m（4丈4尺）で，『絵図』のように間口三間の八脚門となる。また，塔・金堂から割り出した東西中軸線と講堂中軸線を南に延長すると復原南門建物のほぼ中央を中軸線が通る格好となる。

さらに，第109次調査で検出した溝SD3149及びそれに接続するとみられる第115次調査検出の溝SD3340は14世紀代の東西溝であるが，溝のすぐ北側に築地塀が想定でき，伽藍の内外を区画する溝とみなすことが可能である。また，第130次調査検出の溝SD3860は18世紀の溝であるが，恰も南門基壇を迂回するように折れ曲がっていることから，この時期まで南門としての痕跡を留めていたが故に，溝が制約を受け屈曲したものと考えられ，この付近に南門を設定しても強ち無理はないものと思われる。

礎　石（Fig.91，PL.50・51）

南門建物に伴うとみられる礎石は7個あり，参道東側に2個，西側に5個散在する。便宜上，A～Gの番号を付した。何れも，礎石本来の位置は留めていない。礎石Aは参道東側に位置する。・見して礎石と判るが，植の根に抱かれているため礎石は傾斜している。柱座は径62cmの円形を呈し，僅かながら地覆座も残っている。礎石Bは礎石Aの0.7m東にある。大きさからして礎石と考えられるが，上面・側面に柱座はなく，埋没している下面に柱座を有するものか。礎石Cは礎石Aの3.3m西側に位置する。長さ70cm，幅66cm，厚さ30cmの大きさで，基壇からずり落ちた恰好で斜めに座っている。柱座は径47cmの円形を呈し，L形の地覆座を有することから隅柱礎石と考えられる。礎石D・E・Gは礎石Cの6～7m北側に位置するが，上面に柱座が見られないことから裏返しに置かれている。礎石Fは礎石Eの50cm北側に位置する。水平を呈しているが，後で置かれたものである。長さ102cm，幅80cm，厚さ46cmを測る。柱座は径64cmの円形を呈し，地覆座は幅42cm，長さ22cmと幅広である。

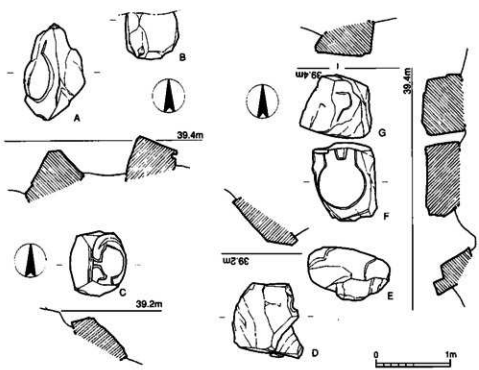


Fig.91　礎石実測図（1/50）

建　物

南門に関しては，遺構の遺存状況が極めて悪く，礎石と礎石抜取り穴しかなく，建物規模・構造は，『資財帳』及び『絵図』でしか知るすべはない。

『資財帳』には，「瓦葺大門一宇　長四丈四尺　広二丈二寸　高一丈一尺四寸　今校全　石，遭元慶四年八月大風顚倒，而以同六年新造全」とあり，南門は瓦葺で，長さが13.2m，幅6.06mで，元慶4年（880）の大風で倒壊し，元慶6年（882）に新築したことが知られる。ただ，『資財帳』では，南門と中門が同規模で記されており，創建南門建物と元慶6年新築建物が同規模であったかは，何とも判断し難い。『絵図』では，瓦葺単層屋根で，三間一戸の八脚門として描かれており，建物内に阿形・吽形の仁王像が安置されている。　（小田）

（5）中　門

1）概　要

中門に関しては，当館は調査を実施していないため，報告する資料を持ち合わせていない。従って，昭和32年に行われた発掘調査の成果を掲載しておく。発掘調査は，福山敏男氏を主任として昭和32年５～６月に実施された。調査原因は観世音寺収蔵庫建設に絡み伽藍解明の一環として行われた。調査箇所は，講堂・東回廊・中門などである。

調査の結果，「調査した箇所に関する限り，中門及び回廊の痕跡は明白には認め難く，地表の状況からみて，この付近では回廊や中門は礎石だけでなく，基壇の痕跡すら失われてしまっていると判定される」とされた。

周辺地形（Fig.92）

南門跡から講堂に向かって参道を歩いてゆくと，途中，３段程の石段があり，石段の手前，向かって右手はツツジ・南京ハゼなどが植えられた小さな林となっている。左側は住職が住ま

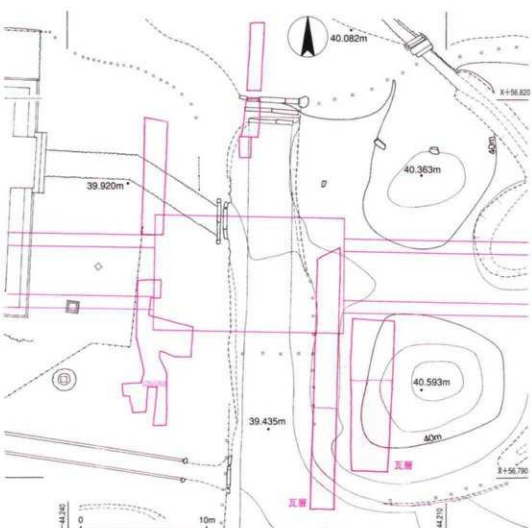


Fig.92　中門周辺地形測量図（1/300）

う扉裡である。階段付近までは，楠やツツジに視界を遮られるが，階段を上ると正面に講堂，左手に金堂，右手には五重塔の心礎を拝むことができる。先の階段付近は40cmの段差があるものの，この付近が中門跡であろうと推定されてきた。現在，中門推定地には，中門に伴う礎石すら存在していない。

2）中門SB4100

建　物（Fig.92）

講堂の補足調査では，創建期の講堂礎石抜取り穴及び北面西回廊の礎石掘付穴を検出した。これにより，当初の北面回廊は講堂梁行中央に取り付くのではなく，一間分南側に取り付くこと。柱間は3.9m等間であること。講堂梁行側柱から８間目で南に折れること。西面回廊北隅柱から10間目の柱位置が五重塔・金堂を結ぶ東西の中心軸上に乗ること。以上により，東・西面回廊は，南北20間（78.0m）に復原した。

Fig.92は地形測量図に昭和32年調査の発掘区と金堂及び講堂補足調査の成果を基に復原した南面回廊と中門を加筆したものである。なお，発掘区には便宜上，イ～ヘＴｒの番号を付した。昭和32年の調査では，中門は礎石だけでなく，基壇の痕跡すら失われていると判断されたが，ハ・ニＴｒでは調査区の中央から南半部にかけて瓦の集積が見られる（PL.78・79）。瓦は小破片となって堆積しているため，屋根に瓦が乗った状態で中門建物が倒壊した訳ではないが，瓦が面的に広がっていることから，倒壊した中門の屋根瓦でもって近辺を整地したような印象を受ける。このことは，南面回廊及び中門の推定位置が瓦集積の近辺に復原されたことと強ち無縁ではないものと思われる。また，ヘＴｒ南側には小石列が東西方向に並んでいるが（PL.80），石列は浮いた状態であり，新しい時期のものかも知れない。

中門建物は「資財帳」では，「瓦葺中門一宇　長四丈四尺　高一丈六尺八寸　広二丈四尺　指南方傾倚三尺　元慶八年修理全」とあり，建物規模は長13.2m，幅7.2mで，傾いていたのを元慶８年（884）に修理したことが知られる。『絵図』では，屋根は瓦葺きの入母屋造りで，五間三戸の楼門として描かれている。また，門の内部には，四天王の二像が安置されている。

ここで問題となるのが，『資財帳』記載の中門・南門の規模である。南門は大門と標記され，長さ四丈四尺（13.2m），広二丈二寸（6.06m）で，八脚門とすると柱間は4.4mとなる。中門は長さが大門と同じ四丈四尺（13.2m）で，広は三尺八寸（1.14m）長い二丈四尺（7.2m）である。『絵図』の如く桁行五間とすると，柱間は2.64mと間口が狭いものとなる。

遺構が残っていないため『絵図』での検証はできないが，『資財帳』では南門は大門と記され，中門より大きな建物であった印象を与える。創建建物は元慶４年（880）の大風で倒壊し，２年後には再建していることから，創建当初の南門建物は中門より大規模であった可能性が指摘できないだろうか。この点に関しては，遺構の遺存状況が悪いため如何ともし難いが，中門に関しては再発掘の余地があるものと思われる。（小田）

（6）回　廊

1）概　要

回廊は講堂から東西に派生し，金堂・塔を囲繞し中門に取り付く。面する方位により南面・東面・北面・西面とし，遺構番号は南面回廊をSC3890，東面回廊をSC3720，北面回廊をSC3730，西面回廊をSC3760とした。また，南面・北面回廊は伽藍中軸線の左右で分け，東側をE，西側をWとする。さらに，二時期ある場合は古い方をA，新しい方をBとした。例えば，創建期の北面西回廊は，SC3730WAという標記になる。

回廊の調査は，昭和32年に北面回廊の調査が実施され，講堂側面中央部に取り付くこと，基壇化粧が玉石積であることが判明した。南面回廊の調査では，顕著な遺構は検出されなかった。

当館が実施した回廊に関する発掘調査は，第126次調査として北面東回廊及び東面回廊屈折部で行った。調査の結果，北面東回廊の雨落溝SD3725・3745及び東面回廊の雨落溝SD3715・3735を検出し，溝の間隔は心々で6.3mを測ることを確認した。

第130次調査では，南面東回廊の推定場所に調査区を設定し掘り下げたが，回廊に関わる遺構は発見されなかったものの，鋳造土坑・東西溝・瓦溜などの遺構を検出した。第126次補足調査では，創建期と考えられる北面西回廊の根石を検出し，創建期は従来の見解と異なり，講堂との取付きは側面中央ではなく，一間分南に取り付くことが明らかとなった。第188次調査では，金堂及び西面回廊に関わる遺構の検出を目的とした。その結果，回廊基壇の基礎地形と考えられる礫敷遺構を検出している。

2）土　層

回廊の場所により土層の堆積状況が異なるので，各々の土層状況をふれておく。

南面東回廊周辺の土層は，表土の下に暗褐色土（厚さ30cm程）が堆積し，その下は黄灰色砂質土の地山面となる。北面東回廊から東面回廊にかけての土層は，表土・耕作土・床土が40～70cmと厚く堆積し，その下が灰褐色砂層で，その砂層は雨落溝の上面を覆っている。

北面西回廊周辺の土層は，講堂3区の土層図によると，上層から表土・撹乱土（昭和32年調査埋土）・瓦層（近世瓦を多量に含む，厚さ20～70cm）・黒灰色土（厚さ30cm）で，地山の黄白色粘土から地表面までの高さは1.1mを測る。西面回廊付近の土層は，金堂A区西壁の土層図によると，表土の下が近世の整地層である黒灰色土（厚さ70cm）で，それを除去すると礫敷となる。礫敷の下は暗灰褐色粘砂・灰青色粘砂・灰褐色粘土・黄褐色粘土・青灰色粘土の整地層で，地山の灰白色砂から表土までの高さは1.3mを測る。

3）南面回廊SC3890

周辺地形（Fig.93，PL.58－1）

南面東回廊推定箇所は，現在，ツツジ・梅などが植栽されており，東面回廊との屈折部は大型車駐車場から宝蔵へ至る通路となっている。前述した如く，中門東側は樹木が生い茂り鬱蒼としている。中門を挟んだ南面西回廊推定地には，現在，観世音寺の車庫が建てられているが，建物南辺部が丁度，回廊部分に該当するようである。

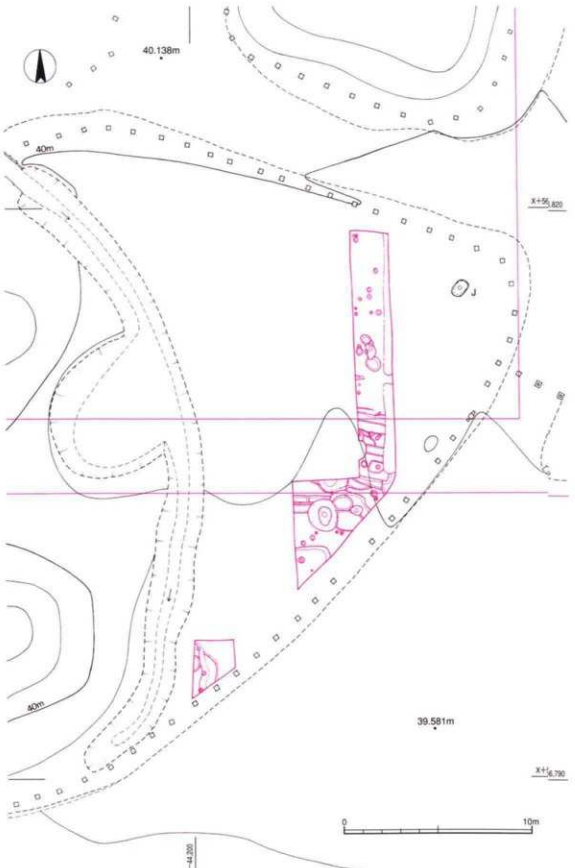


Fig.93　南面東回廊周辺地形測量図（1/200）

SC3890E

調査区は樹木を避けて植栽の中に設定した。A区は幅２ｍ×長さ13ｍで，南北方向に設けた。B区は当初A区の南西側に設定したが，鋳造土坑が東に伸びることからA区に繋げる形で拡幅した。C区はB区の４ｍ南西に設定した。A区東壁側の深掘りは，昭和32年の調査区である。

調査の結果，A区で溝・ピット，B区で溝・土坑・鋳造土坑・瓦溜，C区で瓦溜・ピットなどを検出したが，直接，回廊に関わる遺構は検出されなかった。ただ，B区の瓦溜SK3887と

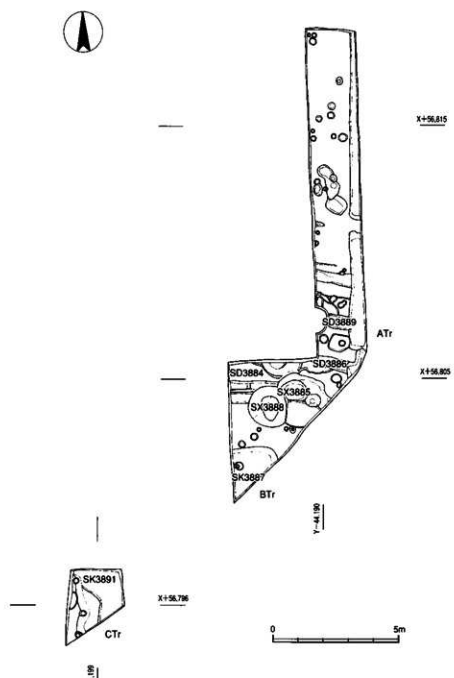


Fig.94　南面東回廊調査区遺構配置図（1/150）

C区の瓦溜SK3891は浅い落込状の土坑で，両者は一連の土坑になるか定かではないが，瓦の破片が多量に入っており，南面回廊が倒壊した際に瓦を廃棄した土坑の可能性がある。

なお，概報段階では，溝SD3889"の北肩部が北面東回廊南落溝から79.0mの距離で，『資財帳』記載の回廊南北長弐拾陸丈肆尺（79.2m）に近似する数値であることから回廊に関連する遺構と考えたが，溝の東西軸が大きく南に傾き，回廊復原図ではⅠ・Ⅱ期回廊の建物内部に入ることから，今回の報告では回廊に伴わないものと判断した。

建　物

『資財帳』によると南面回廊は，「長弐拾五丈捌尺　広一丈五寸　貞観三年小破　八年全」とある。建物の東西長は，弐拾五丈捌尺（77.4m）に中門の長さ四丈四尺（13.2m）を足した90.6mで，幅が3.15m規模となる。

瓦　溜

SK3887（Fig.105，PL.59－1・60－3）　B区南端で北側コーナー部を検出したが，大半が調査区外に延びるため詳細は不明。深さは20cm程で，底面は平坦である。埋土中からは多量の丸・平瓦片が出土した。

SK3891（PL.59－2）　C区北半で検出した。当瓦溜も大半が調査区外に延びるため詳細は不明。SK3887同様，床面は水平で，多量の瓦片が出土した。両者は5m程離れているが，或いは一連の遺構になるのかも知れない。

4）東面回廊SC3720

周辺地形（Fig.96）

現在，東面回廊推定地には，北半部に池が掘削されている以外は，部分的に植栽がなされているもののほぼ平坦地となっている。また，回廊復原図では，鐘楼と宝蔵との間を東面回廊が巡るようである。

SC3720

基　壇

地山面まで完全に削平されているため，地覆石はおろか版築土さえ留めていない。辛うじて東面回廊の雨溝SD3715・3735が遺存する程度である。『筑前国続風土記附録』の挿絵（1793年完成）や奥村玉欄編の『筑前名所図絵』（1821年頃）によると，講堂石垣積基壇SB3800Gの東側は田畑として描かれており，18世紀末以前には既に削平を受けている。このことは，雨溝の埋土上面まで床土が乗っていることからも首肯される。

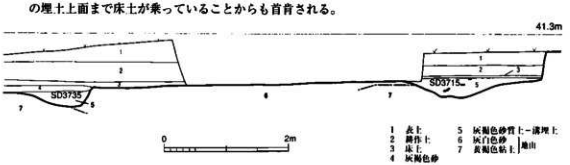


Fig.95　東面回廊雨溝SD3715・3735土層実測図（1/60）

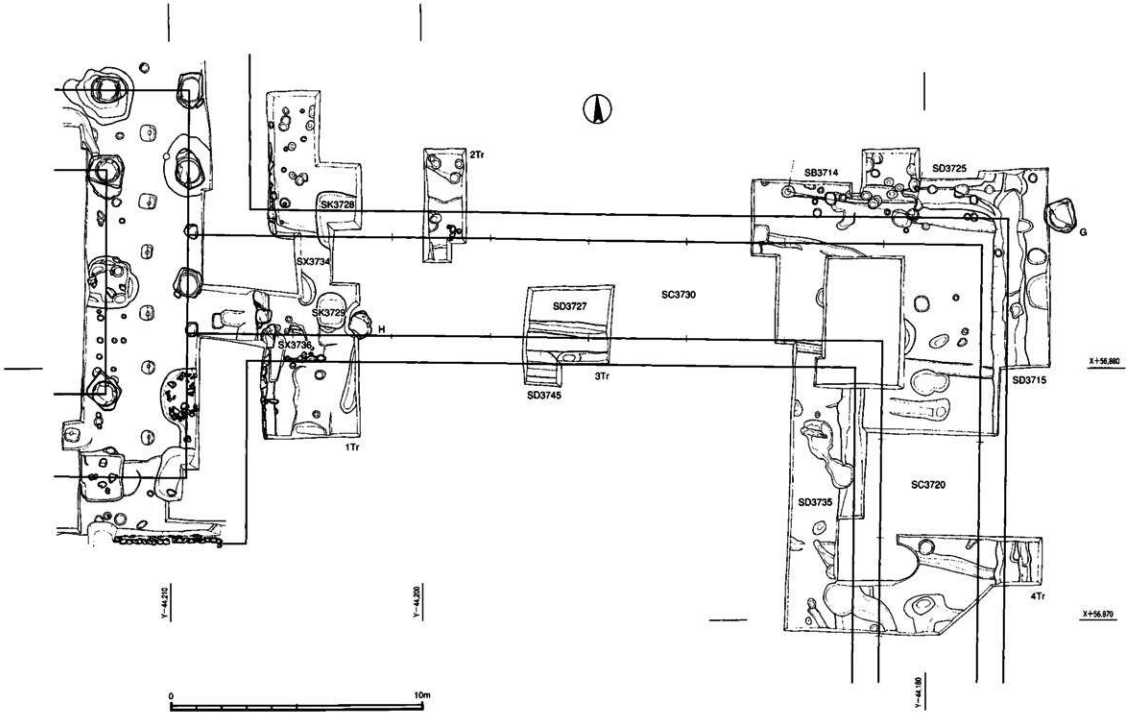


Fig.96　北面東回廊調査区遺構配置図（1/150）

側　溝

北面東回廊調査区4で併走する南北溝SD3715とSD3735を検出した。溝の埋土は灰褐色砂質土で，溝の間隔は溝底心々で6.2～6.3mを測る。

SD3715（Fig.95・97，PL.52）　SC3720の東側溝で，長さ16m分を検出した。上面幅は北端で1.3m，南端で1.4mで，深さは北端で0.3m，中央で0.38m，南端が0.23mを測る。溝の北端は調査区外に延びており，北から流れてくる雨水の排水溝も兼ねているものと思われる。また，南端は溝底が二重になっており，土層上では確認できなかったが，創建講堂及びⅡ期講堂建物に接続する回廊建物側溝の掘り直しの可能性がある。

SD3735（Fig.95・97，PL.52）　SC3720の西側溝で，長さ9.5m分を検出した。上面幅は北端で0.88m，南端で1.42mで，深さは北端で0.28m，南端が0.12mを測る。

礎　石

現状では，東面回廊建物に伴う礎石は見あたらない。また，礎石抜取り穴も検出できない程著しい削平を受けている。

礎石J（Fig.103）　南面東回廊調査区Aの3m東側に置かれている。唐居敷の礎石で，長さ84cm，幅60cm，厚さ25cmを測る。中央には径17cm，深さ10cmの軸受穴を穿っており，穴の周囲は良く振れている。何れの門に伴うか不詳。

建　物

『資財帳』によると東面回廊は，「東長弐拾六丈肆尺　広一丈　尺五寸」とあり，回廊建物の南北長が79.2m，建物幅が3.45mであったことが知られる。

5）北面回廊SC3730

昭和32年の調査により，北面回廊は講堂側面中央に取り付くことが判明した。また，基壇地覆石も確認された。第126次調査では，北面東回廊に伴う南側溝SD3745が検出され，東面回廊西側溝SD3735に接続するものと考えられた。しかし，講堂補足調査では，Ⅰ・Ⅱ期の北面西回廊に関連する遺構が確認され，二時期の回廊遺構が遺存していることが判明した。そこで，北面回廊に関しては，創建期をSC3730A，Ⅱ期をSC3730Bとして報告する。

本章建物の東側に樹木を避けて4箇所の調査区を設定した。調査区1は講堂梁行礎石列から2.5m東側で，Ⅱ期回廊建物地覆石，礎石抜取り穴，土坑などを検出した。調査区2は調査区1の2m東に設定した。調査区3は調査区2の3m南東で，回廊南側溝SD3745を検出した。調査区4は北面回廊と東面回廊の接続部を把握するために設定した。この箇所では，前述した東面回廊側溝SD3715・3735と北面回廊北側溝SD3725，掘立柱建物1棟を検出した。

周辺地形（Fig.97・101）

講堂の背面である北側には，僧房跡が復原整備されている。その間約20mは平坦地となっており，僧房との境に植え込みがみられる程度である。本堂建物の東側には，日吉神社に至る小道と紫陽花の植栽がある。講堂の西側は楠・椎などの樹木が茂り，樹木の間に池が掘られている。この池は，昭和26年頃に掘削されたもので，その場所にはかつて天智院（茶室）があった。現在，天智院は南門跡北西側に移設されている。

Fig.97　北面東回廊周辺地形測量図（1：200）

SC3730E A

基 壇

地山面まで完全に削平されている。辛うじて，礎石据付穴SX3734を検出した程度であり，地覆石・版築土層は留めていない。

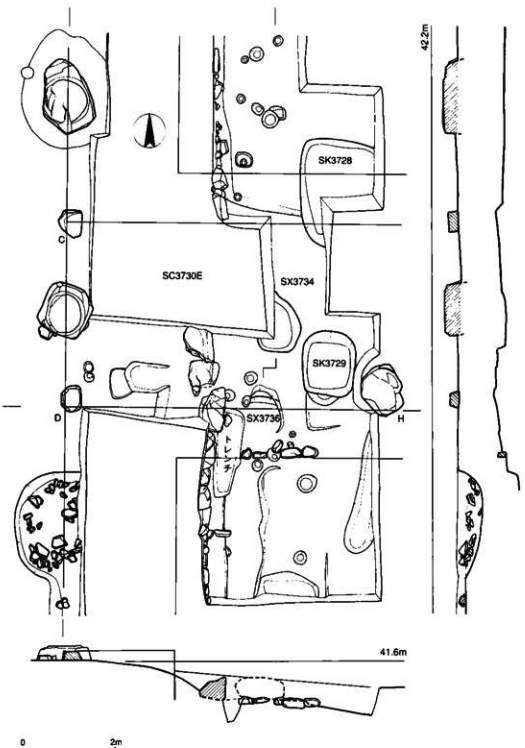


Fig.98 回廊SC3730E取付部実測図（1/80）

礎石据付穴

SX3734（Fig.98）　調査区１の中程に位置する。昭和32年の調査時点で検出していたものである。隅丸方形を呈し，長軸1.22m，短軸0.98mで，検出面からの深さ0.16mを測る。北面西回廊礎石据付穴SX3810の底面レベルより20cm高い位置にあるものの，上に乗る礎石の厚さを考慮するとさしたる問題はない。

SC3730ＥＢ

基　壇

Ⅱ期回廊は講堂側面の中央に取り付く。講堂の東西中軸線から３m南側で回廊地覆石を検出した。このことから，回廊基壇幅は６mに復原できる。

地覆石（Fig.99，PL.54）　基壇南辺部にあり，昭和32年の調査で既に確認していたものである。回廊取付部南側で，長さ1.65m分残っている。長さ30～45cm，幅15～25cm，厚さ20cm大の花崗岩自然石を５個並べたものであり，基壇化粧の地覆石と考えられる。

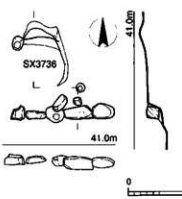


Fig.99　回廊SC3730ＥＢ
地覆石実測図（1/60）

地覆石は掘方を掘って据えているが，基壇上面は地山面であることから，回廊取付部は地山削り出し基壇といえる。また，取り付き部の礎石Ｄから地覆石までの距離が1.05mであることから梁行の柱間は3.9m（基壇幅６m－基壇の出1.05m×２）となる。

礎石据付穴

SX3736（Fig.98・99）　昭和32年当時の発掘写真（Fig.20）をみると，この穴の位置に回廊礎石Ｈが座っていたのが判る。第126次調査時点では，既に石が動かされており，模石も存在しなかった。礎石Ｈを元の位置に戻し，礎石Ｄから礎石Ｈまでの比高差を測ると60cmとなり，講堂Ⅱ期基壇と回廊基壇との接合部は，40cm余りの段が存在したことになる。法隆寺の場合，講堂基壇と回廊基壇との比高差が44cmあり，階段が１段設けられている。

SX3737（Fig.98）　北面東回廊と東面回廊屈折部の内側据付穴である。大半が調査区外にあるが，検出幅1.42m，深さ15cmを測る。回廊桁行柱間を3.9mとすると回廊取付部から７間目で東面回廊に折れることとなる。

側　溝

調査区３で東西溝SD3745を，調査区４では東西溝SD3725を検出した。

SD3725（Fig.96，PL.53）　SC3730ＥＢの北側溝で，長さ8m分を検出した。溝の東端は東面回廊東側溝SD3715と接続する。西半部は掘立柱建物SB3714と重複するが，建物は回廊廃絶後に建てられたものである。上面幅は西側で0.74m，接続部で1.4mで，深さは西側で0.1m，接続部で0.33mを測り，東側に深くなっていることから基壇の高さも回廊取り付き部が高く，東西両側に下がっていたことが判る。

SD3745（Fig.96，PL.53）　SC3730ＥＢの南側溝で，長さ3.2m分を検出した。上面幅1.04m，深さ0.21mを測る。東面回廊西側溝SD3735に接続すると考えられるが，接合部は削平により

確認できなかった。また，地覆石の外面を東に延長すると当溝底にあたる。溝肩にあるピットが地覆石の抜跡で，溝の北肩部が掘方のラインとみなすと回廊の雨落溝自体は地覆石の抜き取り跡を再建回廊の雨落溝として再利用した可能性を有する。

礎　石

北面東回廊建物に伴う礎石は，取付部の礎石C・Dと礎石G・Hの4個を数えるにすぎない。しかも，礎石G・Hは本来据えられていた場所から動かされている。

取付部礎石C（Fig.71，PL.43）　講堂礎石13－14間に位置する。石材は花崗岩で，長さ54cm，幅49cm，厚さ22cmを測る。上面に柱座はないが，方形の石を用いている。礎石G・Hに比してかなり小さく，控え柱の礎石のような印象を受ける。

取付部礎石D（Fig.71，PL.43）　講堂礎石14－15間に位置し，取付部礎石Cと対になるものである。石材は礎石C同様，花崗岩で，長さ54cm，幅43cm，厚さ19cmと大きさもほぼ等しい。なお，礎石C・Dの距離は心々で3.68mを測り，礎石の位置は側柱礎石列中心線から回廊寄りにずれている。回廊建物の棟木を講堂建物梁側柱で受けるため，取付部の回廊側柱は直接屋根を支えるものではないため礎石も小さくて済むのであろう。

礎石G（Fig.103）　北面東回廊調査区4の北東隅に位置する。図面の下半部は欠損しているため三角形状をなす。長軸128cm，短軸117cm，厚さ45cmで，上面に辛うじて径84cmの円形柱座を留める。場所的に北面・東面回廊何れかの礎石になるものと思われる。

礎石H（Fig.98・103，PL.54－1）　現在は講堂Ⅳ期基壇化粧の3m東側に置かれているが，昭和32年の写真を確認すると，礎石据付穴SX3736に座っていたものである。隅丸方形を呈し，長軸100cm，短軸82cm，厚さ40cmを測る。上面に明瞭な柱座は認められないが，原位置からして北面東回廊建物に伴う礎石である。

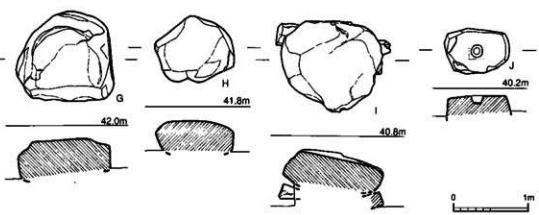


Fig.100　回廊周辺礎石実測図（1/50）

建　物

北面回廊の基壇幅は，地覆石が存在することから6mとなり，取付部礎石C・D及び礎石据付穴SX3736・3737の位置関係から基壇の出は各1.05mなので建物幅3.9mが復原でき，建物幅からして単廊となる。先の基壇幅6m，建物幅3.9m，基壇の出1.05mという数値で北面・東面回廊を復原すると北面東回廊の基壇長は32.6mとなり，回廊の両端に位置する礎石据付穴SX3729からSX3737までは23.6mを測る。桁行の柱間間隔は，据付穴を2個しか検出していない

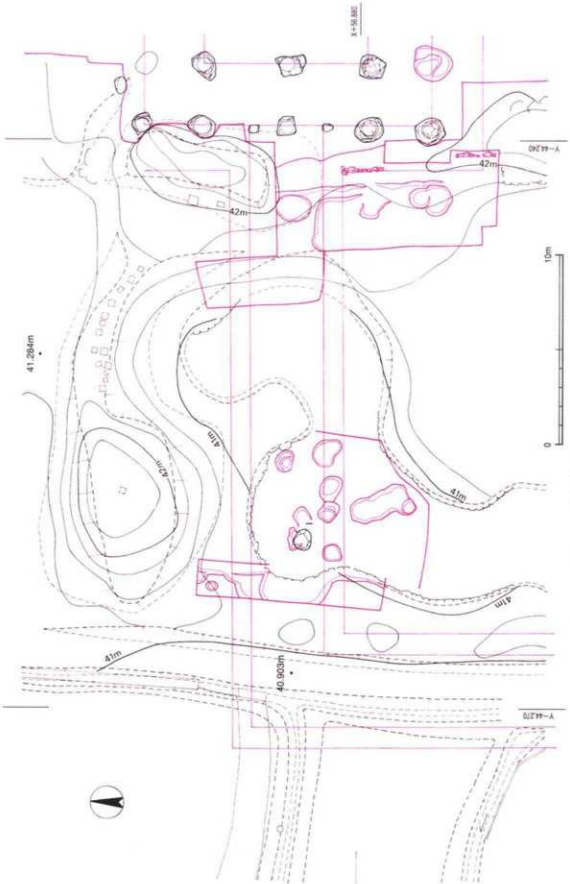


Fig.101　北面西回廊周辺地形測量図（1/200）

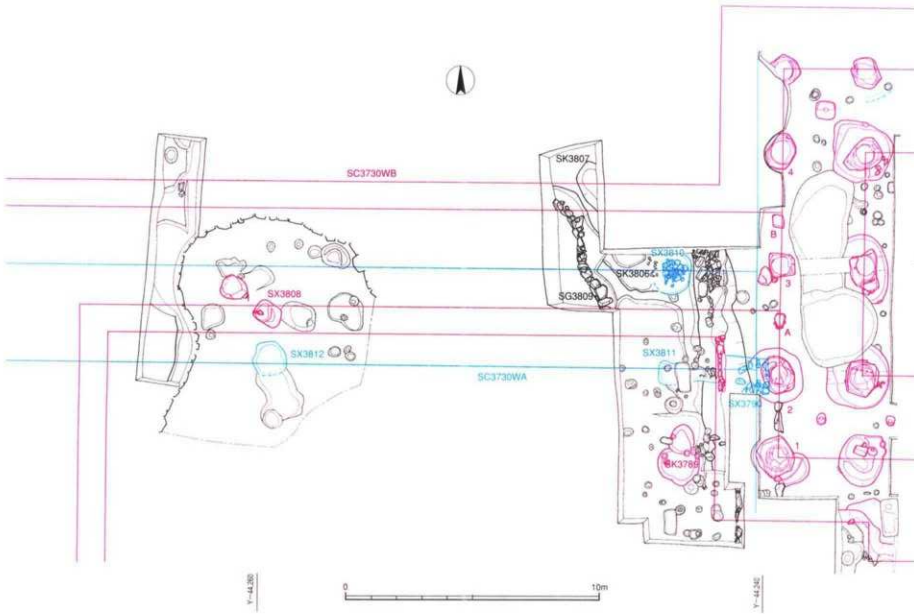


Fig.102　北面西回廊調査区遺構配置図（1/150）

ため明らかではないが，仮に柱間を建物幅と同じ3.9mとすると北面東回廊端から取付部までは8間となる。また，回廊基壇を南に折り曲げると，丁度，東面回廊側溝の溝底中心に基壇復原線が収まる。

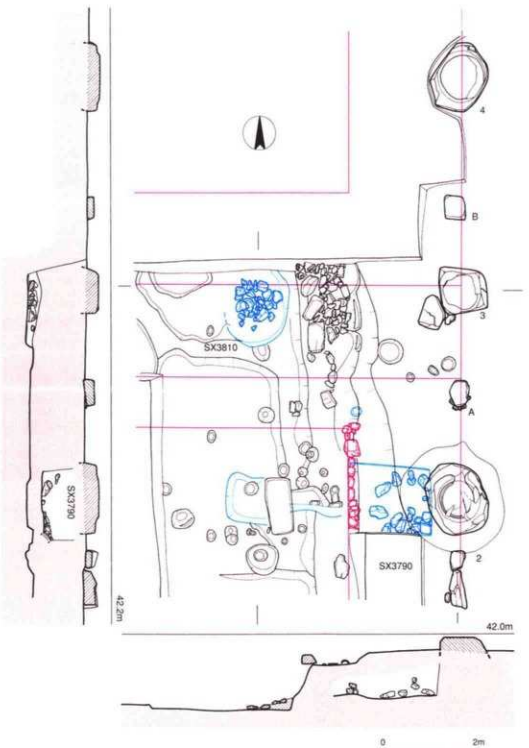


Fig.103　回廊SC3730W取付部実測図（1/80）

SC3730WA

基　壇（Fig.102，PL.57）

北面西回廊の調査では，創建期の回廊建物に付随する礎石据付穴を検出した。このことにより，北面回廊の取付き状況は，講堂築側礎石列の南端から２・３番目の柱に取り付くことが明らかとなった。しかし，基壇地覆石・版築土層は既に削平されていたため，基壇規模はつかめなかった。また，講堂西側の池の中には，回廊礎石とみられる石があり，建物規模を把握するため池浚えを行った。その結果，Ⅰ・Ⅱ期の礎石据付穴を検出し，回廊建物を復原することができた。

礎石据付穴

SX3810（Fig.104，PL.57）　北面西回廊東端の礎石据付穴で，講堂礎石３の3.1m西側で検出した。第126次調査では掘方及び根石の一部を検出していたが，Ⅰ期回廊礎石据付穴とは全く認識していなかった。今回，礎石２の下部でⅠ期講堂礎石据付穴を検出した。創建期回廊がどの様に講堂側面に取り付くか，様々な場合を想定し，遺構面を精査する過程で検出した次第である。

掘方は楕円形を呈し，長軸1.64＋α m，短軸1.3mで，検出面からの深さ0.3mを測る。西隣に中世の土坑SK3806が存在するため西壁は失われるが，根石は良好に遺存していた。掘方の中央には10～30cm大の花崗岩割石を円形に置いて根石としている。

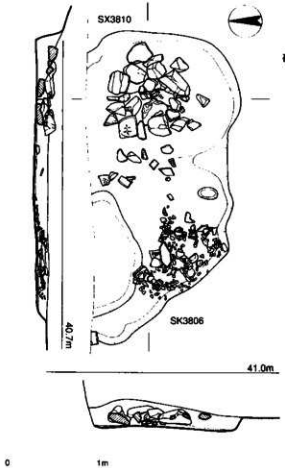


Fig.104　礎石据付穴SX3810，土坑SK3806実測図(1/80)

Ⅰ期講堂礎石据付穴SX3790の底面と当礎石据付穴とのレベル差は24cm程であり，上に乗る礎石の厚さにもよるが両基壇の差は40cm程であろうか。

SX3811（Fig.103）　礎石据付穴SX3810の2.8m南側に位置する。東壁は昭和32年のトレンチで破壊されるため長さは不明であるが，幅1.02m，検出面からの深さ0.12mを測る。埋土は黄褐色砂質土で，花崗岩の小礫が入っていた。SX3810とは心々距離で4.2mを測る。

SX3812（Fig.102）　本堂西側の池の中で検出した。不整形の浅い落込状をなし，長軸3.3m，短軸1.3mで，検出面からの深さは７cmを測る。南半部は別遺構と重複する。埋土中からは花崗岩の角礫が数点出土していることから据付穴と考えられるが，角礫は完全に浮いており，原位置を留めていなかった。この穴と対になる北側の据付穴は削平を受け遺存しない。また，池の底面は青灰色砂質土の地山面であり，この周辺には古い時期の自然河川が流れている。

建　物

Ⅰ期北面回廊建物は，講堂礎石据付穴SX3790及び回廊礎石据付穴SX3810・3811・3812の位置関係から建物幅を3.9mに復原した。また，礎石据付穴SX3811からSX3812間での距離が15.75mなので，建物幅3.9mで割ると4間となる。建物幅より桁行柱間が短いのが通常であろうが，遺構の上からは明確に柱間間隔を把握できなかった。ただ，復原回廊北西隅柱の位置から東面・西面回廊に39m（10間分）とると五重塔と金堂を結ぶ東西中心線上に乗ることは，非常に興味深いものである。

SC3730WB

基　壇（Fig.102・103）

北面西回廊の状況は，Ⅱ期講堂基壇の西辺地覆石が講堂建物東西中軸線から3m南側の箇所で終わり，北側へは延びていないことを確認している。生憎，回廊基壇地覆石は削平により遺存していなかったが，回廊基壇地覆石は講堂基壇に連続して敷設していたものと考えられる。回廊に付随する施設として，西側では礎石据付穴を検出したに過ぎない。

礎石据付穴

SX3808（Fig.102）　池調査区の中央で検出した。楕円形を呈し，長軸1.1m，短軸0.85m，検出面からの深さ0.2mを測る。埋土中には角礫・瓦などが入っていた。位置的にⅡ期回廊建物の礎石据付穴と考えられる。この穴の1m程北西には礎石Ⅰがあり，礎石はここに収まっていたのであろうか。

礎　石

北面西回廊建物に伴う礎石は，取付部の礎石A・Bと池の中の礎石Ⅰの3個が遺存する。

取付部礎石A（Fig.71，PL.43）　講堂礎石2－3間に位置する。石材は花崗岩で，長さ58cm，幅42cm，厚さ23cmを測る。石の下には根石として瓦片・小礫が入れられていた。

取付部礎石B（Fig.71）　講堂礎石3－4間に位置し，取付部礎石Aと対になるものである。石材は花崗岩で，長さ49cm，幅43cm，厚さ15cmとほぼ同じ大きさである。なお，礎石A・Bの距離は心々で3.94mを測るが，講堂側面中央ではなく若干南側にずれている。

礎石Ⅰ（Fig.103，PL.55－1・56－2・56－3）　講堂西側の池の中に位置する。現在は池となっているが，この場所には昭和26年頃まで天智院（茶室）が建てられており，その後に池にしたとのことである。恐らく，池を掘削して出てきた礎石を浮島として残したものと思われる。石の下には根石状に小石が添えられているが，根石の埋土中には近世瓦が入っていた。扁円形を呈し，長軸108cm，短軸95cm，厚さ38cmを測る。上面は平滑であるが，柱座はみられない。下面が上面より大きいことから上下逆転している可能性がある。

建　物

『資財帳』によると北面回廊は，「北方長弐拾丈柒尺　広一丈五寸　貞観三年中破　八年修理全」とある。建物の東西長は62.1mに講堂の長さ30.0mを足した92.1mで，建物幅が3.15mとなるが，南面回廊は長さが90.6mなので北面回廊の方が1.5m長いことになる。中門建物は傾いていたのを元慶8年（884）に修理しているので，修理前より短くなったとすることもできるが，その分回廊の長さは長くなるはずであるが，もとより，回廊は歪な形をしていたのか，或

いは，単なる「資財帳」の記載違いなのか，詳細は判らない。

また，回廊建物幅は北面と南面が一丈五寸（3.15m），東面と西面が一丈一尺五寸（3.45m）で，東面・西面回廊の方が一尺長くなっている。

6）西面回廊 SC3760

周辺地形（Fig.43・101）

現在，観世音寺と戒壇院との間には，幅2mほどの小道が南北に通じている。この小道がかつての西面回廊の痕跡である。小道を挟んだ東半部が観世音寺の境内地で，北半部には池があり，南半部には廊裡・茶室（天智院）などの建物がある。西半部が戒壇院の敷地で，北半部に廊裡があり，南半には地蔵堂・鐘楼などがある。

基　壇

西面回廊推定地には，南北に小道が走っているため，これまで調査がなされていなかった。そこで，金堂跡の調査時点において，西面回廊に関わる遺構の検出を目指して調査区を西側に拡幅した。その結果，回廊基壇の基礎地形と考えられる礫敷遺構を検出したことは，既に述べたとおりである。南西隅部は戒壇院の敷地内にあるが，その箇所での発掘調査は可能であり，今後の課題としたい。

建　物

「資財帳」には，西面回廊は「西長弐拾六丈肆尺　広一丈一尺五寸　貞観三年小破　修理全」とある。建物規模は東面回廊と同規模の長さ79.2m，幅3.45mである。また，扉が東西回廊に1箇所，北面に2箇所設けられていたことが記されている。

回廊に関しては，講堂建物の変遷に関連してⅠ・Ⅱ期の遺構を明らかにすることができた。講堂Ⅲ期建物（11世紀後半）も回廊を有していることは明白であるが，遺構の上では検出し得ていない。また，康治2年（1143）に金堂が焼失した際，西南回廊も33間余り延焼しているので，12世紀半ばまで回廊は存在していたが，それ以後の記録はみられない。

7）その他の遺構

南面東回廊調査区で溝・土坑・鋳造土坑を，北面東回廊調査区で掘立柱建物・溝・土坑を，北面西回廊調査区で土坑・池などの遺構を検出した。

掘立柱建物

SB3714（Fig.104，PL.53－1）

北面東回廊調査区1の北端部で検出した。雨落溝SD3725を切る。建物の南柱列を検出した程度で，大半は調査区外の北側に延びるが，南北棟建

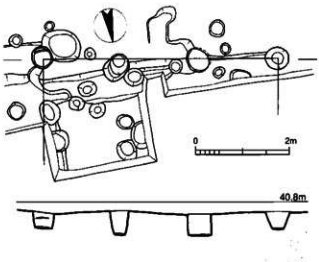


Fig.105　掘立柱建物SB3714実測図（1/80）

物になろう。梁行は3間（5.0m）で，柱間間隔は1.67mの等間。柱穴は円形を呈し，径0.38～0.5m，深さ0.5m前後を測る。

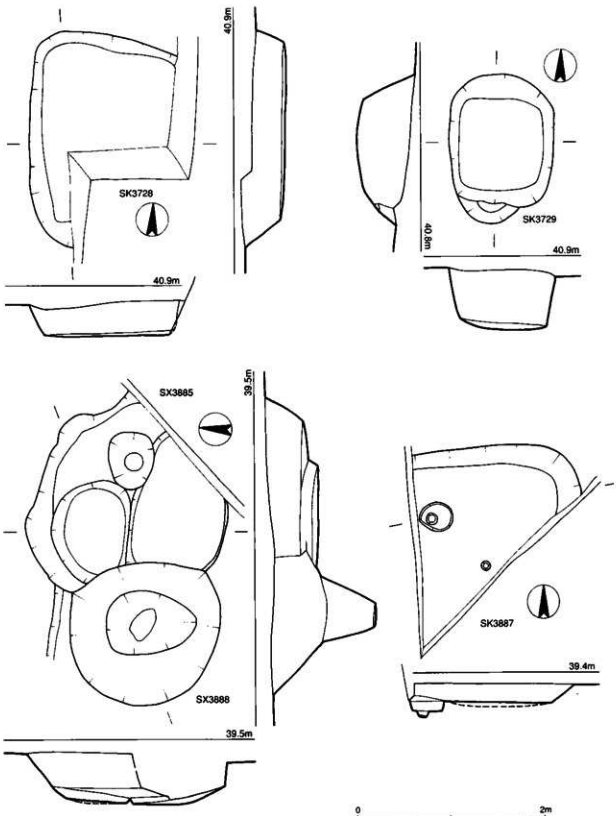


Fig.106　土坑SK3728・3729，瓦溜SK3887，鋳造土坑SX3885・3888実測図（1/40）

溝

SD3884（Fig.94）　南面回廊調査区Bの北側に位置し，鋳造土坑SX3885・3887を切っている。東西方向に走り，長さ4.6mを検出した。上面幅0.47m，深さ0.1mを測る。

SD3886（Fig.94）　南面回廊調査区A・Bの中程で検出した。北西－南東方向に走る溝で，東西は調査区外に進展する。上面幅0.45m，深さ0.13m。

SD3889（Fig.94，PL.58－3）　溝SD3886の1.3m北側に位置し，同溝と平行する。調査区幅での検出であるため詳細不明。上面幅0.54m，深さは9cmと削平が著しい。

土　坑

SK3728（Fig.105）　北面東回廊調査区1の北半部で検出した。平面形は隅丸方形を呈し，東壁は調査区外に延びる。南北長2.28m，東西検出幅1.54m，深さ0.46mを測る。この土坑は昭和32年の調査で確認されていた。

SK3729（Fig.105）　土坑SK3728の1.7m南側に位置する。当土坑も昭和32年の調査で掘り上げられていた。隅丸方形を呈し，長軸1.56m，短軸1.12m，深さ0.63mを測る。調査時の写真を見ると，土坑底面に南北方向に礎盤状の木質が遺存しており，掘立柱建物の掘方かとも思われたが，周囲に対応する穴は見あたらず，性格不明の土坑である。

SK3806（Fig.104，PL.57－2）　1期回廊礎石据付穴SX3810の西隣に重複して位置し，据付穴を切っている。不整形を呈し，検出長2.2mを測る。糸切り小皿，巴文軒丸瓦・剣頭文軒平瓦片などが出土した。

池

SG3809（Fig.101・102，PL.55－2・56－3）　本堂西側に位置する。S字形を呈する池で，護岸には花崗岩の自然石を2段程積み上げており，講堂・金堂の基壇化粧が一部転用されている。この場所には，かつて天智院と呼ばれる茶室が建てられており，茶室移転後の昭和26年頃に掘削されたものである。

鋳造土坑

SX3885（Fig.105，PL.60－2）　南面回廊調査区Bの北側で検出した。溝SD3884に切られ，SK3888と重複する。楕円形を呈し，南北軸2.04m，深さ0.54mを測る。底面には大小浅いピットがあり，埋土中からは焼土・炭とともに多くの鋳型片が出土した。

SX3888（Fig.105，PL.59－1・60－1）　溝SD3884に切られ，SK3885と重複する。上面は径1.6mの円形を呈し，底面中央がピット状に一段深くなっており，深さは1.1mを測る。埋土中からは鋳型片や人頭大の花崗岩が出土している。SX3885と一連の鋳造土坑で，製品を取り出した後，鋳型を投棄したものと考えられる。（小田）

註1　遺構検出段階ではS14と番号を付け，遺構台帳にはSD3886と記載した。また，北側の溝をS4と番号を付け，台帳にはSD3889と登録したが，概報での報告では番号が入れ替わってしまったので，今回は北側の溝をSD3889，南側をSD3886と訂正する。

(7) 僧 房

1) 概 要

福岡県教育委員会が観世音寺の調査に着手したのは，1970年に実施した太宰府史跡第5次調査からである。その後，第16次・20次・23次・38次・39次調査と実施しているが，何れも史跡現状変更に伴う調査であり，観世音寺の解明を目的とした計画調査ではなかった。それ以前，観世音寺の主要堂宇の調査は，昭和27年，昭和32年に発掘調査が実施されていたが，調査は部分的なものであり，個々の堂宇の解明には到底及ばないものであった。

近年，観世音寺周辺の公有地化が進捗し，発掘調査が可能な状況となったため観世音寺伽藍解明の手始めとして，僧房推定地の発掘着手に至った次第である。調査の結果，長大な礎石建物1棟，井戸3基，多数の土坑などを検出したが，遺構の遺存状況は悪く，西側は上方からの水流により撹乱を受けていた。しかし，礎石建物SB1080は規模・位置的に考えて大房に比定可能なものであり，伽藍調査の手始めとしては大きな成果を得ることができた。

大房建物

周辺地形 (Fig.107，PL.61)

現在，大房調査地周辺では環境整備が行われ，大房建物が復原・整備されている。大房は調査段階では礎石掘付穴の検出に留まったが，環境整備事業においては調査成果に基づいて建物基壇及び礎石を復原し，基壇上面には芝生を貼るなどの整備が実施されている。復原大房のすぐ北側には東西に小道が走り，太宰府天満宮～政庁～水城を結ぶ歴史の道として観光客の散策路ともなっている。

大房の北側には，四王寺山から派生した二つの丘陵が存在する。日吉山王宮が鎮座する丘陵（日吉丘陵）が北東方向にあり，北西方向には安養寺の丘陵が存在する。この二つの丘陵の基部には山の井池が築かれており，四王寺山からの谷水を堰き止めたものである。講堂の背面では黄白色粘土の地山を検出しており，本来，日吉丘陵から延びた丘陵突端部となる微高地上に伽藍中軸部は構築されているが，大房の西側は上方からの水流によって削平を受けていることから，伽藍の西側は谷水の流路となっていることが遺構の上からも窺える。

2) 土 層 (Fig.109)

土層堆積状況は，東西南北の4面で作成したが，堆積状況の良好な南壁で説明する。

土層は上層から①表土（厚さ10cm程），②暗褐色土（厚さ5～10cm），③暗茶褐色土（厚さ5～10cm），④茶褐色土（厚さ10cm前後）を基調とする。西半部は①～④層の下に灰茶色粘土（23層，厚さ15～25cm），黄褐色砂質土（26層，厚さ10cm前後），淡茶色砂質土（30層，厚さ10cm前後），暗茶色砂質土（29層，厚さ20cm程）などの砂層が堆積し，西端部は砂層の厚さが50cmにも及ぶ。

また，礎石据付穴は東半部での検出であるが，深さが20cmの遺存状況であり，基壇版築土は完全に削平されている。しかし，西半部においては，礎石据付穴すら遺存しておらず，鉄砲水的な強い水流があったものと思われる。

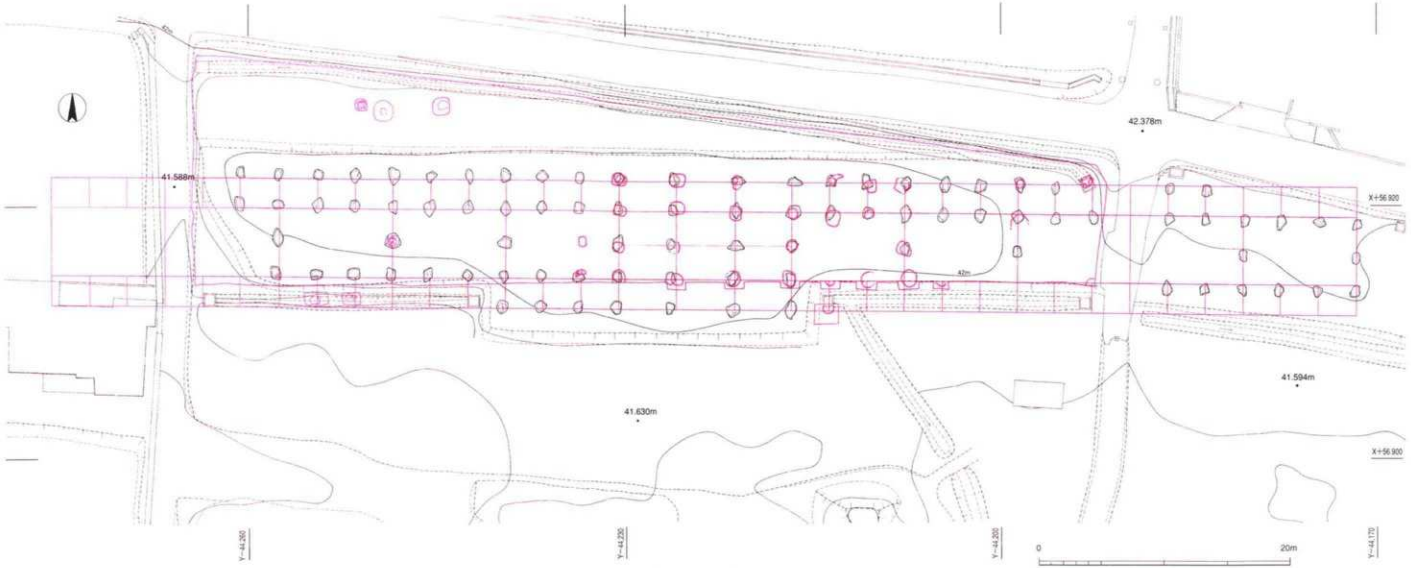


Fig.107　僧房周辺地形測量図（1/300）

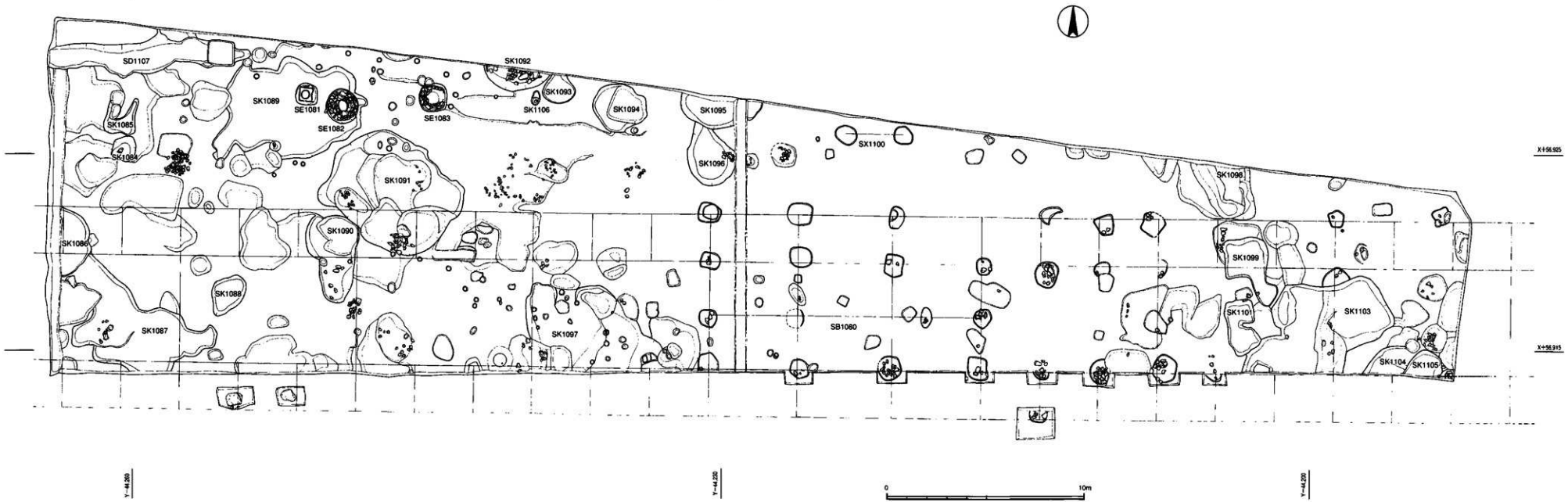
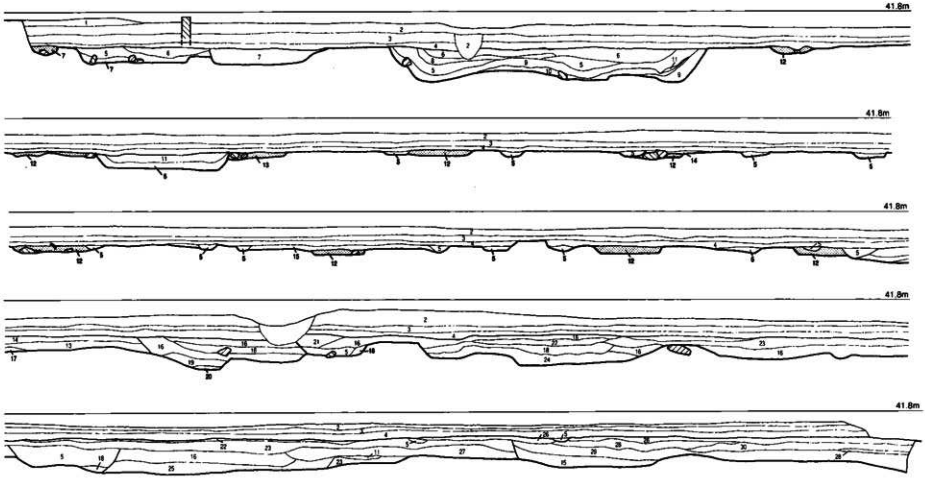


Fig.108 僧房調査区遺構配置図 (1/150)



1 表土
2 暗褐色土
3 暗赤褐色土
4 赤褐色土
5 暗赤灰色土
6 5に炭化物含む
7 灰色土
8 黒色土（灰、鉄滓含む）
9 暗灰色粘質土
10 黄灰色粘質土
11 黒色炭化物層
12 黄灰色土
13 暴灰色土
14 黄褐色土
15 淡赤灰色土
16 暗赤褐色土（3に似）
17 暗灰色砂質土
18 暗灰色粘土
19 暗赤灰色粘質土
20 青灰色砂質土
21 淡赤褐色土
22 赤灰色砂質土
23 赤灰色粘質土（瓦含む）
24 黄灰色粘質土（瓦含む）
25 暗褐色粘質土（瓦含む）
26 黄褐色砂質土
27 灰褐色土（炭化物含む）
28 灰色砂
29 暗赤灰色砂質土
30 淡赤灰色砂質土

Fig.109 調査区南壁土層実測図（1/60）

3）大房ＳＢ1080

SB1080（Fig.108・付図，PL.61～63）

基　壇

礎石建物なので，建物基壇が存在したと考えられるが，基壇に付随する地覆石・基壇化粧などの諸施設は削平を受けて全く留めていない。

礎　石（Fig.110，PL.63－2・63－3）

僧房建物に伴う礎石は，調査区の南西部で２個確認した。また，礎石据付穴は根石を置くなどして確りしているが，礎石自体は角礫状のものであり，しかも柱筋からずれているため創建当初のものではない可能性がある。

礎石１は南側柱の礎石で，平面形は方形を呈する。石材は花崗岩で，長さ80cm，幅62cm，厚さ40cmを測る。上面に明瞭な柱座はなく，20×30cmの平坦面がみられる程度である。礎石２は礎石１の2m東に位置する。三角形状を呈し，長さ80cm，幅56cm，厚さ24cmを測る。１同様，上面に柱座はなく，50×60cmの平坦面がみられる。

礎石掘付穴（Fig.110・付図，PL.62・63－1）　礎石据付穴は37個検出したが，根石が残っている３個を図示した。掘方は円形を呈し，長軸1.3m，短軸1.2mで，検出面からの深さは0.2mを測る。掘方の大きさは，側柱と身舎では大差ないことから，礎石の大きさも同規模と考えられる。根石として20～30cm大の角礫を入れていた。据付穴は地山面に掘り込まれており，礎石の厚さが判然としないものの，他の寺院の例からしても僧房基壇の高さはそれ程高くないものと思われる。

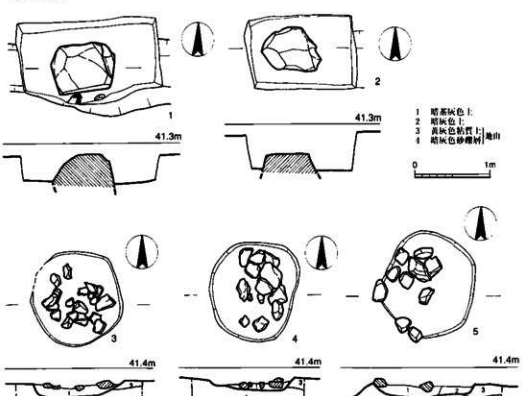


Fig.110　礎石建物ＳＢ1080礎石・根石実測図（1/50）

建　物

東西（梁行）方向に5列の礎石据付穴を検出した。また，南北（桁行）方向は，両端部とも調査区外に延びるが，17列の礎石据付穴を検出した。これにより，身舎梁行2間の南北両面に廂を設けた梁行4間×桁行19間以上の東西棟建物であることが判明した。

梁行の柱間は，南・北の鬼柱が2.4mで，身舎は2.7m等間であるため梁行10.2mとなる。桁行は伽藍南北中軸線が通る部分（中央間）が4.8mと最も広く，その両脇（脇間）が4.5mで，それ以外（外間）は3.0m等間を測る。また，中央間と脇間3間分は総柱となっているが，外間は3間ごとに身舎の柱を有することから，桁行3間を一単位とした空間とみなせる。講堂北鬼柱列から大房南鬼柱列までの距離は20.5mを測る。

「資財帳」には，僧客房章として大房一宇・小子房二宇・馬道屋一宇・客僧房二宇の合計6棟の建物が記されているが，各房の長さは大房が33間で，卅四丈二尺（102.6m），小子房は瓦葺建物が廿二丈八尺五寸（68.55m）で，板葺建物が十一丈（33m），瓦葺馬道屋が六丈二尺（18.6m），客僧房は檜皮葺屋・草葺屋とも四丈（12m）である。建物幅は大房の三丈五尺五寸（10.65m）を除き，大略一丈五尺前後なので，規模的にみて礎石建物SB1080は大房に該当すると考えられる。また，建物の間取りは，長暦元年（1037）の「年中修理来用途帳」によると，「大僧房東第三三間第四三間第五三間造作修理」とあり，「東第三の三間，第四の三間，第五の三間」と各部屋の間口が3間で一室を構成していたことが判る。このことから，桁行33間から中央間・脇間の3間分を引くと30間となる。これを間口の3で割ると10室となり，東西各5室づつ存在したことになる（Fig.111）。

東西各5室

以上から大房建物SB1080を復原すると，桁行33間，梁行2間の身舎の北側と南側2面に廂を設けたもので，建物全体としては桁行33間（103.8m），梁行4間（10.2m）の二面廂建物となり，東西に各5室の部屋（91.8㎡）を有する。『資財帳』の建物規模からすると長さにして1.2m長く，幅が0.45m短いことになる。

中央間に関しては，講堂背面の通路SX3780を僧房側に延長するとこの中央間のほぼ真ん中に至ることから通路である可能性が考えられ，通路は講堂から北門まで直線的に通じていたものと推察される。仮にこの部分が開案した一つの部屋であるならば，北門へ行くのに大房を大きく迂回しなくてはならないという非常に不便な状況が生じる。恐らく，庁招提寺僧房のように中央間部分は屋根が掛かった通路であった可能性が考えられ，左右脇間2部屋は何か別用途に使用したものであろう。

大房建物は，康平7年（1064）に火災で焼失するが，再建されており，今度は康和4年（1102）の大風で倒壊し，4年後の嘉承元年（1106）に再建されている。創建僧房をⅠ期，火災後に再建された建物をⅡ期，嘉承元年再建の建物をⅢ期とすると，大房建物SB1080が何時

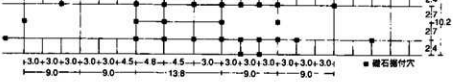


Fig.111　大房間取り復原図

の時期に該当するのか，建物規模でみた場合，規模を記しているのは『資財帳』のみなので如何ともし難い。しかし，SB1080の梁行方位は30分東に振れ，Ⅱ期講堂を基準とした伽藍中軸線が中央間の中心付近を通る格好となることから，今回検出した礎石建物はⅠ期大房と考える。ただ，付記にも記したように，礎石1・2は動いていることからⅡ・Ⅲ期何れかの再建時の礎石とみなしたい。また，『資財帳』には，大房以下，小子房二宇・馬道屋一宇・客僧房二宇の合計6棟の建物が記されているが，第43次調査区内においては，大房以外建物は検出できなかった。この点に関しては，北画築地の項で改めてふれたい。

Ⅰ期大房

『絵図』では，大房建物は学問所と記され，瓦葺単層入母屋造で，梁行2間，桁行43間の建物として描かれている。建物周囲には縁が巡らされ，中央に通路は存在しない。この『絵図』が何時の頃の大房を表したものか定かではないが，中央間も等間に描かれていることからⅠ期以降の建物を描いたものとしておく。

4）その他の遺構

僧房調査区では，柱列・井戸・土坑などの遺構を検出した。

柱　列

SX1100（Fig.116）　僧房建物中央北側に位置する。根石は見られないものの，礎石据付穴と考えられる。ただ，周囲に対になる掘方がないため柱列として報告しておく。掘方は径1m程の楕円形を呈し，心々距離は2.96mを測る。

井　戸

調査区の北西側で3基検出した。

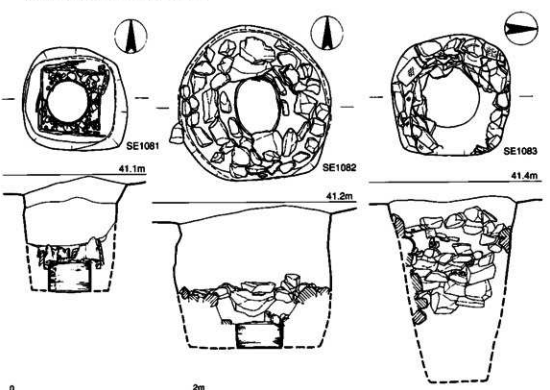


Fig.112　井戸SE1081～1083実測図（1/40）

SE1081（Fig.112, PL.64－1・64－2）　大房建物の5.5m北側で，土坑SK1089と重複するが，井戸の方が後出する。掘方は1.1mの隅丸方形を呈し，検出面から井戸底までは1.2mを測る。井戸底には径46cm，高さ28cmの曲物を据え，方形井戸枠で囲んでいる。井戸枠は幅62cm×長さ72cmで，各辺2枚の板材を立て，下端に桟を渡して補強していた。また，曲物と枠の間には5～10cm大の角礫を入れており，井戸水の汚れと曲物の浮き上がり防止を兼ねているものと思われる。曲物は二重に巻かれ，桜の皮で綴じられているが，上端のみは3箇所で綴じていた。

注目されることに，掘方埋土中から8世紀後半の須恵器・土師器の坏・皿類が一括出土している点である。埋土は堅く締まっており，井戸廃棄に伴う一括埋納とみられる。なお，井戸枠埋土中からは瓦片が出土した程度であった。

SE1082（Fig.112, PL.64－3）　SE1082の50cm東側に位置し，土坑SK1089と重複する。掘方は径1.6mの円形を呈し，検出面から井戸底までは1.5mを測る。井戸底中央には長径62cm，短径48cm，高さ24cmの曲物を据えているが，土圧のためか歪んでおり，楕円形を呈する。また，掘方と曲物との間には角礫を敷き詰めているが，曲物上端から40cmの比高差があり，上段の曲物は痕跡程度となっているものの曲物を2段据えていたと考えられる。井戸埋土中からは瓦片が若干出土している。

SE1083（Fig.112, PL.65）　大房建物の5m北側に位置し，SE1082とは3m東に離れている。掘方は隅丸方形を呈し，長軸1.28m，短軸1.25mを測る。検出面から1.5m掘り下げた時点で壁面が崩壊したため完掘に至らなかった。井戸枠は10～30cm大の角礫を積み上げたもので，石積みは5～7段遺存していた。上面から1.3mまでは石積みが見られるが，下半部には石積みがないことから曲物を2段程度置いていた可能性がある。埋土中からは多量の土師器・瓦類が出土している。掘方の周囲にはピットがあり，上屋とも考えられるが，まとまるものではない。これら3基の井戸は，設置場所・廃絶時期から館房に関連するものと考えられる。

土　坑

調査区の東半部と西半部にまとまるが，大半の土坑が建物を切っており，建物より後出する。また，西側は上方からの水流によって遺構面がかなり浸食を受けていた。

SK1084（Fig.113, PL.66－1）　調査区北西端で，大房建物の24m北側に位置する。隅丸方形を呈し，長軸1.3m，短軸1.15m，深さ0.15mを測る。埋土は青灰色粘土で，8世紀後半の土器が一括して出土している。

SK1085（Fig.113, PL.66－2）　SK1084に接して北側に位置する。不整形を呈し，北側は細くなっている。長軸1.86m，南辺幅1.62mの大きさ。削平により深さは10cm足らずである。埋土からは土師器糸切り小皿・坏が出土した。

SK1086（Fig.113）　調査区の南西隅に位置する。SK1087と一連の土坑と考えられるが，当土坑の底面が若干下がっているので別番号を付した。円形を呈するものと思われるが，西半部は調査区外にある。南北軸は3.5m，深さ0.28mで，底面はフラットである。

SK1087（Fig.113）　SK1086の南東に連なる土坑で，平面は不整形を呈する。長軸8.5m，短軸3.0m，深さ0.15mを測る。土坑の南壁寄りには礫・瓦がまとまって見られたが，浮いた状態であった。また，当土坑東側上層の黒灰土中からは白玉帯の蛇尾が出土しているが，土層的には水流による撹乱土である。

白玉帯の蛇尾出土

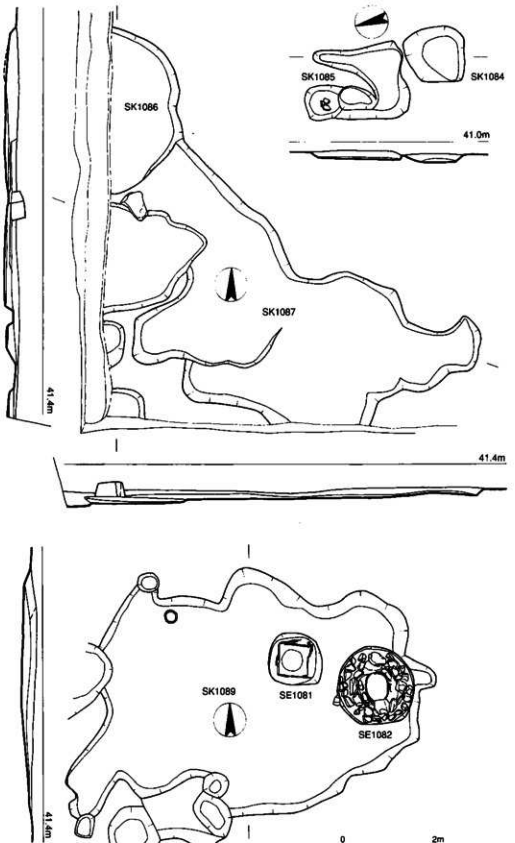


Fig.113 I:坑SK1084～1087・1089実測図（1/80）

SK1088（Fig.114）　SK1087の1.5m東側に単独で位置する。菱形を呈し，長軸2.34m，短軸1.58m，深さ0.2mを測る。

SK1089（Fig.113）　調査区の北西部に位置する。土坑の中には井戸SE1081・1082が存在するが，当土坑の方が新しい。壁面が波打った不整形を呈し，長軸6.8m，短軸4.7mの大きさ。底面は中央が若干下がるものの平坦で，深さ0.3mを測る。埋土には角礫が入っていた。

SK1090（Fig.114）　調査区の西側で，SK1091を切っている。楕円形を呈し，長軸4.42m，短軸1.8m，深さ0.12mを測り，北側が一段下がる。

SK1091（Fig.114）　SK1090の北東側に切られて位置する。平面形は隅丸方形を呈し，長軸7.7m，短軸6.95m，深さ0.5mを測る。全体として大きな土坑にみえるが，底面は起伏があり，小土坑が数基重複しているように思われる。また，土坑の南壁寄りには，僧房建物礎石と同じ大きさの四角い石（圖印，60cm×70cm，厚さ30cm程）と角礫が20個程あり，これらの石は動かされてはいるものの身舎部分の礎石・根石になる可能性が高い。

SK1092（Fig.114）　北半部が調査区外に位置するため詳細は不明であるが，検出長3.45m，深さ0.25mを測る。土坑内には角礫が入っていた。

SK1093（Fig.114）　調査区の北西で，SK1092のすぐ左に隣接する。円形を呈し，北端は調査区外に延びる。東西軸1.68mで，深さは10cmと浅い。

SK1094（Fig.114）　調査区の北側中央で検出した。不整円形を呈し，長軸2.8m，短軸2.5m，深さ0.46mを測り，東側は一段深くなっている。

SK1095（Fig.115）　調査区の中央北端に位置し，SK1096を切る。円形を呈するが，北半は調査区外にある。径4.15m，深さ0.46mを測る。

SK1096（Fig.115）　紡錘形を呈し，北端をSK1095に切られる。残長3.0m，幅2.5mで，深さは8cmと削平が著しい。東壁側には瓦・礫の集積が見られた。

SK1097（Fig.115）　調査区中央南壁側で検出した。北壁側と南壁側は攪乱坑に切られる。不整形を呈し，長軸4.7m，短軸3.0m，深さ0.3mを測る。底面は平坦で，ピットが掘り込まれている。

SK1098（Fig.116）　調査区の北東側で検出した。隅丸方形を呈し，幅3.56mを測る。北半部が調査区外にあるため長さは不明。底面中央が溝状に深くなっている。

SK1099（Fig.115）　調査区の東端部で検出した。SK1099・1101～1103は一群の土坑で，遺物が出土している土坑にのみ番号を付した。SK1099は北西の土坑で，隅丸方形状を呈する。長軸3.7m，短軸2.2m，深さ0.2mを測る。

SK1101（Fig.115）　西側の土坑で，SK1102を切っている。長軸2.8m，短軸1.5m，深さ0.3mを測る。埋土中から土師器糸切り小皿が出土している。

SK1102（Fig.115）　SK1099・1101・1103に切られる。残長1.9m，深さ0.2mを測る。

SK1103（Fig.115）　南側の土坑で，SK1102を切り，SK1101とは重複しているが前後関係は不明。不整方形を呈し，検出長8.1m，短軸4.6m，深さ0.5mで，東側が一段深くなっている。埋土中から土師器と青磁片が出土した。

SK1104（Fig.116）　調査区の南東端に位置し，SK1105に切られる。楕円形を呈するようであるが，南半部は調査区外に延びる。また，北壁側は一段深くなっている。

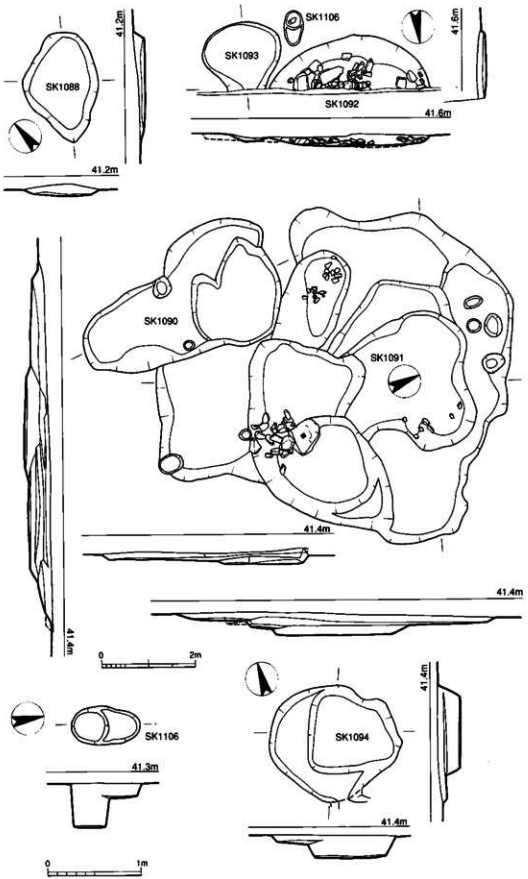


Fig.114 上:坑SK1088・1090～1094 (1/80), SK1106 (1/40) 実測図

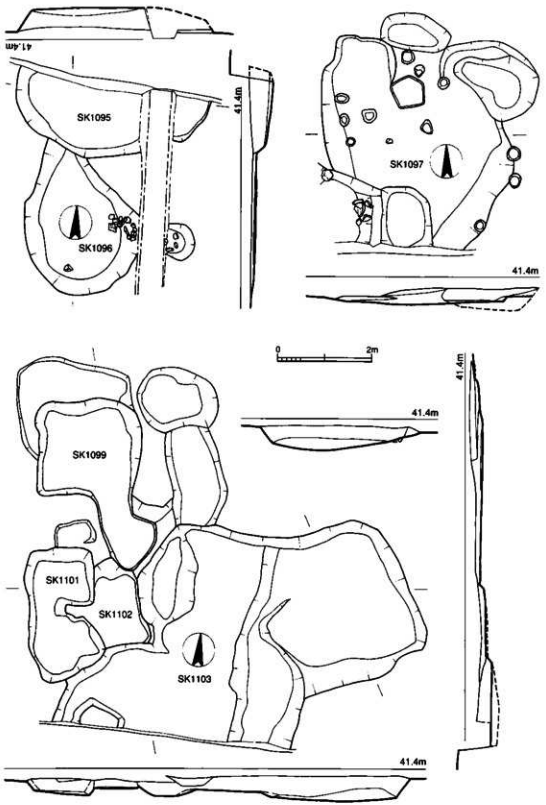


Fig.115　土坑 SK 1095～1097・1099・1101～1103実測図（1/80）

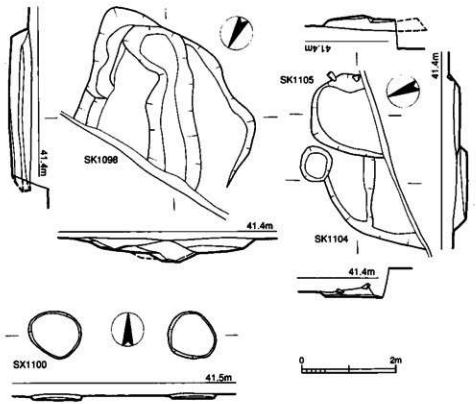


Fig.116　土坑SK1098・1104・1105，SX1100実測図（1/80）

SK1105（Fig.116）　SK1104を切って東側に位置する。楕円形を呈するが，南半部は調査区外にある。検出長1.4m，幅1.7mで，深さは12cm程。

SK1106（Fig.114）　調査区の中央北側で，SK1093の南側に位置する。土坑としたが形状的には柱穴で，北側にはテラスを有する。楕円形を呈し，長軸0.74m，短軸0.4m，深さ0.46mを測る。埋土中からは8世紀後半の土師器が出土しているものの，何を意図して埋置したのか不明。（小田）

註1　観世音寺の正式報告にあたっては，調査箇所全ての遺構実測図・上層図の見直し及び検討を行った。第43次調査箇所推定地もまた例外ではない。前回の報告では桁行中央間を17尺（5.1m）としていたが，礎石据付穴下場中央で柱配置を検討した結果，中央間を16尺（4.8m）とした。今回の正式報告書でもって最終見解とする。

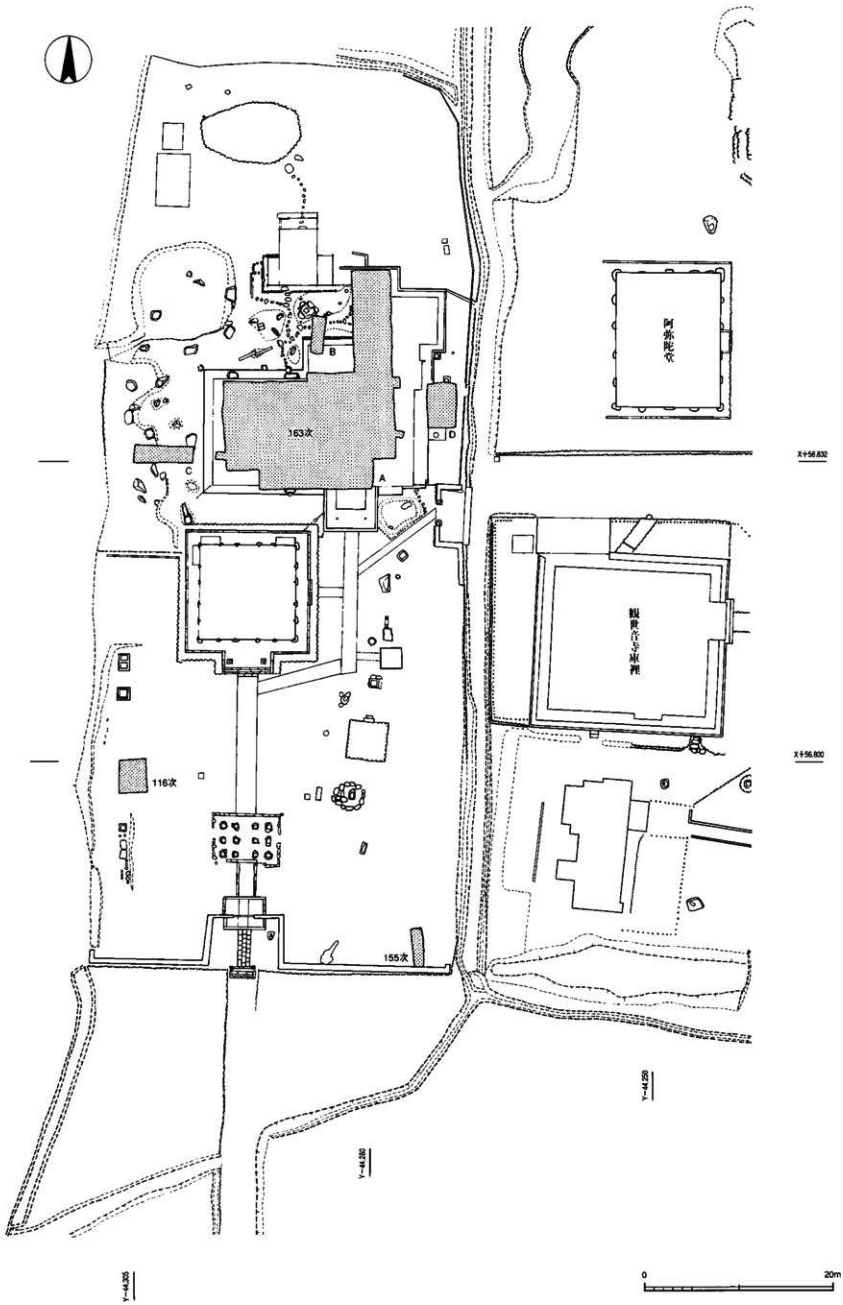


Fig.117　戒壇院周辺地形測量図（1/400）

（8）戒壇院

1）概　要

戒壇院の庫裡は，太宰府役場の庁舎として使用されていた建物を昭和36年に移築したもので，かなり老朽化が進んでいたが，加えて北部九州に猛威をふるった平成３年の台風17・19号により屋根が損壊したため庫裡改築の現状変更申請が提出された。これにより，文化庁から発掘調査の指示があり，太宰府史跡第163次調査として平成６年に発掘調査を実施した。調査箇所は戒壇院本堂の裏手にあたる。

戒壇院に関する調査としては，第115次調査として南面築地前面域の調査を行った程度で，境内地においては第116次調査として墓碑建立に伴う事前調査を行ったのみである。『資財帳』によると戒壇院には，「檜皮葺堂」と「板葺礼堂」の２棟の建物があり，建物は「築垣」で囲繞され，築垣には東西二つの門があったことが記されており，今回が戒壇院境内地の本格的な調査ということで，古代の戒壇院に関わる遺構の検出が期待された。

戒壇院の本格的な調査

調査の結果，江戸時代の礎石建物，石組溝，井戸，池などが検出された。礎石建物は戒壇院の庫裡にあたるが，元禄期の戒壇院復興に関わる貴重な遺構であり，礎石据付穴・石組溝・井戸などにはマサ土を入れて養生し，新築庫裡建物の建設工事に際しては，下の遺構に影響を与えないように地上げした後，建物建設が進められた。

周辺地形（Fig.118，PL.）

現在，戒壇院と観世音寺との境には，南北に小道が走っており，戒壇院側は竹垣で囲まれている。南面の築地には門が開き，参道が南に延びている。参道の東側は公有化が終了し，公園として整備されているが，参道の西側から北側にかけては田畑が広がっており，観世音寺前面の県道以南の住宅街とは趣を大きく異にしている。

2）土　層

建物部分の層序は，上層から①黒色土（表土，10～30cm），②黄灰色砂質土（10cm程），③赤橙色土（5cm前後），④焼土・炭層，⑤褐色土（10～40cm），⑥暗褐色土（10～30cm），⑦灰褐色包含層（20cm程），⑧黄褐色整地層であった。④層の焼土・炭層は礎石建物SB4180Aの火災に伴うもので，SB4180Cは②・③層による整地を施し建てている。また，⑤・⑥層は締まりの無い層で，⑤層には江戸期の瓦が含まれている。⑦層も締まりのない土質であるが，平安期の瓦を多く包含していた。⑧層は奈良時代の整地層で，瓦組暗渠SX4191はこの層に埋設されている。

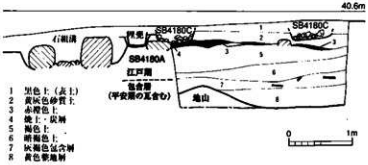


Fig.118　土層模式図（1/60）

Fig.119　成相院調査区遺構配置図（1/150）

Fig.120　礎石建物SB4180実測図（1/80）

3）礎石建物 SB4180

調査区内には，昭和期の庫裡のコンクリート基礎，明治期の庫裡の礎石，江戸期の礎石据付穴が同一平面上で重複し，渾然一体の様相を呈していた。昭和期のコンクリート基礎に関しては，先ず平板測量を行い，柱の位置関係を押さえた上で除去した。

江戸期の礎石建物は，古い方からA・B・Cと番号を付した。SB4180Aは火災により焼失しており，火災後の再建建物がSB4180Bであり，その後SB4180Cに改築されている。年代的には，SB4180Aが17世紀末～18世紀前半で，SB4180Cが18世紀後半～19世紀後半で，SB4180Bが両者の間に収まる。ここでは，江戸期の建物のみ報告する。 江戸期の庫裡

SB4180A（Fig.120，PL.69）

基　壇

SB4180Aは焼失建物であり，石組溝SD4175の上面も火熱により黒変していることからA建物に伴うものと判断した。乱石積基壇で，北辺は石組溝SD4175の南壁として共用している。石組溝の長さは10mを測るが，基壇全体の規模は改築されているため詳細不明。 焼失建物

石組溝

SD4175A（Fig.120・121，PL.70－1）　建物基壇の北辺を構成する花崗岩の石組溝である。A・B2時期あるが，A溝がSB4180Aに伴い，B溝がSB4180Cに伴う。石組の長さは南壁側が10m，北壁側は6.3mで，幅は東側が0.36m，西側は0.42mとやや西側が広い。溝底は西側から東側に緩やかにドがり，観世音寺側に排水している。南壁の西側では20～40cm大の割石を2段積み，東側では50cm大のやや大振りの石を1段積んでいるが，石組は礎石上面よりも10～15cm高いことから東側は積み直しが考えられる。また，西側には階段SX4183を設けている。埋土中には17世紀末～18世紀前半代（A溝）及び18世紀後半～19世紀後半代（B溝）の陶磁器が含まれている。

礎　石

礎石5個と礎石据付穴3個を確認した。礎石1・3・5・8は40cm×50cm程の大きさで，扁平な花崗岩を用いているが，礎石2は長方形の切石で，20cm×35cmの大きさである。また，礎石7－8間には地覆石が2個遺存している。

建　物

上層の礎石据付穴を残した状態で，礎石が想定される箇所にあたりを付けて掘り下げたため建物の全体像を正確に把握できたか些か不安が残るが，平面は桁行2間×梁行2間の東西棟建物に復原した。柱間は桁行が3.0m等間で，梁行は2.1m等間である。

また，礎石3の2.3m南側には，礎石と同じレベルで南北に石が2個存在する。福岡市東長寺所蔵の戒壇院関係文書に戒壇院周辺を描いた絵図（17世紀末頃）があり[11]，それによると戒壇院本堂建物の背面に常住（庫裡）が描かれ，両者は渡り廊下で繋がっている。先の石を渡り廊下に関連する礎石と考えると，この部分に廊下を想定できる。 渡り廊下

瓦　敷

SX4194　礎石8の西側で検出した。SB4180B礎石据付穴に北西隅部を切られる。1.3m四方に瓦を敷き詰めたもので，石下も見られた。瓦敷の北辺は桁側中央柱列までで，西辺は梁側西

塔柱列から1.5mの箇所に瓦を立てて埋設していることからこの箇所までであるが，南辺の範囲は判らない。瓦敷の性格としては，戸口前面の舗装になるのであろうか。

SB4180B（Fig.120，PL.68）

基　壇

基本的にSB4180A基壇を踏襲したものであるが，西側と南側に6m程拡幅している。SB4180Aの焼失面に黄灰色砂質土による整地を施し，20cm程かさ上げした後，礎石据付穴を掘っている。SB4180C建物と重複するため基壇規模はつかめていない。

礎　石

SB4180Cと同一面で重複するが，礎石据付穴の遺存状態は当建物の方が悪いことから時期的にSB4180Cより先行するものと考えられる。礎石は全く留めておらず，礎石据付穴を9個検出したのみである。据付穴の掘方は径50～60cmの円形を呈し，中には5～10cm大の礫・瓦片を詰めて根石としていた。

建　物

礎石据付穴の遺存状態が悪いため建物の詳細は明らかではないが，残存する据付穴からみて梁行4間（6.9m）×桁行4間（9.3m）規模で，建物南面に幅1.3mの廂を設けた建物を想定している。また，戒壇院本堂へ繋がる廊下が想定されるが，取付き箇所・規模など確認し得ていない。

SB4180C（Fig.120，PL.70－1）

基　壇

SB4180B建物同様，SB4180A基壇を踏襲したものである。北辺は石組溝SD4175南壁を利用し，石組西端から5.4m西側に拡幅しており，基壇北西隅及び西辺には平瓦を立てている。東辺は東側柱列から1.1m東側に2段の石列を構築し，南端部に階段SX4182を設ける。南辺には石組を施しておらず，素掘りの雨落溝SD4184が存在するのみである。これにより，基壇規模は東西14.1m，南北10.4mに復原できる。

階　段

SX4182（Fig.121，PL.71）　東辺基壇の南側で，礎石据付穴12－14間に付設する。石積みが礎石据付穴12を切っていることから，礎石を据えた後に階段を築いたものと考えられる。基壇石積み5個を奥にずらして踏面を設けた一段の階段である。階段幅133cm，踏面40cm，蹴上げ26cmを測る。

SX4183（Fig.121）　礎石据付穴3の北側は，石組溝の石列を90°南に曲げており，この部分を階段と判断した。遺存状態は良好ではないが，階段幅125cm，一段目の蹴上げ20cm，踏面30cmで，石段は2段設けていたものと考えられる。また，石組溝SD4175の北壁が階段部分で途切れていることから，北側に通路が想定される。

雨　落

SD4184（Fig.120）　SB4180Cに伴う基壇南辺部の雨落溝で，廂部分の礎石から0.9m南側に設けている。南東隅部は弧を描いており，一部未掘となったが，石組溝SD4185に繋がるもの

と思われる。埋土中には砂層の堆積がみられたが，南壁の立上りを確認しなかったので溝状を呈するかは不明。長さ10.3mを確認した。

石組溝

SD4175B（Fig.121，PL.70－1）　SD4175Aを再利用した溝で，東側に溜枡遺構SX4177，東端には土管を使用した排水施設SX4174を，中央には階段SX4183を設けている。SX4174の敷瓦はSD4175Aが10cm程埋まった段階で敷いていることから，SD4175Bは礎石建物SB4180Cに伴うものと考えられる。

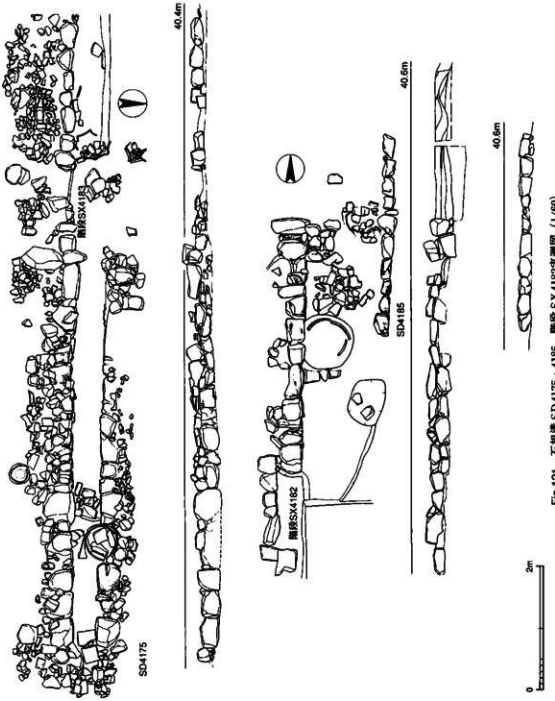


Fig.121　石組溝 SD4175・4185，階段 SX4182実測図（1/60）

SD4185（Fig.121，PL.68－2）　調査区の東端部で検出した石組の南北溝で，北端はSD4175Bに繋がる。SB4180C基壇から65cm東側に基壇と平行して設けている。溝の規模は未確認であるが，東側に丸瓦を並べた配水施設SX4173があり，当溝側に排水していることから溝の幅は90cm程になろう。石列は20cm×30cm大の花崗岩を11個一段並べたもので，長さは3.2m遺存する。また，上面が焼けている石がみられることからSB4180A基壇積石を再利用したことが窺える。

排水施設

SX4173（Fig.122，PL.68－2）

調査区の東側で検出した。石組溝SD4185に排水したもので，丸瓦を東西に2個繋げている。西端は花崗岩割石を3個据えているが，東側が調査区外であるため規模は不明。

また，奥村玉欄編著の『筑前名所図絵』（1821年成立）によると，庫裡の東隣にも建物が描かれており，この建物に関連した排水施設と考えられる。

SX4174（Fig.122，PL.70－2）

石組溝SD4175Bに伴う排水施設である。石組溝の東端部から東に8mまで確認したが，さらに東側に延びている。施設は平瓦と土管を組み合わせており，平瓦部分は水が東側に流れるように平瓦3枚を重ねて土管に繋げている。

土管は長さ60～70cm，径15cmの大きさで，上管の繋ぎ目には瓦当面を打ち欠いた軒丸瓦や平瓦を被せており，敷瓦から1.1m東側部分から暗渠であったものと考えられる。

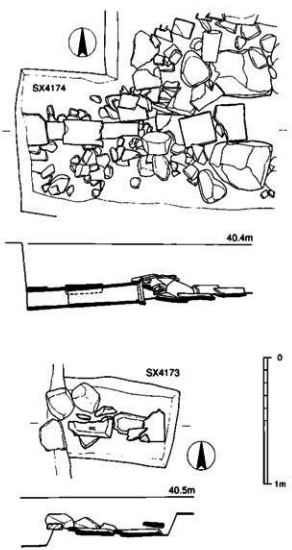


Fig.122　排水施設SX4173・4174実測図（1/30）

溜桝状遺構

SX4172（Fig.123，PL.71－1）　SB4180Cの基壇東辺石列に接しており，掘方は石列に切られる。掘方径85cmで，深さは僅か10cmの遺存状況であった。枠として平瓦3枚を立てているが，復原すると5枚になる。枠の復原径は70cmであろう。なお，瓦の下端部には径3cmの穴が穿たれており，この部分を結束していたものとみられる。

一応，溜桝状遺構としたが，繋ぎ目の防水処理を施さないと水漏れを起こすので，液体を溜めたものではないと思われるが，遺構の性格は判らない。

SX4177（Fig.123，PL.73－1・73－2）　石組溝SD4175Aの北壁石列を一部除去して構築している。埋設状況からSD4175B・排水施設SX4174と一連のものと考えられる。掘方は径65cmの円形を呈し，深さは50cmを測る。上部は6枚の平瓦を枠として立て並べ，下部には径45cm，深さ25cmの木桶を埋置するが，腐食が著しく底板5枚と鋼板の一部を残す程度である。枠内には人頭大の石が3個投げ込まれており，裏込埋土は暗灰色粘質土であった。

また，平瓦には「楼門元禄十四年孟夏立
戒壇忩翁惠灯照代」
の文字が二行に刻印されている。戒壇院の楼門は，現在は礎石だけとなっているが，寛政5年(1793)に完成した『筑前国続風土記附録』の挿絵や奥村玉欄編著『筑前名所図絵』には描かれている。銘文は楼門が夏に建立されたこと，その時の戒壇院の僧侶が惠灯（運照慧燈）であったことを示す貴重な資料である。

楼門は元禄十四年建立

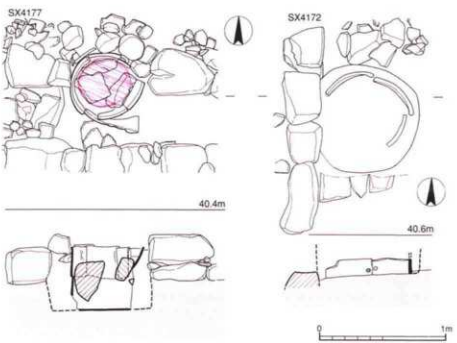


Fig.123　溜桝状遺構SX4172・4177実測図（1/30）

礎石

建物に伴う礎石は全く遺存しておらず，礎石据付穴が23個みられるだけである。礎石据付穴の掘方は径80cmの円形を呈し，中には5～10cm大の礫・瓦片を詰めて根石としている。

建物

桁行5間（12.0m），梁行4間（7.0m）の東西棟建物で，南側に廂を設けている。礎石が遺存していないため正確な柱間は測り得ないが，桁行は両端が3mで，間3間分が2mとした。梁行は北側から2.1m，1.7m，1.5m，1.7mとした。廂部分は南桁側柱列から1.1m南で，中の間3間分に設けている。

『筑前名所図絵』によると，戒壇院本堂背面から渡廊下が庫裡に延びていることから廂部分に廊下が取り付くものと考えられる。また，庫裡建物の右側にも小さな建物があり，塀で繋がったように描かれている。階段SX4182は庫裡建物からこの建物へ往き来する通路であったこ

とが知られる。

礎石据付穴

SX4192（Fig.120）　SB4180A礎石据付穴4－5間に位置する。掘方の中には角礫・瓦片が入っており，礎石据付穴と考えられるが，対応する穴が見当たらない。或いは，SB4180Cの床束礎石の据付穴になるか。掘方は径60cmの大きさを測る。

4）その他の遺構

A区北側で溝・池・埋甕・埋桶，C区で溝などの遺構を検出したが，礎石建物に関連する遺構は建物の北東側に位置している。

溝

SD4186（PL.72－2）　調査区の北側にあり，礎石建物SB4180Aに伴う黄褐色砂質土の整地層を掘り下げて検出した。南端は石組溝SD4175Aに切られており，長さ6.2mを検出したが，西側は調査区に延びる。幅10～17cmの矢板を打ち込んで護岸としており，矢板の北端は西側に折れ曲がっている。裏込内からは「□□十七年」銘の軒丸瓦が出土しているが，埋土中からは17世紀後半代の染付が出土していることと，SD4175Aに切られることから軒丸瓦の銘は「寛永一七年」としておく。

SD4187（Fig.124，PL.75－1）　C区中央で検出した。溝SD4188埋没後に掘削された南北溝で，上面幅0.4m，深さ0.28mを測る。東岸には10～20cm大の花崗岩を並べて護岸としている。埋土中から江戸時代の遺物が出土しているが，SB4180Aより60cm程下がっており，礎石建物より古い時期のものと思われる。

SD4188（Fig.124，PL.75－2）　C区で検出した南北溝で，大半が調査区外に延びるため詳細は不明。上面幅3.55m，深さ0.3mを測る。埋土は締まりのない灰褐色土で，平安期の瓦が多量に出土している。

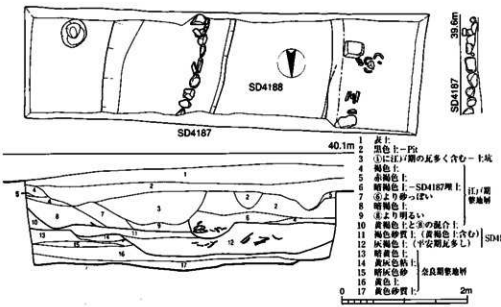
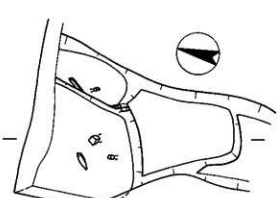


Fig.124　溝SD4187・4188実測図（1/60）

SD4189（Fig.126，PL.72－1）

石組溝SD4175南壁の3.5m北側で検出した東西溝で，溝SD4186と池SG4190に切られる。B区でも検出しており，長さは8.4mまで確認した。上面幅1.3m，底面幅0.43m，残存高0.53mのしっかりした溝で，埋土中からは土師器糸切り坏と鬼瓦片が出土している。



井　戸

SE4195（Fig.125）　調査区の北端で検出した。北半部は調査区外に延びるため詳細不明。井戸枠そのものは遺存していないが，枠を固定していたとみられる角柱が打ち込まれていることから井戸とした。検出幅1.55m，深さ0.8mで，掘方南側にはテラスを有する。テラスは井戸枠抜き取りの際に掘ったものか。埋土中からは「戒壇院」銘木簡が出土している。

Fig.125　井戸SE4195実測図（1/40）

「戒壇院」銘木簡

池

SG4190（Fig.126，PL.72－2）　石組溝の3m北側に位置し，東西溝SD4189を切っている。東半部は調査区外に延びているが，隅丸方形ないしは長方形を呈するものと思われる。上面での長さ3.34m，検出幅1.92m，深さ0.67mを測る。埋土中層及び下層には植物遺体が厚く堆積し，滞水していた状況が窺える。埋土からは「東林寺」と寺名を記したものや「マルヒャタム」と記した木簡の他に，漆塗椀・杓文字・下駄などの豊富な木製品が出土した。また，当遺構からも江戸時代の記念銘軒丸瓦（「□□十七年」銘）が出土している。

豊富な木製品の出土

Fig.126　溝SD4189，池SG4190土層実測図（1/60）

暗　渠

SX4191（Fig.127，PL.75－3）　A区の西南隅部下層で検出した瓦組暗渠である。地山直上で行基式丸瓦3個と玉縁を打ち欠いた丸瓦1個を東西方向に長さ1.95m分繋げている。西側が東側より8cm低くなっており，瓦の組み合わせ的にも西側に排水している。暗渠の西側をC区と

瓦組暗渠

して拡張したが瓦列は連続しておらず，これに接続する溝などの遺構も確認していない。また，暗渠の掘方が検出されなかったことから整地と同時に埋設したものと考えられる。

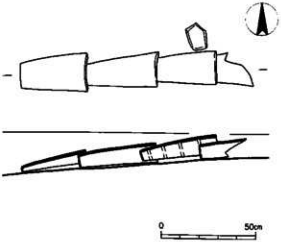


Fig.127　暗渠SX4191実測図（1/20）

埋　甕

建物基壇内で1基，建物の北側で2基検出した。

SX4176（Fig.128）　SB4180Cの北東隅柱のすぐ北西側で検出した小型の埋甕で，SD4175Aの掘方を切って埋設されている。掘方は円形で，径0.34m，深さ0.2mを測る。甕は瓦質のもので，埋土中には炭・灰が入っていた。

SX4178（Fig.128，PL.73－3）　暗渠SX4174の北側で検出した。掘方は円形を呈し，径0.4m，深さ0.2mを測る。瓦質の甕を埋設しているが，北側に傾いている。甕は下半部が水平方向に割れているが，その部分には黄橙色粘土で目張りを施していた。

SX4179（Fig.128，PL.74－1）　埋桶SX4181の東隣に位置する。掘方は楕円形を呈し，長軸1.0m，短軸0.76m，深さ0.35mを測る。掘方の南側に陶器甕の下半部のみ一段掘り窪めて埋置する。甕の上半部は削平により失われている。

埋　桶

SX4181（Fig.128，PL.74－2）　埋甕SX4179の西に並列して位置する。掘方は楕円形を呈し，長軸0.85m，短軸0.72m，深さ0.22mを測る。小判形の桶を掘方の中心に掘えている。桶は長径34cm，短径29cmで，高さ10cmと腐食が著しい。底板は2枚数える。SX4179とセットをなし，トイレ遺構であろうか。

埋甕・埋桶はトイレか

（小田）

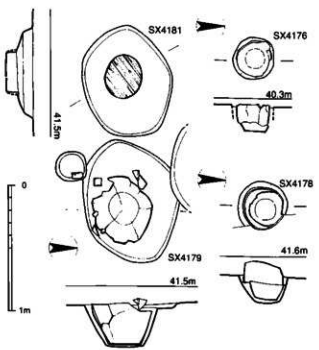


Fig.128　埋甕SX4176・4178・4179，埋桶SX4181実測図（1/30）

註1　八尋和泉編　九州の寺社シリーズ13「筑前太宰府成境院」　1994　九州歴史資料館

Fig.129　南面築地周辺地形測量図（1:200）

(9) 築　地

1) 概　要

観世音寺の堂宇は，南門から左右に延び北門へ繋がる方形の築地塀によって囲繞されている。『資財帳』によると南面・北面築地の長さは57丈（171m）で，東面・西面築地の長さは65丈（195m）とある。南門推定地を基準として築地の推定線を割り出し，寺域周辺部の調査においては築地遺構の検出を目指した。

南面築地に関係する調査としては，第109次・115次・122次・130次・155次調査があり，東面築地に関係する調査としては，第45次・66次・119次・121次調査がある。北面築地に関しては第70次・78次・120次調査があり，西面築地に関しては第68次調査を実施している。調査の内容については，それぞれの築地の項目でふれる。なお，遺構番号は南面築地がSA3880，東面築地がSA1260，北面築地がSA1860，西面築地がSA1290とした。

周辺地形（PL.2）

現在，観世音寺境内地から戒壇院境内地にかけては，楠・公孫樹などの樹木が茂り，一種の森と化した状態である。推定築地の周辺には田畑が広がっているが，県道筑紫野古賀線以南は住宅地となっており，田園都市の風情を醸し出している。大房跡は公有化され史跡整備がなされているが，境内地は私有地と言うこともあり，手つかずの状態である。

僧玄昉の墓

また，大房の西側には観世音寺の造営に深く関わった僧玄昉の墓がある。墓は玄昉の嗣塔と伝承されるが，宝篋印塔を刻出した板碑で，形式的に南北朝頃の製作とみられている。

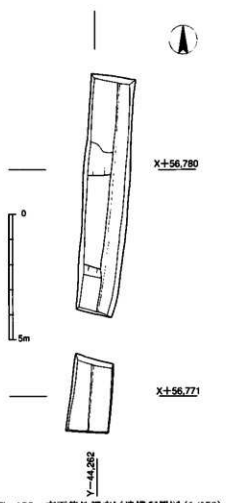


Fig.130　南面築地調査区遺構配置図（1/150）

2) 南面築地SA3880

調査区の設定

南面築地の調査は，第130次調査の一環として実施した。南門推定地の西側には，東西方向に延びる幅6m，高さ1m程の土塁状の高まりがある。この高まりは，戒壇院の築地塀とほぼ同一線上にあり，南面築地の痕跡ではないかとする見方があった。今回は，この高まりが築地の痕跡であるかを見極めるため測量調査の後，伽藍南北中心線から西側へ37mの地点で高まりを横断する形で南北にトレンチを設定し掘り下げた。

土塁状の高まり

土 層（Fig.131，PL.76－2・3）

Fig.131の土層図によると，1～5層が高まり本体以外の堆積土で，茶褐色土を基調とし，最下部には灰青色粘土が堆積していた。6～9層が本体の積土で，大きく二層に分層でき，上部が灰褐色土（⑥層，厚さ20～40cm），褐色土（⑦層，厚さ25～45cm），茶褐色土（⑧層，厚さ25cm）で，最上層の灰褐色土は粉っぽい土質で，瓦を含んでいた。中間の褐色土層は締まりがみられるものの土師器糸切り皿・坏が包含されている。下部は黄褐色土（⑨層，10～45cm）と灰黄褐色土（⑩層，厚さ30cm程）で，ともに粘性を有し，若干であるが奈良時代の瓦が含まれる。11～15層は灰青色粘砂と青灰色粘土を基調とする整地層で，12～15層は本体積土以前の整地層である。11層は本体積土以後の整地層になる。

以上の如く，この高まりの土層の状況は版築によるものではなく，盛土ということが判明した。また，比較的良好であった下部の土層状況は，奈良時代の整地層であり，直接南面築地に関わるものではないと判断される。

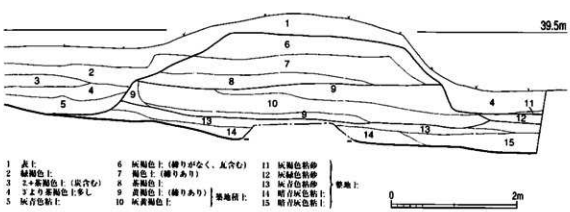


Fig.131 南面築地土層実測図（1/60）

SA3880（Fig.129・132，PL.76-1）

南面築地と推定された高まりは，長さ37m，幅6.5m，高さ0.95mの大きさであるが，断ち割った結果，版築土層ではなく，後世の盛土であることが判明した。また，南門地区の調査では，礎石抜取り穴２個と礎石の位置から門建物を復原した。通常，築地は門建物の棟縁中央に取り付くので，築地を復原すると高まりから６m南の位置に想定される（築地推定線B）。

高まりは後世の盛土

第109次調査では，築地推定線Bの２m南側にそれと平行する形で東西溝SD3149を検出しており，第115次調査でもこの溝に接続すると考えられる東西溝（SD3340）を確認した。また，第109・111次調査検出の南北溝SD3200は参道の西側溝的性格の溝であるが，北端が築地推定線Bの２m手前で終焉している。時期的には，何れの溝も14世紀代の埋没ではあるが，築地の痕跡がその場所に存在したが故に溝も規制を受けたものと推察される。

なお，『資財帳』では，「南長伍十柒丈瓦葺」とあり，南面築地は長さが57丈（171m）で，瓦葺であったことが知られる。『絵図』では，南門棟縁中央に取り付く瓦葺の築地が描かれている。戒壇院の西辺は伽藍南北中心線から85.7mの距離で，丁度南面築地の長さの半分に該当し，現状では戒壇院境内地と水田とは１m程の比高差を有している。

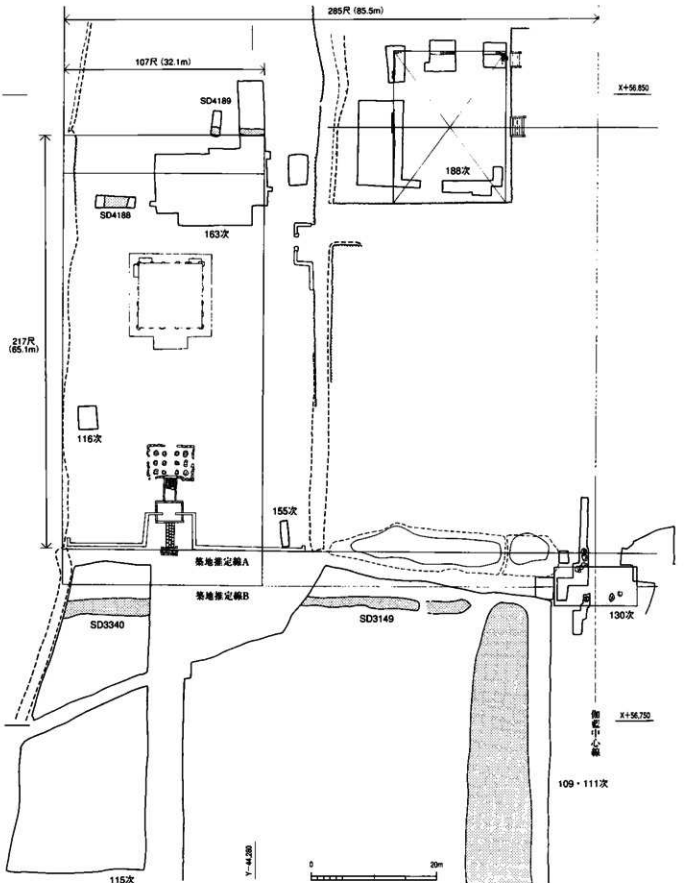


Fig.132　戒壇院南面築地関係図（1/600）

3）東面築地 SA1260

東面築地に関係する調査としては，第45次・66次・119次・121次調査がある。第45次・119次調査は，観世音寺伽藍解明を目的とした計画調査で，東面築地の検出が期待されたが，築地遺構は遺存していなかった。第66次調査は住宅建替えに伴う現状変更であるが，顕著な遺構は検出されなかった。第121次調査は東面築地及び寺域内の付属施設の検出を目的とした計画調査である。調査の結果，8世紀後半の掘立柱建物3棟，櫛2条を検出した。ここで注目されるのが南北方向の櫛 SA3625である。これについては，次項でふれたい。

櫛 SA3625（付図）

SA3625は推定中軸線から東に84.8mの箇所で，長さ30.1m分を検出した。溝 SD3630に切られ，著しい削平を受けるが，柱掘方を12個確認した。柱掘方は方形を呈し，一辺50cm程の大きさで，深さは30cm前後である。柱痕が残っていないため正確な柱間は不明であるが，掘方心心で3.0m～3.2mの間隔を測る。また，第45次調査でも，SA3625南端の柱掘方から35.9m南側で方形の柱穴を検出しており，櫛の掘方と考えられる。柱掘方北端からここまでの距離は75mを測り，南端柱掘方からは8間分に該当する。

「資財帳」では，「□□（条）（坊）陸十伍丈板葺」とあり，長さが65丈（195m）で，板葺であったことが知られる。第121次調査検出の櫛 SA3625は推定中軸線から東に84.8mの箇所に存在し，この距離は南面築地57丈（171m）の半分の距離85.5mに近似する。また，東面築地は板葺となっているが，延喜段階で板葺になったのか，以前から板葺であったのかは定かではないものの，櫛と回廊との間には奈良時代後半の掘立柱建物 SB3610・3615・3620が存在し，第45次調査では「□□東院」・「厨」銘の墨書土器が出土している。寺域西辺部は学校院との境界にあたるため険因な区画施設が必要であるが，東辺部に関しては東院・厨と言った観世音寺関連の施設の存在を指摘でき，西側に比べて土地規制が比較的緩やかであったものと推察され，当初から築地塀は板葺であった可能性を有する。

東面築地は当初から板葺か

4）北面築地 SA1860

北面築地に関する調査としては，第70次・70次補足・78次・120次調査がある。第70次調査地は第43次調査地の北側に位置し，僧房建物の検出を目的とした計画調査である。小子房・客僧房などの僧房建物の検出が期待されたが，それらの建物は検出できなかった。しかし，調査区北端において瓦組暗渠6条と暗渠に関連する東西溝 SD1830を検出した。暗渠施設は建物基壇や回廊・築地及び整地層に伴う例が多く，瓦組暗渠 SX1831～SX1835は築地遺構に関連する可能性が考えられた。第70次補足調査では，70次検出の瓦組暗渠 SX1833・1834の北延長部と東西溝 SD1830の下層溝 SD1850を再調査し，瓦組暗渠は版築状の整地層中に埋設されていることを確認した。

第78次調査は北面築地関連遺構の検出を目的とした計画調査であるが，検出した遺構は中世の建物・溝・池である。これらの遺構の下部には腐植土が厚く堆積しており，谷地形の様相を呈していた。従って，築地や古代の遺構は自然流路により削平されたものと考えられる。

第120次調査地は第70次調査地の北側に当たり，北面築地関連遺構の検出を目的として調査を実施した。かつて，この調査地付近からは礎居敷の礎石（Fig.49－F）が出土しており[11]，北

門礎石とする見方があり，築地遺構の検出が大いに期待された。しかし，調査区内では築地基壊痕跡や雨落溝などの遺構は検出できなかった。

『資財帳』では，「北方五十七丈五尺」とあり，長さは南面築地と同じ57丈（171m）であるが，延喜段階では築地が存在していなかったことが窺われる。今回，南門跡を従来言われていた箇所より６m南に復原した。その地点から東面築地の長さである65丈（195m）を北にとると第120次調査区の南半部にあたる。前述した如く，この付近からは北門礎石と考えられる礎石も出土しており，ここに北面築地及び北門を想定しておきたい。

なお，第130次調査での見解は[2]，東西溝SD1850より約15m北側に北面築地を想定しているが，今回は溝の10m北側に築地線を想定した。

５）西面築地SA1290

西面築地に関しては第68次調査を実施している。第68次調査は住宅改築に伴う現状変更であるが，顕著な遺構は検出されなかった。

『資財帳』では，「西長陸拾伍丈　瓦葺中破以板改所」とあり，西面築地は長さが65丈（195m）で，本来瓦葺きであったが，破損した箇所を板葺に改築したことがわかる。

伽藍南北中軸線から171m（南面築地の長さ）の半分の距離85.5mを取ると戒壇院の西辺にあたり，現状では戒壇院境内地の西縁は田畑となっており，１m程の比高差を有している。発掘調査による西面築地に関する遺構は未確認であるが，この場所に西面築地を想定しても強ち無理はないものと思われる。（小田）

註１　山鹿氏は「日吉神社石段直下より西方５～６間の地からかつて礎石が１個発掘された。…平面形は矩形に近く，中央に大型の深い円孔がある。唐居敷ともいわれるが，もしそうであるならば，その位置からみて北門関係のものではないかと」言われている」とされた。
鏡山　猛『大宰府都城の研究』　1968　風間書房

註２　大宰府史跡平成４年度発掘調査概報　1993　九州歴史資料館

Ⅵ 総　括

ここでは，観音寺の伽藍解明を目的として実施した発掘調査で得られた成果を各章ごとにまとめ，併せて残された課題点についてふれておく。

塔

[成　果]

基壇の基底部は削り出しにより，緻密な版築土層を確認した。基壇西辺と南辺に地覆石が遺存していたことから基壇規模は一辺15.0mで，東西２箇所に階段を設けていることが判明した。ただ，基壇一辺の長さが15mという数値は，一重基壇にしては大きすぎるきらいがあり，塔の基壇は二重基壇であった可能性が考えられる。

二重基壇

基壇断割りの結果，心礎は創建時の原位置を留めていることを確認したが，四天柱礎石・側柱礎石の高さは心礎上面から70cmも下がっており，側柱礎石の抜石の状況からみても両者は動かされていることが確かめられた。

[課題点]

金堂の創建基壇は瓦積基壇で，砂岩製切石を地覆石として据えている。講堂補足調査でも地覆石とみられる砂岩製切石が出土している。しかし，塔基壇の地覆石は花崗岩の自然石であり，講堂Ⅱ期基壇化粧に類似していることから創建期のものとは考え難い。後世，基壇のみ改修した可能性があるものの調査では確認し得ておらず，今後の課題である。

金　堂

[成　果]

創建期から明治期に及ぶ５期の基壇変遷を把握することができた。44次数に及ぶ観世音寺の発掘調査をとおして，今回，初めて創建期の基壇を検出した。

５期の基壇変遷が判明

創建（Ⅰ）期は瓦積基壇であり，基壇規模は東西幅18.0mで，南北推定長は24.0mになる。地覆石として砂岩製切石を据え，その上に老司Ⅰ式の平瓦を積んでいる。階段遺構は北・西・南側の調査区内においては検出されなかったため東辺のみに設けていたと考えられる。

Ⅱ期基壇は乱石積基壇で，南北長22m，東西幅16mの基壇規模を推定復原した。地覆石は設けておらず，直接花崗岩の自然石を立て並べている。階段に関しては不明。また，基壇北西から西側にかけて焼土層があり，康治２年（1143）の金堂火災に伴うものとみられる。

焼土層は康治２年の失火

Ⅲ期基壇は石垣積基壇で，基壇規模は東西21.0m，南北19.8mで，東西にやや長い方形基壇に改築している。調査の結果，階段は南辺に１箇所付設しており，北・西辺には付設していないことを確認しているが，東辺にも付設していたかは未掘のため確認し得ていない。

Ⅳ期基壇は花崗岩製切石を並べたもので，寛永７年の暴風により倒壊した講堂の仮堂を移築した建物（阿弥陀堂）に伴う基壇と考えられる。南北長18m，東西幅15m程の基壇規模が想定される。Ⅴ期基壇は石垣積基壇である。19世紀前半頃に講堂前面部から金堂東・南面にかけて整地を施し，現在みられるような石垣に改修している。

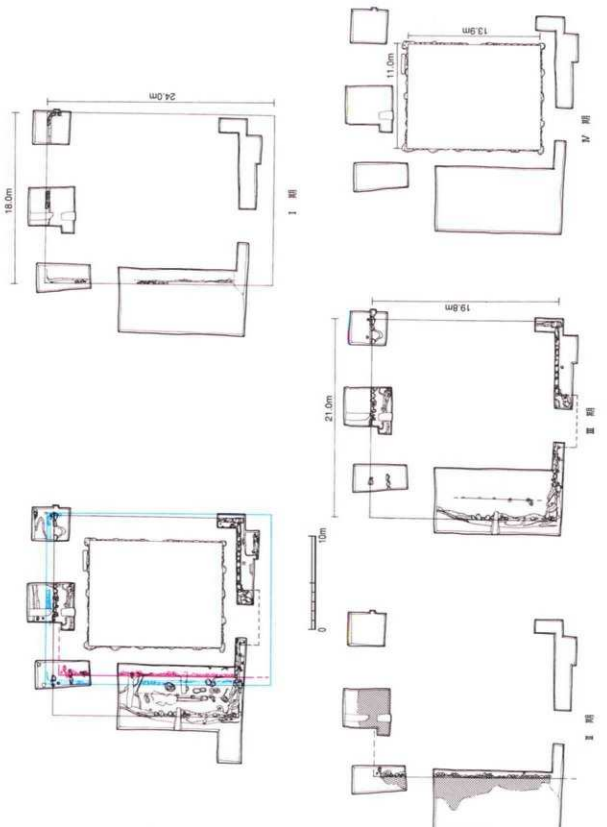


Fig.133 金堂建物変遷図（1/400）

[課題点]

基壇遺構については5期の変遷を明らかにすることができたが，建物遺構に関しては金堂建物（阿弥陀堂）が存在するため内部の調査が全くできておらず，基壇変遷と建物の再建記事とを関連づけた建物遺構の調査が必要である。

講　堂

[成　果]

補足調査の結果，創建時から原位置を留めているとみなされていた礎石の下層から創建（Ⅰ）期の礎石掘付穴が発見され，現在みられる礎石は再建時のものであることが判明した。創建期の回廊礎石掘付穴も検出され，従来指摘されていたように講堂側面中央に回廊が取り付く構造ではなく，創建時は講堂梁間礎石の1間分南側に単廊の回廊が取り付くことが明らかとなり，講堂に関しては従前の学説が悉く覆った。また，南北に長く，東辺に階段が想定される金堂基壇の平面形は，金堂建物が東面することを明示している。中門から左右に延びた回廊が講堂に取り付き，東側に五重塔，西側に東面する金堂が配される伽藍配置は観世音寺独自のものであり，単なる川原寺の省略型式ではなく，「観世音寺式伽藍配置」と呼ぶべきものである。　観世音寺式伽藍配置

SB3800AがⅠ期建物に伴う基壇で，基壇規模は東西36.3m，南北22.8mに復原した。Ⅰ期建物は柱間を4.5m等間として身舎桁行5間，梁行2間の四面廂建物で，側柱桁行31.50m，同梁行18.0mの規模とした。

Ⅱ期はⅠ期基壇を30～40cmかさ上げし，構築している。SB3800BがⅡ期建物に伴う乱石積基壇で，基壇規模は東西34.808m，南北20.465mに復原可能である。階段は南辺に3箇所と北辺に1箇所設けており，通路遺構が大房に延びている。Ⅱ期建物は身舎桁行5間，梁行2間の四面廂建物で，側柱桁行30.008m，同梁行15.365mの規模である。Ⅱ期建物以降，Ⅵ期建物まではⅡ期礎石を再利用している。

SB3800C・Dが Ⅲ期建物に伴う石垣積基壇で，基壇Cは基壇B裾部から2m南側に拡幅している。基壇Dは基壇Cから更に0.6m南側に拡幅したもので，基壇Cの改修とみられる。Ⅲ期基壇は基本的にⅡ期基壇を最大限活用し，前面部を亀腹とすることで基壇を構築している。　亀腹
Ⅲ期建物は身舎桁行5間，梁行2間の四面廂建物で，南辺部には孫廂を設けている。　孫廂

SB3800Eも石垣積基壇でⅣ期建物に伴うものである。基壇Eは基壇Dから左右に1.7m，南側に1.1m拡幅しており，講堂基壇中において最大の基壇規模を誇る。Ⅳ期も五間四面の建物であるが，周囲には縁を巡らせ，南辺に軒の出6.2mの孫廂を設けた建物として復原した。Ⅳ期建物は寛永7年（1630）の大暴風雨で倒壊し，寛永8年に仮堂を建立した。この仮堂を移築したのが現在の金堂（阿弥陀堂）とされている。

寛永8年建立の講堂仮堂がⅤ期建物であるが，元禄元年（1688）に再建されており，建物・基壇規模については全く把握できないものの，時期を設定した（SB3800F）。

Ⅵ期建物は仮堂移設後の元禄元年に再建された講堂建物で，現在の本堂である。建物は入母屋造本瓦葺で身舎桁行3間，梁行2間の四面に裳階を付している。建物規模は桁行側柱心々で16.0m，梁行側柱心々で11.6mを測る。建物基壇（SB3800G）は東西19.8m，南北15.3mの規模である。以上の如く，講堂に関しては建物及び基壇の変遷を明らかにし得た。　四面に裳階

[課題点]

創建期の礎石据付穴は発見されたものの，創建期の基壇及び建物規模は完全には把握されていない。また，Ⅴ期建物も文献との関係上，一時期を設定したが，建物及び基壇に関しては，規模・構造は全く不明である。また，Ⅱ期建物はⅠ期礎石を抜き取り，基壇を改築するなど大規模な改築を行っているが，改築に至った原因を明らかにする必要がある。

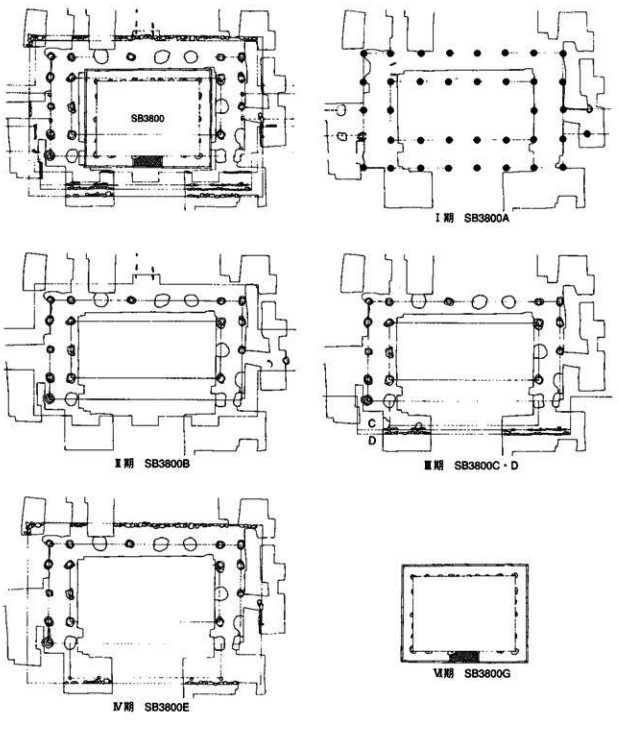


Fig.134 講堂建物変遷図（1/600）

南　門

[成　果]

南門推定箇所には礎石が7個あり，礎石の抜取り穴を2個検出した。礎石及び抜取り穴を基に建物を復原すると間口三間の八脚門となり，ほぼ中央を伽藍南北中軸線が通る。第109次SD3149及びそれに接続する第115次SD3340は14世紀代の東西溝であるが，溝のすぐ北側に南面築地の痕跡が存在したからこそ溝がその位置に掘削されたもので，南門推定箇所を建物の痕跡としても強ち無理はないものと考える。

[課題点]

基壇に随伴する地覆石・基壇化粧・階段などの諸施設は，遺構の残存状態が悪かったのと中央部が参道のため未掘となった。

中　門

[成　果]

地形測量図に昭和32調査の発掘区と金堂及び講堂補足調査の成果を基に復原した南面回廊と中門を落としてみると，中門及び南面回廊推定位置付近に瓦の集積がみられる。この瓦の集積は，回廊及び中門に関連するものと考えられる。

[課題点]

中門に関しては，当館は発掘調査を実施しておらず，昭和32年に調査がなされたのみで，詳細は不明であるため中門の位置・規模を明らかにする必要がある。

回　廊

[成　果]

従来の研究では，北面回廊は講堂側面中央に取り付くと考えられていたが，講堂補足調査により北面西回廊の礎石抜取り穴を検出し，一間分南側に取り付くこと，Ⅱ時期の回廊遺構が存在することが明らかとなった。

[課題点]

北面・東面・西面回廊は，ある程度規模・構造が明らかとなり，遺構の復原が可能であるが，南面回廊の位置は未確定のままである。

僧　房

[成　果]

身舎梁行2間の南北両面に廂を設けた梁行4間，桁行19間以上の東西棟建物を検出した。建物規模からみて大房建物と考えられる。建物全体としては桁行33間（103.8m），梁行4間（10.2m）の二面廂建物で，東西各5室の部屋を有し，中央間は屋根付きの通路とみられる。

[課題点]

大房建物は康平7年（1064）に焼失するが再建され，康和4年（1102）の大風で転倒し，嘉承元年（1106）に再建されている。創建大房をⅠ期，焼失後に再建された建物をⅡ期，嘉承元年再建建物をⅢ期とすると，SB1080が何時の時期の大房に該当するのか明瞭ではない。また，

『資財帳』には大房以下，小子房 二宇・馬道屋 一宇・客僧房 二宇の合計6棟の僧房が記されているが，他の建物に関しては全く不明であり，明らかにする必要がある。

戒壇院

[成 果]

古代の戒壇院関連遺構の検出が期待されたが，江戸期の礎石建物SB4180を検出した。礎石建物は戒壇院本堂の背面にあり，庫裡建物とみなされる。溜桝状遺構SX4177からは「楼門元禄十四年孟夏立 戒壇忠鶴恵灯照代」と刻印された平瓦が出土しており，楼門が元禄14年の夏に建立されたことが判る貴重な発見となった。

[課題点]

古代の戒壇院に関しては，何ら手がかりが得られておらず，今後の課題である。

築 地

[成 果]

南面築地は復原南門建物から位置が押さえられた。東面築地に関しては，第121次調査で構SA3625を検出しており，伽藍推定中軸線から東側84.8mに位置し，築地関連遺構と考えられる。また，第45次調査では「□□東院」・「厨」銘の墨書土器が出土しており，東辺部には東院・厨といった観世音寺関連施設の存在が指摘される。北面築地に関しては，位置が特定できていないものの唐居敷の礎石が出土しており，北門礎石とみられる。西面築地は未調査であるが，戒壇院西辺の段落ち箇所が推定される。

[課題点]

東面築地は当初から板塀であったのか確認し得ていない。南門推定位置に南面築地を想定すると北面築地は195m北側に想定されるが，遺構的には確認されていない。西面築地も位置は未確定であり，明らかにする必要がある。

以上，成果と課題点を述べてきたが，伽藍に関しての考察は『観世音寺－遺物・考察編－』で改めてふれたい。

（小田）

PLATES

大宰府史跡航空写真（南上空から）

(1) 観世音寺周辺航空写真（昭和35年頃，南上空から）

(2) 観世音寺周辺航空写真（平成３年頃，南上空から）

(1) 塔全景（西から）

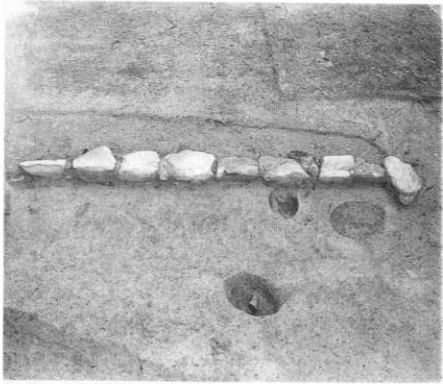
(2) 塔全景（南から）

(1) 塔全景（北から）

(2) 塔全景（北西から）

(1) 塔調査区（西面，西から）

(2) 塔SB3850基壇化粧（西面，北から）



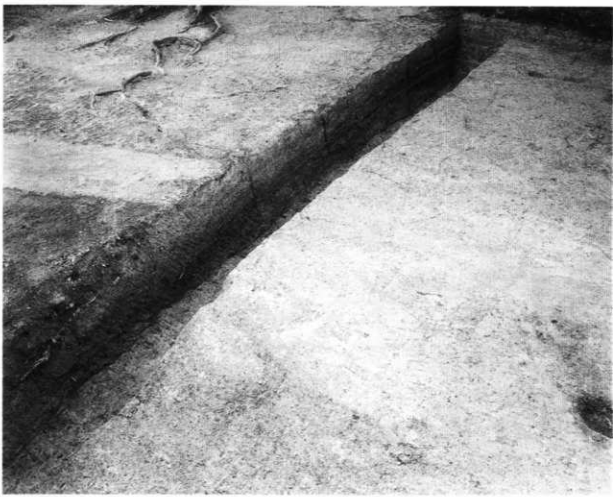
(3) 塔SB3850基壇化粧（西面，西から）

(1) 塔調査区（南面，南から）

(2) 塔SB3850基壇化粧（南面，北から）

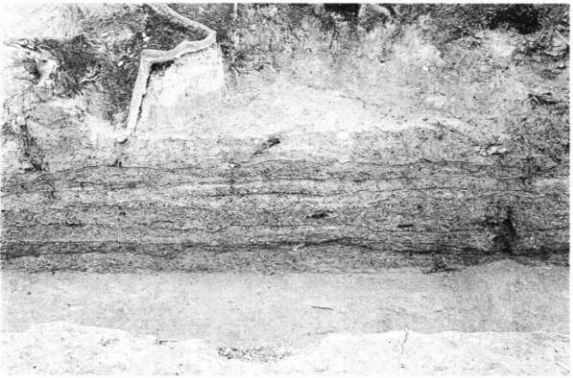
(3) 塔SB3850基壇化粧（南面，南から）

(1) 塔調査区（東面，南から）



(2) 基壇版築状況（北面，北西から）

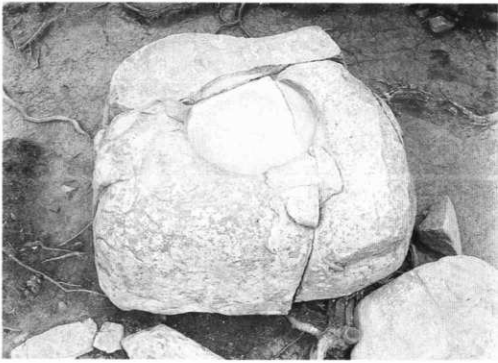
(1) 基壇版築状況
（南面，南西から）



(2) 基壇版築状況細部
（南面中央，西から）

(3) 基壇版築状況細部
（南面端，西から）

(1) 塔心礎（西から）



(2) 塔心礎（西から）

(3) 塔心礎（東真上から）

(1) 側柱礎石 1（北から）

(2) 側柱礎石 2（南から）

(3) 側柱礎石 2 の根石状況（西側面）

(1) 塔周辺礎石A（南から）

(2) 塔周辺礎石B（南西から）

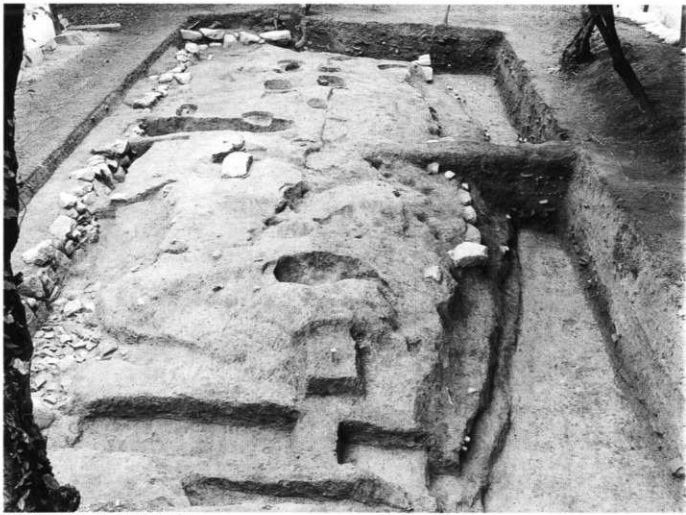
(3) 塔周辺礎石C（西から）

(1) 塔周辺礎石D（南西から）

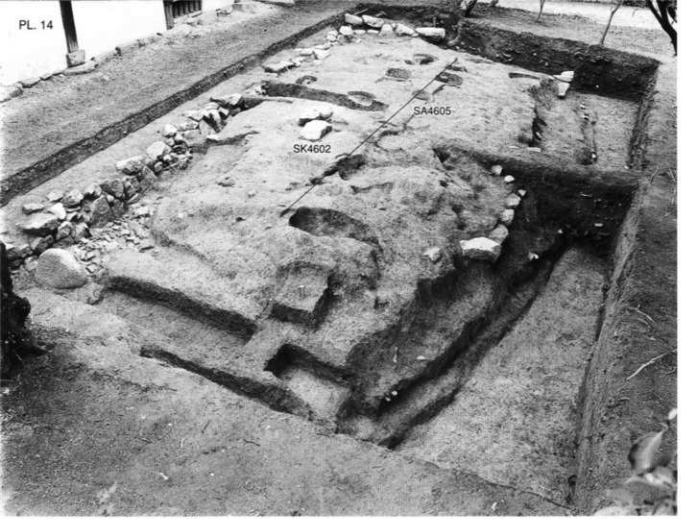
(2) 塔周辺礎石E（北西から）

(3) 塔周辺礎石F（南から）

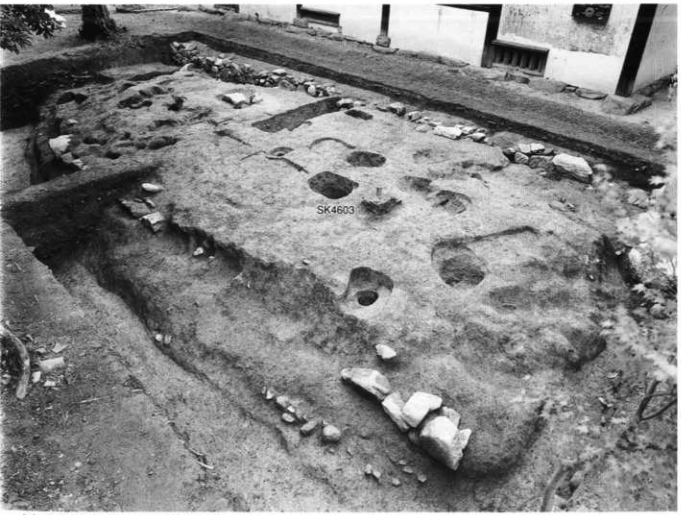
(1) 金堂建物（元禄期再建，東から）



(2) 金堂A区全景（上層，北から）



(1) 金堂A区全景（上層，北西から）



(2) 金堂A区全景（上層，南西から）

(1) 金堂SB4600C基壇化粧（北から）

(2) 金堂SB4600C基壇化粧（北から）

(3) 火葬墓SX4603（南から）

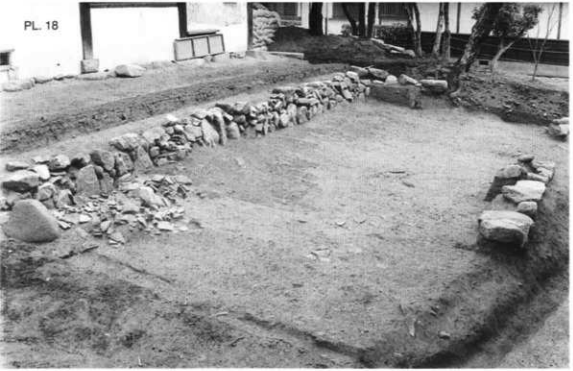
(1) 金堂SB4600B基壇化粧検出状況（北から）

(3) 金堂SB4600B基壇化粧と焼土層（北から）

(2) 金堂SB4600B基壇化粧検出状況（南から）

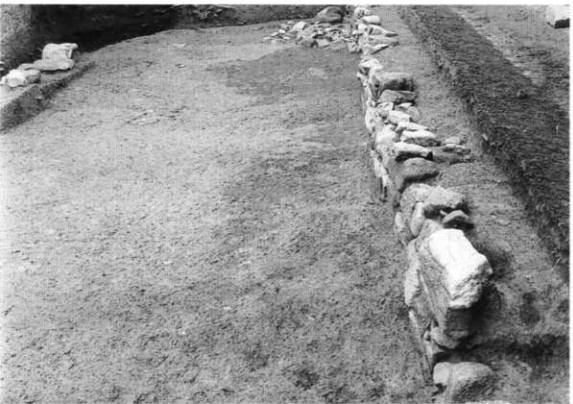
(1) 金堂A区全景（下層，北西から）

(2) 金堂A区全景（下層，南西から）



(1) 金堂SB4600B
基壇化粧（北西から）

(2) 金堂SB4600B
基壇化粧（南西から）



(3) 金堂SB4600B
基壇化粧（南から）

(1) 金堂SB4600B
基壇化粧細部
（西から）

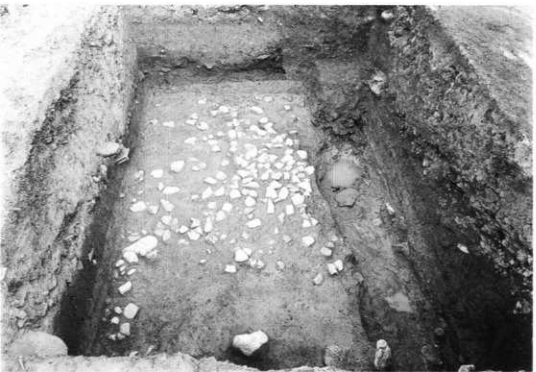
(2) 同上（西から）

(2) 同上（西から）

(3) 瓦溜SX4606
（西から）

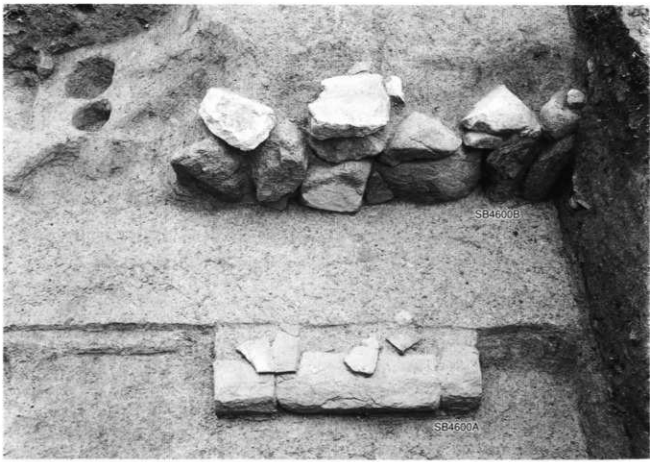
(1) 金堂SB4600A基壇化粧
(西から)

(2) 金堂A区基壇版築状況
(南西から)



(3) 基壇南西部下層礫群
(西から)

(1) 金堂B区全景（下層、南から）



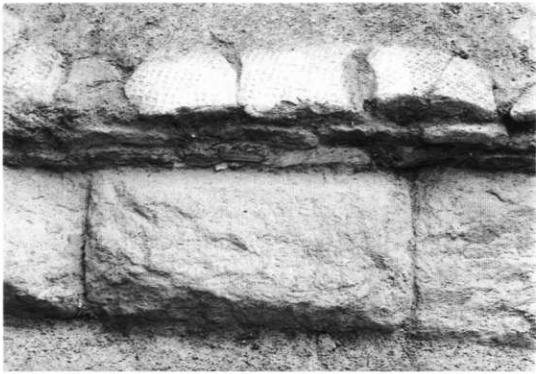
(2) 金堂SB4600A・B基壇化粧（西から）

(1) 金堂C区全景（上層，北から）

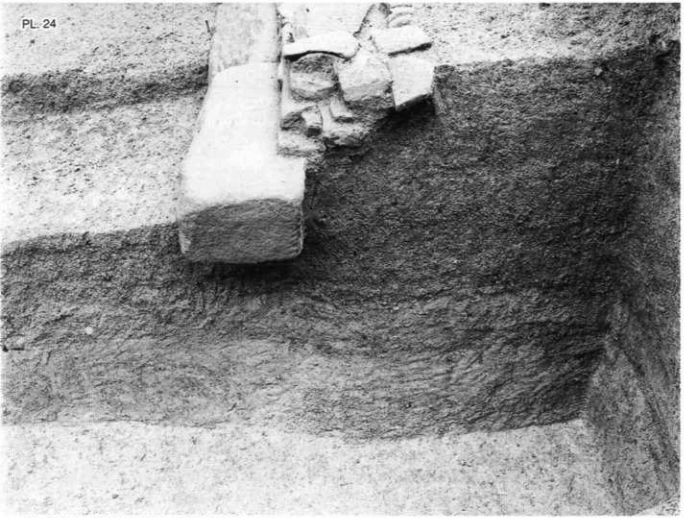
(2) 金堂C区全景（下層，北から）

(1) 金堂SB4600A・C
基壇化粧（北から）

(2) 金堂SB4600A基壇
版築状況（西から）



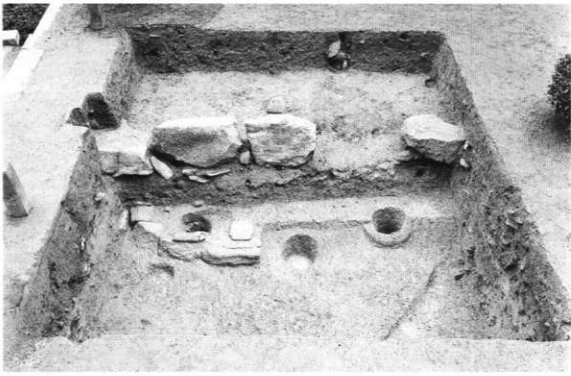
(3) 金堂SB4600A
基壇化粧細部（北から）



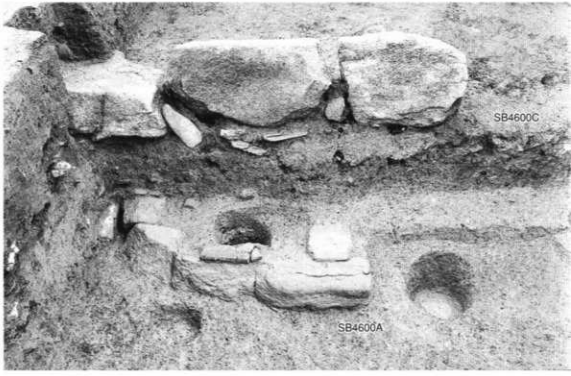
（1）金堂C区基壇版築状況（基壇化粧側，西から）

（2）金堂C区基壇版築状況（建物側，西から）

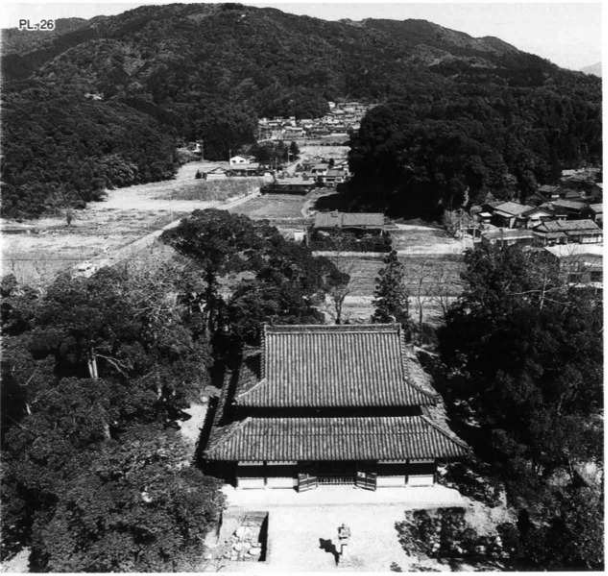
(1) 金堂D区（南西から）



(2) 金堂E区全景（北から）



(3) 金堂E区SB4600A・C基壇化粧（北から）



(1) 講堂建物周辺（空中写真，南上空から）

(2) 講堂建物（元禄元年再建，南から）

(1) 講堂SB3800前面（東半，南から）

(2) 講堂SB3800前面（西半，南から）

(1) 講堂SB3800背面部（西半、南から）

(2) 講堂SB3800背面部（東半、北から）

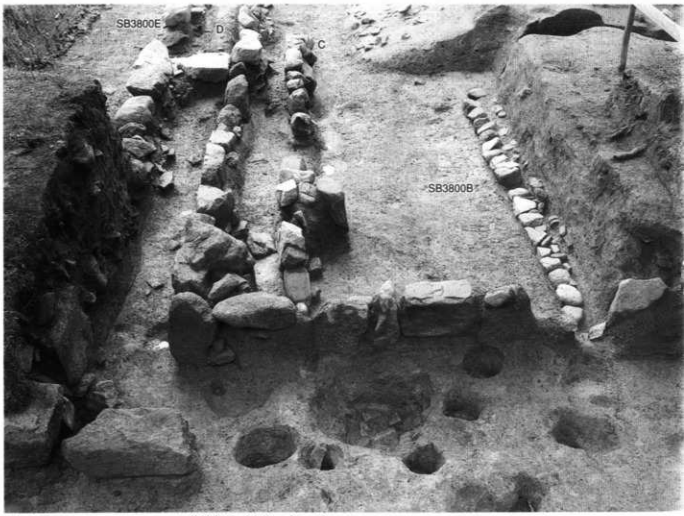
(1) 講堂SB3800梁側礎石（東半，南から）

(2) 講堂SB3800梁側礎石（西半，南から）

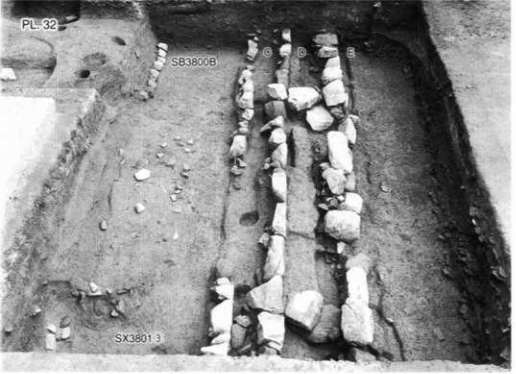
(1) 講堂SB3800梁側礎石（西半，北から）

(2) 講堂SB3800梁側礎石（東半，北から）

(1) 講堂SB3800B・C・D基壇化粧（東半，南から）



(2) 講堂SB3800B・C・D・E基壇化粧（東半，東から）

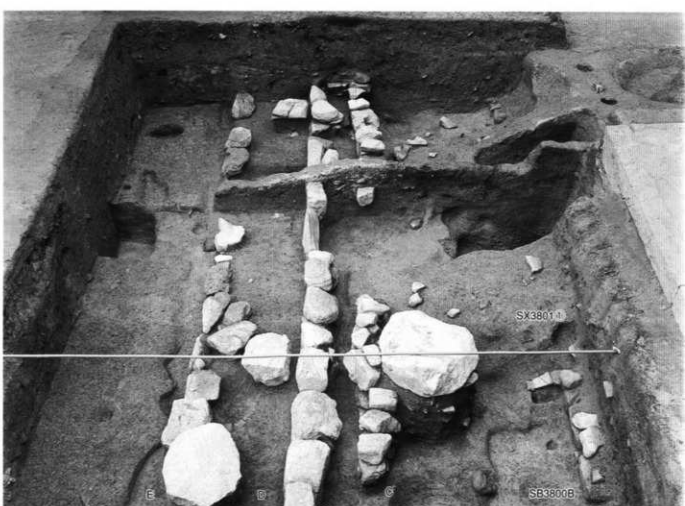


(1) 講堂SB3800B・C・D・E
基壇化粧（東半，西から）

(2) 講堂SB3800B・C・D・E
基壇化粧（東半，南西から）

(3) 階段SX3801③
（南西から）

(1) 講堂SB3800B・C・D・E基壇化粧（西半，南から）



(2) 講堂SB3800B・C・D・E基壇化粧（西半，東から）

(1) 講堂SB3800背面部（北東から）

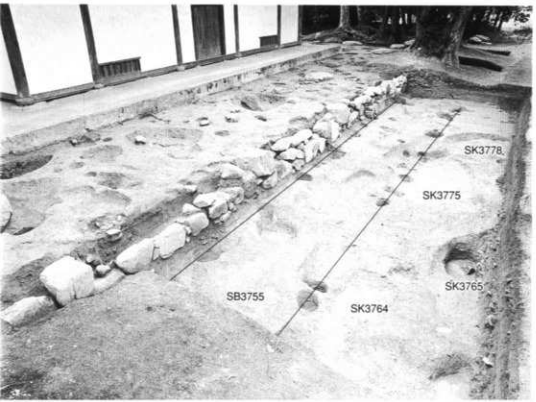
(2) 講堂SB3800背面部（北西から）

(1) 講堂SB3800E基壇化粧（背面，東から）

(2) 講堂SB3800桁側礎石（背面，東から）

(1) 講堂SB3800E基壇化粧
(背面、北から)

(2) 講堂SB3800E階段SX3802
(▲印、北から)



(3) 足場穴SB3755及び土坑群
(北東から)

(1) 講堂SB3800E基壇化粧（北西隅，北から）

(2) 講堂SB3800E基壇化粧（北東隅，北から）

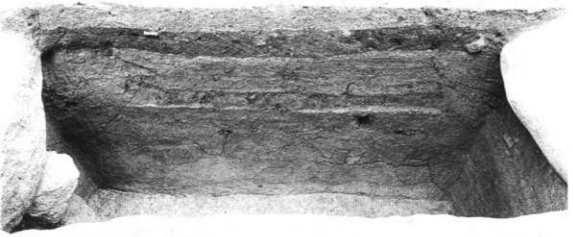
(1) 講堂補足調査 3 Tr 全景（南から）

(2) 講堂補足調査 3 Tr 全景（北から）

(1) 講堂SB3800B基壇化粧，礎石根石SX3790（西から）

(2) 講堂SB3800B基壇化粧（西から）

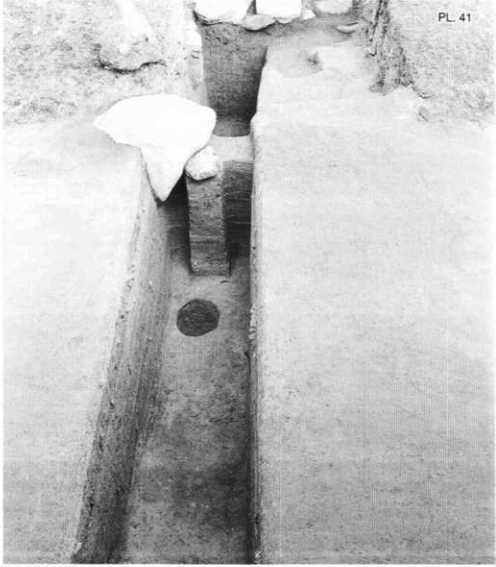
(3) 礎石根石SX3790(北から)



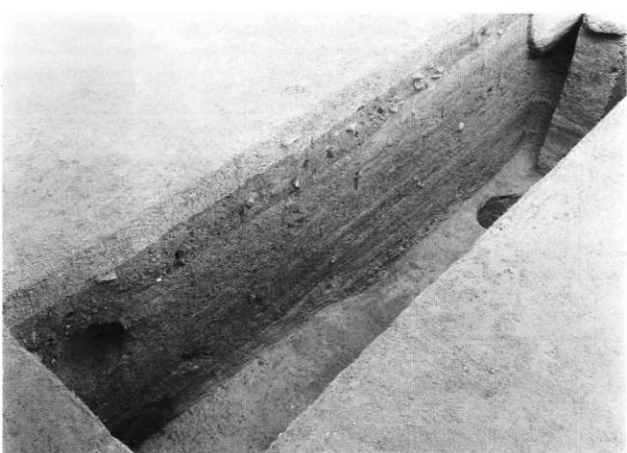
(1) 基壇版築状況
（礎石2－23間，北から）

(2) 基壇版築状況
（礎石6－基壇化粧間，
東から）

(3) 基壇版築状況
（礎石14－基壇化粧間，
南から）



(1) 基壇版築状況（礎石31－14間，西から）



(2) 基壇版築状況（礎石31－14間，南西から）

PL. 42

1

11

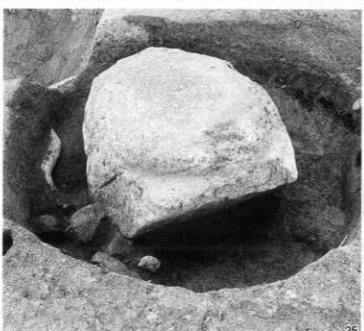
5

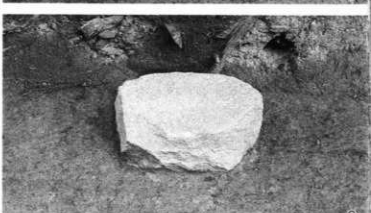
14

8

23

講堂SB3800礎石



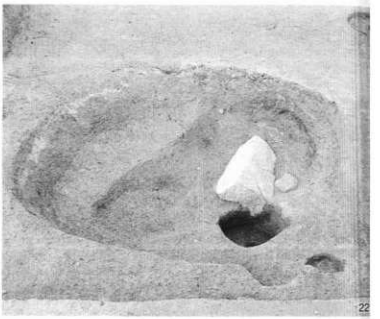


講堂 SB 3800礎石

9

17

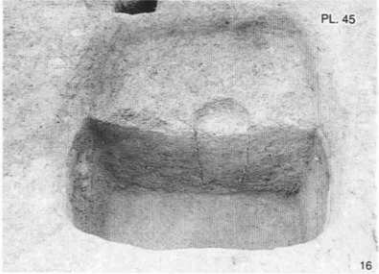
99

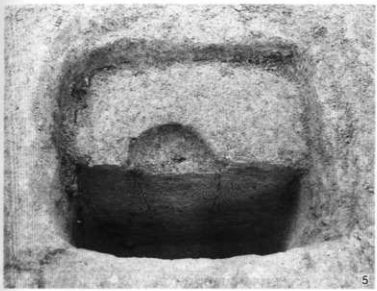

22

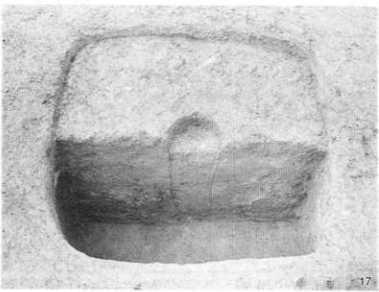
15

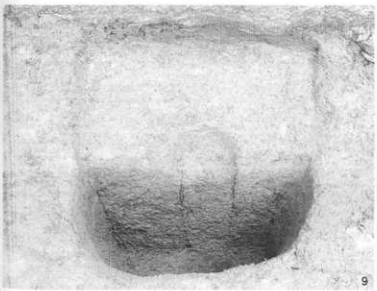
31

講堂SB3800礎石抜取穴



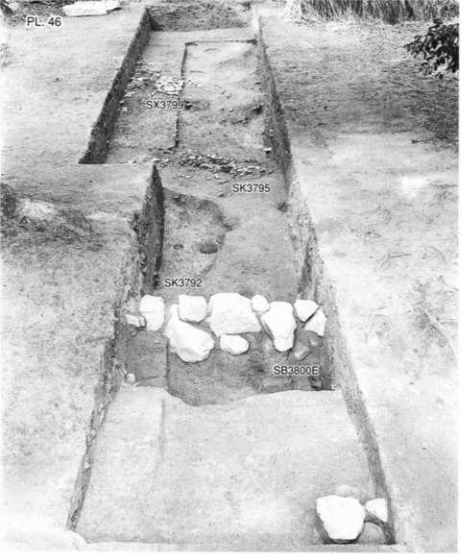






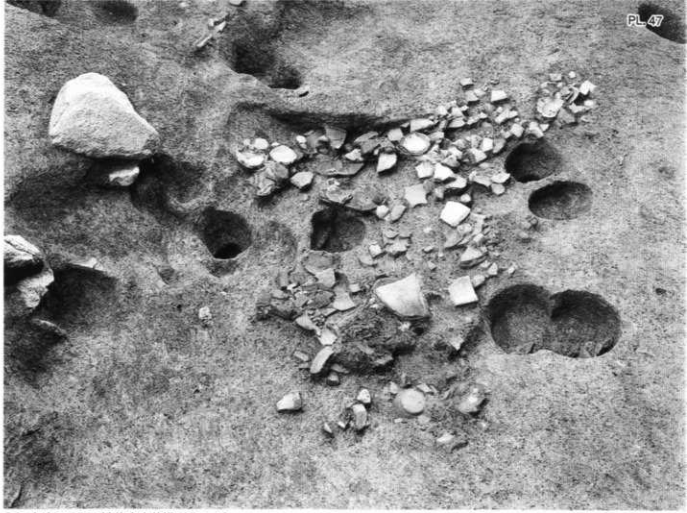
(1) 足場穴SB3740柱掘方断割

(2) 足場穴SB3782柱掘方



(1) 講堂補足調査1Tr全景
(南から)

(2) 講堂補足調査1Tr
(北から)

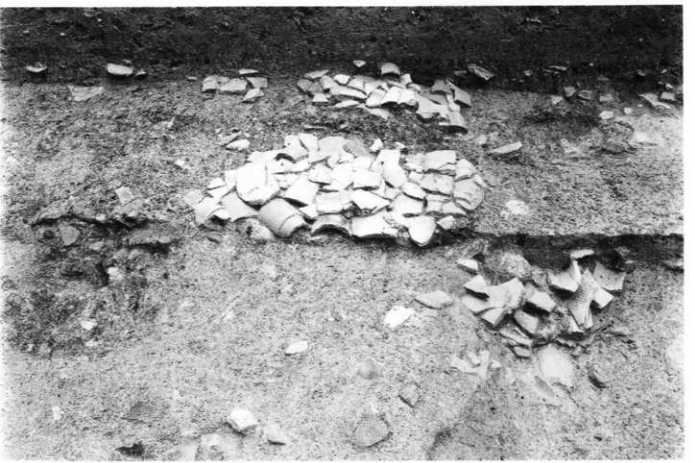


(1) 土坑SK3789遺物出土状況（北から）

(2) 土坑SK3792（東から）

(1) 土坑SK3795遺物出土状況（東から）

(2) 土坑SX3802銅型出土状況（南西から）



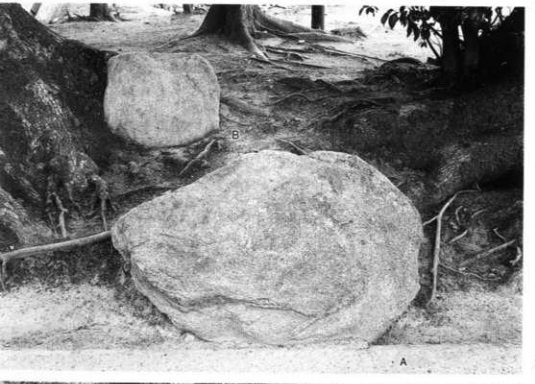
(3) 瓦敷SX3799（東から）

(1) 南門調査区（南から）

(2) 南門調査区（西半，南東から）

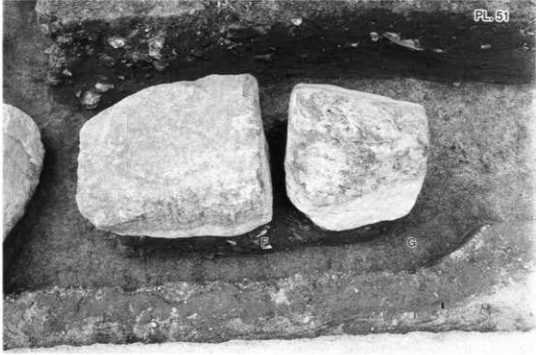
(3) 南門調査区（西半，北から）

(1) 南門調査区（西半中央部，東から）



(2) 南門礎石A（西から）

(3) 南門礎石C（東から）



(1) 南門礎石F・G
（東から）

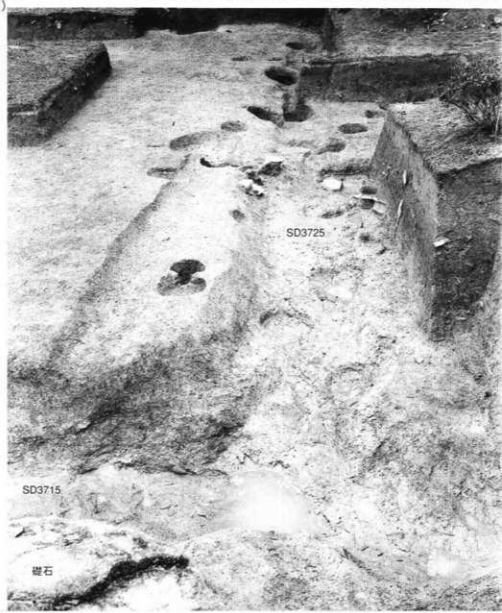
(2) 礎石A移設後
（西から）

(3) 礎石C移設後
（東から）

（1）東面回廊調査区（南から）

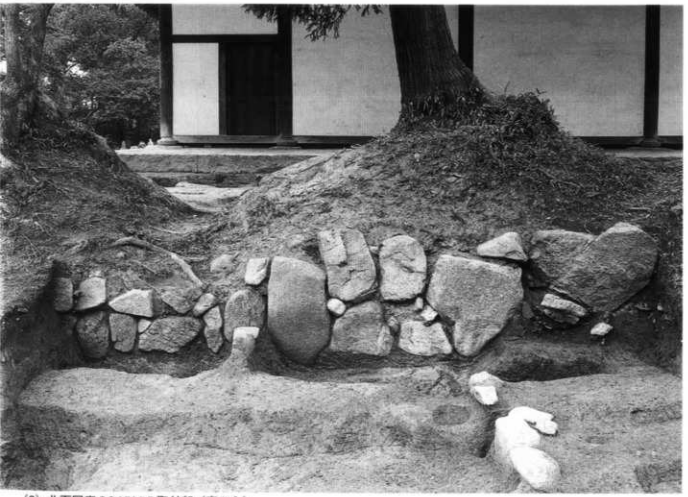
（2）東面回廊調査区（北半、南から）

(1) 北面回廊SC3730E（西から）



(2) 北面回廊SC3730E
（東から）

(1) 北面回廊SC3730E取付部（南から）



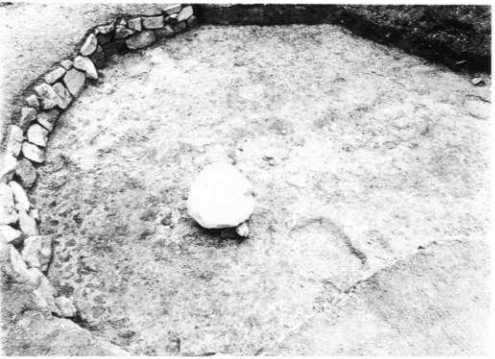
(2) 北面回廊SC3730E取付部（東から）

(1) 補足調査 6 Tr
北面回廊地区
(調査前,西から)

(2) 補足調査 6 Tr 北面回廊地区 (調査後、南西から)

(1) 北面回廊SC3730W
（126次調査，北から）

(2) 北面回廊SC3730W
（126次調査，東から）



(3) 北面回廊SC3730W
（補足調査，南西から）

(1) 北面回廊SC3730W取付部（西から）

(2) 北面回廊礎石根石SX3810（南から）

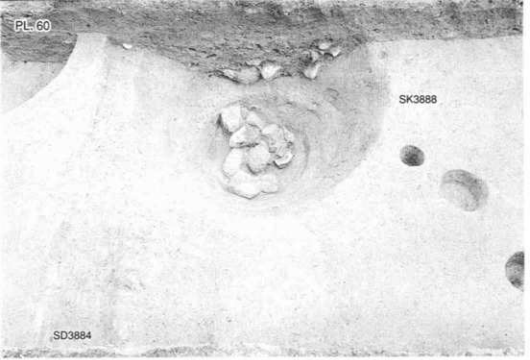
(1) 南面回廊調査区全景（南から）

(2) 南面回廊ATr（北から）

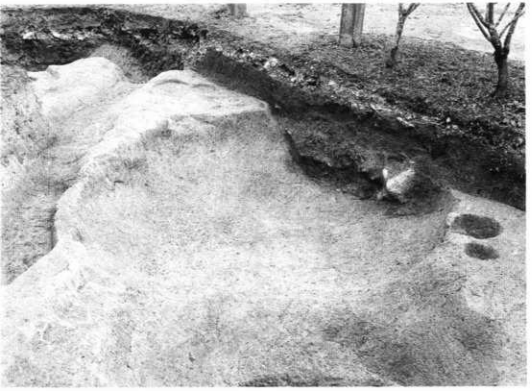
(3) 南面回廊ATr（南から）

(1) 南面回廊BTr
(北から)

(2) 南面回廊CTr (南から)



(1) 溝SD3884，鋳造土坑
SK3888（西から）



(2) 鋳造土坑SK3885
（西から）

(3) 土坑SK3887
（西から）

(1) 僧房調査区全景（東から）

(2) 僧房調査区全景（西から）

(1) 僧房SB1080（東から）

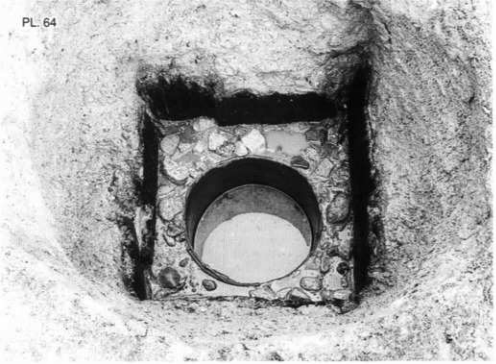
(2) 僧房SB1080（西から）

(1) 僧房SB1080（北から）

(2) 僧房SB1080礎石（北から）

(3) 僧房礎石1（北から）

(4) 僧房礎石2（北から）



(1) 井戸SE 1081（西から）

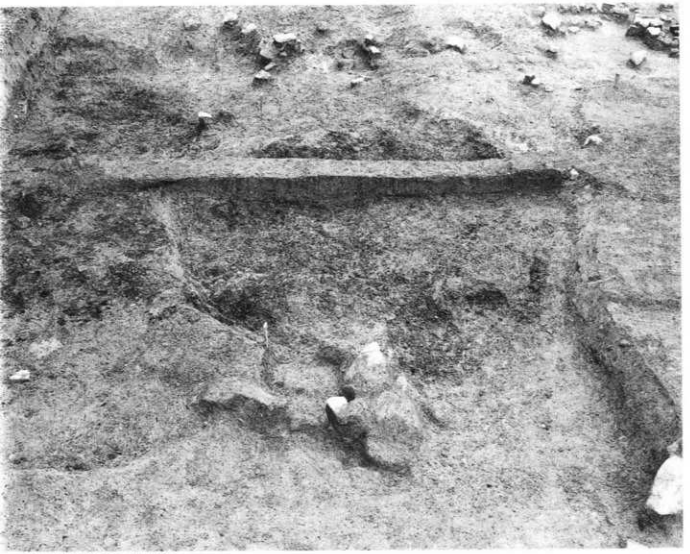
(2) 井戸SE 1081遺物出土状況（西から）

(3) 井戸SE 1082（北から）

(1) 井戸SE1083（東から）

(2) 井戸SE1083石積状況（東から）

(1) 土坑 SK 1084遺物出土状況（南から）



(2) 土坑 SK 1103（東から）

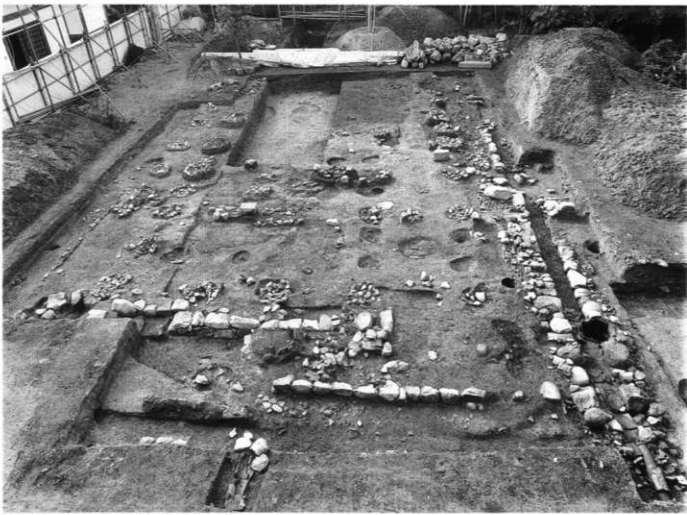
(1) 戒壇院本堂建物（寛保三年建立，南から）

(2) 戒壇院地区調査区全景（南から）

(1) 戒壇院地区調査区全景（上層、東から）

(2) 礎石建物SB4180全景（東から）

(1) 礎石建物SB4180全景（下層，南から）

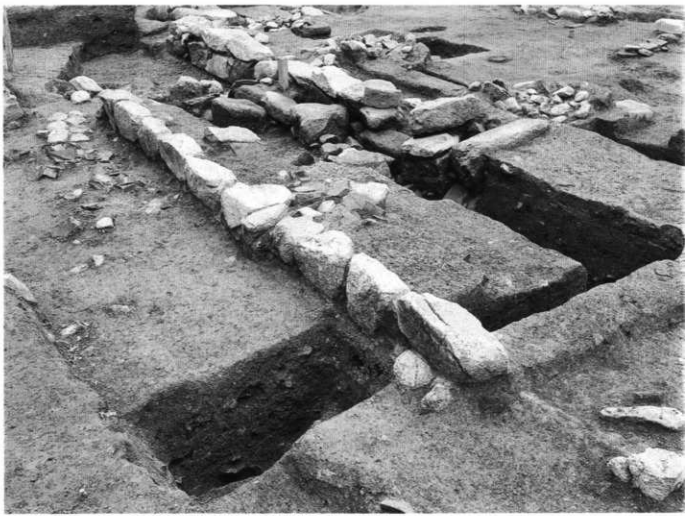


(2) 礎石建物SB4180全景（下層，東から）

(1) 石組溝SD4175（東から）

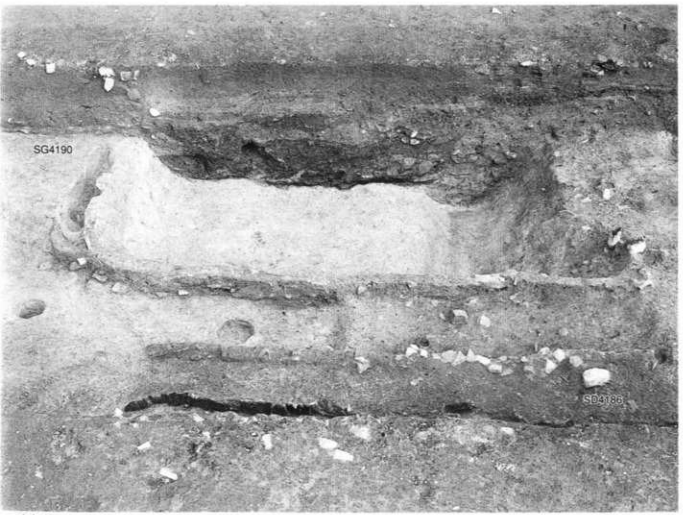
(2) 石組溝SD4175先端の暗渠SX4174（西から）

(1) 石組溝SD4185，埋甕SX4172（東から）



(2) 石組溝SD4185，SB4180基壇化粧SX4182断割状況（北東から）

(1) 溝SD4189（東から）



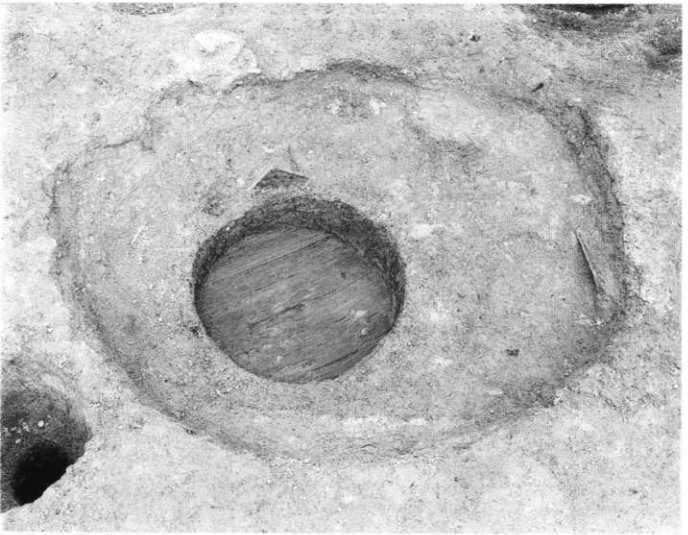
(2) 溝SD4186、池SG4190（西から）

(1) 埋甕SX4177（南から）

(2) 埋甕SX4177
完掘状況（南から）

(3) 埋甕SX4178（西から）

(1) 埋甕SX4179（北から）



(2) 埋桶SX4181（南から）

(1) 溝SD4187（東から）

(2) 石組溝SD4188（東から）

(3) 暗渠SX4191（東から）

（1）南面築地調査区（南から）

（2）南面築地SA3880W断割状況（南西から）

（3）2Tr土層断面（西から）

(1) 南面回廊北側（55次）
1 Tr（南から）

(2) 南面回廊北側（55次）
2 Tr（西から）

中門調査状況（昭和32年，北から）

(1) 中門調査状況（昭和32年，北から）

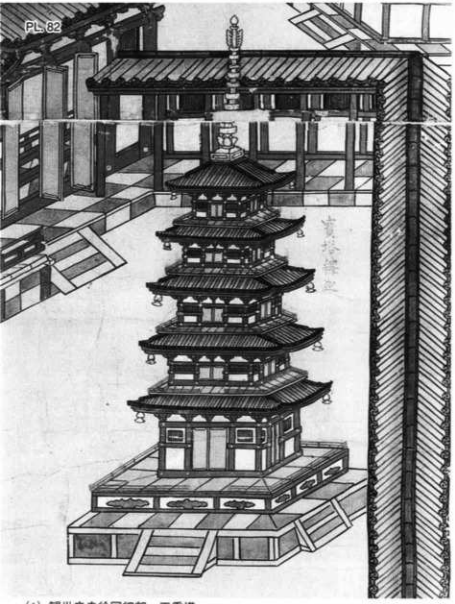
(2) 遺物出土状況（昭和32年，南から）

(1) 中門調査状況（昭和32年、北から）

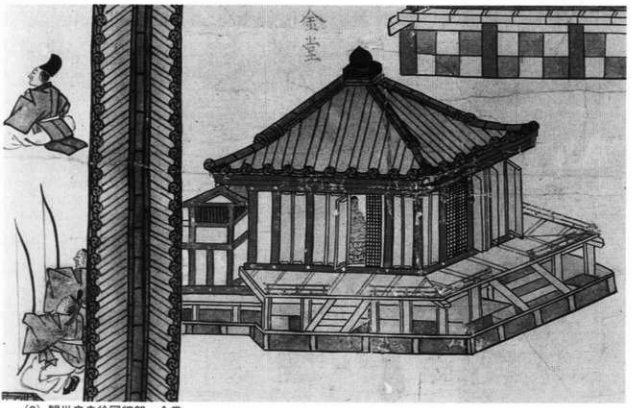
(2) 中門調査状況
（昭和32年、南から）

(1) 北面回廊取付部調査状況（昭和32年，南から）

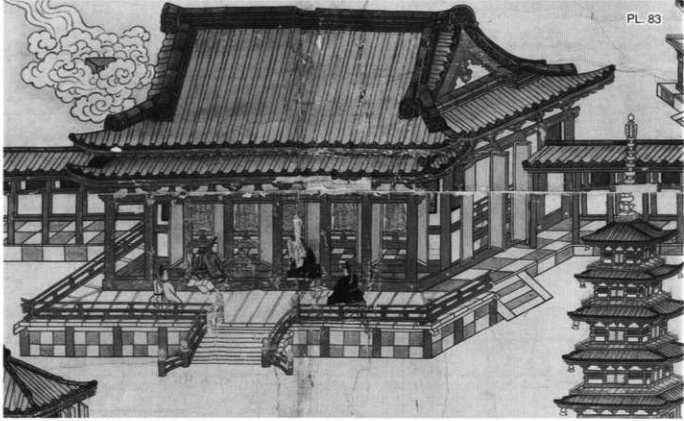
(2) 土坑 SK 3729（昭和32年，南西から）



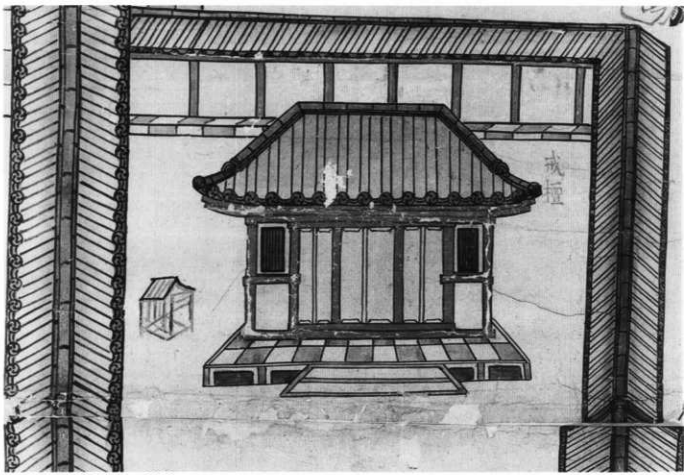
（1）観世音寺絵図細部・五重塔



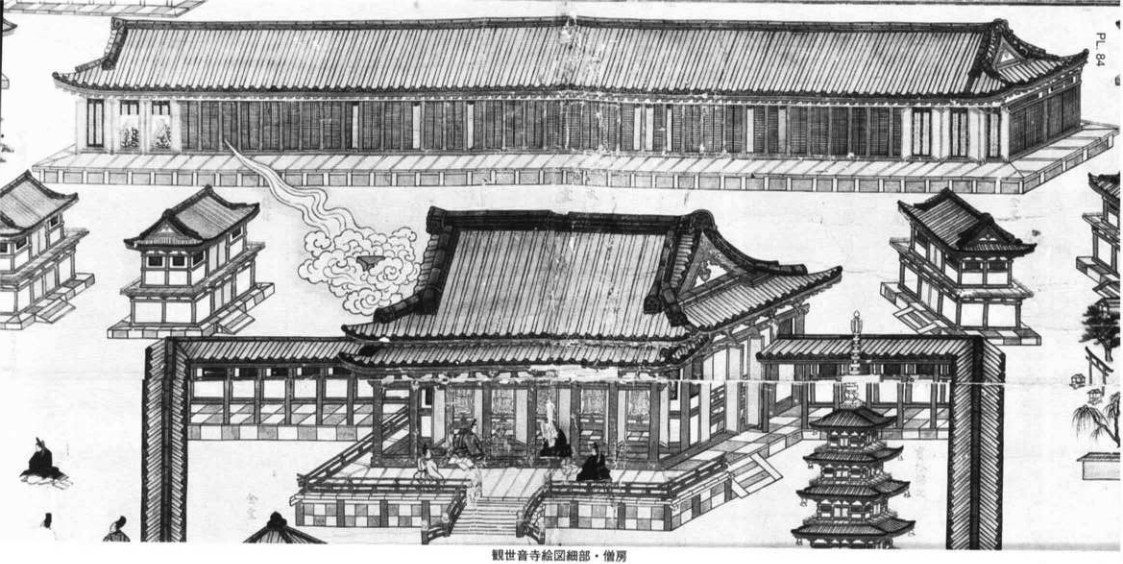
（2）観世音寺絵図細部・金堂



(1) 観世音寺絵図細部・講堂



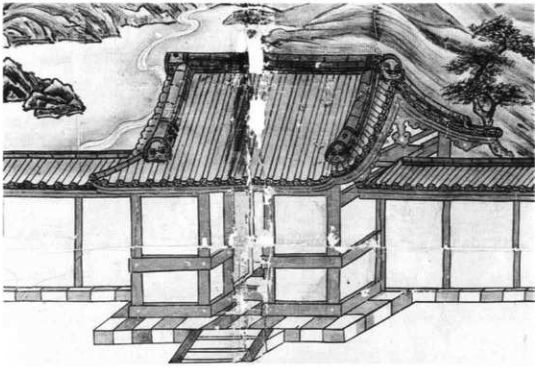
(2) 観世音寺絵図細部・戒壇院



観世音寺絵図細部・僧房

(1) 観世音寺絵図細部・南　門

(2) 観世音寺絵図細部・中　門



(3) 観世音寺絵図細部・北　門

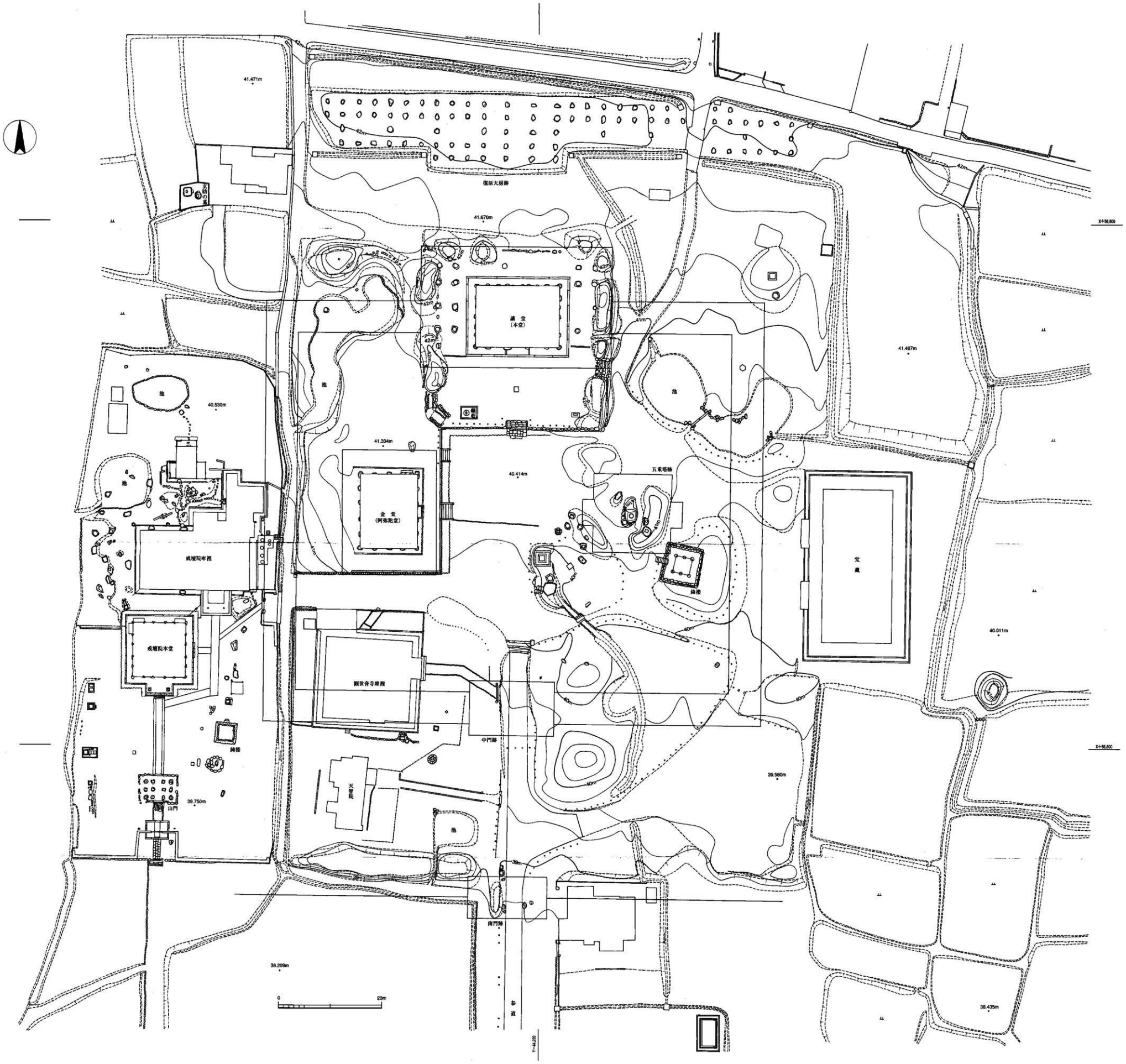
参道入口に立つ観世音寺標石（大正三年建立）

報告書抄録

ふりがな	かんぜおんじ
書名	観世音寺
副書名	
巻次	
シリーズ名	－伽藍編－
シリーズ番号	
編著者名	高橋章・小田和利（編集）・吉村靖徳・石松好雄・横田賢道
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒818-0118　福岡県太宰府市石坂4-7-1　TEL092-923-0404
発行年月日	2005年3月31日

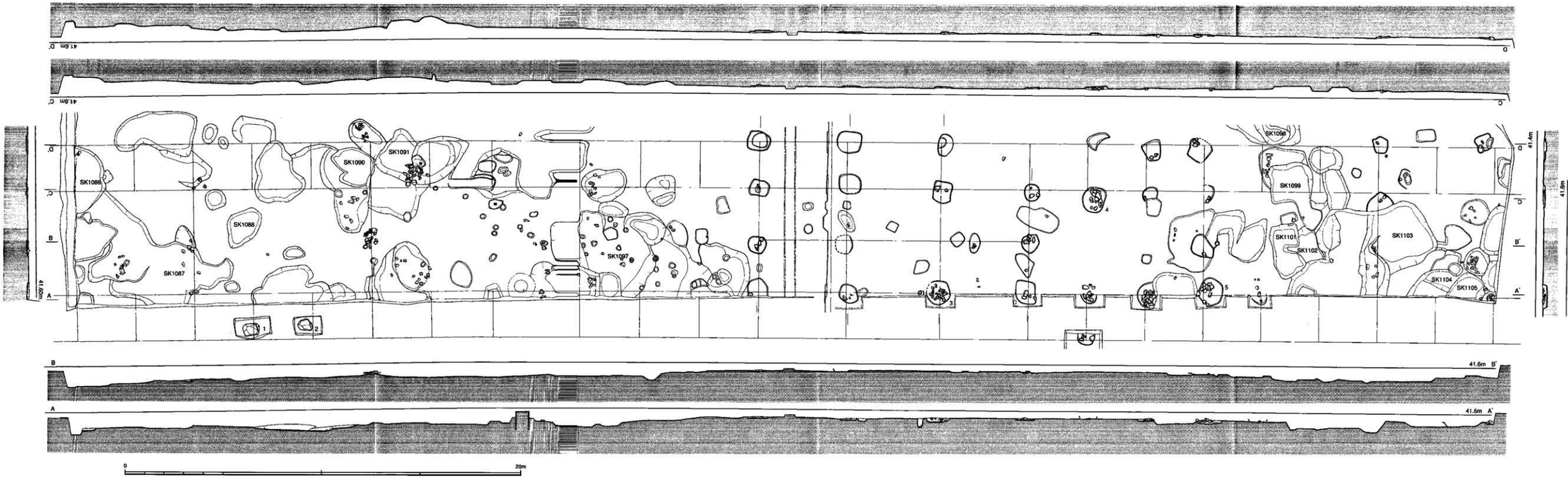
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
観世音寺	太宰府市観世音寺5-6-1			33 30 41	130 31 24	700710～030210	16,000㎡	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
観世音寺	寺院	奈良時代	塔跡		・基壇一辺15m
		〃	金堂跡		・創建期は瓦積基壇
		〃	講堂跡		・〃
		〃	南門跡		
		〃	回廊跡		・講堂一間南に接続
		〃	僧房跡		・桁行33間、梁行4間
		江戸時代	戒壇院		・江戸時代の庫裡
		奈良時代	築地跡		・東面は板塀



付　図1　観世音寺地形測量図（1/400）

付図2　観世音寺遺構配置図（赤：Ⅰ期，黒：Ⅱ期　1/600）



付　図3　僧房礎石建物SB1080実測図（1/120）

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード 2117104
登録年度 16	登録番号 3

観世音寺

-伽藍編-

平成17年3月31日

発行　九州歴史資料館
太宰府市石坂4丁目7番1号

印刷　瞬報社写真印刷株式会社
福岡市中央区天神5丁目4番16号